

2022

つなぐ

～個別最適な学びと協動的な学び～

(3年次研究)

研究集録第 39 集

岩手県立盛岡となん支援学校

令和4年度校内研究



研究集録 第39集 目次

研究集録刊行に寄せて	1
I はじめに	2
II 研究の概要	
III 研究の実際	
1 I グループ	8
2 II グループ	66
3 III グループ	88
4 訪問 (つばさ)	157
5 訪問 (あおぞら・てんくう)	162
6 寄宿舍	174
IV 研究のまとめ	183
○研究サポートのための各種資料・様式	
指導構想	184
訪問 (つばさ)	193
○外部研究団体における発表資料	
・全国肢体不自由教育研究大会 第2分科会 (準ずる教育課程) 提案発表	204
・全国肢体不自由教育研究大会 第5分科会 (自立活動) ポスター発表	208
あとがき	209

研究集録刊行に寄せて

本校における前次研究【確かな学び、豊かな学びをはぐくむ授業づくり～三つの柱に基づいた授業実践を通して～】の実践では、教職員全員参加型の組織的・実践的な校内研究を進め、成果として以下の3点が確認されました。

○教材教具の工夫、実験や観察等実感を伴った学習、学習の積み重ね、できる状況づくりにより、本校が目指す児童生徒像にせまることができた。

○3年間で1年次ずつ、3つの柱の1つに焦点を絞ったことにより、目標や内容が整理され、「確かな学び・豊かな学びを育む授業づくり」に有効であった。

○学習指導要領改訂を意識し、多様な視点から授業づくりを見なおすきっかけとなった。お互いに授業を見合うことで児童生徒の状況を客観的に評価できた。

一方、課題として以下の2点もあげられました。

●児童生徒の学習の目標設定が指導者に任されているため、一貫した指導が難しいこと。学習の評価が児童生徒の学習改善及び教職員の指導改善につながりにくい。

●自立活動を中心とする教育課程において教科的要素を取り入れている学習では、指導者によって目標のとらえ方が違うこと。各教科と自立活動の目標設定にいたる手続きの違いを確認し、校内での共通理解を図り、一貫した指導を目指す必要があること。

この前次研究を土台として、昨年度からの新たな3年計画の研究では「つなぐ～個別最適な学びと協働的な学び～」を新たな主題に掲げて取り組み始め、今年度2年目を迎えました。これは前次研究同様に授業づくりを中心に据え、中央教育審議会による『令和の日本型教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現～（令和3年1月25日付：答申）」を踏まえ、本校の多様な児童生徒一人一人が主語となる学校教育を目指すべく、従来以上に多様性を尊重しながら個別最適な学び、協働的な学びを目指していく実践となります。

研究テーマの具現化に向け「つなぐ」をキーワードに据え、改めて一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む「個別最適な学び」と、そこで付けた力を生かし探究的な学習や体験活動を通し、他者と関わりながら必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」のあり方を探る研究のうち、今年度は特に「協働的な学び」の指導構想を得ることを重点として取り組んだところです。本校における校内研究の取組と推進の成果物としてのこの研究収録にお目を通していただき、ぜひ忌憚のないご意見ご指導を頂戴できますと幸いです。

岩手県立盛岡となん支援学校 校長 横 澤 修

校内研究

I はじめに

1 研究主題

「つなぐ～個別最適な学びと協働的な学び」（3年次研究）

2 研究の経緯

令和2年度までの校内研究は、「確かな学び、豊かな学びをはぐくむ授業づくり」－三つの柱に基づいた授業実践を通して－を研究主題として3年次研究で取り組んできた。一人一授業では、教職員それぞれがかかえている課題をテーマに取り組み、毎年90本以上の研究実践が報告された。その成果として以下の3点が挙げられた。

- 児童生徒の興味関心に基づいた教材教具の工夫、実験・観察等実感を伴った学習、繰り返しの学習の積み重ね、できる状況づくりにより、本校が目指す児童生徒像にせまることができたこと。
- 1年次につき、3つの柱のうちの1つに焦点を当てたことにより、目標や内容が整理され、「確かな学び、豊かな学びを育む授業づくり」に有効であったこと。
- 教職員が改訂のポイントを意識した授業を行ったことで、多様な視点から授業づくりを見直すきっかけとなったこと。また、お互いに授業を見合うことで、児童生徒の状況を客観的に評価することもできたこと。

また、課題としては、以下の2点が挙げられた。

- 新学習指導要領の改訂により、指導者によって評価の方針が異なり、学習改善につなげにくいことから、観点別の評価を行うことになっているが、目標設定が指導者に任されているため、一貫した指導が難しいこともある。学習の評価が、児童生徒の学習改善につながるもの、そして、教職員の指導改善につながるものにしていくこと。
- 自立活動を主とする教育課程の児童生徒が増加する中、「リズム」や「うんどう」のような教科的要素を取り入れた学習では、教科の目標を設定して授業を行ったり、自立活動の目標を設定して授業を行ったりと、指導者によってとらえ方が違うこと。各教科と自立活動の目標設定に至る手続きの違いを確認し、校内でしっかり共通理解を図り、一貫した指導を目指すこと。

これらを見ると、大きな成果としては、肢体不自由教育がかかえる課題から、専門性を高め「生きる力をはぐくむ」ことができたことがわかる。しかし、課題として挙げられたように、共通のとらえ方ができるようにさらに研究を進めていく必要があることが分かった。

II 研究の概要

1 研究主題について

令和2年度からの校内研究の内容について教職員にアンケートを実施したところ、新学習指導要領をはじめ、多岐にわたる研究テーマの回答があった。これは、本校が4つの学部と3つの教育課程が存在すること、子どもの実態が多様であり、より一層個に応じた指導の必要性を実感しているからだと考える。また、令和元年度に始まった新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、学校においても臨時休業を余儀なくされるなど、甚大な影響を及ぼしている。社会全体のデジタル化が推進される中、学校においてもICT環境を最大限に活用して学びの保障を進めること、また学校教育の本質的な意義を踏まえ、この事態に対応するためのカリキュラム・マネジメントを展開することが求められた。このような状況を踏まえ、中央教育審議会では「教育課程部会における審議のまとめ」（令和3年1月25日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会。以下「教育課程部会における審議のまとめ」という。）、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、「個別最適な学び」と、「協働的な学び」の実現～（答申）（令和3年1月26日中央教育審議会。以下「令和3年答申」という。）

が取りまとめられた。令和3年答申に盛り込まれた教育課程に関する事項についてより詳しい内容が取りまとめられた教育課程部会における審議のまとめでは、今後の教育課程の在り方について、学習指導要領において示された資質・能力の育成を着実に進めることが重要であり、そのためには新たに学校における基盤的なツールとなる ICT も最大限活用しながら、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子どもたちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められるとされている。

本校教職員の多岐にわたる研究テーマ案と、目の前にいる子どもたちの実態からも、一人一人の子どもが主語になる学校教育をめざすべく、これまで以上に多様性を尊重し、誰一人取り残さないよう、様々なこと、ものをつなぎ、個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指していきたい。

2 研究の目的

■児童生徒の多様化が進む中、「つなぐ」をキーワードにし、児童の実態に応じ、指導方法・教材の検討により、効果的な指導の実現、児童生徒の興味・関心に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む「個別最適な学び」とそこでつけた力を生かし、探究的な学習や体験活動を通じ、他者と関わりながら必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」の実現を目指す。

(3年次計画共通の目的)

■各教科等、教育課程、指導形態における「協働的な学び」の指導構想を練る。

(2年次の重点)

■研究の成果は校内ネットワークを通じて共有すると共に、外部団体の研究会にて発表する。

(成果の発信)

3 2年次の研究について

令和3年答申教育課程部会における審議のまとめでは、探究的な学習や体験活動を通じ、子ども同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質の能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要であると記載されている。

また、学習指導要領でも主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の中で、以下の事項に配慮するように求められている。

児童（生徒）が生命の有限性や大切さ、主体的に挑戦してみることや多様な他者と協働することの重要性などを実感しながら理解することができるよう、各教科（・科目）等の特質に応じた体験活動を重視し、家庭や地域社会と連携しつつ体系的・継続的に実施できるように工夫すること。

これらのことから、1年次で検討してきた個別最適な学びと今次研究の内容である協働的な学びを一体的に充実させることによる、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が必要である。

本校では、1年次研究において GIGA スクール構想等により、一人一人の特性等に合わせて学習を進めることが可能になってきている中、「個別最適な学び」とは何かを検討し、一人一人の児童生徒と向き合う実態把握のための資料を作成してきた。しかし、それらの資料を活用した授業づくり、指導までには至らなかった。そこで、今次研究では、多様な児童生徒の実態について、それらの資料を活用し、実態把握を行い、一人一人が自分のよさや可能性を認識できるような場の設定、ICT を活用した新たな教材や学習活動を積極的に取り入れながら、児童生徒が同じ空間で時間を共有することで、お互いの感性や考え方等にふれ、刺激し合うことなどができるよう、授業改善、指導改善を行っていきたい。

4 研究の内容および方法

(1) 全体研究会

第1回全体研究会では、校内研究の3年次全体構想及び今年次研究の構想を説明し、職員間の共通理解を図る。また研究推進の流れやグループ研究会での取り組みについて、具体的な例を示しながら説明する。年間7回の全てのグループ研究会前後に校内研究の取り組みに対する児童生徒の変容についての調査を実施し、第2回全体研究会でその結果を報告する。また、グループの研究成果の発表の機会とする。その際、今年次研究のまとめと次年度研究の方向性を示す。

(2) アンケート調査

グループによる研究を始めるにあたり、事前に教職員に希望調査を行い、実践する教育課程や教科等について記入し回収する。この回答を基に研究グループを編成する。

研究を始める前と研究を終えた段階で前述した児童生徒の変容についての調査（「夢の実現プロジェクトアンケート」小学校等に準ずる教育課程）を実施し、今年次研究の成果や課題をまとめる。

(3) グループ研究会

前述したアンケートを基に対象とする児童生徒の教育課程や研究内容との関わりからグループ編成を決定する。これまでの、協議する時間が短い、対象の児童生徒の実態が分からず、協議を深めることが難しいという反省を活かし、今年次は共通した課題をもつ職員でグループを構成する。年間7回のグループ研究会のうち、1回目はグループでの研究推進計画を確認し、2回目以降は指導案検討会、授業研究会、協働的な学びの指導構想検討会とする。

グループ研究会後は、各グループの動向をまとめ、研究グループ間の相互理解及び交流を図る。

グループ	研究テーマと内容
準ずる教育課程	小・中・高をつなぐ～夢の実現プロジェクト～ 自己評価の高い実態から、ルーブリックの活用による評価で協働的な学びを目指す。
知的代替の教育課程	指導と評価をつなぐキャリア教育 児童生徒の実態から、指導形態の検討の仕方の確立で協働的な学びを目指す。
自立活動を主とする教育課程	実態把握と授業づくりをつなぐ～となん式システムづくり～ 学習到達度チェックリストを活用した教科の視点からの実態把握と目標設定及び授業実践をとおして、自立活動を主とする教育課程での協働的な学びを目指す。
訪問教育部 つばさ	学びをつなぐ教材・教具 教材・教具に焦点を当て、児童生徒の学びをつなぐと同時に協働的な学びを目指す。
訪問教育部 てんくう	復学につながる支援のあり方～関係機関との連携をとおして～ 教員との協働的なふり返し～多面的な自己理解を目指す～
訪問教育部 あおぞら	復学につながる支援のあり方～関係機関との連携をとおして～ 学習室利用の実態から、段階に応じた支援で協働的な学びを目指す。
寄宿舍	「協働的な活動をとおして考える自分たちの生活のしやすさ」～主体的で対話的な学びや体験をとおして～ 舎生同士の意見交換や発表などをとおして協働的な学びを目指す。

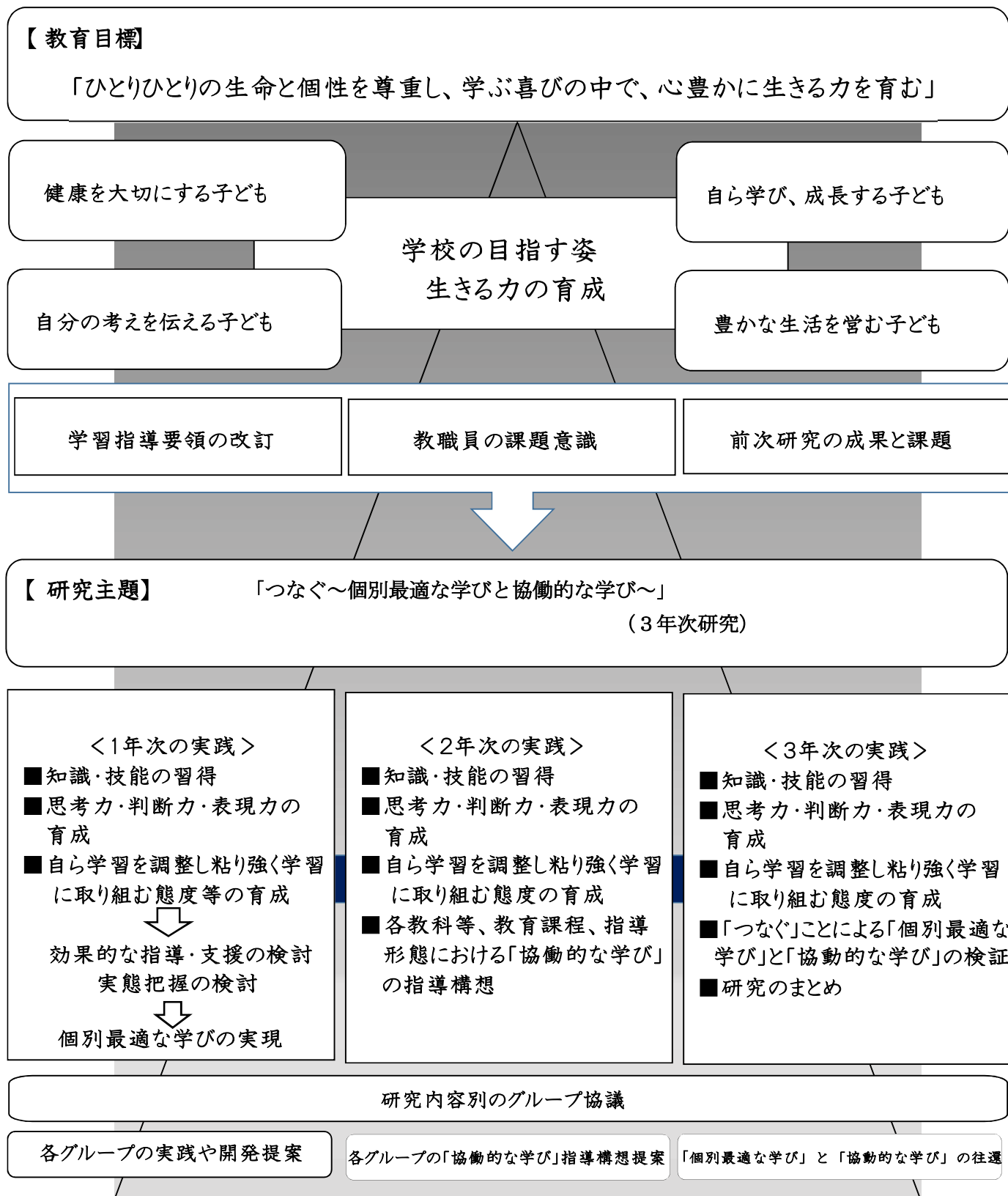
(4) その他

1回目のグループ研究会の運営は研究部員が行うが、グループによっては2回目以降についてはさらにテーマ毎に細分化したグループごとに研究会を推進する場合もある（職員アンケートの回答による）。

5 研究推進計画

(1) 全体構想図

各年次の実践内容や研究主題設定に至るまでの概要は【図1】の通りである。



(2) 3年次研究

本研究は3年の複数年次にわたって行い、各年次の主なねらいは下記【表1】の通りとする。

【表1】3年次研究のねらい

研究年次	ねらい
1年次 (令和3年度)	基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得し、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するための効果的な指導・支援のあり方について検討する。また、学習が最適となるよう、児童生徒の興味・関心等、一人一人の実態把握の仕方について検討する。
2年次 (令和4年度)	各教科等、教育課程、指導形態における「協働的な学び」の指導構想を練る。
3年次 (令和5年度)	「つなぐ」ことにより、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還が実現可能となったか検証する。

(3) 今年次の推進

今年次の研究は、【表2】の通り推進する。

【表2】今年次の取り組み

月	日	曜日	主な取り組み
4	20	水	全体研究会①（資料配布）アンケート（研究グループ希望）配布
5	11	水	研究日①（グループごとに研究推進計画の確認）
5	20	金	（舎）研究日①（テーマ推進計画の確認）
6	22	水	研究日② 指導案検討会
	24	金	（舎）研究日② 指導案検討会
7	13	火	研究日③ 授業実施後の研究会
		金	（舎）研究日③ 指導後の研究会
	22	金	全校授業研究会 講師 柴垣 登 先生
8	2	火	高教研講演会 講師 徳永 豊 先生
9	7	水	研究日④ 指導案検討会
	30	金	（舎）研究日④ 指導案検討会
10	26	水	研究会⑤ 授業実施後の研究会
	28	金	（舎）研究日⑤ 指導後の研究会
11	16	水	研究日⑥ 指導構想の検討
	18	金	（舎）研究日⑥ 指導構想の検討
12	14	水	研究日⑦ まとめ
	16	金	（舎）研究日⑦ まとめ
2	8	水	全体研究会②（報告）
3	下旬		研究集録発行

6 研究のまとめ方

今年次研究の成果は、研究部が各グループにおける、こと、ものとつなぐことによって実現する効果的な指導支援の在り方を「協働的な学び」の指導構想としてまとめる。その資料はネットワークに保存し常に閲覧可能とすると共に研究集録として保存する。

第Ⅰグループ： 準ずる教育グループ 研究テーマ

小・中・高をつなぐ～夢の実現プロジェクト～

1. テーマ設定理由

本グループでは、1年次研究は個別最適な学びの充実を目指し、学部毎に育てたい資質・能力をまとめ、課題の明確化を図り、さらにその課題について授業の中でどう指導していくのか研究協議を重ねた。その中で準ずる教育グループの児童生徒の自己評価が教師側が評価したものより高い評価をしていることが結果として見えてきた。また「主体的に学習に取り組んだか」などの評価に対してどうしていいかわからないことが実態として見えていたこともあり、課題の重点は自己評価と相対評価の進め方にあると仮定した。

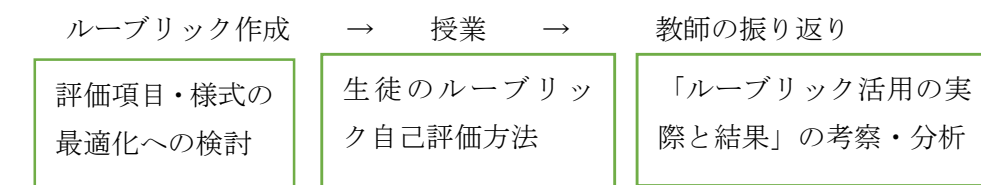
今年度の研究では、さまざまな評価方法の中から、学習の達成度を測るための評価方法の一種としてルーブリックの作成方法を検討していきたい。そしてルーブリックを活用した自己評価を発表する場面を設定し、相互評価の時間を協働的な学びとしたい。協働的な学びについては、指導者1対児童生徒1の授業の場面が多いのだが、関わりながらどう意味をつけていくのか、どう価値を見出すのかを探っていきたい。

2. 研究の重点

- (1) 自己評価、相対評価のためのルーブリック作成を推進する。
- (2) ルーブリックを活用した授業を展開し、協働的な学びについて検討する。

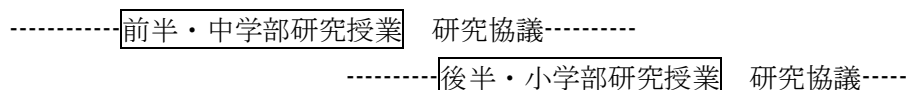
3. 研究内容

今年度の研究の流れ



----- (この流れを2回行う) ----->

研究授業・授業研究会



4. 実践

- | | | |
|-----------------|---|-----------|
| (1) 第1ルーブリック作成 | + | 振り返りシート |
| (2) 第1次研究授業 | + | 研究協議の記録から |
| (3) 第2次研究授業 | + | 研究協議の記録から |
| (4) 第2次ルーブリック作成 | + | 振り返りシート |

以上の順で以下に紹介する。

中学部 1 年 社会科の歴史のとらえ方・調べ方

作成者 阿部 美保子

「身近な地域の歴史」

	評価の観点	A 知識・技能 興味・関心・情報収集力		B 思考・判断・表現 目標・課題の設定		C 主体的に学習取り組む態度 学ぶ姿勢	
	評価規準	資料から歴史に関わる情報を読み取ることができる。		地域に関わる文化財や諸資料を活用して、身近な地域の歴史的な特徴を多面的・多角的にとらえることができる。		地域の歴史について、調べたことをまとめて発表したり、友だちの発表を聞くことができる。	
判断基準	レベル 3	文化財や特徴について調べることができる。		資料から年表を作ったり、図や表にして調べた内容をまとめることができる。		調べたことやわかったことを発表でしたり、友だちの発表に意見や感想を言うことができる。	
	レベル 2	必要なことを調べることができる。	生徒 A・B・C	時期や年代、推移、現在の私たちとのつながりに着目して、テーマをきめることができる。	生徒 C	友だちの発表でよいと思ったことに気づくことができる。	生徒 B・C
	レベル 1	小学部での学習を踏まえて、疑問や関心をもった事柄を見つけることができる。		自分の興味・関心のある、歴史上の人物や出来事からテーマを決めることができる。	生徒 A・B	友だちの発表内容に関心を持つことができる。	生徒 A

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 中学部 1－1 社会

授業名 「身近な地域の歴史」

ルーブリック名 1 年 1 組 【社会】身近な地域の歴史

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？
・授業の中では、それぞれの発表に対して質問したり、感想を述べることができたが、自分たちの評価では、あまり良い評価をしていない。 ・調べることで、それ以前のテーマを決めたり、調べ方を学習することに時間がかかり、発表の時間が少なくなって、お互いの発表に対する意見や感想に時間があまりとれなかった。
成果
・自分がどのようなレベルで学習しているのかが、客観的に把握することができた。

高校数学科数学Ⅰ「２次関数の値の変化」の評価のためのルーブリック（教師用）

作成者 滝村 真一

	評価の観点	知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学びに向かう態度	
	評価規準	二次関数の値の変化やグラフの特徴を理解している。		２つの数量関係に着目し、日常の事象を数学的に捉え、問題を解決することができる。		二次関数の考えを用いて考察するよさを認識し、粘り強く考え判断しようとしている。	
判断基準	レベル３	２次関数の最大値・最小値を的確に速く求めたり、２次方程式・２次不等式を的確に速く解いたりすることができる。		２次関数を利用するような問題を自ら設定し、考察することができる。		２次関数の値の変化について、教科書に載っている内容以外のことを調べたり考えたりしようとしている。	
	レベル２	２次関数の最大値・最小値を的確に求めたり、２次方程式・２次不等式を的確に解いたりすることができる。		２次関数を利用して、日常や身の回りの事象を考察でき、解答を導くことができる。		中学校で学んだ２次方程式の内容と適切に関連づけながら２次関数のグラフや２次不等式を学ぼうとしている。	
	レベル１	２次関数の最大値・最小値や、２次方程式・２次不等式の解き方を理解できる。	生徒 A	２次関数を利用して、日常や身の回りの事象を考察することができる。	生徒 A	中学校で学んだ２次方程式の内容をふり返りながら２次関数のグラフや２次不等式を学ぼうとしている。	生徒 A

※ レベル１を１点、レベル２を２点、レベル３を３点として採点し、最高点を１２点、最低点を４点とする。

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 高等部 1－1 数学

授業名 「2 次関数」

ルーブリック名 1 年 1 組 数学「2 次関数」

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？
・生徒 1 名の授業において、自己評価を他者と比較することができず、協働的な学びにつなげることは困難であった。
成果
・自己評価をととして自分の学習達成度を客観的に把握することができた。

様々な画材（静物画）

	評価の観点	1.「興味、関心、態度」	2.「発想や構想の能力」（正確なデッサン）	3.「創造的な技能」（色彩の知識と画材の特性を生かす）	4.「鑑賞の能力」
	評価規準	主体的に美術の表現活動に取り組み、対象のよさや美しさについて、多様な視点から味わい、楽しもうとしている。	モチーフを立体として把握したうえで、受けた印象を大切にし、それを描写するために創意工夫している。	色彩の基礎知識（明度・彩度・色相・混色・補色など）、画材の特性をふまえたうえで、創意工夫して作品制作を行っている。	様々な画材のもつ特性を味わい、作品の表現にどう生かされているかを分析し、そのよさを言葉や文章で表現することができる。
判断基準	レベル3	主体的に画材の特性などを探り、創造的な表現の可能性を追求することができた。	モチーフを立体として把握し、魅力的な絵画作品として制作できた。	色彩の組み合わせによる効果や画材特有の効果などを考慮して、絵画作品を制作することができた。	画材による作品の印象の違いについて踏まえたうえで、絵画作品としての魅力を考察できた。
	レベル2	作品の完成イメージを持ち制作に向かうことができた。	作品の構図や余白などを考え、バランスをとって描写することができた。	モチーフの色彩を観察し、想定した色彩を混色によって作り出すことができた。	作品について自分なりに印象を感じ取り、言葉で表現することができた。
	レベル1	造形的な視点で対象を観察し、作品制作に取り組むことはできなかった。	モチーフの印象を自分なりにとらえ、言葉で表現することができた。	色の印象や効果などについて直感的に感じ取り、色や画材を選ぶことができた。	好きな作品を選んだり、簡単な評価をしたりすることができた。

※ レベル1を1点、レベル2を2点、レベル3を3点として採点し、最高点を12点、最低点を4点とする。

生徒A（1名）の自己評価に

10点

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 美術 I

授業名 美術 I

ルーブリック名 高3・1 美術「様々な画材・静物画」

ルーブリックを作成→授業 ・単元の導入とまとめについて、ルーブリックを軸に行った ・在籍生徒1名のため、参考作品を提示するほか、職員とともに作品の制作を行った。
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ ・取り組み時間が長く、制作中においては、あまりルーブリックを意識させることができず、後付けで振り返るようなかたちになってしまった。 →毎時間の目標設定をする際、ルーブリックを提示することにする。 →自分の制作を客観視する手段として活用したい。 ・ルーブリックの文言が分かりにくかった。 →わかりやすい文章、具体的な評価基準のルーブリックを作成する。
成果 ・職員も生徒も、評価の観点を明確にして、授業を行うことができた。 ・少人数であっても協働的な学びを得るために、自分の作品を客観視する手段として活用できた。

	評価の観点	1. 構成と内容の把握 (思考・判断・表現)		2. 精査・解釈 (思考・判断・表現)		3 考えの形成 (思考・判断・表現)		4. 共有 (思考・判断・表現)	
	評価規準	登場人物の行動や会話に着目し、それぞれの場面の登場人物の気持ちや、世の中の様子、出来事をたしかめましょう。		戦争中と戦争後の場面をくらべて最後の場面に「一つだけ」という言葉が出てこない理由を考えましょう。		くわしく読んで分かったところを中心に、感想をまとめましょう。		感想を読み合い、考え方や感じ方のちがいが表れているところを見つけて、伝えあいましょう。	
判断基準	レベル3	物語のせつ定や場面を確かめ、3つの場面について、登場人物の行動や会話に着目して読み、戦争中のくらしについてそうぞうする。	児童 A ○ B	登場人物の行動や会話に着目して読み、目の場面に「一つだけ」という言葉が出てこなかった理由について登場人物の気持ちや与世の中の様子出来事からまとめる。	児童 A ○ B	さいしょに読んだときに感じたことと、登場人物の行動や会話などをくわしく読んで感じたことをくらべながら、自分の考えを「初め・中・終わり」のこうせいで書く。	児童 A ○ B	自分の考えといていところとちがうところを見つけ、友達の考え方でいいなと思うことについて、理由も合わせて書いたり、発表したりする。	児童 A ○ B
	レベル2	物語のせつ定や場面を確かめ、3つの場面について、登場人物の行動や会話に着目して読み、お父さんとお母さんの気持ちをそうぞうする。	児童 A ○ B ○	登場人物の行動や会話に着目して読み、目の場面に「一つだけ」という言葉が出てこなかった理由についてまとめる。	児童 A ○ B ○	登場人物の行動や会話、題名から受ける印象、戦争中と戦争後のちがいなどから、1つ選んで、くわしく読んで考えが変わったところを中心に書く。	児童 A ○ B ○	自分の考えといていところとちがうところを見つ	児童 A ○ B ○
	レベル1	物語のせつ定や場面を確かめ、3つの場面について、登場人物の行動や会話に着目して読む。	児童 A ○ B ○	本文から「一つだけ」という言葉を見つける。	児童 A ○ B ○	先生といっしょに書く内容をきめて、さいしょに書いた感想を見直しなが、自分の考えを書く。	児童 A ○ B ○	自分の考えといていところを見つけている。	児童 A ○ B ○

※ レベル1を1点、レベル2を2点、レベル3を3点として採点し、最高点を12点、最低点を4点とする。

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 小学部 国語（４年）

授業名 場面の様子をくらべて読み、感想を書こう

ルーブリック名 小学部国語の物語「一つの花」 感想文の

評価のためのルーブリック

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？
・友達の学び方についても、同じルーブリックで評価し合い、それを発表する（お互いのよさを認め合う場）ことも有効ではないか。 ・点数はお互いに発表してもよかった。（友達の点数についても）
成果
・最初に提示したことで、子どもたちがどのように学習を進めていくのかが分かり、見通しをもって取り組むことができた。

	評価の 観点	聞くこと ＜知識・技能＞		読むこと ＜知識・技能＞		話すこと（やり取り） ＜知識・技能＞		話すこと（発表） ＜知識・技能＞		書くこと ＜知識・技能＞	
	評価 規準	＜知識＞ 比較表現の意味や働き を理解している。 ＜技能＞ 比較表現の意味や働き の理解を基に、国の大きさ や都市の気温などの比較 について聞き取る技能を 身につけている。		＜知識＞ 比較表現の意味や働きを 理解している。 ＜技能＞ 比較表現などの意味や働 きの理解を基に、対話文や スピーチの内容を読み取る 技能を身につけている。		＜知識＞ 比較表現の意味や働き を理解している。 ＜技能＞ 好きなものや大切なも のについて、比較表現の特 徴や決まりの理解を基に 伝え合う技能を身につけ ている。		＜知識＞ 比較表現の意味や働きを 理解している。 ＜技能＞ 動物の特性や生活に取り 入れられている技術につい て、比較表現の特徴や決まり の理解を基に、話す技能を身 につけている。		＜知識＞ 比較表現の特徴や決ま りを理解している。 ＜技能＞ 身近なものについて、比 較表現の特徴や決まりの 理解を基に、書く技能を身 につけている。	
判 断 基 準	レベル 3	比較表現などの意 味や働きを十分理解 し、比較について、十 分聞き取ることがで きる。		比較表現の意味や 働きを十分理解し、 対話文やスピーチの 内容を十分読み取る ことができる。		比較表現を適切 に用いて、ほぼ正し い英語で伝え合う ことができる。		比較表現を適切に用 いて、ほぼ正しい英語 で話すことができる。		比較表現を適切に 用いて、ほぼ正しい 英語で書くことがで きる。	
	レベル 2	比較表現の意味や 働きを理解し、比較 について、おおむね 聞き取ることができ る。	A B	比較表現の意味や 働きを理解し、対話 文やスピーチの内容 をおおむね読み取る ことができる。	A B	比較表現を用い て、コミュニケーションに支障のない 英語で伝え合うこ とができる。	A B	比較表現を用いて、 コミュニケーションに 支障のない英語で話す ことができる。	A B	比較表現を用い て、コミュニケーションに支障のない英 語で書くことができ る。	A B
	レベル 1	助けがあれば、比 較表現の意味や働き を理解し、比較につ いて、何とか聞き取 ることができる。		助けがあれば比較 表現の意味や働きを 理解し、何とか対話 文やスピーチの内容 を読み取ることがで きる。		助けがあれば、好 きなものや大切な ものについて、比較 表現を用いて、何と か英語で伝え合う ことができる。		助けがあれば、比較 表現を用いて、何とか 英語で話すことができ る。		助けがあれば、比 較表現を用いて、何 とか書くことができ る。	

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 外国語科（英語）

授業名 Program4 High-Tech Nature

ルーブリック名 中学校外国語科（英語） 自己評価のためのルーブリック

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？
自己評価を生徒どうしで伝え合う、お互いに評価し、アドバイスをし合う活動を設定してみたが、お互いにインスパイアされることはなく、学習に意欲が湧いてくる様子は残念ながら見られなかった。小学部くらいの発達段階であれば有効なのかもしれない。
成果
生徒が評価規準をみて、自分のレベルが分かるのはよい。

高等部国語科 現代の国語 単元「言葉の海のおノマトペ」論説文

自己評価のためのルーブリック（生徒用）

作成者 吉田 恵理子

	評価の観点	知識・技能				思考・判断・表現				主体的に学習に取り組む態度			
	評価規準	漢字や語句の意味、文章の組み立て方や接続の仕方について理解する。		筆者の主張とその根拠、筆者の考えと一般論、予想や仮定で書かれた文などの理解ができる。		「学習の手引き」の課題について、自分の考えや事柄を的確に伝える文章を書く。読んだ人がよく理解できるように文章の構成や展開、表現の仕方を工夫する。		音声と意味との関係かおよびオノマトペの機能的特徴を理解し、言葉への興味を広げる		積極的にオノマトペを使った短文を作り、筆者の主張を報告できる。		積極的にオノマトペを使った短文を作り、慣れ親しみ語彙を増やすことができる。	
判断基準	レベル3	漢字や語句の意味、文章の組み立て方や接続についてよく分かりテストも概ねできた。		どれが筆者の主張とその根拠、筆者の考えと一般論、予想や仮定で書かれた文かなどがよく分かり授業プリントも概ねできた。		文章の構成や展開、表現の仕方をよく工夫し、読み手に十分理解させることができた。		内容や構成、論理の展開について容を的確に手解捉え書きの意図を積み、ワークブックも概ねできた。		積極的にオノマトペを使った短文を作り、筆者の主張を報告できた。		積極的にオノマトペを使った短文を作り、慣れ親しみ語彙を増やすことができた。	
	レベル2	漢字や語句の意味、文章の組み立て方や接続についてある程度分かりテストも半分以上できた。	生徒A	どれが筆者の主張とその根拠、筆者の考えと一般論、予想や仮定で書かれた文かなどがだいたい分かり授業プリントも半分以上記入できた。	生徒A	文章の構成や展開、表現の仕方を意識して、まとめることができた。	生徒A	内容や構成、論理の展開について理解した。あることに関わった。	生徒A	オノマトペを使った短文を作り、筆者の主張を確認した。	生徒A	オノマトペを使った短文を作り、慣れ親しみ語彙を増やすことができた。	生徒A
	レベル1	漢字や語句の意味、文章の組み立て方や接続についてわからなかった。テストも20点以下だった。		筆者の主張とその根拠、筆者の考えと一般論、予想や仮定で書かれた文などがわからない。		自分の考えをまとめることができない。読み手に理解を得られない。		内容や構成、論理の展開について理解できない。ワークブックの〈内容の把握〉が難しかった。		短文に筆者の主張を入れなかった。		オノマトペを使った短文作成に慣れなく作りにくかった。	

振り返りシート～協働的な学びの実現が図れたか～

教科名 高等部 1 年 現代の国語

授業名 「言葉の海のオノマトペ」(論説文)

ルーブリック名 高 1・1 現代の国語「言葉の海のオノマトペ」論説文

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ ・ルーブリックについては、評価基準や判断基準の文言が難しく読んで理解するまで時間がすごくかかる。判断基準の解釈が正確に捉えられなく、実際よりも自己を過大に評価する傾向も見られた。例えば「内容や構成、論理の展開について内容を的確に捉え書き手の意図を解釈し、ワークブックも概ねできた」とあると、「ワークブックも概ねできた」という点で内容、構成の把握や書き手の主旨の捉え方などが曖昧であっても、ワークブックの回答率が半分以上を回っている事実だけを捉えて、「できた」とする様子が見られた。具体的に自己評価するポイントをきちんと理解させるものでなくてはならない。単元全体を通してのルーブリックを作成したが、このポイント、この分野と焦点化し、自己が評価しやすい物を作成する必要がある。
成果 ・授業では、単元の目指すところをあらかじめ意識させることはできた。自己評価のタイミングについては、プリントや小テストなど終わったタイミングでルーブリック評価を組み込んだ。生徒はよく考えて答えようとしていた。 ・教師側が、論説文の評価基準のための要素を明確にしながら授業ができた。

	観 点 評 価 の	知識		思考・判断・表現		主体的に学習に 取り組む態度	
	評価 規 準	健康と疾病の定義、運動、食事、休養および睡眠の効果、健康に関する環境作り、意思決定、行動選択のために必要な知識を身に付けている。		健康の考え方と成り立ち、生活習慣と健康の関わりなどについて、自分の健康課題を理解し、適切な改善策を具体的に自分で考えて発表することができた。		健康の考え方と成り立ち、生活習慣と健康の関わりについて自己の健康課題の解決に自主的に取り組もうとしている。	
判 断 基 準	レ ベル 3	単元テストで、8割以上の点数を取った。		授業で学んだ知識をもとに、自分が健康に生きていくために必要なことと、そのためにしなければならないことを3つ以上発表できた。	生徒A	授業で学んだ知識をもとに、自分が健康に生きていくために必要だと考え、実際に学校や家庭で行っていることを発表できた。	
	レ ベル 2	単元テストで、5割以上の点数を取った。	生徒A	授業で学んだ知識をもとに、自分が健康に生きていくために必要なことと、そのためにしなければならないことを2つ発表できた。		授業で学んだ知識をもとに、自分が健康に生きていくために必要だと考え、今後学校や家庭で行いたいと思っていることを自分で考えて発表できた。	生徒A
	レ ベル 1	単元テストで、5割未満の点数を取った。		授業で学んだ知識をもとに、健康に生きていくために自分に必要なことと、そのためにしなければならないことを1つ発表できた。		授業で学んだ知識をもとに、自分が健康に生きていくために学校や家庭で行ったほうがよいことを教師と確認した。	

※ レベル1を1点、レベル2を2点、レベル3を3点として採点し、最高点を12点、最低点を4点とする

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 高等部 1 年 保健

授業名 現代社会と健康

ルーブリック名 高等部 1 年 保健 「現代社会と健康」

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？
・単元を通したルーブリックを制作してしまったため、評価のポイントがぼやけるものとなってしまった。内容を絞る必要がある。 ・単元の最初と最後のための提示で行ってしまったため、自己評価を付けるときも迷う場面があった。 ・ルーブリックを使い、協働的な学びにつなげるのは難しいと感じた。
成果
(生徒) ・単元の目標を設定する場面ではわかりやすかった。 (教師) ・評価基準をもちながら授業をすることができた。

	観 点	評 価 の	知識		思考・判断・表現		主体的に学習に 取り組む態度	
	評価 規 準	健康と疾病の定義，運動，栄養，休養および睡眠の効果，健康の保持増進のために必要な行動に関する知識を身に付けている。		健康の成り立ちと疾病の発生要因，生活習慣と健康における事柄や情報などについて，自分の生活上の健康課題を理解し，適切な改善策を具体的に自分で考えて発表することができた。		健康の成り立ちと疾病の発生要因，生活習慣と健康について，自己の生活上の課題解決に自主的に取り組もうとしている。		
判 断 基 準	レ ベ ル 3	小テストで， 9 割以上の点数を取った。		授業で学んだ知識をもとに，自分が健康に生きていくために必要な課題と，具体的な改善点がわかった。		自分が健康に生きていくために必要な課題や改善点について友達や家族と話し合ったり，教科書を見直したりして確認した。		
	レ ベ ル 2	小テストで， 5 割以上の点数を取った。	A B	授業で学んだ知識をもとに，自分が健康に生きていくために必要な課題がわかった。	B	自分が健康に生きていくために必要な課題や改善点について教科書を見直して確認した。	A	
	レ ベ ル 1	小テストで， 5 割未満の点数を取った。		授業で学んだ知識をもとに，健康に生きていくために自分に必要なことと，そのためにしなければならないことがよくわからない。	A	自分が健康に生きていくために必要な課題や改善点について特に確認していない。	B	

※ レベル 1 を 1 点，レベル 2 を 2 点，レベル 3 を 3 点として採点し，最高点を 9 点，最低点を 3 点とする

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 中学部 1－1 保健

授業名 「健康な生活と疾病の予防」

ルーブリック名 1 年 1 組 【保健】健康な生活と疾病の予防

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ ・そもそもルーブリックの文言が難しく、自己評価をすること自体も難しかった。また、それが共同的な学びになったとは言えない。 ・ルーブリックを毎時間、毎単元で準備するのは時間的に厳しい。 ・ルーブリック自体は文言の整理などを行えば自己評価ツールとして有効であると思うが、それを共同的な学びにつなげる方法がよくわからない。必要性を感じにくい。具体的な活用方法の事例がみたい。
成果 ・今回、forms を振り返りに使用した。表を見ることに困難がある生徒たちなので、ルーブリックは別に作成するにしても、必ずしもそれを提示しなくてもいいということに気づくことができたので、今後の振り返りには forms を有効活用したい。

1 年 1 組 【数学】方程式

作成者 佐々木睦

	A 知識理解 (等式の性質)		B 思考・判断・表現 (方程式の作りの説明)		C 主体的に学習に取り組む態度 (方程式の活用)	
評価規準	等式の性質を使って、方程式を解くことができる。		方程式を解く方法を説明することができる。		方程式を効率的に解く方法を考えようとしている。	
3	方程式の作りに注目し、等式の性質のどれとどれを使うか説明ができる。		方程式の作りに注目をし、解く方法を理由も含めて説明することができる。		方程式の作りに注目し効率的に解こうとしている。	
2	等式の性質を使って、方程式を解くことができる。	生徒 B 生徒 C	等式の性質について、例題を見ながら説明できる。		例を見ながら、計算方法を説明しようとしている。	生徒 A
1	例題を見ながら、方程式を解くことができる。	生徒 A	説明を一つ一つ確認しながら聞くと、納得できる。	生徒 A 生徒 B 生徒 C	友達などの説明を聞き、キーワードになる言葉を伝えることができる。	生徒 B 生徒 C

氏名 _____

A 知識理解 _____ 点、 B 思考判断表現 _____ 点、 C 主体的に学習に取り組む態度 _____ 点

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 中学部 1－1 数学

授業名 「方程式」

ルーブリック名 1 年 1 組 【数学】方程式

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ ・ルーブリックの評価を確認したからといって、協働的な学びには結びつかなかった。 (評価項目が協働的な学びを評価するようにはなっていない) ・クラスメイトのつぶやきを取り上げても、取り入れる様子はなかった。→ほかの考えを自分の考えに取り入れるのは難しい様子だった。
成果 ・自己評価の様子を見ていると、自分自身に甘い評価が見られなくなった。

中2理科「生物の体のつくりとはたらき」で学習成果を自己評価するためのルーブリック

作成者：小水内光浩

評価の 観点 評価 基準	1. 実 験(知識・技能)		2. ワークシート(知識・技能)		3. アクティブ(思考・判断・表現)		4. 態 度(主体的に学習に取り組む態度)	
	仮説を立てたり、実験結果をとったり、自分の考えをまとめて発表することができる。		ワークシートには、理科の用語を書いたり、図や絵を描いたり、自分のまとめを書くことができる。		学習のめあてを考えて、自分から進んで考えを発表したり、先生、友だちと協力して実験をしたりしている。		実験の時に集中して安全に気をつけて取り組んだり、話し合いや発表の姿勢に気をつけたりしている。	
レベル3	友だちに教えたり、みんなの意見をまとめたりしながら、実験を進めることができた。	生徒 A () 生徒 B ()	これまでに習ったことを使って考えるだけでなく、自分なりのアイデアや考えを作って書くことができた。	生徒 A () 生徒 B (O)	学習のめあてをいつも考えながら、どうすればもっとよい実験になるか考えて取り組んだ。	生徒 A () 生徒 B ()	実験のきまりを班のみんなに守るように注意したり、学習のルールを守ったりすることができた。	生徒 A (O) 生徒 B ()
レベル2	仮説→観察→記録→まとめ→発表の流れにそって自分の考えで進めることができた。	生徒 A (O) 生徒 B (O)	ワークシートを全部うめることができ、これまでに習ったことを使って自分の考えをまとめられた。	生徒 A (O) 生徒 B ()	授業中や実験のときに、自分から進んで取り組んだり、先生や友だちと協力したりすることができた。	生徒 A (O) 生徒 B (O)	実験のきまりをしっかりと守って安全に気をつけ、聞く姿勢をしっかりとすることができた。	生徒 A () 生徒 B (O)
レベル1	自分の考えを持たないで、ときどき人まかせにすることがあった。	生徒 A () 生徒 B ()	黒板のまとめや結果の記録を写すことはできたが、自分の考えはまとめられていない。	生徒 A () 生徒 B ()	友だちからの指示を待っていたり、実験に参加しないでいたりしたことがあった。	生徒 A () 生徒 B ()	友だちとふざけてしまったり、友だちの発表を聞いていなかったりしたときがあった。	生徒 A () 生徒 B ()

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 中2理科

授業名 「植物が光合成を行ったとき、二酸化炭素の出入りが行われるか」

ルーブリック名

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ ・評価については、やりはじめてまもなくのことだったからか、遠慮がちで、一人は「態度」がレベル3、一人がワークシートがレベル3だった。
成果 ・生徒二人とも、実験が好きであり、自分の意見を発表しあう場面もつくることができた。 ・振り返りに、このシートを使ったが、評価の観点が生徒にとって具体的でわかりやすかったためか、記入もはやく終わっていた。

第1次ループリック作成後の研究協議の内容

①ループリックの「つけたい力」(＝評価の観点)の項目内容は学習指導要領や指導書などからズレないこと。

→「評価の観点」については、単元毎の「評価の観点」3観点をそのまま引用している場合と、評価の観点の例えば「読む」だけの一部を引用している場合とあったが、教師が評価に活かすという部分ではどちらも可なので、統一はしない。授業に活かすというループリックであれば良い。

②生徒がループリックに慣れていない→工夫しないといけない。

→「判断基準」の項目設定の仕方の工夫を。児童生徒たちが理解しやすい文言。レベルの捉え方を客観的に。「ここまでできたら小学生」「ここまでできたら中学生」など考えやすいように。評価をすることで「次に頑張りやすいように」提示したい。

③各自の評価につながるという視点で作成

→児童生徒の評価がそのまま評価になるわけではないが、自分を客観的に評価できるキーワードは必要。過大評価につながらない文言の工夫。

④授業内容にも同様だが、「友だちの発言に対してどう考えた?」「伝え合うことができた?」などの判断基準ごとの項目も必要

→研究テーマ「つなぐ～個別最適な学びと協働的な学び」の要素を常に入れて表をつくらう。

⑤そして横書き、横向きに統一

→後々、研究集録の原稿の観点と、作成しやすい理由から、決定事項。

中学部1年準ずる教育課程 「保健」 学習指導案

日 時：令和4年7月11日（月）4校時

場 所：中学部1年1組教室

対象生徒：中学部1年生徒（3名）

指 導 者：伊藤篤司

1 本時の指導

(1) 本時の学習 「ミニテスト～健康な生活と疾病の予防～」

(2) 本時の目標

- ・ テストと答え合わせを通じ、健康に生きるために必要な知識を確認する（知識・技能）
- ・ テストを通じ、自分が健康に生きるために何が必要かわかる（思考力判断力表現力）
- ・ テスト結果を通じ、健康に生きていくために必要なことを学び、考えることの大切さを意識する（学びに向かう力、人間性）

(3) 生徒の実態

- ・ 生活経験に乏しく、学習に必要な語彙の少なさがみられる。
- ・ 指示や文章の意味、漢字の読みなどがわからないまま、放置してしまう傾向がある。
- ・ 身体の動き、またはLD傾向により、板書をしたり記述をしたりすることに困難がある。
- ・ 認知特性により、表の読み取りが困難

(4) 本時の展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点・児童生徒への配慮等	○評価の視点 ◎評価の方法	教材・ 教具等
導入	1. 前時のプリント配付 2. 本時の目標確認	・ ファイリングが難しい生徒には、手伝いが必要か声をかける。 ・ あくまで成績ではなく、今後健康に生きるために必要な知識を身に付けるためのプロセスであることを強調する。		プリント ファイル
テストを通じ、健康に生きるための知識を確認しよう				
展開	3. テスト ※ 問題は別紙 4. 答え合わせ（知） 5. 答え合わせ（思）	・ Forms を利用し、記述しやすくする。 ・ 問題の意味や漢字の読みなど、わからないときは質問するよう促すとともに、こちらからも様子を見ながら確認する。 ・ テスト結果を画面に映し、全員で共有できるようにする。 ・ 教科書やプリントを見ながら、学習したことを思い出せるような声掛けをする。 ・ 全員の答えを共有し、教師を含め全員で課題や改善点を話し合えるような状況を作る。	○知識問題が何割取れているか（知） ◎テスト ○自分で教科書やプリントを確認したり、教師や友達に確認したりしているか（主） ◎様子観察 ○自分の健康上の課題やその改善策を具体的に記述しているか（思） ◎テスト ○自分や友達の健康課題と改善点について、積極的に発言しているか（主） ◎様子観察	電子黒板 iPad 教科書 プリント
まとめ	6. ルーブリック記入	・ 必要に応じ、テストの結果とルーブリックの対応している点を一緒に確認する。		

1. 「健康」はどのような状態であるか、正しく記述しているものを一つ選択してください【知】
 - 心と体が元気な状態
 - 病気やけがをしていない状態
 - 心と体が元気で、充実した生活を送ることができる状態
2. 以下の選択肢のうち、疾病の「主体要因」をすべて選んでください【知】
 - 年齢
 - 食事内容
 - 友達や先生との人間関係
 - 気温
3. 以下の選択肢のうち、疾病の「環境要因」をすべて選んでください【知】
 - 年齢
 - 食事内容
 - 友達や先生との人間関係
 - 気温
4. 生命を維持するためのエネルギーのことを何というか、正しいものを一つ選択してください【知】
 - 基礎体温
 - 基礎代謝
 - 基礎疾患
5. エネルギーの補給について、正しく記述しているものを一つ選んでください【知】
 - エネルギーが不足すると、太る原因になる。
 - エネルギーを必要以上に摂取すると、太る原因になる。
 - エネルギーを必要以上に摂取すると、痩せる原因になる。
6. 以下の選択肢のうち、主に体の組織を作る役割をもつ栄養素をすべて選びなさい【知】
 - タンパク質
 - カルシウム
 - ビタミン
 - 無機質
 - 炭水化物
 - 脂質

7. 以下の選択肢のうち、主に身体の調子を整える役割をもつ栄養素をすべて選びなさい【知】

- タンパク質
- カルシウム
- ビタミン
- 無機質
- 炭水化物
- 脂質

8. 以下の選択肢のうち、主にエネルギーになる役割をもつ栄養素をすべて選びなさい【知】

- タンパク質
- カルシウム
- ビタミン
- 無機質
- 炭水化物
- 脂質

9. 以下の選択肢のうち、「疲労」について間違った記述をしているものを一つ選びなさい【知】

- 疲労のたまり方には、個人差がある
- 疲労は回復させないと蓄積し、病気になったり心の健康を損なったりすることがある
- 疲労がたまっても、学習や運動、作業に影響はないとされている

10. 睡眠、休養について、間違った記述をしているものを一つ選びなさい【知】

- 睡眠には心身の疲労を回復させる効果がある。
- 睡眠には、身体の傷んだ部分を修復したり、身体の抵抗力を高める働きがある。
- 休養とは、何もせず横になってじっとしていることである。

11. 「自分が健康に生活するために足りていないと思うことを記述してください」【思】

12. 「自分が健康に生活するためにやりたいこと、やってみたいことを具体的に記述してください」【思】

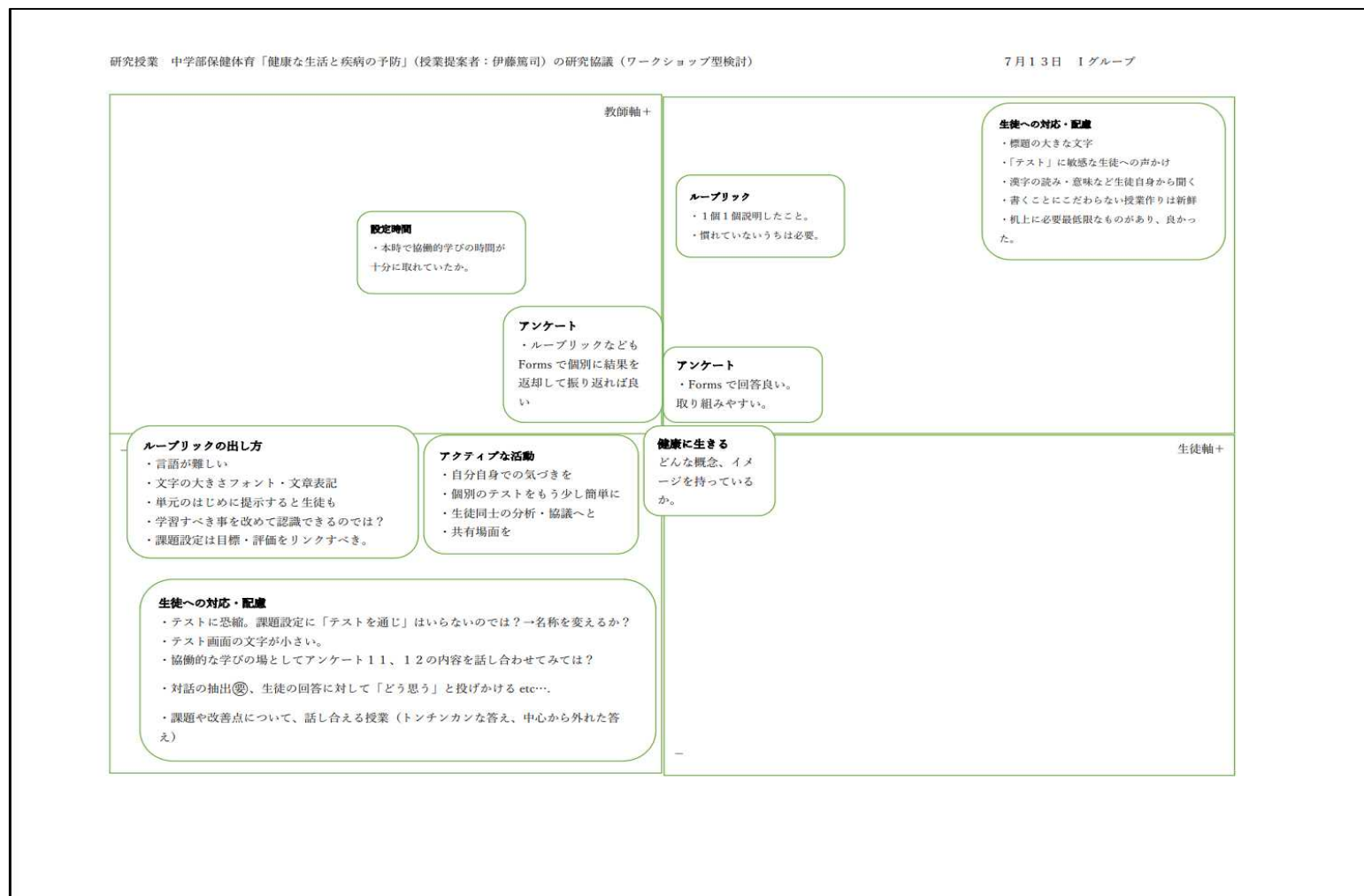
13. 今までの授業から、今日のテストまでに行ったことを一つ選んでください【主】

- 自分が健康に生きていくために必要な課題や改善点について友達や家族と話し合ったり、教科書を見直したりして確認した。
- 自分が健康に生きていくために必要な課題や改善点について教科書を見直して確認した。
- 自分が健康に生きていくために必要な課題や改善点について特に確認していない。

研究協議の記録から

【授業について】ワークショップ型検討

教師と生徒の軸で＋面、－面で分類、集約結果



【ルーブリック第一次作成を通して】

○生徒にルーブリックを使わせるとき、ルーブリックで自己評価（あるいは相互評価）させる内容（あるいは焦点化した項目）は、漠然と単元全体を網羅したものと評価基準自体も漠然としていて理解が得られにくい。単元によっては、単元内の評価項目が複数あることはよくあることであり、全ての評価項目を網羅したルーブリックであると、生徒自身が評価するときに、単元のすべての項目をあとから想起する作業になり、難しい様子が見られる。「授業のどの場面で記入させるのか」をあらかじめ想定したうえで作成する必要がある。（毎時毎時、ということではなく、単元内でのまとまりはもたせて、のほうがいいか？）

⇒要するに

- ・私たち教師が評価する際、児童生徒の自己評価（相互評価）を参考にしていくという視点をもつこと。
- ・児童生徒自身が授業の中で行うルーブリックを通して、自己のを学習目標をもつこと、意欲を継続させて自分を客観的に観られる視点をもつこと
- ・自己評価を行うことで、主体的な学びへとつなげること、自己にとっての最適化を図ること

ができるようになる。

小学部 図画工作科学習指導案

日 時：令和4年10月14日（金）5校時

場 所：4年1組教室

対象児童：男1名 女1名 計2名

指 導 者：石川 茜

1 題材名

アートでしりとり

2 題材について

（1）題材について

生涯を通して芸術文化と豊かな関わりを築くために、小学校段階では、図画工作科を中心に芸術の基礎的なリテラシーが求められる。リテラシーとは、基本的には識字能力を意味する用語であり、芸術教育の立場からは、人間としての成長と芸術文化への有意義な参加を可能にする、すべての児童生徒に身に付けさせたい芸術の知識、理解、技能として捉えられている。このアートカード教材は、子どもの生活と芸術とのつながりを深めるために必要となる基礎的なリテラシーを高めることに役立ち、初歩的な学習段階において用いられるものである。

アートカード教材は、てのひらサイズで、実際にカードに触れながら活動できるため、児童の芸術に対する心理的な距離を縮め、身近に感じさせることで、さらなる学習意欲を喚起することができる。また、アートカード教材を用いた学習活動の本質はその遊びにあり、ゲーム形式の学習活動を通して、事前に基礎的な知識、理解、技能が身につくように設計されている。

（2）児童について

本学級の児童は、2名とも車椅子で生活している。また、2名とも図画工作の学習を好み、楽しみにしている。アートカードを使った鑑賞は、1度取り組んだ。神経衰弱が楽しかったようで、またアートカードを使った学習をしたいと思っている。1名は、脳室周囲白質軟化症により、右にまひがある。進んで表現したり鑑賞したりする活動に取り組むが、途中で疲れてしまったり、つくりたいものの発想や構想とつくったり表したりしたものとの差が生じたりすると、「先生がそっちやってね。」というように、自分の作品づくりに没頭することへの難しさを感じることもある。また、はさみを使って切ったり、組み合わせたりすることに難しさもあり、教師の支援が必要である。家庭では「友だちの方が上手にできた」というように話すこともあるようで、自分よりも友だちの方ができると感じているようなところもある。もう1名は、絵で表すことを好み、他の教科の学習でも、ノートに絵でまとめることも多い。進行性の疾患のため、かなづちなど、使用する際に力が必要な道具については、使用が難しくなっており、教師の支援が必要である。

（3）指導にあたって

2名とも、図工の学習は楽しみにしているものの、実態差があるため、毎回満足のいく活動ができているとは限らない。アートカードを活用することで、手指機能等、実態差に関係なく、遊びをとおして、よさや面白さ、造形的特性にふれ、感じ取ったり考えたりして、お互いの感じ方の違いも認め合いながら、自分の見方や感じ方を広げていきたい。また、「アートでしりとり」は、1枚のアートカードと共通する要素が見つけられる別のカードをセットの中から取り出し、その要素を伝え合う。その要素については、色、形、材質、大小、温かい、冷たい、硬い、柔らかい、広い、狭い、細かいなどの感じやその組み合わせ方などの造形的特性に注目して伝え合えるようにしていきたい。また、ループリックを活用した評価では、その造形的特性に注目できたかについて振り返りができるようにしていきたい。さらに、その振り返りも交流し、友だちの気づきや発見を認め合える場を設定したい。これらの活動をとおして、次題材「本から飛び出した物語」での、物語から思い浮かべて登場人物の気持ちや場面の様子をつくる活動でも、その気に入った場面を伝え合ったり、色や形、材料の組み合わせなどの感じを理解したりできるようにしていきたい。

3 題材の目標及び指導計画

●学習内容 (学習指導要領)	次	● 学習活動	時間	○ 3つの柱における目標		
				●知識及び技能	●思考力、判断力、表現力等	●学びに向かう力、人間性等
B 鑑賞 (1) ア (思考力、判断力、表現力等) [共通事項] (1) ア (知識) (1) イ (思考力、判断力、表現力等)	第 1 次	●アートカードを活用した「アートでしりとり」	本時	●自分の感覚でアートカードを見ることを通して、色や形などの造形的な特徴を理解することができる。	●自分の感じたイメージをもとに、自分の見方や感じ方を広げながら、共通する要素を見つけることができる。	●互いの感じ方の違いやよさを味わったり楽しんだりして、「アートでしりとり」に取り組む。

4 本時の指導

(1) 本時の学習 「アートでしりとり」

(2) 本時の目標

- ・自分の感覚でアートカードを見ることを通して、色や形などの造形的特性を理解することができる。
(知識及び技能)
- ・自分の感じたイメージをもとに、自分の見方や感じ方を広げながら、共通する要素を見つけることができる。
(思考力、判断力、表現力等)
- ・互いの感じ方の違いやよさを味わったり楽しんだりして、「アートでしりとり」に取り組む。
(学びに向かう力、人間性)

(3) 児童の実態と目標

氏名 (学年)	児童の実態	目標	指導・支援の手立て
児童 A	右にまひがあるため、両手を使って使用する道具については支援が必要である。 けやき祭の作品を鑑賞し、つくっている様子を想像したり、表現されてことについて、考えたりすることができる。	自分の感覚でアートカードを見ることを通して、色や形などの造形的特性を理解することができる。 自分の感じたイメージをもとに、自分の見方や感じ方を広げながら、共通する要素を見つけることができる。 互いの感じ方の違いやよさを味わったり楽しんだりして、「アートでしりとり」に取り組む。	アートカードに手が届かない場合は、どのカードを手にしたのかを聞き、カードを手元に渡す。 共通する要素が友だちに伝わらなかったときは、注目した造形的特性について確認し、一緒に確かめる。
児童 B	かいたりつくったりして表現することが好きである。 けやき祭の作品を鑑賞し、その表現方法や、色や形などのよさを言葉で表現することができる。	自分の感覚でアートカードを見ることを通して、色や形などの造形的特性を理解することができる。 自分の感じたイメージをもとに、自分の見方や感じ方を広げながら、共通する要素を見つけることができる。 互いの感じ方の違いやよさを味わったり楽しんだりして、「アートでしりとり」に取り組む。	共通する要素が友だちに伝わらなかったときは、注目した造形的特性について確認し、一緒に確かめる。 ループリックの評価について、迷っている場合には、一緒に学習したことを振り返るようにする。

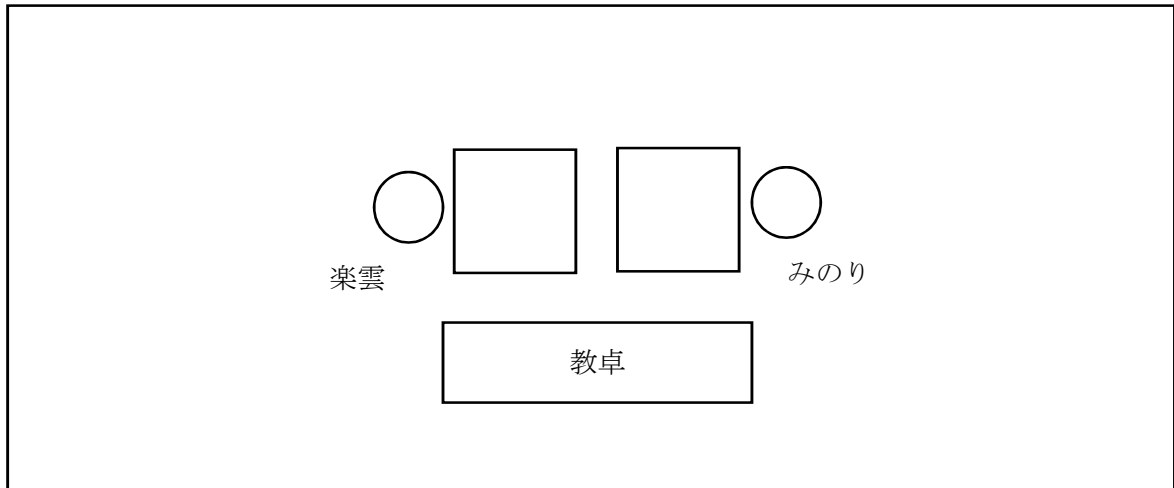
(4) 具体の評価規準

具体の評価規準（おおむね満足できる）	努力を要する子どもへの手立て
知・技：自分の感覚でアートカードを見ることを通して、色や形などの造形的特性を理解している。	造形的要素について、板書を見ながら、教師と一緒に確認する。
思・判・表：自分の感じたイメージをもとに、自分の見方や感じ方を広げながら、共通する要素を見つけている。	自分の感じたイメージを言語化できるように、どの部分に注目したのかを確認し、一緒に考える。
主：互いの感じ方の違いやよさを味わったり楽しんだりしようとしている。	友だちの見方やよさを教師が伝えることで、そのよさや面白さを感じられるようにする。

(5) 本時の展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点・児童生徒への配慮等	○評価の視点 ◎評価の方法	教材・ 教具等
導入 10分	1. アートカード 神経衰弱 2. 本時の目標	10ペアのアートカードを用意し、神経衰弱を行う。 カードに手が届かないときには、どのカードをめくりたいのかを伝えられるようにすることを確認する。 自分の近くにあるカードは、お互いにめくってあげられるよう、声をかける。 簡単なゲームを行うことで、アートカードを親しめるようにする。 神経衰弱以外のゲームにも挑戦することを促し、「アートでしりとり」を行うことを確認する。	＜協働的な学びの視点1＞ お互いに声を掛け合いながら、神経衰弱を楽しむ。	アートカード 10ペア
注目した点を明確にして、アートでしりとりをしよう。				
展開 25分	3. 造形的特性についての確認 4. 「アートでしりとり」のルール確認 5. 「アートでしりとり」	造形的特性には、5つの特性があるが、児童からどのような点に注目したいかを、発表できるように、1枚のカードを提示して、一緒に確認できるようにする。 つなぐカードが届かないところにあるときには、どのカードをつなぎたいのかを伝えられるようにすることを確認する。 何枚のカードをつなぎたいのか、目標を聞き、意欲につなげる。 注目した点について、確認しながらゲームを進めることで、造形的特性を意識できるようにする。	＜協働的な学びの視点2＞ 造形的特性に注目して、考えを出し合いながら、しりとりを楽しむ。 [知・技]自分の感覚でアートカードを見ることを通して、色や形などの造形的特性を理解しているか。 (観察) [思・判・表]自分の感じたイメージをもとに、自分の見方や感じ方を広げながら、共通する要素を見つけているか。(観察) [主]互いの感じ方の違いやよさを味わったり楽しんだりしようとしているか。(観察)	電子黒板 実物投影機 アートカード 1セット
まとめ 10分	6. 振り返り 7. 次時の活動の確認	どのような点に注目して「アートでしりとり」を行ったのかについて、ループリックシートで評価する。 友だちがどのような点に注目していたのかについても、ループリックシートで評価し合う。 自分の得点が何点になったのかを確認する。 今回の学習を活かし、次題材「本から飛び出した物語」でも、色や形、材料の組み合わせなどの感じを表現することを伝え、次時の意欲につなげられるようにする。	＜協働的な学びの視点3＞ ループリックシートを活用して、互いのよさを認め合う。	ループリックシート

(6) 配置図



(7) 板書計画

10/14

課題：注目した点を明確にして、アートでしりとりをしよう。

人 植物 動物・・・(かかれているものの特性)

形 色 材質・・・(造形要素の特性)

動き くりかえし とうー・・・(構成上の特性)

あたたかい つめたい 楽しい おそろしい・・・(感じの特性)

絵具 粘土 木・・・(材料の特性)

研究協議の記録から

授業者より

- ・（「2題材について(3)指導にあたって」の部分より）2名の児童は「絵に表す」から「つくって遊ぶ」までなど、実態差がある。
- ・カードに親しむ（カードを使ってしりとりやゼスチャ遊び）……鑑賞するにつながる。
- ・（「本時の展開」の部分より）
協働的な学びの視点1…お互い声を掛け合いながら神経衰弱ができていた。
協働的な学びの視点2…造形的特性に注目して、考えを出し合いながらできた。
しりとりを楽しむについては思っていることを言い合い、声が出せるようになってきた。
- ・あとに絵を描いたとき、材料の組み合わせなど考えようとしていた。

ワークショップ型協議

（後記 図1 参照）

①教材（アートカード）について

- 手指の器用さなどに左右されずに取り組める、とても良い教材だと思う
- ゲームとして、点数を無理につけていないのが良かった。

②授業の内容について

- 生徒から言葉を引き出す言語活動にもなっていた。
- 言葉でコミュニケーションを取り、認め合う活動ができていた。

③授業の構成について

- あらかじめ、色、形、感じなどの造形の要素について整理してから取り組んだことで、図画工作の着目点が自然に身につくと思った。

④生徒について

- 意見を言い合える関係ができているのが素晴らしかった。

⑤協働的な学びについて

- ゲーム形式より、しりとりをつなげることを共通の目的とすれば、（カードをお互いに手渡すなどの）学びが促進されるのではないかと思った。

⑥ループリックの活用について

- ループリックが生徒の充実感に繋がっている。
- ループリックの構成について、レベル1が上にあるほうがよりスムーズに評価できるのではないか。
- 生徒自身がループリックを（穴埋めなどで）設定するなどすれば、より効果的なのではないか。

柴垣先生より助言

①協働的な学びについて

→協働的な学びの基盤として、個別最適な学びが保証されていること。

→それぞれが感じたことを出し合うだけではなく、言語を介したコミュニケーションによって、お互いの学びを深めていくことが協働的な学び（お互いの感じ方・見方を認めながら、感じ方・見方を広げる）。

②教師の役割について

→アートカードから受ける“感じ”（ふんわり、怖いなど）を言語化していく支援（共有する中で物の見方考え方が広がったりする）。

→支援学校の生徒の抱える経験の少なさや偏りを補い、生徒の気づいていない点について適切な声掛けをする（経験の偏り、広がりはどう工夫していくか）。

→少人数指導のマイナス面を補う、教師の役割の大事さ。

③教科指導について

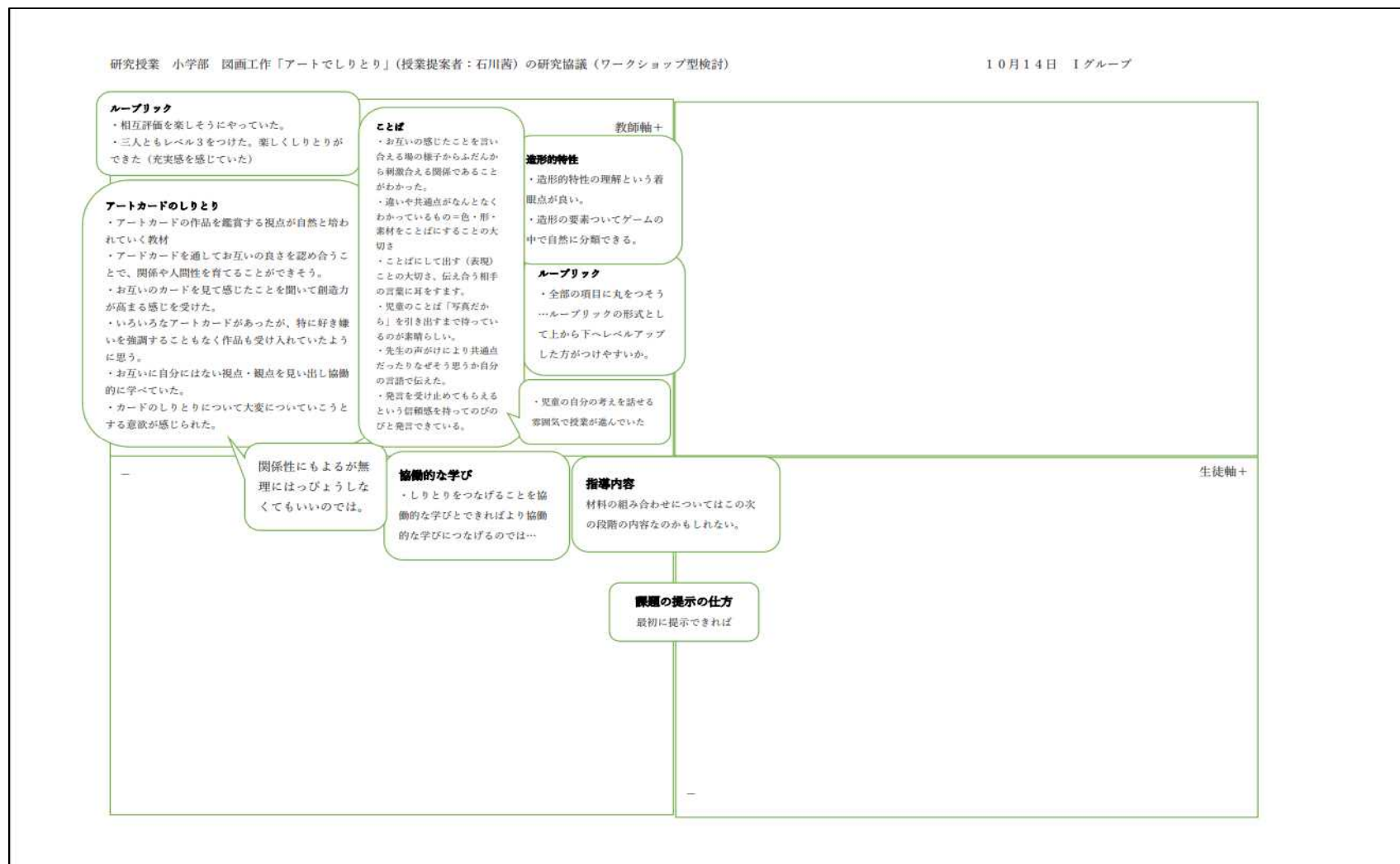
→教材によって、生徒のこういった力を伸ばしたいのか。

→他の教科（言語化をどうしていくか）や自立活動（目標：伝え合う）とどう横断的につなげていけるか。

④生徒について

→抽象的な思考力を育てていく年齢（小4・10歳段階）である。

図 1



中学部 1 年 資料を活用する力を鍛える社会科のルーブリック 「世界各地の人々の生活と環境」

作成者 阿部 美保子

「自然環境と共生する生活」

評価の観点	A 知識・技能 興味・関心・情報収集力		B 思考・判断・表現 目標・課題の設定		C 主体的に学習に取り組む態度 学ぶ姿勢	
評価基準	南アメリカの特徴的な地域である、アマゾン川流域、熱帯林の各地域で営まれてきた自然環境との共生と開発の影響を調べることができる。		南アメリカの自然環境の様子を写真や資料から読み取り、アマゾン川流域で森林が減少している様子とともに、環境問題の観点から考えることができる。		身近な環境問題と、世界的な視野に立った環境問題を結びつけながら、自分なりの課題をもつことができる。	
レベル 3	熱帯雨林の植生や生態系の様子 と開発の進行・影響について調べ ることができる。	生徒 B・C	開発の結果、どんな問題が起こっ ているのか調べ、開発と自然との 共生のバランスをどのようにして いったらよいか考えることができ る	生徒 C	熱帯雨林の生態系や植生を知 ることによって、貴重な環境 であることを想像し、環境保 全と開発の視点をもつことが できる。	
レベル 2	アマゾン川がどのように利用さ れてきたか資料を参考に調べ ることができる。		なぜアマゾン川流域の開発が行わ れてきたのか開発の経緯・目的を 調べることができる。		森林の伐採は環境問題につな がることを知り、環境保全の 大切さについて気づくことが できる。	生徒 B・C
レベル 1	ブラジルはどういう国か。自然環 境（雨温図、地形図）を調べ ることができる。	生徒 A	アマゾン川流域ではどんな開発が 行われてきたか、開発の様子を写 真や資料をもとに開発以前と比較 することができる。	生徒 A・B	アマゾン川流域の自然環境の 果たす大きさに気づくことが できる。	生徒 A

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 中学部 1－1 社会

授業名 「自然環境と共生する生活」

ルーブリック名 1 年 1 組 【社会】身近な地域の歴史

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ ・課題やテーマにあった資料を検索することや自分にとってわかりやすい資料を見つけることに時間がかかったりするので、教師のほうからいくつかの資料を提示した。 - そのため、みんな同じ内容をまとめることになり、資料を読み取ってのまとめでは、お互い質問し合ったりする場面がなかった。 質問し合うことはなかったが、それぞれのまとめに対する補足や確認はすることができた。 ・お互いのルーブリックの評価を話し合う場面もあったほうがよかった。
成果 ・授業の前にルーブリックを提示して学習することにより、評価の観点がわかり学習に取り組む流れがわかるようになった。 ・評価を点数化することで、具体的なレベルを意識しやすくなった。

高校数学科数学Ⅰ「三角関数」の評価のためのルーブリック（教師用）

作成者 滝村 真一

	評価 の観 点	知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学びに向かう態度	
	評価 規準	サイン・コサイン・タンジェントの 値を的確に求めることができる。		三角比を利用して、高さや水平距離などを 求めることに活用し、解答することができる。		中学校で学んだ知識と三角比の学習内容 を関連付けて学ぼうとしている。	
判 断 基 準	レ ベ ル 3	直角三角形や三角比の 表を用いて、サイン・コ サイン・タンジェントの 値を的確に速く求める ことができる。		長さや高さを求める際に三角 比を利用することの良さがわ かり、いろいろなことがらにつ いて考えたり表現したりでき る。		校舎の高さなどの、身の回 りの高さ・長さについて、三 角比を利用して考えようと している。	
	レ ベ ル 2	直角三角形の辺の長さ から、サイン・コサイン・ タンジェントの値を的確 に求めることができる。		三角比を利用して、建物の高さ や水平距離などを考察でき、解 答を導くことができる。		中学校で学んだ相似や三平 方の定理と適切に関連づけ ながら三角比を学ぼうとし ている。	
	レ ベ ル 1	サイン・コサイン・タン ジェントや、三角比の相 互関係を理解できる。	生徒 A	三角比を利用して、建物の高さ や水平距離などを考察するこ とができる。	生徒 A	中学校で学んだ相似や三平 方の定理をふり返りながら 三角比を学ぼうとしている。	生徒 A

※ レベル1を1点、レベル2を2点、レベル3を3点として採点し、最高点を12点、最低点を4点とする。

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 高等部 1－1 数学 I

授業名 「三角比」

ルーブリック名 1 年 1 組 三角比

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ ・ルーブリックを単元の中で示したことで小学校、中学校の学習内容の大切さを知る機会となった。平方根の意味や分数の計算方法など下学年の内容を学ぼうとする姿勢が見られた。
成果 ・点数化したことにより学習内容の理解を深める必要性に気付き、定期考査でルーブリックに基づいた段階別の問題が出題されていることを理解できた様子であった。教師がどんな観点で評価しているかを知ることが教師にとっても生徒にとっても基準が明確になるというメリットがある。一方、学力の低い生徒にとっては基準に満たない項目が多くなりがちで一定の水準に達することができたときに自己肯定感が芽生えてくるのだと想定される。

	評価の観点	1. 「関心・意欲・態度」 写真の撮影または選択	2. 「発想や構想の能力」 写真を線画にする	3. 「発想や構想の能力」 色彩について	4. 「創造的な技能」 着彩の技能
	評価規準	知的財産権・肖像権に配慮して、目的に合わせた人物写真を準備することができる。	写真の明暗を分析し、ハイコントラスト処理を適切に行い、線画に置き換えることができる。	明度、彩度の調節方法について理解し、自分の制作意図に合わせて混色や配色することができる。	ハイコントラスト作品の特性を踏まえ、アクリル絵の具で平塗りを丁寧に行うことができる。
判断基準	レベル1 ★	用意された人物写真の中から、作品に使用する写真を自分で選ぶことができる。 1点	写真の明暗を感じ取り、明度ごとに区分けしようとしている。(区分け2段階以下) 1点	白・黒の絵の具で明度を調節することができる。 1点	画面全体を塗りきっている。 1点
	レベル2 ★ ★	知的財産権・肖像権に配慮して、自分で人物写真を用意することができる。 2点	写真の明暗を感じ取り、明度ごとに区分けしようとしている。(区分け3段階以上) 2点	明度、彩度の働きに気を付けて、適切な階調を作ることができる。 2点	絵の具の濃度を調節して、はっきりと発色する平塗りができている。 2点
	レベル3 ★ ★ ★	ハイコントラストの素材であることを考慮し、構図や光の当て方など工夫して人物写真を撮影できる。 3点	写真の持つ雰囲気を生かし、線画としての美しさを追求して明暗の区分けを行っている。(区分け3段階以上) 3点	自分のイメージに合わせて、コントラストを付けた独創的な配色を工夫することができる。 3点	デザイン効果を考えた線画を生かして、美しい平塗りができている。 3点

※ レベル1を1点、レベル2を2点、レベル3を3点として採点し、最高点を12点、最低点を4点とする。

生徒A（1名）の自己評価に ○

10 / 12

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 美術 I

授業名 美術 I

ループリック名 高3-1 美術「デザイン・ハイコントラスト」

ループリックを作成→授業 ・毎時の導入と振り返りにループリックを確認した。 ・在籍生徒1名のため、参考作品を提示するほか、職員とともに作品の制作を行った。
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ ・生徒間のやり取りや相互鑑賞によって生まれる思いがけない気付きなどの効果は、生まれにくかった。（教員であることで生徒が聞く体勢になってしまうように思う。） ・レベルを教師が決めるのではなく、生徒自身が作品制作に際して大事にしたいことによって決めれば、より能動的な取り組みとなるかと思った。 ・レベルの合計点を加点するループリックにすれば、授業を通して付けたい力をより意識できるかもしれないとも思った。
成果 ・レベルや自己評価の記入欄を感覚的に捉えやすくしたのは良かった。 ・職員も生徒も、評価の観点や授業を通して付けたい力などを明確にして、授業を行うことができた。 ・少人数であっても、ループリックを通して自分の作品を鑑賞することで、自分の作品や自分自身を客観視することができた。

		伝え合おう (思考・判断・表現)		注目しよう (知識・技能)		楽しもう (主体的に学習に取り組む態度)	
	目ひょう	「アートでしりとり」の活動をと おして、思ったことや考えたこ とを話し合おう。		さまざまな点に注目しよ う。		ゲームを楽しみ、自分の気付き や感じ方を広げよう。	
どこまでできたかな？ふりかえってみよう。	レベル 3	アートカードを進んで見たり、さわったりして、友だちと話したり、友だちの話を聞いたりして、自分の見方や感じ方を広げることができた。	児童 A ○ B ○	アートカードの色や形、材料について、その組み合わせについても注目することができた。	児童 A B	友だちといっしょに「アートでしりとり」を楽しみ、しりとりを続け、友だちのよさにも気付くことができた。	児童 A ○ B ○
	レベル 2	アートカードを進んで見たり、さわったりして、アートカードについて話すことができた。	児童 A ○ B ○	アートカードの色や形、材料について注目することができた。	児童 A ○ B ○	友だちといっしょに「アートでしりとり」を楽しみ、しりとりを続けることができた。	児童 A ○ B ○
	レベル 1	アートカードを進んで見たり、さわったりすることができた。	児童 A ○ B ○	アートカードの色や形に注目することができた。	児童 A ○ B ○	友だちといっしょに「アートでしりとり」を楽しむことができた。	児童 A ○ B ○

※ レベル 1 を 1 点、レベル 2 を 2 点、レベル 3 を 3 点

合計点 / 9 点

		伝え合おう (思考・判断・表現)		注目しよう (知識・技能)		楽しもう (主体的に学習に取り組む態度)	
	目ひょう	「アートでしりとり」の活動をと おして、思ったことや考えたこ とを話し合おう。		さまざまな点に注目しよ う。		ゲームを楽しみ、自分の気付き や感じ方を広げよう。	
どこまでできたかな？ふりかえってみよう。	レベル3	アートカードを進んで見 たり、さわったりして、友だ ちと話したり、友だちの話を 聞いたりして、自分の見方や 感じ方を広げることができ た。	児 童 A ○ B ○	アートカードの色や 形、材料について、その 組み合わせについても注 目することができた。	児 童 A B ○	友だちといっしょに「ア ートでしりとり」を楽しみ、し りとりを続け、友だちのよさ にも気付くことができた。	児 童 A ○ B ○
	レベル2	アートカードを進んで見 たり、さわったりして、ア ートカードについて話すこ とができた。	児 童 A ○ B ○	アートカードの色や 形、材料について注目す ることができた。	児 童 A ○ B ○	友だちといっしょに「ア ートでしりとり」を楽しみ、し りとりを続けることができ た。	児 童 A ○ B ○
	レベル1	アートカードを進んで見 たり、さわったりするこ とができた。	児 童 A ○ B ○	アートカードの色や形 に注目することができ た。	児 童 A ○ B ○	友だちといっしょに「ア ートでしりとり」を楽しむこ とができた。	児 童 A ○ B ○

※ レベル1を1点、レベル2を2点、レベル3を3点

合計点 / 9点

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 小学部 図画工作（4年）

授業名 アートでしりとり

ループリック名 アートでしりとり 評価のためのループリック

ループリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ ・最初に提示し、目標を確認してから取り組んだほうがよかった。 ・「注目しよう」のレベル3の「組み合わせ」については、こちらからふれなかったのも、子どもたちが挑戦してみようとはならなかった。 ・文字の上に、丸をつけるようにしているが、丸をつける欄があったほうが、見やすい。 (視覚認知に課題がある子が多いので) ・点数はお互いに発表してもよかった。(友達の点数についても)
成果 ・色、形など注目すべき点を明確に示したことで、それ以外に注目できたかどうかを判断することができた。 ・「組み合わせ」を説明はしなかったものの、そこを見て自分の取り組み方がどうであったかを考える姿がみられ、この1時間をきちんと振り返ろうとしていた。 ・点数ではなく、お互いのがんばり、よかった点について、ループリックをてがかりに評価することができた。

○中学部 外国語科 Friendship beyond Time and Borders 読むこと、書くこと（自己・相互）評価のためのルーブリック 作成者 及川 恵貴

	評価の観点	読むこと（知識・技能）		書くこと（思考・判断・表現）	
	評価規準	トルコと日本間の友好関係について理解するために、英文を読んで、概要や要点を捉えることができる。		自分の考えを伝えるために、国と国が友好関係を築くために大事なことについて、書くことができる。	
判断基準	レベル3	既習の英語表現や文法事項を理解し、トルコと日本間の友好関係に関する文章の概要や要点を十分読み取ることができる。		自分の考えを伝えるために、既習の英語表現や文法事項を適切に用いて、国と国が友好関係を築くために大事なことについて、ほぼ正しい英語で書くことができる。	
	レベル2	既習の英語表現や文法事項を理解し、トルコと日本間の友好関係に関する文章の概要や要点をおおむね読み取ることができる。	生徒 A 生徒 B	自分の考えを伝えるために、既習の英語表現や文法事項を用いて、国と国が友好関係を築くために大事なことについて、コミュニケーションに支障のない英語で書くことができる。	生徒 A 生徒 B
	レベル1	助けがあれば、既習の英語表現や文法事項を理解し、トルコと日本間の友好関係に関する文章の概要や要点をおおむね読み取ることができる。		助けがあれば、国と国が友好関係を築くために大事なことについて、既習の英語表現や文法事項を用いて、自分の考えを何とか書くことができる。	

※ レベル1を○点、レベル2を○点、レベル3を○点として採点し、最高点を○点、最低点を○点とする。

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 外国語科（英語）

授業名 **Friendship beyond Time and Borders**

ルーブリック名

Friendship beyond Time and Borders 読むこと、書くこと（自己・相互）評価のためのルーブリック

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ ・個々の学習の頑張りはみられるようになったが、協働的な学びにはつながらなかったように思う。 ・ルーブリックを用意したところで、お互いを意識し合うというところまでは至っていない。普段からの少人数学習であるが故に、ルーブリックを作ったところで、いつもと変わらない様子であった。中2に関して言えば、学習への意欲は別として、お互いを意識はしているようである。
成果 ・学習の意欲喚起には一定の効果があつたのではないかと。また、自分のレベルを目で見てわかるのはよかった。 ・授業者が改めて授業のポイントを確認できる機会となったのではないかと思う。

高等部国語科 現代の国語 単元【「弱いロボット」の誕生 第6段落】論説文

自己評価のためのルーブリック（生徒用）

作成者：吉田 恵理子

	評価の観点	語句の理解・解釈（知識・技能）		論文の主旨理解（思考・判断・表現）	
	評価規準	指示語や接続語から、指示されている箇所を把握する。		人とロボットの共同行為を生み出すポイントを理解する。	
判断基準	レベル1	「そうした心配」「そうした情報」「つまり」で結論づけられた内容をさす場所がノートを見て分かる。	生徒 A (○) 生徒 B (○)	この文での「共同行為」、「関係論的な行為方略」「ロボットからの社会的表示と子供たちの思いやりが連携し合う」とはどういうことか、説明を聞いて何となく理解できた。	生徒 A (○) 生徒 B (○)
	レベル2	「そうした心配」「そうした情報」「つまり」で結論づけられた内容をさす場所がノートを見なくても何となくわかる。		この文での「共同行為」、「関係論的な行為方略」「ロボットからの社会的表示と子供たちの思いやりが連携し合う」とはどういうことか、ノートを見ながら説明できる。	
	レベル3	「そうした心配」「そうした情報」「つまり」で結論づけられた内容をさす場所がどこなのかノートを見なくても人に説明できる。		この文での「共同行為」、「関係論的な行為方略」「ロボットからの社会的表示と子供たちの思いやりが連携し合う」とはどういうことかノートを見なくても人に説明できる。	

振り返りシート～協働的な学びの実現が図れたか～

教科名 高等部 1 年 現代の国語

授業名 『『弱いロボット』の誕生』（論説文）

ルーブリック名 高 1・1 現代の国語『『弱いロボット』の誕生』論説文

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ ・論説文の学習における、協働的な学びのとは、正しい語句の理解や文章の把握を、協議しながら読み解くことや、そのようにして読み解いた論文の主旨をまとめていく過程で友達同士で意見を交わしたりすることなのだろう。基礎的知識の上に計画されるこれらの学習内容を履修させるには、生徒たちの基礎的知識の理解度をしっかりと理解しなければならない。語彙の学習としては理解度があっても、それが文章読解力向上につながる例をほとんど見たことはない。今回の授業においても同様である。 ・指示語や接続詞がどんなものかがわかってその言葉がさす場所やつながる場所の特定ができずに迷っている様子が見られた。それでもお互いの意見を出してもらい。リモートの生徒がいると協働的な学びにわずかでもなれる。正解に近づくように声をかける。その答え合わせをする。地道に「うまいことを言おうとせず文章から探せ」と指示する。文章読解力を高めるためにはその繰り返しがまだまだ必要な段階にある。
成果 ・授業では、単元の目指すところ（＝ルーブリックの評価基準）をあらかじめ提示し意識させることはできた。指示語や接続詞の確認からはじめなければならなかったが、生徒にとってこのことは大いに有意義である。確認することで、小中学校で履修してきた内容を一瞬で想起し、何について注目するのかという読解技法の第一歩にたどりつけることができる。ルーブリックはとにかく余計なものはそぎ落として、「この時間で自分はどのくらいの評価ができるのか」自身で判断できるように、作成した。過大評価できないようにレベルの並べ方も低い物から高い物へと変えた。具体的にどの部分が、どれくらい、どのようにしてわかったか、現在の自分の位置がわかるルーブリックを意識してことばを選んだ。結果として生徒は正直に選んでくれたと感じている。ルーブリックのもう一つのねらいとして今いる自分の座標をより高められる目標を持ってくれることなので、次のルーブリックではそのことばを添えて生徒に伝えたい。

	観 点	評 価 の	知識		思考・判断・表現			主体的に学習に 取り組む態度	
	評価 規 準		食生活と健康との関係について説明 できる。		食生活を改善するための方法 について、自他の課題を発見 し、適切な解決方法を選択で きる。		健康的な食生活のための環境整 備について、現状を分析し、効果 的な対策について整理できる。	食生活と健康の関わりについて、自己 の課題解決に自主的に取り組もうとし ている。	
判 断 基 準	レ ベ ル 3		教科書本文より、重要語句 を読み取り、その意味や内 容を理解し、食事と健康が 密接に関わり合っている ことを説明できる。		食生活を改善するた めの方法について、自 他の課題を発見し、適 切な解決方法を選択 できる。		健康的な食生活のため の環境整備について、 現状を分析し、効果的 な対策について整理で きる。	授業で学んだ知識をもと に、自分が健康に生きてい くために必要だと考え、実 際に学校や家庭で行ってい ることを発表できた。	
	レ ベ ル 2		教科書本文より、重要語句 を読み取り、その意味や内 容を説明できる。		食生活を改善するた めの方法について、自 分の課題を発見し、適 切な解決方法を選択 できる。		健康的な食生活のため の環境整備について、 現状を分析し、効果的 な対策についておおむ ね整理できる。	生徒A 授業で学んだ知識をもと に、自分が健康に生きてい くために必要だと考え、今 後学校や家庭で行いたい と思っていることを自分で考 えて発表できた。	生徒A
	レ ベ ル 1		教科書本文より、重要語句 を読み取ることができる。	生徒A	食生活を改善するた めの方法について、自 分の課題を発見でき る。	生徒A	健康的な食生活のため の環境整備について、 現状を分析できる。	授業で学んだ知識をもと に、自分が健康に生きてい くために学校や家庭で行っ たほうがよいことを教師と 確認した。	

※ レベル1を1点、レベル2を2点、レベル3を3点として採点し、最高点を12点、最低点を4点とする

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 高等部 1 年 保健

授業名 現代社会と健康

ルーブリック名 高等部 1 年 保健 「食事と健康」

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？
・ 1 人学級の場合、生徒は自己評価として、教員側は生徒の評価として記入するため、ルーブリックをもとに共有することが協働的な学びとなるのか難しさがあった。 ・ 「生徒の自己評価」と「生徒の自己評価」で他者と協働することによって協働的な学びとなると考えると、教師が生徒役をしながら話し合い等を行い、教師も自己評価してそれを協働したら良いものか、それがどの程度、有効なのか。 ・ 実際に評価する際は教師による確認が必要であった。
成果
(生徒) ・ 授業の中で、自分が目指す目標が分かり、実行しようとする姿が見られた。 (教師) ・ 評価基準を明確にもちながら授業をすることができた。

	観 点 評 価 の	思考・判断・表現		学びに向かう人間性	
	評価規準	自他の性機能の成熟に伴う、「性に対する適切な態度」について、自分の考えを自己の経験や学習内容を踏まえて表現し、友達の考えも踏まえて考えをまとめることができる。		自他の性機能の成熟に伴う、「性に対する適切な態度」について、話し合いに参加して周りの意見を聞いたり、自分の意見を述べたり、友達の意見を引き出したりすることができる。	
判断基準	レベル 1	自他の性機能の成熟に伴う、「性に対する適切な態度」について、友達の考えを聞くことができた。	A B	自他の性機能の成熟に伴う、「性に対する適切な態度」について、話し合いに参加することができた。	A B
	レベル 2	自他の性機能の成熟に伴う、「性に対する適切な態度」について、自分の考えを自己の経験や学習内容を踏まえて表現することができた。	B	自他の性機能の成熟に伴う、「性に対する適切な態度」について、話し合いに参加して周りの意見を聞いたり、自分の意見を述べたりした。	A B
	レベル 3	自他の性機能の成熟に伴う、「性に対する適切な態度」について、自分の考えを自己の経験や学習内容を踏まえて表現するとともに、友達の意見を踏まえて考えをまとめることができた。	A	自他の性機能の成熟に伴う、「性に対する適切な態度」について、話し合いに参加して周りの意見を聞いたり、自分の意見を述べたり、友達の意見を引き出した。	

※ 点数はつけない

※ このルーブリックは見せず、アンケートをとる。

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 中学部 1－1 保健

授業名 性機能の成熟～性に対する適切な態度とは？～

ルーブリック名 11/9 保健振り返り

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？
・ 協働的な学びの動機づけとしての目標があいまい → 「話し合いで自分たちの意見をまとめる」という学習課題を設定、提示 ・ 実態的にルーブリックの様式は認識しづらく、また長文の理解が難しい。 → ルーブリックは直接提示せず、ルーブリックをもとにした「できた・できない」で回答する振り返りシート（別紙）で自分と友達を評価する。 ・ 考えの言語化が難しいことと、そもそもの学力差により話し合いが成立しにくい。 → 教師がファシリテーターを務めながら、必要に応じてできるだけ生徒の考えを損なわない形で言語化したり、難しい言葉を簡単な表現にしたりする。
成果
・ 1名出停のため、2名での授業に変更 ・ 「性」に関する考えをまとめる、という話し合いだったので、恥ずかしさなどから発言が少なくなることが予想されたが、ルーブリックをもとにした学習課題を事前に提示してやるべきことを明確にしたことで、2名とも積極的な発言がみられた。 ・ クラスに異性がないなどのこともあり、「経験がないからわからない」などの発言もみられた。これについても目標を明確にしていたことで、「今はわからなくても、この先考え続けなくてはいけないテーマ」と伝えることができた。 ・ 「OOくんどう思う？」などのお互いの意見を直接引き出そうとする姿はなかったが、他者評価ではお互いに「自分の意見を引き出してくれた」としていた。他者がいること、他者の意見を聞くことそれ自体が共同的な学びになっていると本人たちが捉えているとも解釈できる。 ・ 本人たちの振り返りツールとして、また教師の授業アンケートとしては、ルーブリックは有用であった。
課題
・ 協働的な学びにつなげるためのルーブリックの活用について、正直（教師の）理解が追い付かなかった。上記の成果についても、ルーブリックの活用によるものとはあまり感じていない。 ・ ルーブリック準備のために相当の時間を使った。日常使いに耐えるものにすることは難しいと感じた。

1 年 1 組 【数学】反比例

作成者 佐々木睦

	A 知識理解 (反比例の意味)		B 思考・判断・表現 (反比例の式)		C 主体的に学習に取り組む態度 (反比例の活用)	
評価規準	反比例の意味を理解することができる。		反比例の関係を式にすることができる。		比例と比較して、反比例を理解しようとしている。	
1	式の形に注目して、反比例の関係にあること判断できる。		表に分かったことを書き込むことができる		指示があれば表をもとに、 x と y の関係を考えようとしている。	
2	式の形や x, y の関係に気づくことができ、反比例の関係にあることが判断できる。	生徒 A 生徒 B 生徒 C	表中の x, y の関係を横だけでなく縦にも注目し、反比例の式をつくることができる。	生徒 A	表中の x, y の関係を比例と比較しながら、説明しようとする。	生徒 A 生徒 B 生徒 C
3	比例と反比例を比較し、共通点や相違点を見つけ理解を深めることができた。		反比例の関係に気づき、比例定数の意味も説明することができる。	生徒 B 生徒 C	表中の x, y の関係を比例と比較しながら説明することができ、日常生活に活用できることを探そうとする。	

氏名 _____

A 知識理解 _____ 点、 B 思考判断表現 _____ 点、 C 主体的に学習に取り組む態度 _____ 点

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 中学部 1 年 1 組 数学

授業名 佐々木睦

ルーブリック名 1 年 1 組 【数学】反比例

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ ・既習事項との比較で理解を深める予定であったが、自分で共通点や相違点を見つけることは、難しかった。いずれも、協働的な学びにはつながらなかった。
成果 ・小学校でやってきた表の見方（横方向）だけでなく、縦の関係にも注目するようになった。 ・比例定数の計算、説明も確実にできるようになっている。←ルーブリックの評価基準を先に説明した効果のように思う。

中2理科「生物の体のつくりとはたらき」で学習成果を自己評価するためのルーブリック

作成者：小水内光浩

評価の 観点 評価 基準	1 知識・技能		2 思考・判断・表現		3 主体的に学習に取り組む態度	
	生物の体のつくりと働きに着目してついで、体の特徴について基本的な概念や原理法則を理解する。また、科学的に探究するために必要な観察実験などに関する基本的な操作や記録などの基本的な技能を身につける。		生物の体のつくりについて、見通しをもって観察実験を行い、その結果を分析して解釈して、生物の体のつくりとはたらきについての規則性や関連性を見出し表現したりして科学的に探究している。		生物のつくりとはたらきに関する事物・現象に進んで関わり、見通しを持って振り返ったり、科学的に探究しようとしている。	
レベル3	観察・実験を行い、探究シートの中の「準備物」「方法」を読んで、基本操作を <u>正確</u> に覚え、また体の仕組みやはたらきを「結果」から <u>正確</u> に理解することができた。	生徒 A (○)	生物の体について <u>見通し</u> をもって観察・実験を行い、その結果を <u>正しく</u> 分析・解釈し、規則性を発見したりして、 <u>探究シートに「考察」を、「理由もつけて」まとめた。</u>		生物のつくりとはたらきについて観察・実験に興味を持って、進んで参加して、探究シートの「探究の振り返り」で、「 <u>気がついたこと</u> 」と「 <u>新たな課題</u> 」を両方とも記入できた。	生徒 A (○) 生徒 B (○)
レベル2	観察・実験を行い、探究シートの中の「準備物」「方法」を読んで、基本操作を覚え、また、体の仕組みやはたらきを「結果」から理解することができた。	生徒 B (○)	生物の体についての観察・実験を行い、その結果を分析・解釈し、規則性を発見したりして、探究シートに「考察」をまとめた。	生徒 A (○) 生徒 B (○)	生物のつくりとはたらきについて、観察・実験に参加して、探究シートの「探究の振り返り」で、「 <u>気がついたこと</u> 」と「 <u>新たな課題</u> 」のどちらかを記入できた。	
レベル1	生物の体についての観察・実験を行ったが、その基本操作を <u>あまり</u> 覚えておらず、また、体の仕組みやはたらきを <u>あまり</u> 理解することができなかった。		生物の体についての観察・実験を行い、その結果を分析・解釈したり、規則性を発見できなかったため、探究シートに写しただけだった。		生物のつくりとはたらきについて、観察・実験に参加したが、探究シートの「探究の振り返り」で、「 <u>気がついたこと</u> 」や「 <u>新たな課題</u> 」の両方とも記入できなかった。	

※レベル3を3点、レベル2を2点、レベル1を1点として採点してみよう。

1. 知識・理解 ()点 2. 思考・判断・表現()点 3. 主体的に学習に取り組む態度()点 合計点()点／12点

振り返りシート～協働的な学びの実現を図ろう

教科名 中学部理科 2 年

授業名 小水内光浩

ルーブリック名 生物のからだのつくり

ルーブリックを作成→授業
問題点・改善点～協働的な学びになったか？ 既成の「探 Q シート」の中から、「探 Q 実験 2 唾液のはたらき」を用いて、授業をした。授業は「探 Q シート」の流れのとおりに行ったが、協働的な学びになるような場面を設定できなかった。
成果 ルーブリックを作成するうえで、「主体的に学習に取り組む態度」のところで、「気がついたこと」と「新たな課題」の両方を記入できたか、生徒に評価をしてもらうことにしたが、生徒にとって、二つとも記入ができればいいのか、と分かりやすい評価になったのではないか。実際に、ここのところを自分で記入できたようである。(資料) (「知識・技能」「思考・判断・表現」のところは、漠然として生徒に分かりにくかったかもしれない。)

5 まとめと今後の課題

(1) まとめ

指導計画の段階から、生徒が自己を正しく評価できるようにということを最初の目標に定めて、ループリックの作成を始めた。授業における活用のタイミング、ループリックの内容、形式、相互評価への導入など、新しい指導構想を十分に検討した。授業を作る前に、ループリック作成をすることで、どういうことを意識させるか観点を明確にすることができた。このように教師がどこを目指したいか、明確にしたいかとしっかり把握できる面でもループリックを有効的に活用できたことと評価したい。さらに後半では、ループリックの活用を協働的な学びの指導構想に組み入れ、今後の授業を考えていく上で必須事項と捉えた。グループ内で、合計7回の研究協議を行ったが、協働的な学びの場面を考えていく中で、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三本の柱を評価の観点として行う個別最適な学習を充実させることが第一条件であるとの意見で一致した。評価基準で児童生徒自身が自己の学力向上を自覚し、自己肯定感を高めるということが大前提になり、他者を認め合う協働的な学びはそこからのスタートになる。

(2) 今後の課題

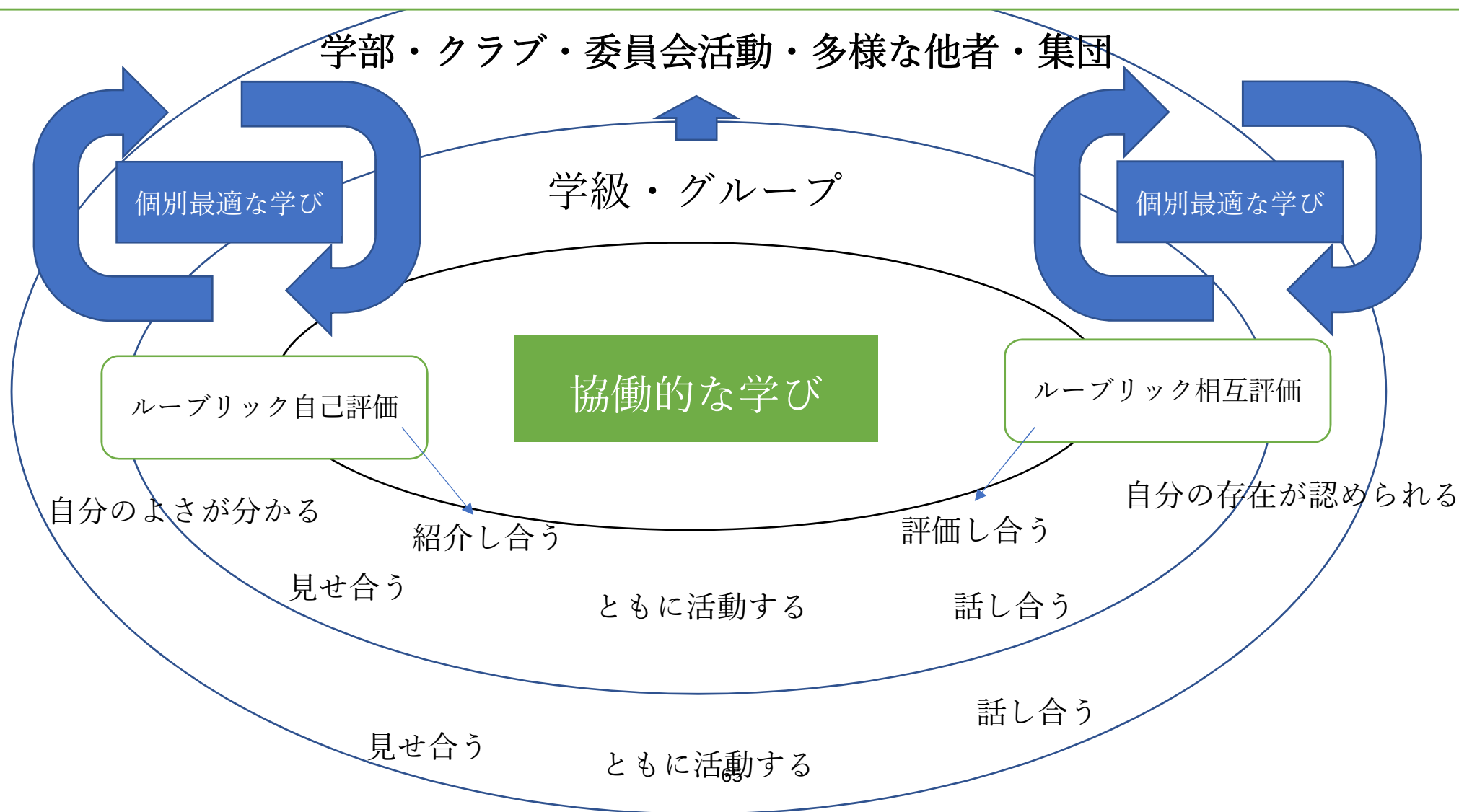
今回の研究ではⅠグループの少人数化がたびたびクローズアップされることが多かった。一人学級では協働的な学びは難しい。学習環境が児童生徒一人で、相互評価の実現に至らないクラスにおいては、教師とループリックについて確認し合う時間を取り、協働的な学びへの実現に近づける工夫が必要である。また相互評価を、校内と限定せずに他校との合同遠隔地授業で実現するという方法も考えられるなど、多面的に捉えてもよいであろう。今回は教科にポイントを置いた研究であったが、総合的な探究の時間や自立活動など、教科以外の、指導グループを超えた活動でも、協働的な学習の場面にループリックを取り入れていくこともできる。少人数の協働的な学びの実践については、先行事例など文献を探ることもなかったが、他校の取り組みについて効果的な事例はないか今一度探ってみることも必要だ。

6 協働的な学びの構想図

(1) 協働的な学びの構想図 教科等（小学校等に準ずる教育課程）

多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動に必要なことについて理解し、行動の仕方を身に付ける。

集団活動を通して、その活動に必要なことについて考え、話し合い、合意形成を図ったり、意思決定をしたりする。



第Ⅱグループ：知的代替の教育課程 グループ研究テーマ

指導と評価をつなぐキャリア教育

1. 知的代替の教育課程における「つなぐ」とは

本校の知的代替の教育課程においては、国語、算数の他に、「生活単元学習」「作業学習」といった知的障がい者を併せ有する児童生徒にとって日常生活に般化しやすいように各教科等を合わせた指導に日々取り組んでいる。

児童生徒が学校を卒業し、社会で自分の役割を果たしながら、自分らしく生き生きと生活するためには、児童生徒一人一人の実態に合わせ、学習指導要領の各教科等の目標・内容を取り扱い、小学部・中学部・高等部での教育内容をつなぎ、評価する、連続性・系統性のある指導が求められる。また、つないでいくことにキャリア教育の視点で授業を計画・展開する必要もある。そこで、本研究において、キャリア教育全体計画や学校教育目標及び学習指導要領の各教科等の目標・内容を確認しながら、本校の児童生徒の目指す資質・能力を検討していきたい。

また、児童生徒の評価の方法について共有し、そこからさらに授業を改善していく「指導と評価の一体化」を目指し、授業の質の向上に向けた研究を進めていきたい。

2. テーマ設定理由

本校を卒業した生徒は、進学、就職、福祉事業所等での就労など「社会」へ飛び出していく。しかし、いざ社会に出てみると学校生活で身に付けた力がうまく機能せず、もっている力を発揮できなかったり、限定された場面ではしか通用しなかったりと課題が多くみられている。

そこで、今一度「キャリア教育」について職員間で理解を深め、児童生徒が社会で生き生きと生活していくためにはどのような教育活動、指導方法が有効かを検証していきたい。特に、小学部・中学部・高等部間で情報を共有しながら児童生徒に身に付けさせたい力を明確にし、発達段階に応じた系統性のある教育活動を展開できるよう各教科の指導に落とし込みながら研究を進め、「個別最適な学び」と「協働的な学び」に迫っていきたい。

3. 研究の重点

- ・キャリア発達段階に基づいた児童生徒に育てたい力の整理と授業づくり
- ・本校の児童生徒に育てたい資質・能力の整理

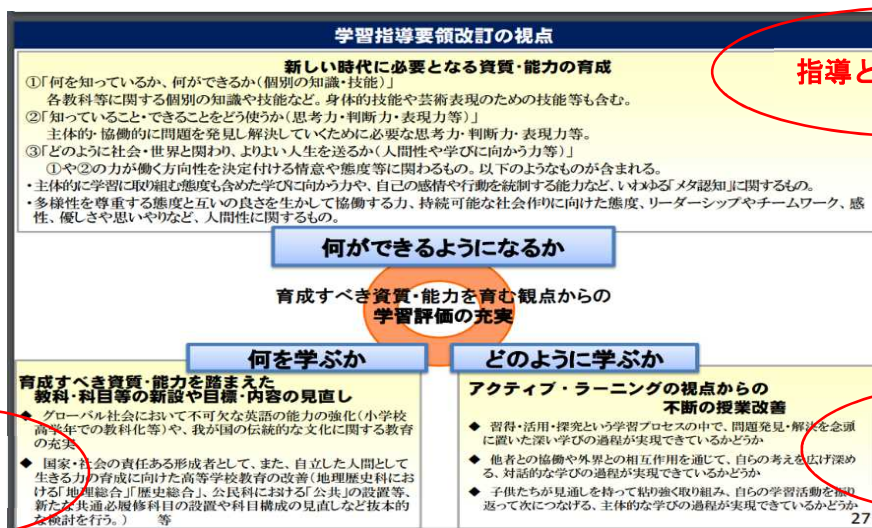
4. 研究の重点（2年次）

- ・児童生徒の実態から、学習内容をどのように学ぶかの検討
(年間指導計画で予定している単元について、その活動ではどの教科等の目標・内容を取り扱うのかを検討)
- ・「協働的な学び」の構想図の作成

5. 実践

今年度は、各教科等を合わせた指導に注目し、生活単元学習、作業学習から1単元を設定し、授業構想シートを作成し、授業づくりを行った。本校では、年間指導計画により、生活単元学習、作業学習の内容が年度初めに設定されている。しかし、本来であれば、児童生徒の実態から、指導目標、指導内容を設定することになっている。そこで、指導者が選定した1単元を、児童生徒の実態把握から、指導目

標、内容を決め、最後に活動内容を決定する流れで実践することに取り組み、効果的な合わせた指導、協働的な学びの場の検討を行った。



(1) 授業実践1 生活単元学習

はじめに、生活単元学習について確認を行い、共通理解した上で、指導検討を行った。

【生活単元学習】

1. 児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的・体系的に経験することによって、自立や社会参加のために必要な事柄を実際の・総合的に学習するもの
2. 広範囲に教科等の目標や内容が扱われる
3. 児童生徒の学習活動は、実際の生活上の目標や課題に沿って指導目標や指導内容を組織されることが大切

○配慮する点

- ・単元は、実際の生活から発展、個人差の大きい集団にも適合するもの
- ・生活上の望ましい態度や習慣が形成されて、身に付けた指導内容が現在や将来の生活に活かされるようにする
- ・目標意識や課題意識、課題の解決への意欲等を育む活動を含む
- ・集団全体で単元の活動に協働して取り組めるもの
- ・単元の活動は、自走性と自然な生活としてのまとまりのあるもの
- ・教科等に係る見方・考え方を生かしたり、働かせたりする内容で、多種多様な意義のある経験ができるように計画

※合わせた指導を行う場合は、取り扱われる教科等の内容を基に、児童生徒の知的障害の状態や経験等に応じて、具体的に指導内容を設定し、指導内容に適した時数を配当する。授業時数は、教科ごとに指導する場合との授業時数の合計と概ね一致する。

生活単元学習について、共通理解をしたのち、「何を学ぶか」は、教科であり、「どのように学ぶか」は、各教科での学びがよいのか、各教科等を合わせて学ぶほうがよいのかを検討すること、また、合わせて学ぶことのよさを指導者が検討して授業づくりをすることにした。そこで、グループのメンバー一人一人が授業を構想し、シートにまとめ授業実践を行った。その中で、中学部の生活単元学習を選択し、研究会で授業検討を行うことにした。

授業者からは、理科「植物の成長と生殖の仕組み」、職業・家庭「栽培の実際」、数学「土と肥料の割合や農薬の準備」、国語「生育の観察と記録」を合わせて指導することが提案された。

中学部 生活単元学習指導案

日 時：令和4年7月5日（火）3・4校時
 場 所：2年3組教室 テラス（プランター）
 対象生徒：1年2組A、2年2組B、
 2年3組C、3年2組D、3年3組E
 指 導 者：角館愛加 工藤一史、法領田真美、
 堀籠力斗

1 本時の指導

（1）本時の学習 「夏野菜を育てて、販売しよう」

（2）本時の目標

- ・ウリ科植物の生長の順序を確認する。前回の復習。（知識及び技能）
- ・雌花・雄花の違いを観察し、特定することができる。（思考力、判断力、表現力等）
- ・人工授粉の仕事を分担して行う。（学びに向かう力、人間性等）

（3）児童生徒の実態

授業構想シート（生活単元学習・作業学習）

単元名				
「夏野菜を育てて、販売しよう」				
対象学年				
小 ・ 中 ・ 高 1・2・3年				
実態把握（児童・生徒個人または学習グループ全体）				
生徒氏名	1－2 A			
教科名	国語	数学（算数）	理科	職業・家庭
段階	小3段階	小3段階	生活2段階	職業1段階
実態	簡単な指示や説明を聞き、行動できる。経験したことなどを大まかに伝えることができる。	ものとももの対応ができる。数や量の大小関係が分かる。	季節の特徴や天候の変化が分かる。身の回りにある植物に気づき、特徴などを表現できる。	自分の役割が分かり、時間いっぱい活動できる。生物の育成活動に関心をもっている。
生徒氏名	2－2 B			
教科名	国語	数学	理科	職業・家庭
段階	中2段階	中1段階	中1段階	中1段階
実態	自分の気持ちを的確に表現できる。日常生活に必要な文章を書くことができる。	数の大小関係を理解し、3位数までの四則計算ができる。計器を用いて、計測できる。	植物の構造や器官の仕組みを大まかに理解している。	社会における農業の役割を理解し、自分で農産物を加工し料理することに興味を持っている。

生徒氏名	2-3 C			
教科名	国語	数学	理科	職業・家庭
段階	小3段階	小2段階	生活3段階	職業1段階
実態	日常生活の中で自分の考えを相手に伝えることができる。	5までの数を2つの数に分ける組み合わせを調べ、答えを自分で考えることができる。	草花などの栽培において天候の変化に気付き関心をもって取り組むことができる。	作業内容を知り、使用する道具の扱い方に慣れることができる。
生徒氏名	3-2 D			
教科名	国語	数学	理科	職業・家庭
段階	中2段階	中2段階	中1段階	中2段階
実態	自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の考えを受けとめたりすることができる。	整数や少数、分数を用いた四則計算ができる。金銭の計算や、計量ができる。	季節の特徴や天候の変化が分かり、植物の成長する過程が分かる。	作業内容を理解し、自分で判断して作業に取り組むことができる。
生徒氏名	3-3 E			
教科名	国語	数学	理科	職業・家庭
段階	小2段階	小1段階	生活1段階	職業1段階
実態	簡単な指示や説明を聞き、その指示等に応じた行動をすることができる。	同じもの同士の集めづくりをすることができる。	身の回りの生命や自然について関心をもつことができる。	作業内容を知り、使用する道具の扱い方に慣れることができる。

目指す姿（資質・能力）（Ⅱグループ用の育てたい資質・能力参照）

- ・相手や目的に応じて、自分の伝えたいことを明確にする
- ・集団活動における役割を理解し、協力する
- ・自分の役割を理解し行動する

単元または題材の設定（教科での指導ではなく、合わせた指導の方がよい理由等）

本単元は仲間と一緒に活動することとおして、集団の中で楽しい時間を共有することや協力する良さを感じることを目指す。また、仲間との関わり方や集団生活でのマナーなども身につく機会になると考える。

野菜（果実）の栽培では植物の成長と生殖の仕組み【理科】、栽培の実践【職業】、土と肥料の割合や農薬の準備【数学】、生育の観察と記録【国語】など多くの教科を横断したり、組み合わせた学習が求められることから合わせた指導としている。

学習内容

- ・プランターに用土と肥料を適切な割合で混合し入れる。
- ・野菜や花の種を購入し、播種する。
- ・教室内で発芽と苗の生育を観察する。
- ・プランター（野外）に定植し、栽培し観察の記録をする。
- ・植物の生殖の仕組みを学び、人工授粉を行う。（スイカ）
- ・収穫し、大まかな計量と等分にカットし、一般的な価格を学び、実際に販売する。

※「教科名」「段階」は、学習指導要領にある各教科等の「教科名」「段階」である。

(4) 本時の展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点・ 児童生徒への配慮等	○評価の視点 ◎評価の方法	教材・ 教具等
導入	1. 系の進行で、本時の作業の確認をする。 2. 本時の目標を確認する。			作業日誌
分	協力して、人工授粉を成功させよう。			
展開	3. これまでのスイカの成長を振り返る。 4. 雄花と雌花の違いを確認する。 5. 収穫までのスケジュールを確認する。 6. 人工授粉の仕方を確認する。 7. 人工授粉の仕事の分担を行う。 8. 人工授粉を行う。	・スイカの成長が分かるように、6月13日からの写真を提示する。 ・雄花と雌花の写真を提示し、違いがわかるように説明する。 ・カレンダーを見ながら、受粉から収穫までに必要な日数を確認し、販売会に意識を向けられるようにする。 ・必要なものを持って移動できるように声を掛ける。	○画像を見て前回までの内容を思い出すことができるか。◎発言で確認 ○画像を見て特徴を比較する◎特徴を言葉で表現できる。 ○今日の日付と販売会の日付を確認し作業スケジュールのイメージを持つ◎日数を認識できる ○それぞれが責任をもって取り組むことができる◎お互いに協力できたかどうか	テレビ iPad 受粉棒 ラベル
まとめ	9. 記録したビデオを見て振り返る。 10. 目標について振り返りを発表する。 11. 次時の活動の確認をする。		○スイカを栽培するにあたって、必要な作業に興味を持つことができる ◎自分が取り組みそうな作業について発言する	作業日誌

(5) 授業研究会

授業実践での、協働的な学びの場面については、授業者の方から「人工授粉」そのものが協働的な学びとなっていること、その「人工授粉」が成功し、今後は販売会へ向けて準備を進めていることが話された。また、今回の作業分担については、それぞれの実態から、今回については教師が決めることにした。内容によっては、自己決定の場や、生徒同士の関わりの場も設定している。

最後にはグループワークを行い、今後の展開について意見が出された。それは、以下のとおりである。

・今後の活動について

販売会を行うのであれば、ポスターづくり（字を書く、写真を貼るなど分担して）をする。
ラベルづくりを行う。生徒と教師のペア→生徒と生徒のペア（協働的な学び）にする。

・工芸班（中学部・生活単元学習）では

実態差のある生徒の活動として、フェルトボールを制作している。
子どもたちのつながりを考え、報告では個々の頑張りを振り返る場を設定している。

・高等部の作業学習においては

物（製品）づくりや物流、子どもたちが「働くこと」を学ぶ学習をする。
自分の作業と他の作業を組み合わせでできている←この理解が今後の課題
一人一人のよさ、可能性に期待し、共に働く意味を考え、この経験が大切な力となるよう支援して

いく。

（２）協働的な学び、各教科等を合わせた指導と教科について

全体研究会、高教研講演会を経て、考えたことを共有する研究会を行った。

- ・生単の目標はない
 - 授業者は、生単の目標として、「本校の児童生徒に育てたい資質・能力」を挙げている。
 - ・教科の内容を指導する
 - 学習指導要領の各教科等の目標・内容を取り扱う。
 - 本校の場合は、年間指導計画を作成（昨年度並み、または職員の得意分野等を盛り入れている、各教科等の目標・内容から検討ではなく、活動が先、これは、長い歴史があり、本物の生活を学ぶことを大切にしてきた文化がある）後、授業実践を行う。
 - 各教科等の目標・内容から検討することに難しさがある。
 - ・何を合わせたのかを明確に
 - 小学部でいえば、図画工作は教育課程にないので、生単として取り扱うようにしている（場合によっては、合わせていない場合も、生単として取り扱っている）
 - ・教科の内容について評価する
 - 「本校の児童生徒に育てたい資質・能力」に当たる部分を評価している場合もあるのではないかな。
 - 教科ごとの評価だけではない。
 - ・協働的な学びについて
 - 生単や作業学習そのものが、協働的な学びである。
 - その場を共有するだけでなく、個々のよさが発揮されるような活動を、私たち教師が仕組んでいくことが大切である。
 - 個別最適な学びでつけた力を、集団の場で、発揮できるようにする。
 - ・講演会や研究会を経て
 - 内容は理解できるが、本校としてどのように取り組んでいくべきなのかが課題である。
- これらの課題が明確となった。

（３）授業実践２ 作業学習

はじめに、作業学習について確認を行い、共通理解した上で、指導検討会を行った。

【作業学習】

- １．作業活動を学習活動の中心にしながら、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するもの
- ２．児童生徒の働く意欲を培いながら、将来の職業生活や社会自立に向けて基盤となる資質・能力を育むことが重要

【高等部】職業・家庭科及び情報科の目標や内容が中心

○配慮する点

- ・教育価値の高い作業活動
- ・社会の変化やニーズ等にも対応した永続性や教育価値のある作業等を選定
- ・段階的な指導
- ・相互の役割等を意識しながら協働して取り組める作業活動
- ・安全で衛生的、健康的な作業内容や作業場所
- ・適切な作業量や作業の形態、実習時間及び期間
- ・作業製品等の利用価値が高く、生産から消費への流れと社会貢献が理解されやすいもの

○作業学習における協働的な学び

- ・生徒同士の話し合い
- ・どのようなことをやりたいのかを決める

- ・工程表を見合う
- ・できた作業から次の作業へとつなぐ
- ・挨拶「次の作業お願いします」等
- ・報告

これらのように、学習中のどの場面でも設定することができる。しかし、本校の生徒の実態から、個々の作業を教師がつなぐ形になっている。それを、生徒同士をつなぐようにするには、どのような取り組みが考えられるかについてグループワークを行った。

- ・工程表・・・分担で1つのものになっている、個々の必要性が実感できる
- ・作業の終盤・・・状況を確認
- ・自分以外の作業・・・目を向ける
- ・1つの製品をみんなでつくりあげる・・・個数を決める、表に表す→見える形にする
- ・販売会・・・達成感を味わわせたい
- ・職員のかかわり方・・・マンツーマンになり過剰な支援になっていないか

生徒が自分で考える機会を奪っていないか

- ・本校の生徒の実態にこの作業内容があっているのか？

自分で作業できる支援

生徒←作業→生徒

これらのことを受け、授業者は、「協働的な学び」として以下の5つを挙げ、授業を行った。

- ・朝礼（生徒主導）
- ・目標：友だちのいいところを見つけよう
- ・作業と作業のつながり
- ・作業成果の報告
- ・友だちのいいところ発表

授業構想シート（生活単元学習・作業学習）

単元名						
環境整備班 製品づくり						
指導者氏名						
佐藤 開思、佐々木忍、高橋健一、昆宏実、細井一浩						
対象学年						
小 ・ 中 ・ 高 1 、2、3 年 生徒 4 名						
実態把握（児童・生徒個人または学習グループ全体）						
生徒氏名	A			B		
教科等名	国語	数学	職業	国語	数学	職業
段階	中学 2 段階	小学 3 段階	中学 2 段階	中学 1 段階	小学 2 段階	中学 2 段階
実態	・ 自分の考えや思いをまとめて発表することができる。	・ 物の数や 2 つ以上の数字の大きさを比べることができる。	・ 自分の役割を理解し、作業に進んで取り組むことができる。	・ 自分の考えや思いを発表することができる。	・ 1 から 100 までの数字を数える、読み取ることができる。	・ 作業学習に達成感を得て進んで取り組むことができる。
目指す姿（資質・能力）（Ⅱグループ用の育てたい資質・能力参照）						
自ら学び、成長する子ども						
～将来設計や進路希望の実現を目指した目標を設定し、達成に向けて取り組む～						
単元または題材の設定（教科等での指導ではなく、合わせた指導の方がよい理由等）						
卒業後の社会生活や、産業現場実習に臨むにあたって必要となる力を、作業学習から学ぶことができる。製品づくりをする中で、コミュニケーションや道具の使い方など必要な要素で、合わせた指導として関連させた指導が有効であると考え。また、継続して取り組むことで仕事に取り組むにあたっての生徒の得意不得意に主体的に気づくことができる。						
学習内容						
本研究の授業では環境整備班として「油吸うんだゾウ」の製品づくりに取り組んでいる。大きく 4 つの工程に分かれて行う。 1 日誌記入 2 始めの挨拶 3 作業内容の確認 4 作業（適宜休憩） 紙の裁断、水ミキサー、フワフワミキサー、計量 5 日誌記入（振り返り） 6 先生から 終わりの挨拶						
協働的な学びの姿						
製品づくりの目標を設定し、目標達成のために各工程の担当が自己の係の仕事に取り組む。また、円滑に作業が進むように各工程の担当同士が進捗状況等を確認しながら進めていく。報告、連絡、相談の重要性を感じながら仕事を進めることができるよう教職員を含めた作業班全体がコミュニケーションを取りながら進める場面を設定している。						

高等部 作業学習指導案

日 時：令和4年11月22日（火）3、4校時

場 所：木工室

対象児童・生徒：木工班生徒4名

指 導 者：T1 佐藤開思、T2 昆宏実、

T3 佐藤あゆみ（3校時）、中嶋健太（4校時）

1 単元名

「販売会に向けて製品づくりに取り組もう」

2 単元について

（1）単元・題材について

本単元の内容は、特別支援学校学習指導要領解説知的障害者教科編(下)第8職業において、以下のように位置付けられている。

A 職業生活

ア 勤労の意義

勤労に関する意欲や関心を高め、他者と協働して取り組む作業や実習等に関わる学習活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

（ア）勤労の意義を理解すること。

（イ）意欲や見通しをもって取り組み、その成果や自分と他者との役割及び他者との協力について考え、表現すること。

（ウ）作業や実習等に達成感を得て、計画性をもって主体的に取り組むこと。

国語

中学2段階(思考力・判断力・表現力)

A 話すこと・聞くこと

ウ 見聞きしたことや経験したこと自分の意見などについて、内容の大体が伝わるように伝える順序等を考えること。

環境整備班では、「油吸うんだぞう」の製造に取り組んできた。製造した商品は、年3回の販売会での販売を目的に協力して一つの商品を多く製造することを目標としている。製造に関する工程は大きく4つの工程があり、各生徒1工程を担当し商品の製造に取り組んでいる。一人1工程にすることで協力して取り組むコミュニケーション力と、与えられた役割に継続して取り組む力を高めていきたい。

本単元を通して、協力して製造することで感じることのできる達成感を味わうことができると考える。

（2）児童・生徒について

環境整備班は1年生1名、2年生2名、3年生1名の計4名で活動している。4名とも車椅子を使用しており、電動車いすが1名、自走可能が1名、2名は移動の際教師の支援が必要である。また、生徒の中で3名は手指の動きに硬さがあり、安全のために見守りや支援が必要である。今年度の作業学習で複数の作業を経験しており、経験のある作業について見通しをもって活動することができる。

本単元では目標の発表だけでなく報告・連絡・相談の場面を設けており、自ら考え言葉で伝えることができる生徒は3名で、1名は音声言語をもたないため50音表や手話を模したサインを使用してコミュニケーションをとることができる。

(3) 指導にあたって

本単元では高等部卒業後、協働的に働くことの意義や達成感を感じることができるように指導していきたいと考える。前回の販売会までの取り組みの中で1つの作業に対して達成した数や安全に取り組むために身につける必要がある力を考え工夫しながら継続して働くちからを目標に取り組んできた。本単元からは協働的な学びを入れ、各工程と自分自身の工程がつながっていることを意識し、協力して作り上げていくことで製品が完成する喜びや、販売会に向けて立てた班目標や個人目標の達成で得ることができる達成感について意識できるような授業としていきたい。

3 単元・題材の目標及び指導計画

●学習内容 (学習指導要領)	次	● 学習活動	時間	○3つの柱における目標		
				●知識及び技能	●思考力、判断力、表現力等	●学びに向かう力、人間性等
A 職業生活 ア 勤労の意義 勤労に関する意欲や関心を高め、他者と協働して取り組む作業や実習等に関わる学習活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。 (ア) 勤労の意義を理解すること。 (イ) 意欲や見通しをもって取り組み、その成果や自分と他者との役割及び他者との協力について考え、表現すること。 (ウ) 作業や実習等に達成感を得て、計画性をもって主体的に取り組むこと。	第 1 次	販売会の目標を決めよう	2	・販売会の日程や活動場所、知ることができる。	・販売会に向けて、作業における役割を踏まえて、自身の成長や課題について考え、表現することができる。	・販売会までの一連の活動に見通しをもち、計画的に作業に取り組む。
		製品づくりに取り組もう	14 本時	・目的をもって作業に取り組み、自分の役割を果たし、自ら仕事に励む大切さを理解する。	・見通しをもって取り組んだ結果や成果などを振り返り、協力の仕方について考え、表現することができる。	・準備や片付けを含んだ一連の活動に見通しをもち、自ら作業に取り組む。
		販売会の準備をしよう	4	・販売準備に取り組み、販売会の自己の役割について理解することができる。	・販売準備に必要な役割を考え、協力の仕方について考え、表現することができる。	・販売準備に見通しをもち、作業に取り組む。
	第 2 次	販売会	2	・自己の役割を理解し接客に取り組むことができる。	・商品の魅力を接客で表現することができる。	・商品を販売する達成感を得て、主体的に販売に取り組む。
	第 3 次	販売会を振り返ろう	2	・販売個数や接客の様子を振り返りまとめることができる。	・販売会における自己や他者との役割を振り返り、次回に向けての課題や目標を考え、表現することができる。	・振り返りに見通しをもって取り組み、次回の販売会の計画に主体的に取り組む。

4 本時の指導

(1) 本時の学習 『油すうんだぞう』を製造しよう」

(2) 本時の目標

- ・目的をもって作業に取り組み、自分の役割を果たし、自ら仕事に励む大切さを理解する。
(知識・技能)
- ・見通しをもって取り組んだ結果や成果などを振り返り、協力の仕方について考え、表現することができる。(思考力判断力表現力)
- ・準備や片付けを含んだ一連の活動に見通しをもち、自ら作業に取り組む。(学びに向かう力、人間性)

(3) 児童生徒の実態と目標

氏名 (学年)	児童の実態	目標	指導・ 支援の手立て	評価規準
A (1年)	・必要な報告を考え自ら行うことができる。 ・手指の動きの硬さがあるが道具を使うことで細かな作業に取り組むことができる。	・秤を使い、適正な量のパルプを測ることができる。 ・友達の作業に注目して、良い点を見付け発表することができる。 ・正しい言葉遣いで報告することができる。	・パルプを掴みやすい道具を準備する。 ・振り返りの発表の内容を朝礼で確認する。 ・朝礼で報告の手順を確認する。	・秤を使い、適切な分量を量れたか。 ・振り返りで自分の考えを発表することができたか。 ・自ら報告できたか。
B (2年)	・50音表やサインを使い挨拶や報告をすることができる。 ・教師と一緒に手順を確認することで正しい手順で作業をすることができる。	・正しい手順で作業を進めることができる。 ・友達の作業の中から良い点を見付け、教師と一緒に発表することができる。 ・サイン等を使い自分から報告することができる。	・手順表を準備する。また、違う手順の時は教師と確認する。 ・振り返りの発表の内容を朝礼で確認する。 ・朝礼で報告の手順を確認する。	・正しい手順で作業できたか。 ・選択肢の中から自分の考えを選ぶことができたか。 ・自ら報告できたか。

C (2年)	・1から10までの数字を教師と確認しながら数えることができる。 ・決められた手順で作業を進めることができる。	・正しい手順で作業を進めることができる。 ・友達の作業の中から良い点を見付け、教師と一緒に発表することができる。 ・自分から友達や教師に報告することができる。	・教師と一緒に数や作業手順を確認する。 ・振り返りの発表の内容を朝礼で確認する。 ・朝礼で報告の手順を確認する。	・正しい手順で作業できたか。 ・選択肢の中から自分の考えを選ぶことができたか。 ・自ら報告できたか。
D (3年)	・作業手順を理解し効率のよい方法を考えることができる。 ・自分でできると支援が必要なことを判断して声をかけることができる。	・正しい作業手順で作業を進めることができる。 ・友達の作業に注目して、良い点を見付け発表することができる。 ・適切な言葉遣いで作業の報告をすることができる。	・手順表を準備する。 ・振り返りの発表の内容を朝礼で確認する。 ・朝礼で報告の手順を確認する。	・正しい作業手順で作業できたか。 ・振り返りで自分の考えを発表することができたか。 ・自ら報告できたか。

(4) 本時の展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点・児童生徒への配慮等	○評価の視点 ◎評価の方法	教材・ 教具等
導入 10分	1 日誌の記入 ・日付、作業について記入する ・朝礼 (1) 挨拶 (2) 点呼 (3) 作業内容と目標の確認	・作業日誌に作業内容と日時を記入する。 ・紙を折る、なぞり書き等生徒に合わせて書きやすいように準備する。 ・進行表を準備する。 ・今日の作業内容と担当する生徒を		

		ホワイトボードに掲示する。 ・班としての目標と振り返りで発表する内容を示す。		
展 開	2 作業 (1) 作業準備 ・班長の号令で作業を開始する。	・必要な場合エプロンの着用を支援する。	○準備や片付けを含んだ一連の活動に見通しをもち、自ら作業に取り組む。(主体的に学習に取り組む態度) ◎自ら片付け、準備に取り組もうとしている(観察)	・エプロン ・シュレッター ・磁石 ・ホワイトボード ・ミキサー ・ボウル ・カップ ・タイマー ・晒し布 ・カゴ ・ビニール袋 ・秤 ・お茶パック ・ピンセット ・紙コップ
5 0 分	① シュレッターがけ ・紙の枚数を10枚数える。 ・数えたものを一枚ずつシュレッターにかける。 ② 水ミキサー ・裁断された紙をカップ1杯分ミキサーに入れる。 ・ミキサーに貼られたテープラインまで水を入れる。 ・ミキサーに30秒かける。 ・布を被せたカゴに流し入れる。 ③ ふわふわミキサー ・パルプを規定の量ミキサーに入れる。 ・ミキサーに30秒かける。	・両手を使い、作業できるようにシュレッターの位置を右側に設置する。 ・数の数え間違えた時は、教師と一緒に再度確認する。 ・作業手順を示したものを掲示する。 ・数を数えやすい記録表を準備する。 ・報告などでボウルを持って移動する際は教師が移動の支援をする。 ・蓋を閉じる、ミキサーに乗せる際、教師が支援する。 ・作業がしやすいようにミキサーの下とカゴに滑り止めを敷く。	○目的をもって作業に取り組み、自分の役割を果たし、自ら仕事に励む大切さを理解する。(知識・技能) ◎班員に報告や連絡をし、自己の役割に継続して作業に取り組んでいたか。(観察)	

	・袋を被せたカゴに柔らかくなったパルプを入れる。 ④ 計量 ・穴の空いた紙コップにお茶パックを付け秤に乗せる。 ・ピンセットを使い紙コップにパルプを入れ、8gを測る。 ・紙コップに入ったパルプを油性マジックでお茶パックに押し入れる。 ・10個量り終えた後に再確認を行う (2) 片付け (3) ちぎり (4) 日誌記入	・ ・片づける場所がわかりやすいように片付け場所を示す。 ・パルプを掴みやすいようにピンセットの先に厚紙を固定し、掴める箇所を広げる。 ・シュレッターを担当した生徒が水ミキサー後のパルプを細かくちぎる。		
まとめ20分	3 振り返り (1) 作業成果の報告 (2) 友達の良い点発表 (3) 終礼 ① 次回の授業について ② 挨拶	・作業成果を発表し、ホワイトボードに示す。 ・必要に応じて選択肢や例を示す。	○見通しをもって取り組んだ結果や成果などを振り返り、協力の仕方について考え、表現することができる。(思考力判断力表現力) ○自分の考えをまとめ発表できたか。(日誌記入、観察)	

(4) 研究会

グループワークでは、次の3つについて話し合った。

【製品を作り上げる工程の理解】

- ・一人一人が、1つの製品になる工程が分かる。
- ・次の作業につなげる工程表や写真、製品の完成品を提示する。
- ・作業が一つでも欠けたら製品にならないことを理解できるようにする。(互いの必要性)
- ・友達の活動が見える配置にする。
- ・生徒間で報・連・相ができる場面作りを設定する。

【自己評価、他者評価】

- ・他者の頑張りを知り、認める。
- ・反省会の中で仲間に自分の良さを認めてもらえることで、意欲の向上につながる。

【その他】

- ・肢体不自由を考慮した作業内容を設定する。
- ・職員も一緒に働きながら介助したり、生徒間のつながりを支援したりする。

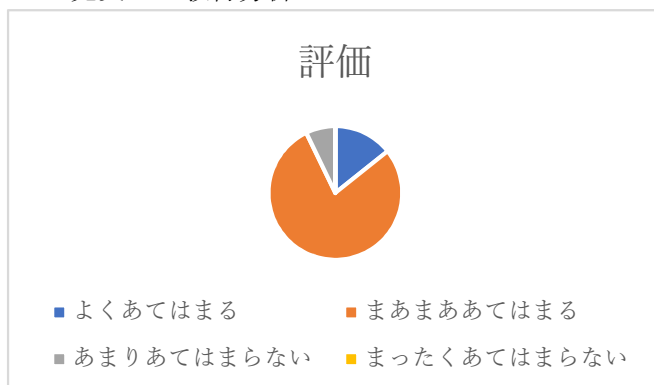
グループワークを経て、発表し合った中で、作業学習における協働的な学びとは、次のように考えた。

- ・製品を作り上げる工程を理解し、自分や他者の役割を意識して取り組むことができる学習
- ・お互いの作業の様子を見て、生徒の自己評価、他者評価を行うことで意欲を高めることができる学習

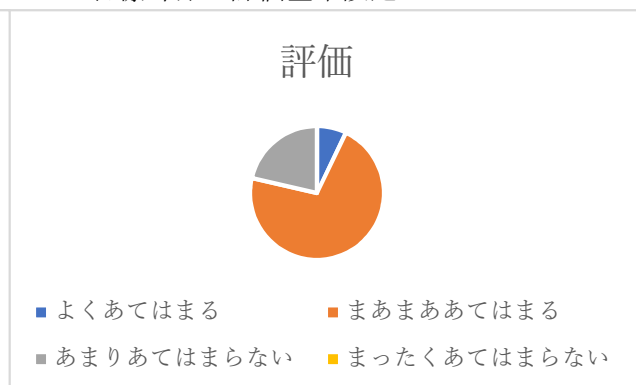
6. まとめ(成果と課題)

今年次研究では、実態把握から授業づくりを行い、その中で「協働的な学び」について検討を行ってきた。授業実践については、代表の2名だけでなく、グループに所属している職員全員が授業構想シートを作成し、授業実践を行い、指導と評価をつなぐキャリア教育振り返りシートを活用し、振り返りを行った。その結果は、次のとおりである。

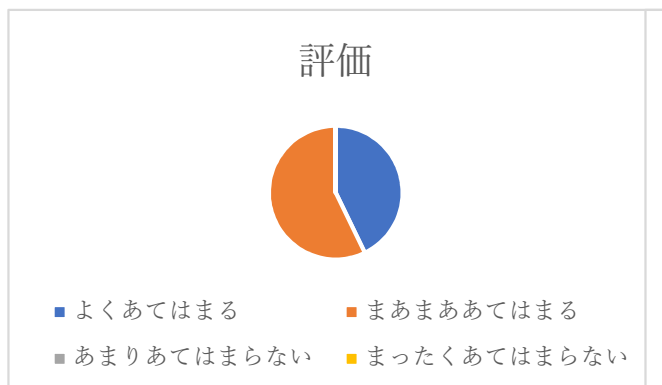
1. 充実した教材分析



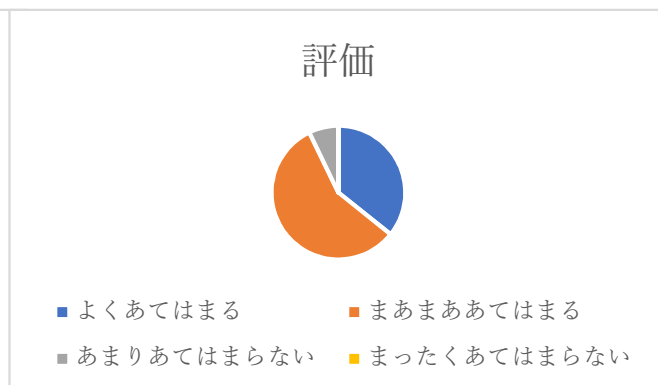
2. 目標吟味・評価基準設定



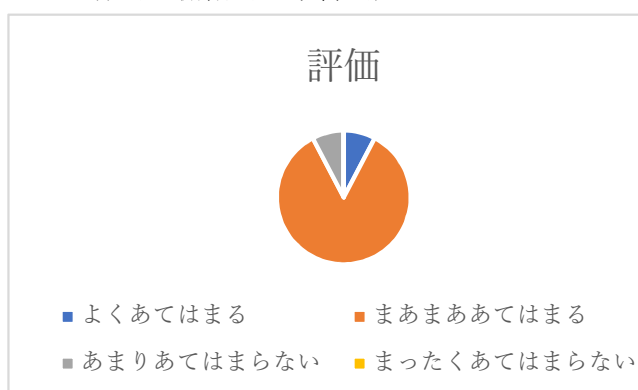
3. 実態を踏まえた展開案



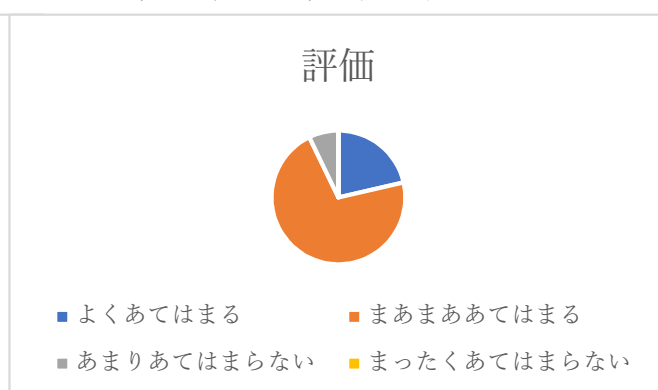
4. 課題設定



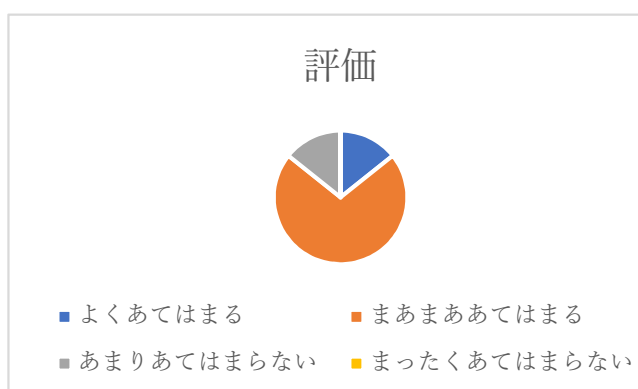
5. 主体的・協働的な学習展開



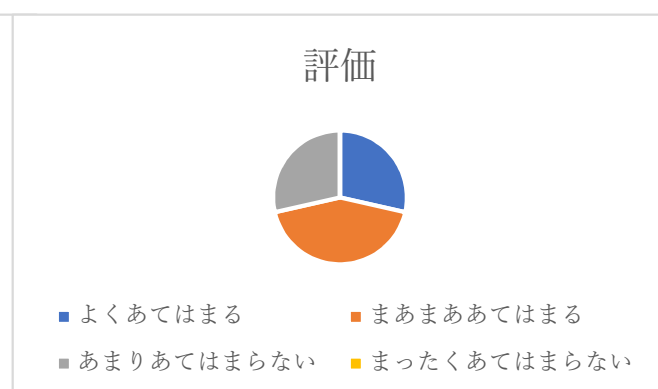
6. 児童生徒同士、児童生徒と教師の関わり



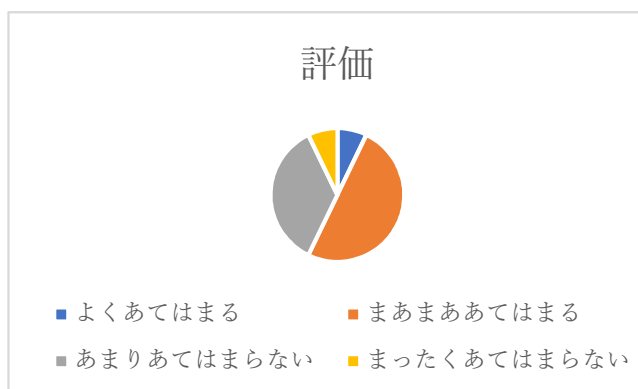
7. 障害の状況に留意



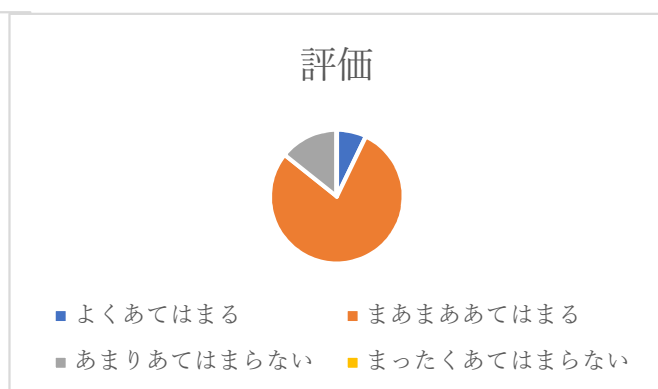
8. 振り返りの設定



9. 自己評価の指示



10. 評価基準に照らし合わせた評価



授業実践を含めた職員の振り返りから、授業構想シートを作成することで、各教科等の実態把握を行ってからの授業づくりができたことが読み取れる。また、協働的な学びの視点については、生活単元学習、作業学習そのものが協働して取り組める内容となっていることもあるが、職員が意識して取り組むことがおおむねできている。学習の中で「協働的な学び」については、一緒に活動する、一緒に作業する、見る、見せ合う、発表し合う、教師が仲介しながら、ものごとを決定する、鑑賞の中で、自分や友達のよさを認め合える、報告、連絡、相談、職員を含めた作業班全体のコミュニケーション、作業製品を作ろうという協働意識、個々の必要性を実感できる流れ、対話、つながり、友達を思いやる気持ち、楽しさ、声掛け、振り返り、作業の確認等が挙げられ、これらの活動場面が設定された授業となった。さらに、それらの活動をとおして、児童生徒同士の関わり、児童生徒と教師の関わりを大切にすることも読み取れる。これらのことは、グループ研究会を重ね、教師が授業づくりにおいて重点として取り組んだ成果だと考える。

課題としては、振り返りシートからも読み取れるように、振り返り・評価にかかわる点において、否定的な回答が多くみられた。これは、児童生徒の各教科等の実態を把握したが、評価に関しては、各教科等を合わせて指導を行う場合においても、各教科等の目標に準拠した評価の観点による学習評価を行うことになっているが、そこに難しさを感じている結果である。また、各教科の目標に準拠した評価の観点による学習評価を行っているのか、「本校の児童生徒に身につけたい資質・能力」を中心とした学び方・学びに向かう姿の評価を行っているのか、指導者によって異なる状況がある。本グループの研究テーマでもある「指導と評価をつなぐ」においては、課題が残った。次年度は、つなぐことができるよう、研究を推進していきたい。

「協働的な学びの視点」からは、関わりの中で、どうしても児童生徒と教師の関わりが多いので、児童生徒同士の関わりを増やすこと、また、そのために教師が関わりながら児童生徒同士をつないでいけるようにしていきたい。また、教師の役割として、児童生徒がひとりでできるようにすることも大切であるが、教師が手伝ったらできることにも注目しながら、どこまでの援助で「できる」につなげることになるのか、検討していきたい。また、子どもたちの主体性を引き出すためにも、「待つ」支援の重要性も実感している。「待つ」ことで、「できる」ことが増える場合もあると考える。待ち方・関わり方も検討しながら、児童生徒のキャリア発達を促していきたい。

7. 次年度研究に向けて

今年度の研究においては、単元で取り扱う内容・活動が決定されている中で、実態把握を行い、授業構想を練ってきた。しかし、各教科等を合わせて指導を行う場合においても、各教科の目標を達成していくことになり、育成を目指す資質・能力を明確にして指導計画を立てることが重要である。本校では、生活単元学習・作業学習における目標として、昨年作成した「本校の児童生徒に身につけたい資質・能力」の内容を中心に設定している。これは、

各教科等の目標ではなく、学び方や学びに向かう姿としている。これと各教科等の目標をそれぞれで捉え、それぞれ評価することが必要である。そのために、以下のように組みたい。

【現行】

年間指導計画によって設定された単元

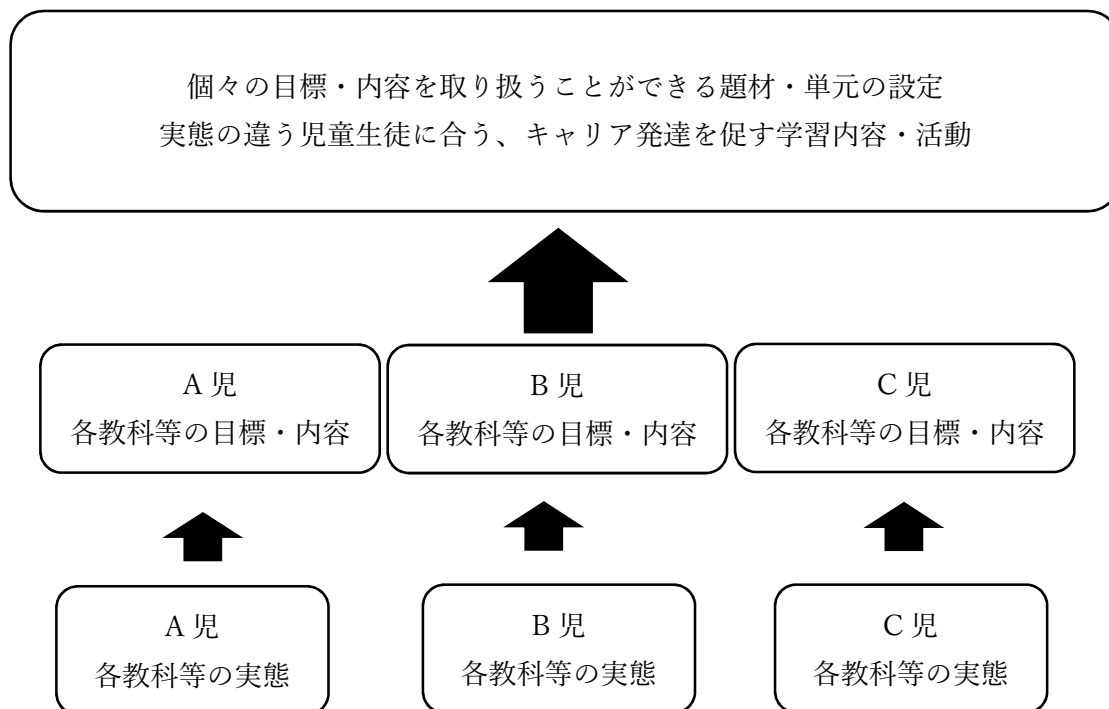


活動から、どの目標・内容を取り扱うことが可能か検討

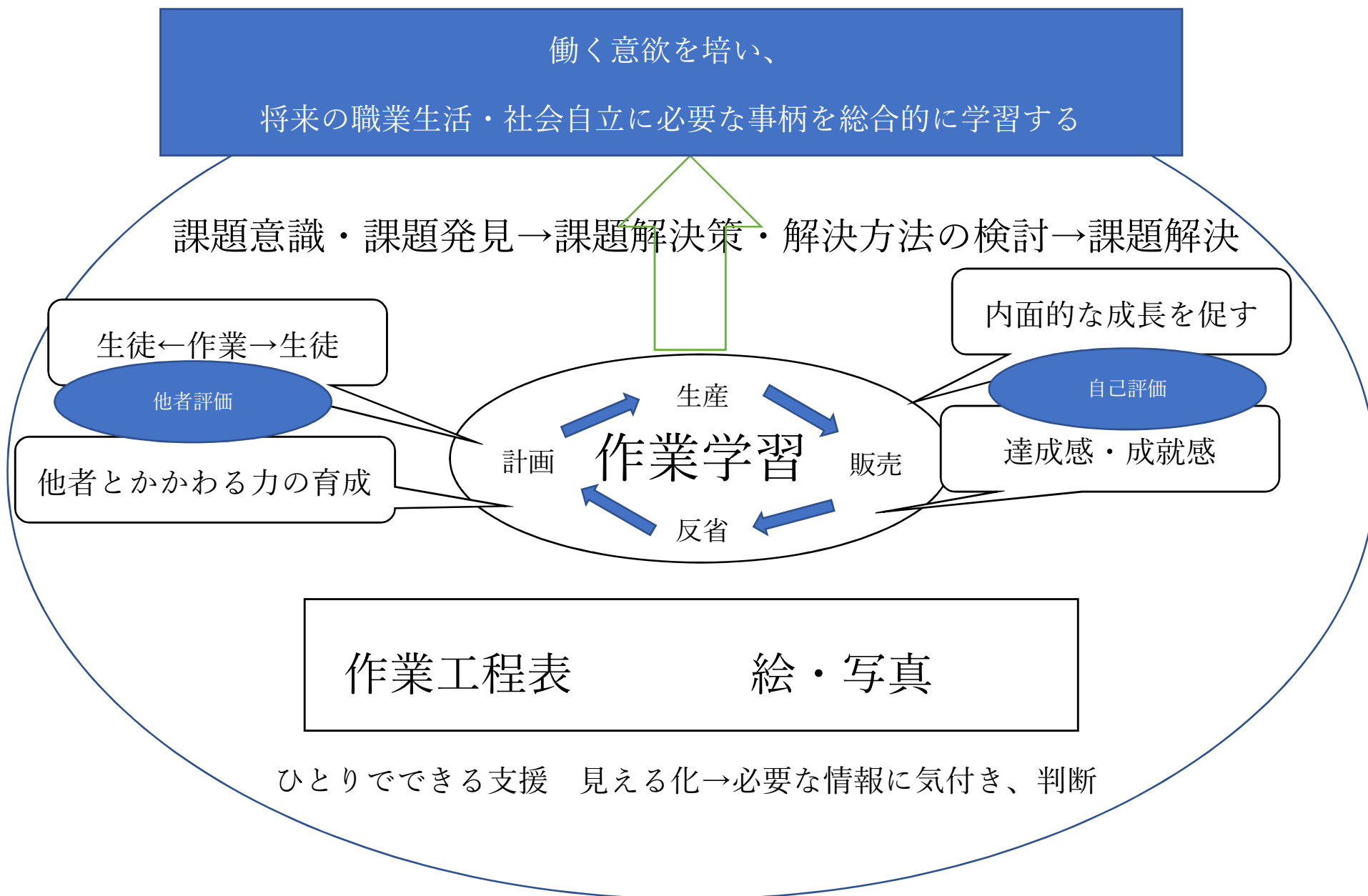


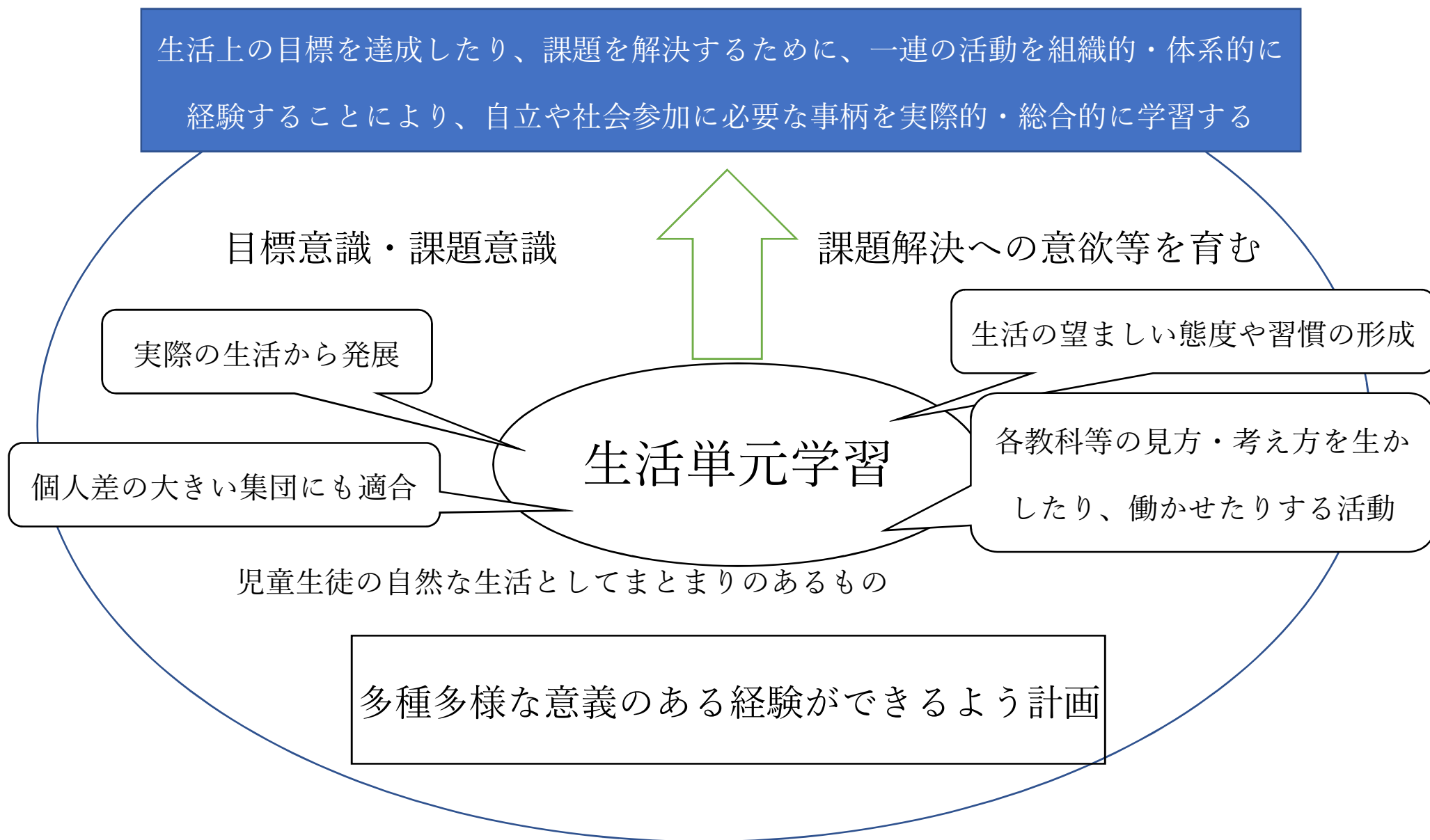
授業実践

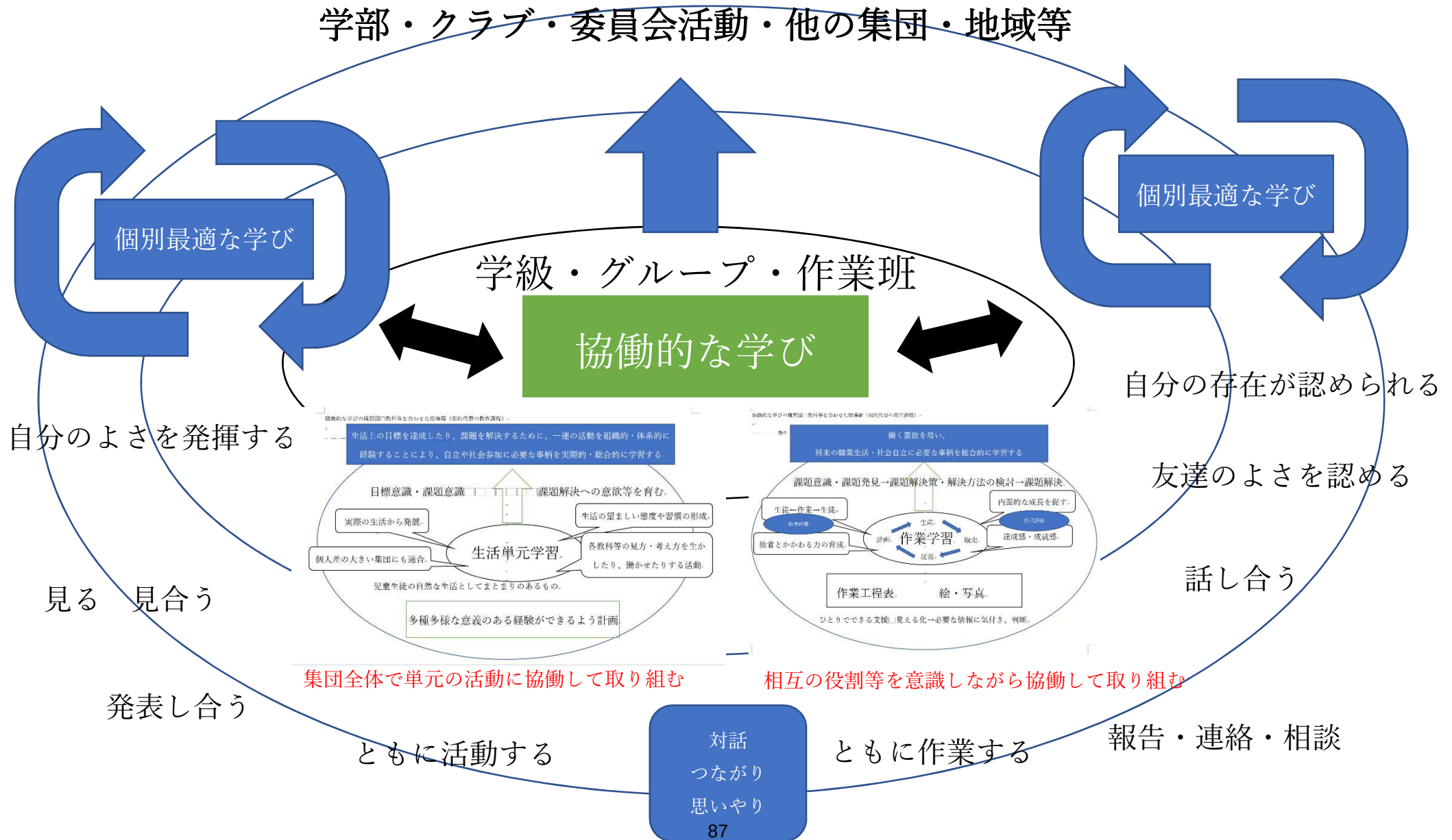
【次年度 1 単元で実践】



本校の実態から、全単元で行うことには難しさがある。しかし、1 単元について取り組むことで、評価までつなぐことができるのではないかと考える。また、生活単元学習・作業学習の単元を設定する前に、実態把握を行い、各教科等の目標・内容を設定することで、個別最適な学びにおいて必要な資質・能力を育成し、それらを集団の中で生かしたり、発揮したりできる協働的な学びにつなぎ、その往還によって、児童生徒のキャリア発達を目指していきたい。(別紙 協働的な学びの構想図 参照)







第Ⅲグループ：自立活動を主とする教育課程 研究テーマ

実態把握と授業づくりをつなぐ

～となん式システムづくり～

内容 「学習到達度チェックリストを活用した教科の視点からの実態把握と目標設定及び授業実践をととして、自立活動を主とする教育課程での協働的な学びを目指す」

1. 自立活動を主とする教育課程におけるつなぐとは

本校の「自立活動を主とする教育課程」に在籍する児童生徒は、年々増加傾向にあり、その実態も様々である。

自立活動の指導は、個々の障害の状態や発達の段階等に即して指導を行うことが基本である。個々の障害の状態や発達の段階等の的確な把握に基づき、学習指導要領等示されている「内容」の中から必要な項目を選定し、それらを相互に関連づけて個別に指導の目標や具体的な指導内容を定める必要がある。これらの児童・生徒の実態把握を日々の授業につなげるプロセスを、自立活動を主とする教育課程における「つなぐ」と捉えている。

本研究では、個々の児童生徒の実態把握から目標を設定し、その目標を達成するためにどのような授業を行っていけばよいのかを明確にして、日々の授業へとつないでいくための実践を行った。

2. テーマ設定理由

本校の「自立活動を主とした教育課程」では、小・中学部においては特別活動の他は、すべて自立活動として教育課程が編成されている。その中で、「朝の会」「リズム」「うんどう（中学部は運動）」「チャレンジ（中学部は課題）」などの授業を行っている。しかし、それらの授業の指導目標・内容は指導者によって様々であり、「自立活動」の目標・内容を取り扱っている場合も、「教科的」な目標・内容を取り扱っている場合もある。

本研究では、上記のことを授業の担当者全員で確認し、共通認識をもって授業を行うことが必要と考えた。併せて、自立活動の指導の基本である『児童生徒の実態を的確に把握し、それに基づいて指導すべき課題を明確にし、個々の指導目標や具体的な指導内容を設定していくこと』という考え方についても全体で再確認する必要があると考えた。

上記のことから、となん支援学校独自の「実態把握→目標設定」のシステムを作り、今後はそのシステムを踏まえて授業を行っていきたいと考え、本テーマの設定に至った。

3. 研究の重点

- ・音楽科、体育科の視点を取り入れた授業実践
- ・自立活動を主とする教育課程での「協働的な学び」の指導構想

4. 研究内容

- ・「スコアと根拠となる行動シート」「目標のための手がかりとなる行動シート」「目標・指導内容・方法シート」の作成
- ・となん式ねらい一覧の作成
- ・音楽科、体育科の視点を取り入れ、自立活動を主とする教育課程での協働的な学びの授業実践

5. 自立活動を主とする教育課程における「協働的な学び」の指導構想

キーワード：教師と一緒に、集団活動の雰囲気を感じる、友達の活動に注意を向ける

《うんどう、体育》

指導場面	具体的指導内容	指導上の留意点	児童生徒の反応 (行動)
導入	・教師と一緒にあいさつすること	・当番に注目するように声をかける。	・当番に視線を向ける。
展開	・友達の活動の様子を意識し視線を向けたり、集団活動の雰囲気を感じたりすること ・教師と一緒に楽しみながら競技に取り組む ・教師と一緒に楽しみながら体を動かすこと ・体を動かす心地よさを	・教師は児童と一緒に他の児童を応援したり、がんばりを認めたりする。 ・自分がプレイしているとき以外もコートに視線が向くようにMTが活動の雰囲気を盛り上げる。 ・競技をしている友達に視線を向けるように、声を掛けたり視線を向ける方向を指さしたりする。 ・活動の雰囲気を感じて表情や体の動きに現れたときは、活動の様子を児童に話して共感する。 ・交代の際、おすすめの楽しみ方として児童が楽しん	・教師の声掛けで、声を出そうとしたり、表情がやわらいだりする。 ・コートに視線を向ける。 ・友達に視線を向ける。 ・雰囲気を感じて、表情や体の動きが現れる。 ・快の表情、声、身体

	自分なりの方法で表現すること	でいた様子を各グループの職員がホワイトボードに記入しておき、次のグループの職員が楽しみ方の紹介をし、期待感を高めるようにする。	の動きが現れる。
まとめ	・ 友達の活動に注意を向けること ・ 教師と一緒にあいさつすること	・ MTがホワイトボードに紹介された楽しみ方を紹介し、みんなで振り返りができるようにする。 ・ STは、児童と共感したり相づちをうったりして楽しかった雰囲気を作る。 ・ ST1～ST5に個々の生徒の頑張った点やみんなに伝えたい点を簡潔に発表してもらう。 ・ 当番に注目するように声をかける。	・ 友達の活動に視線を向ける。 ・ 当番に視線を向ける。

《リズム》

指導場面	具体的指導内容	指導上の留意点	児童生徒の反応 (行動)
導入	・ 教師と一緒にあいさつすること	・ 当番に注目するように声をかける。	・ 当番に視線を向ける。
展開	・ 教師と一緒に心地よい音や自分なりの鳴らし方を見つけ、楽器の音を出すこと ・ 教師と一緒に歌ったり、教師や友達と楽器をな	・ 子供の実態と楽器の種類によって、床に置く、角度をつける、教師が持つなど、手や腕の可動域に合わせて設置したり、配置を検討したりしながら進める。 ・ 合奏することが目標ではないが、一人一人が役割を持ち、教師や友達と協働して	・ 音を聴いて、手や体が動き、楽器の音を出す。 ・ 伴奏を聴き、表情の変化、声が出

	らしたりすること	1曲を完成させたことに、達成感や満足感をもたせる。	る、体を動かして歌ったり、手や体が動き、楽器の音を出したりする。
まとめ	・ 友達の活動の様子に注意を向けたり、友達が鳴らした楽器の音に気付いたりすること ・ 楽器を一人ずつ鳴らす場面で、良い点や進歩の状況を教師から生徒へ伝えること ・ 教師と一緒にあいさつすること	・ 友達の前で、一人ずつ音色や奏法を発表する時間を設けたり、動画を撮影、その場で再生してすぐにみんなで振り返りができたりするようにする。 ・ 教師が共通事項「音楽を形づくっている要素」と関わらせて、生徒の良い点や進歩の状況を積極的に伝える。 ・ 評価をとおして、お互いの活動を意識できるようにする。 ・ 当番に注目するように声をかける。	・ 友達に視線を向けたり、楽器の音を聴いて、表情が変わったり、体が動く。 ・ 教師からの話を聞き、表情が変わる。 ・ 友達に視線を向ける。

6. 実践

(1) 「スコアと根拠となる行動シート」「目標のための手がかりとなる行動シート」「目標・指導内容・方法シート」の作成について

昨年度の課題から、現在行っている授業は「児童生徒がどんな資質・能力を身につけるために行っているのか」、「その資質・能力は学習指導要領のどの教科に該当しているのか」を明確にし、「自立活動の指導はその基盤を培うための指導を行うものである」ということを再確認する必要があると考えた。そこで本研究では、徳永豊氏の『障害の重い子どもの目標設定ガイド』に掲載されている「学習到達度チェックリスト」を活用しながら、「スコアと根拠となる行動シート」「目標のための手がかりとなる行動シート」「目標・指導内容・方法シート」の作成を児童生徒一人一人について行った。作成方法を全体で確認した後、担任と副担任で話し合い、分担・協力しながら、学級ごとにそれぞれのシートを完成させた。児童生徒一人分のシートを作成するのに数時間は要することから、多数の教員が大きな負担を感じる作業となった。しかし、これらのシートを作成することで、今までの方法と比べて、より根拠のある目標設定ができるようになったと考える。

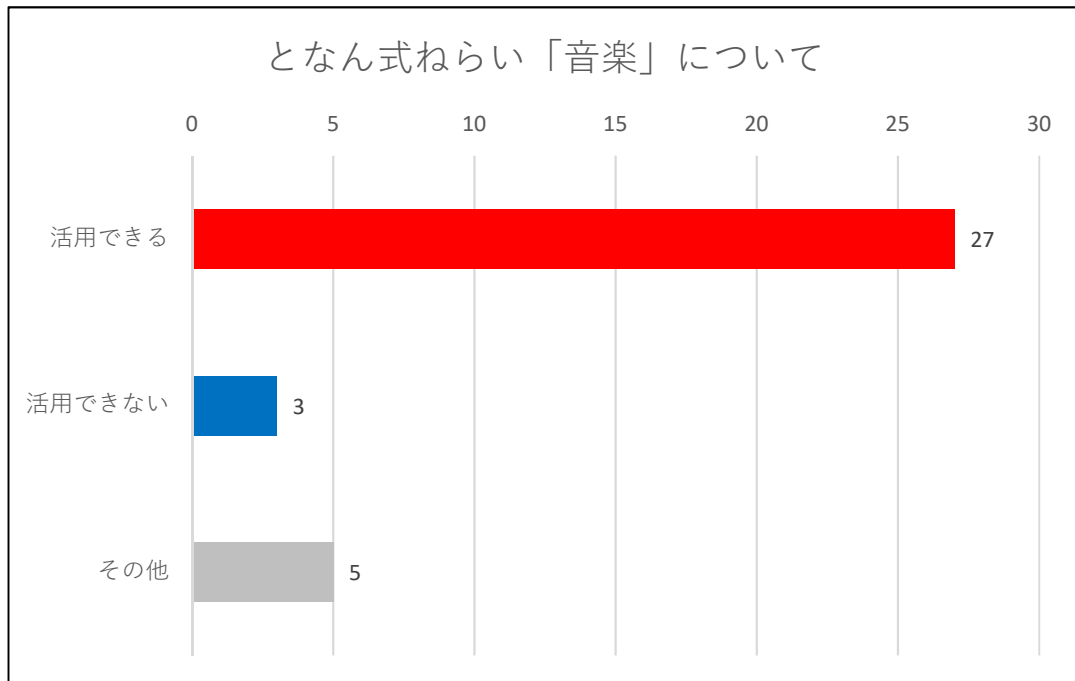
(2) となん式ねらい一覧の作成

今年度、「自立活動を主とする教育課程」において教科の目標・内容を取り扱うことが可能かどうか、授業実践を通して検討するにあたり、授業者となる教員が「この授業でどのような児童・生徒の姿をねらうのか」の具体的な目安が必要ではないかと考えた。その目安をまとめたものが「音楽科」と「体育科」の「となん式ねらい一覧」である。この一覧を作成するにあたって、まずは平成30年に改訂となった新学習指導要領の各教科の目標や内容を全員で再確認した。次に、小、中学部の「リズム」「うんどう（運動）」と高等部の「音楽科」「体育科」の年間指導計画を照らし合わせて、新学習指導要領に記載されている「音楽科」「体育科」の内容と共通するものがあるかどうかの確認を行った。すると、学習指導要領に記載されている「知的障害である児童・生徒に対する各教科の目標・内容」では、1段階のものであっても、本校の「自立活動を主とする教育課程」の児童生徒の実態にそぐわない場合があることが分かった。そこで、知的障害1段階の目標に到達する前段階の目標を「支援大」と「支援中」として設定し、一覧表に盛り込むことにした。一覧表の作成は、授業実践を行う5つのグループに分かれ、「音楽科」は2グループ、「体育科」は3グループで行った。

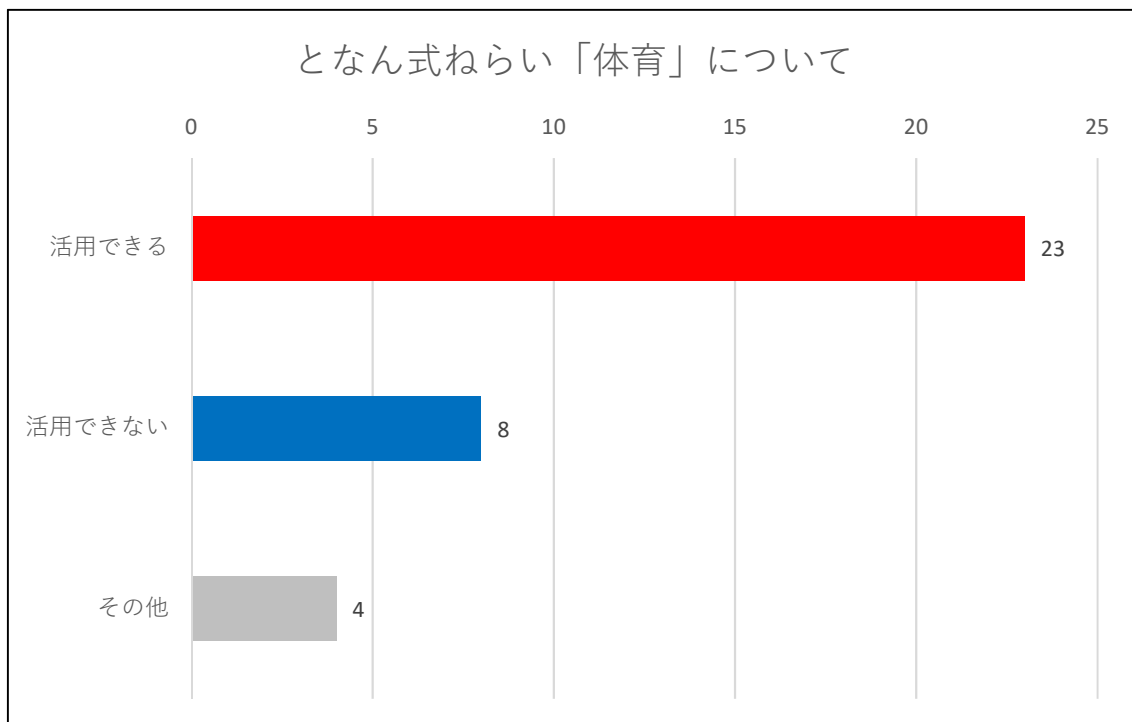
「となん式ねらい一覧」の作成を通して、「この一覧表を年間指導計画のねらいとも関連付けられたらいいのではないか」、「目標にある『表現』を『表情、声のトーン、発声、目力』として読み取ってはどうか」という意見が出された。また、「音楽科」の作成を担当したグループでは、「共通事項の目標が本校の児童生徒の実態にとっては難しいが、現在の年間指導計画の表現・鑑賞内容すべてを網羅していた、流れが一定化している」という気付きも見られた。一方で、「体育科」の作成を担当したグループからは、「『となん式ねらい一覧』で児童生徒の実態を確認し、年間指導計画で活動内容とねらいを確認するものであればよいのではないか」という意見や「生徒をイメージすることで、具体的に段階を考えることができた」という感想があがった。

最後に、来年度以降「となん式ねらい一覧」を授業で活用できそうか、その理由も含めてアンケート調査を行った。結果は、以下のグラフの通りである。「参考にできそうだから」「本校の実態に合わせた一覧表なので分かりやすい」との理由で「活用できる」と回答する教員が半数以上であった。一方で、「さらなる検討が必要で今すぐに活用することは難しい」との意見も見られた。来年度以降、「となん式ねらい一覧」を活用して授業実践を行いながら、修正を加えていくことでより活用しやすく、良いものにできると考える。

■となん式ねらい一覧「音楽」について



■となん式ねらい一覧「体育」について



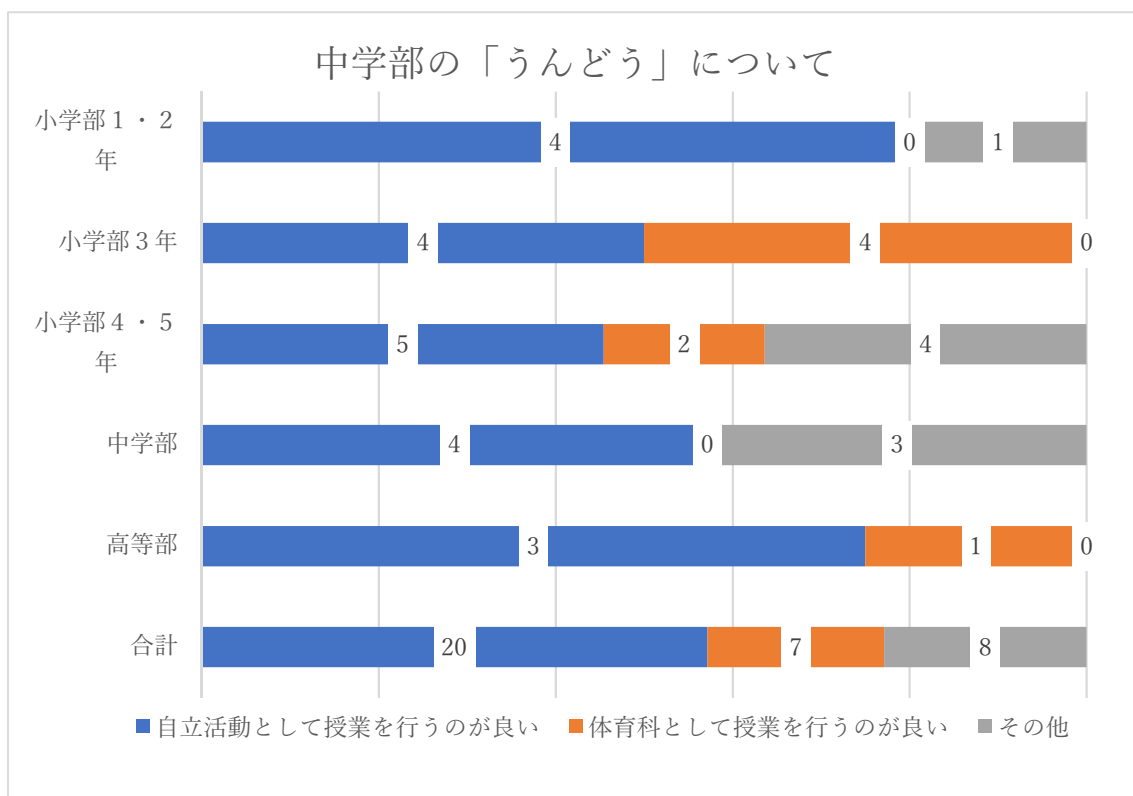
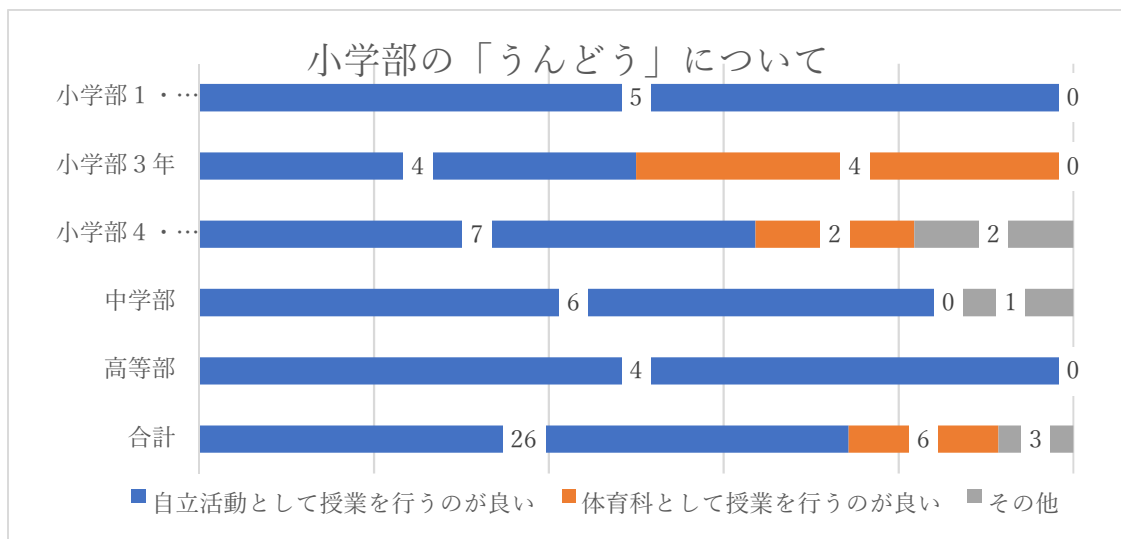
(3) 音楽科、体育科の視点を取り入れ、自立活動を主とする教育課程での協働的な学びの授業実践

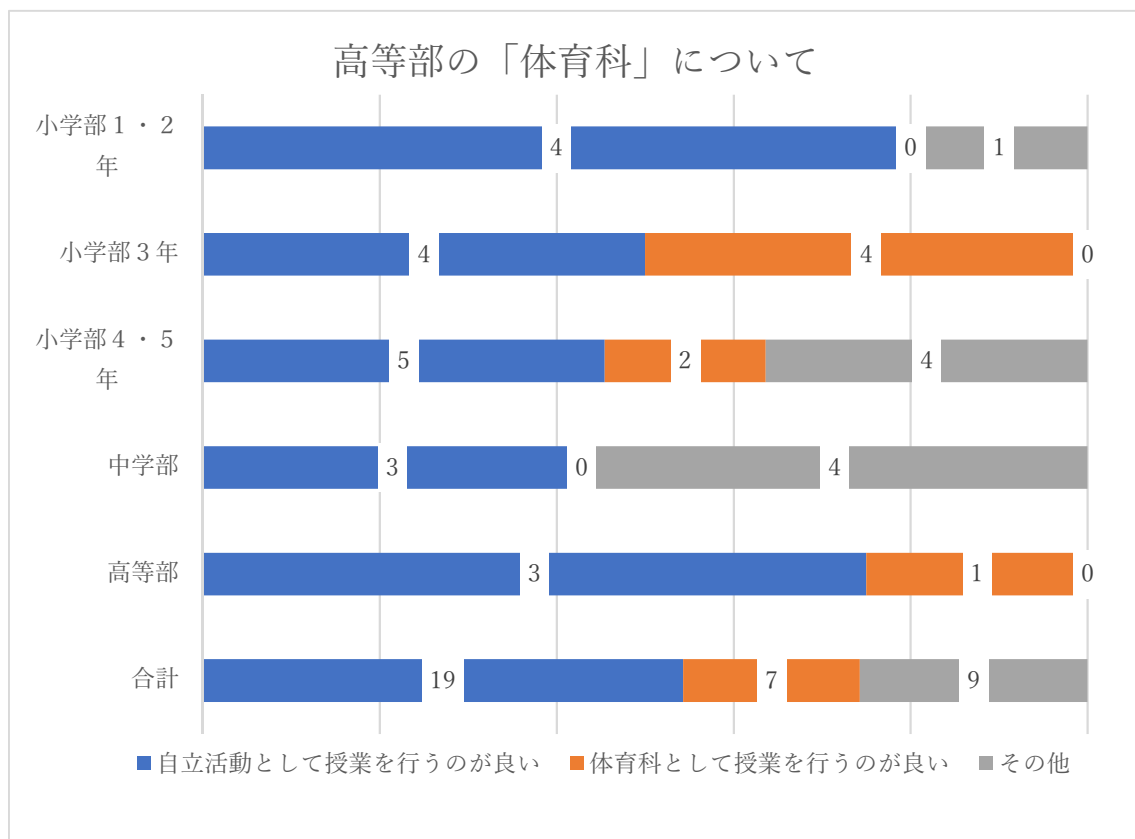
上記(1)、(2)を踏まえて、小学部1・2学年と4・5学年では、「うんどう」を「体育科」とする授業実践、小学部3学年と中学部では「リズム」を「音楽科」とする授業実践、高等部は「体育科」の授業実践を行った。実践後にはすべての授業について全員でまとめを行い、「教科の目標・内容を取り扱うことが可能かどうか」「『協働的な学び』の視点はどうかあればよいか」の2点について確認した。その際、岩手大学教育学部特別支援教育科教授の柴垣登先生にも授業を参観いただき、ご助言を頂戴した。柴垣先生におかれては、ご多忙中にも関わらず、本校の研究に対し、多大なるご協力をいただいたことに、改めて感謝を申し上げたい。

すべてのまとめが終了した後に、「リズム(音楽科)」、「うんどう/運動(体育科)」は「自立活動として授業を行うのが良いか」、「教科として授業を行うのが良いか」のアンケートを、各学部について行った。結果のグラフは以下の通りである。グラフからも分かる通り、「うんどう/運動(体育)」については、半数以上が「自立活動として授業するのが望ましい」と回答した。その理由には「肢体不自由児の実態から適している」「児童生徒の実態から教科の評価が難しい」という内容が多く見られた。一方で、「リズム(音楽)」については、どの学部でも意見が約半数ずつで分かれている。「自立活動として授業を行うのが望ましい」と回答した教員からは、「すべてを教科として授業するには評価が難しい」「授業は自立活動として行い、一部に教科も取り入れるのが、児童生徒の実態に合っている」といった意見が出された。また、「教科として授業するのが望ましい」と回答した教員からは、「授業の積み重ねができており、教科として行うことができるのではないか」「工夫次第では教科として授業を行うことができる」といった意見が出されている。

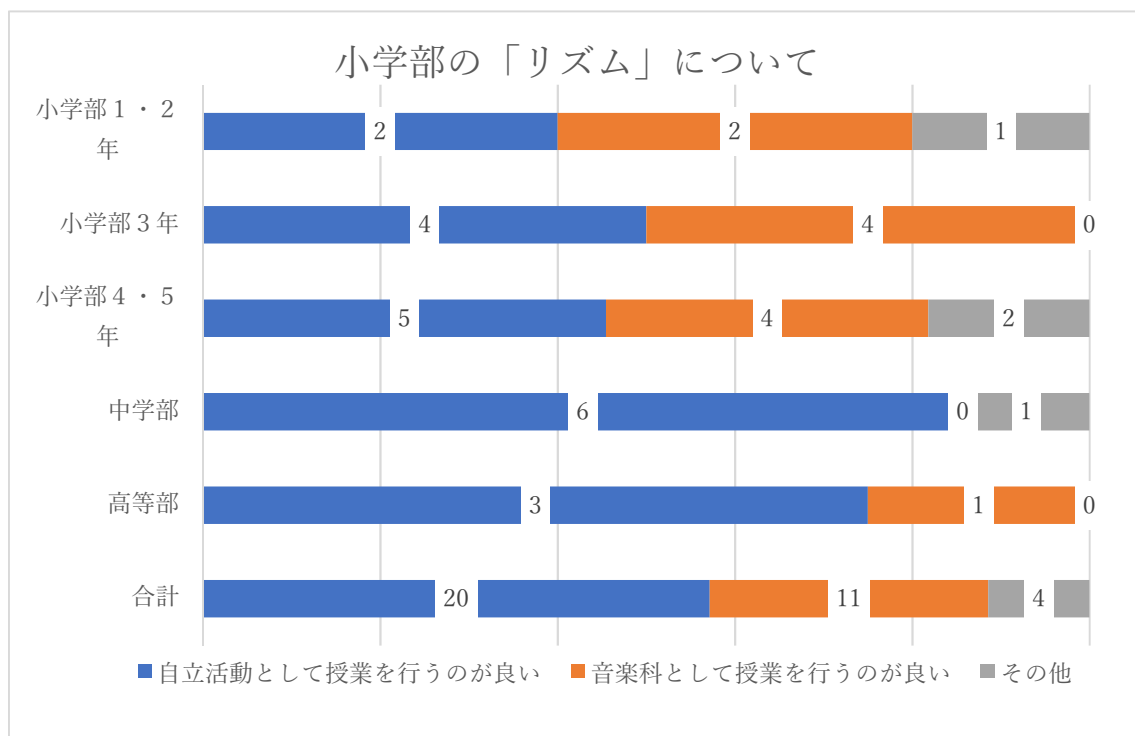
以上の実践から、本校として、すぐに教育課程を変更することは難しいと考えている教員が多いことが分かる。変更にあたっては、児童生徒の実態を踏まえることが重要である。「小学部、中学部では自立活動の中で教科の視点も取り入れた授業を行い、徐々に教科の要素を取り入れる割合を多くしていく。そして、高等部では、教科の授業の中で、自立活動を行う」というように段階を踏まえ、そのことを教員の間で共通理解しながら、日々の授業に取り組んでいくことが望ましいと考える。

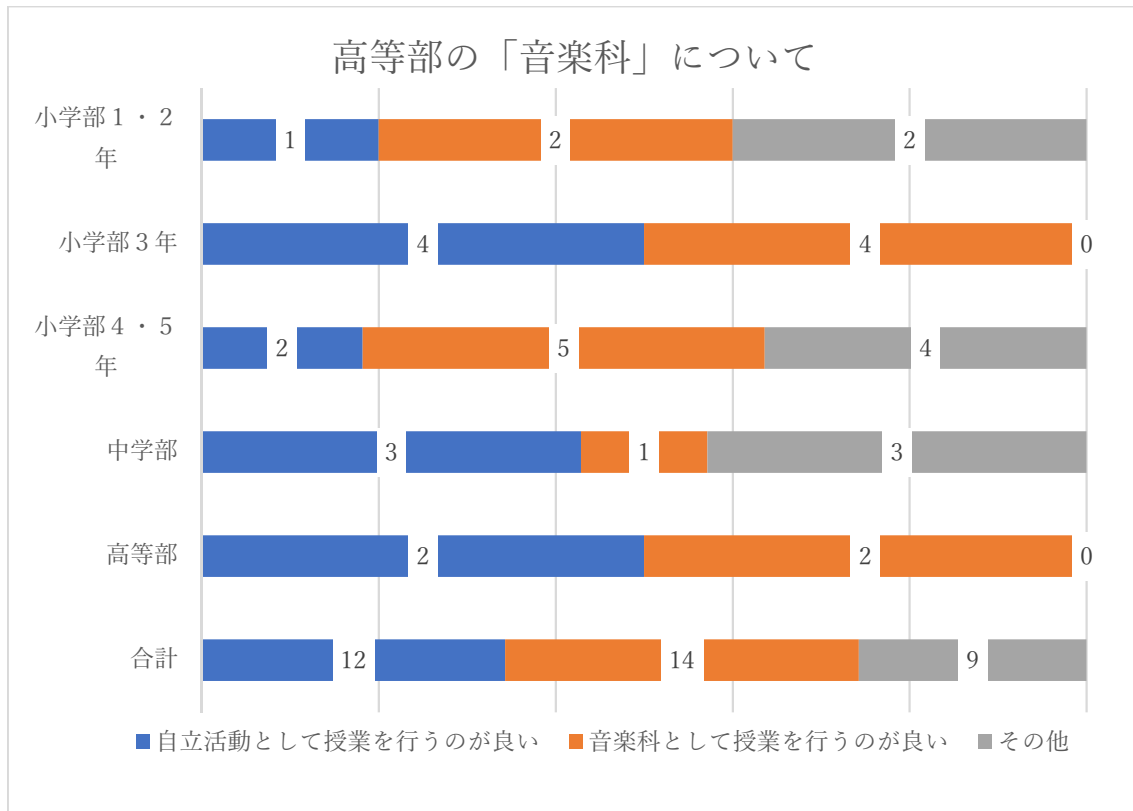
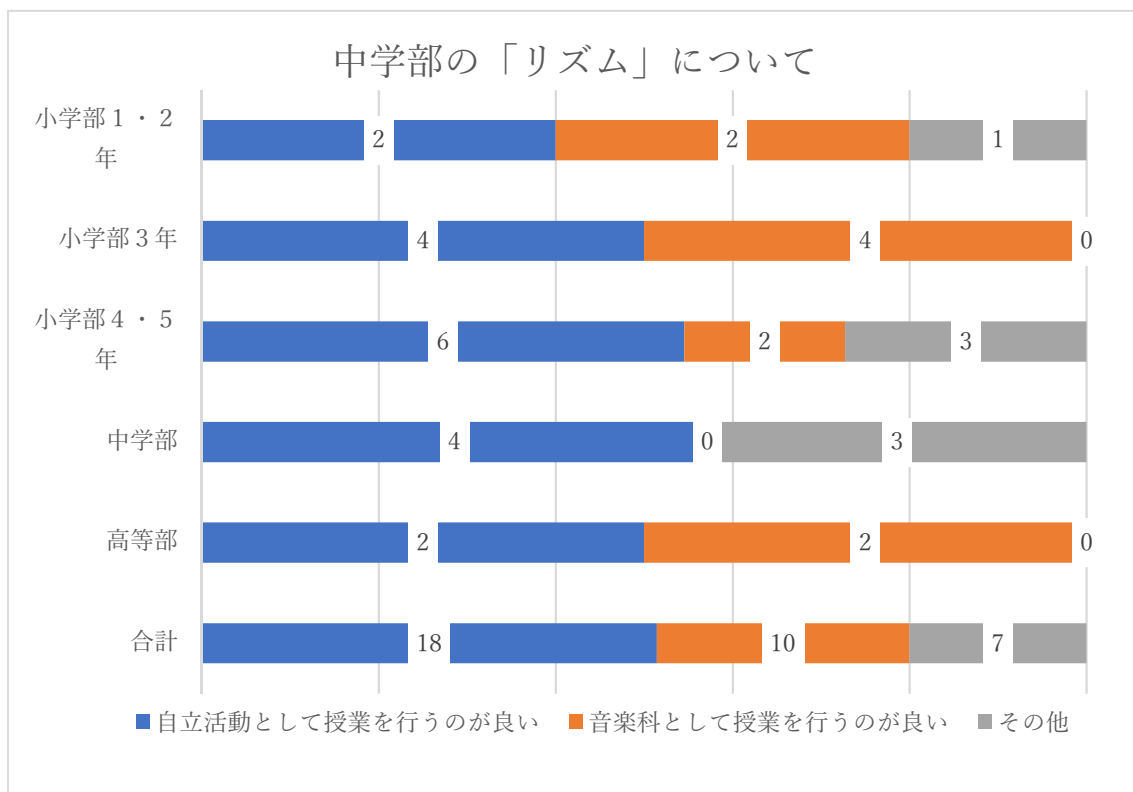
■ 「うんどう」「体育科」の授業について





■ 「リズム」「音楽科」の授業について





7. 今年度の実践の成果

今年度は、「自立活動を主とする教育課程」において教科の目標・内容を取り扱うことを前提として、3つの実践を行ってきた。得られた成果は以下のとおりである。

- ・授業を行うために必要な実態把握から目標設定までの手順を全体で確認し、「スコアと根拠となる行動シート」「目標のための手がかりとなる行動シート」「目標・指導内容・方法シート」を作成することにより、児童生徒一人一人について根拠のある目標を設定することができた。
- ・教科の目標・内容を取り扱った授業実践を行うために「となん式ねらい一覧」を作成し、児童・生徒の授業での姿を具体的にイメージすることができるようになった。
- ・授業実践を行い、全員で授業の映像記録を観ながら、各授業について様々な視点から検討することができた。また、実践から自立活動を主とする教育課程における「協働的な学び」について確認し合い、具体的なイメージをもつことができた。

8. 今年度の実践の課題

今年度の実践と研究をとおして、来年度に残された課題は、以下の通りである。

- ・実態把握から目標設定までの手順（「スコアと根拠となる行動シート」「目標のための手がかりとなる行動シート」「目標・指導内容・方法シート」の作成）は、現在多くの教員にとって大きな負担となっており、この負担を軽減する必要がある。
- ・昨年度の研究で取り扱った「課題関連図」の様式や、「となん式ねらい一覧」を再度検討しながら、これらを活用し、さらなる授業実践を積み重ねる。
- ・児童生徒の実態と授業づくりをつなぐことにより、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還が実現可能となっているか、授業実践をとおして検証する。

9. 来年度に向けて

前項で述べたとおり、本校の「自立活動を主とする教育課程」において、小・中学部では、特別活動を除くすべての授業を自立活動としている。一方で高等部では、特別活動、音楽科、体育科、美術科以外を自立活動として授業を行っている。そこで、中学部から高等部へ進学した際に、今まで自立活動として実施してきた授業を教科として実施することは、生徒の実態からみても難しいのではないかと考えられる。今回の「音楽科」、「体育科」の内容を取り扱った授業実践では、実践後の検討会を通じてそれぞれの学部の特性を共通理解し合うことができ、貴重な機会となったと言える。一方で、特に「体育科」では、授業実践を踏まえて「自立活動として授業を行うことが望ましい」と考える教員も多数いることが分かった。来年度以降も、本校の「自立活動を主とする教育課程」で学ぶ児童生徒によってより良い授業とはどのようなものか、検討を続けていきたい。

となん式 【音楽】 ねらい一覧（改訂）：小学部 3 学年担当

領域			A（支援大）	B（支援中）	C（支援小） 小学部・1段階相当
A 表現	ア	（ア）音や音楽を聴いて、自分なりに表そうとする。	教師が体を触り、動かすのを受け入れる。	好きな曲をきいて体を動かす。	自分なりに表すことができる
		（イ）表現する音や音楽に気付く。	具体物を使って曲をイメージできる。	きいたことのある曲をきいて反応する。	音や音楽に気付くことができる
		（ウ）㊦音や音楽を感じて体を動かす技能	教師と一緒に音や音楽を感じて体を動かすことができる。	初めだけ教師が手伝い音や音楽を感じて、その後自分が体を動かすことができる。	音や音楽を感じて、自分が体を動かすことができる
		（ウ）㊧音や音楽を感じて楽器の音を出す技能	教師と一緒に楽器の音を出すことができる	初めだけ教師が手伝い、その後自分で楽器の音を出すことができる	自分で楽器の音を出すことができる
		（ウ）㊨音や音楽を感じて声を出す技能	教師と一緒に、音や音楽を感じて、自分で音を出すことができる。	初めだけ教師が手伝い音や音楽を感じて、その後自分で音を出すことができる。	音や音楽を感じて、自分で音を出すことができる
B 鑑賞	ア	（ア）音や音楽を聴いて、自分なりの楽しさを見つけようとする。	教師が準備した曲を受け入れる。	教師が準備した曲を楽しむことができる。	自分なりの楽しさを見つけることができる
		（イ）聞こえてくる音や音楽に気付く。	繰り返し取り組んだり、教師から様々なジャンルの曲を提示したりする。	教師からの声掛けで、聞こえてくる音や音楽に気付くことができる。	聞こえてくる音や音楽に自分から気付くことができる
共通事項	ア	聞き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考える。	教師から様々なジャンルの曲を提示し、好きな曲だけでなく、興味の幅を広げる。	教師からの声掛けで、聞き取ったことと、感じ取ったこととの関わりについて、何かを感じ取ることができる。	聞き取ったことと、感じ取ったこととの関わりについて、自分から何かを感じるすることができる
	イ	絵譜や色を用いた記号や用語について、その意味にふれる。	曲のイメージに合った動作や写真、動画などを教師から提示する。	教師からの声掛けで、記号や用語に気付く、その意味を教えてもらう。	自分から記号や用語に気付く、その意味を教えてもらう

※ 音楽【小学部・1段階】

となん式 【音楽】 ねらい一覧（改訂）：中学部担当

領域		A（支援大）	B（支援中）	C（支援小） 小学部・1段階相当
A 表現	ア	ア（ア）音や音楽を聴いて、自分なりに表そうとする。	音や音楽を聴いて、嫌がらずに受け入れることができる。	自分なりに表すことができる
		（イ）表現する音や音楽に気付く。	教師の声掛けで気付くことができる。	音や音楽に気付くことができる
		（ウ）⑦音や音楽を感じて体を動かす技能	教師の支援で体を動かすことができる。	音や音楽を感じて、自分が体を動かすことができる
		（ウ）④音や音楽を感じて楽器の音を出す技能	初めだけ教師が手伝い、その後自分で楽器の音を出すことができる	自分で楽器の音を出すことができる
		（ウ）⑨音や音楽を感じて声を出す技能	目や手指の動きで表すことができる。	音や音楽を感じて、自分で音を出すことができる。
B 鑑賞	ア	ア（ア）音や音楽を聴いて、自分なりの楽しさを見つけようとする。	教師の声掛けで楽しさに気付く。	自分なりの楽しさを見つけることができる。
		（イ）聞こえてくる音や音楽に気付く。	教師の声掛けで音や音楽に気付く。	聞こえてくる音や音楽に自分から気付くことができる。
共通事項	ア	ア 聞き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考える。	教師の声掛けで聞き取ったことと、感じ取ったことの関わりについて、何かを感じることができる。	聞き取ったことと、感じ取ったことの関わりについて、何かを感じることができる。
	イ	イ 絵譜や色を用いた記号や用語について、その意味にふれる。	教師の声掛けで、記号や用語に気付き、その意味を覚えてもらう。	記号や用語に気付き、その意味を覚えてもらう。

※ 音楽【小学部・1段階】

となん式 【体育】ねらい一覧（改訂）：小学部1・2学年、4・5学年、高等部担当

領域		A（支援大）	B（支援中）	C（支援小） ：小学部・1段階相当
A 体づくり 運動遊び	ア 教師と一緒に、手足を動かしたり、楽しく体を動かす。	・児童生徒が教師に手を握ってもらい、一緒に手足を動かすことができる。	・教師の手本を見たり、声掛けを受けたりしながら、自由に手足を動かす。	・教師の手本をみながら、大まかに手足を動かす。
	イ 手足を動かして体を動かすことの楽しさや心地よさを表現する。	・優しい声掛けを受けながら活動に取り組むことができる。	・初めだけ教師が手伝い、その後自分から手足を動かす。	・自分から体をうごかす。目に力が入る。 ・自信をもって活動に取り組む。
	ウ 簡単な合図や指示に従って、体づくり運動遊びをしようとする。	・教師から簡単な合図や指示を教えてもらい、教師と一緒に活動に取り組む。	・初めだけ教師が手伝い、その後自分から教師の真似をしようとする。	・指示を受けて教師の真似をしようとする。
B 器械・器具 を使って の遊び	ア 教師と一緒に、器械・器具を使って楽しく体を動かすこと。	・教師が揺らした感覚を受け入れる。 ・優しい声掛けを受けて、教師と一緒にボールに触れる。楽しい雰囲気を作り、たくさん褒められる経験をする。	・教師と一緒に取り組む。 ・教師と一緒に、ボールに触れる。楽しい雰囲気を作り、たくさん褒められる経験をする。	・教師に支えてもらい、自分で体を動かす。 ・目の前にある投球台を見て、自分からボールに触れる。
	イ 器械・器具を使って体を動かすことの楽しさや心地よさを表現すること。	・揺れる感覚への快・不快の表現をする。	・教師の問いかけに応じて反応、表現する。	・自分からやってみたいという気持ちを伝える。

	ウ 簡単な合図や指示に従って、器械・器具を使つての遊びをしようとする。	・教師から簡単な合図や指示を教えてもらい、教師と一緒に器械・器具を使つての遊びをする。	・初めだけ教師が手伝い、その後自分から教師の真似をしようとする。	・教師の指示を聞いて、順番を守り、教師の真似をしようとする。
C 走・跳の運動遊び	ア 教師と一緒に、走ったり、飛んだりして楽しく体を動かすこと。	・教師と一緒にトランポリンの上で飛んで体を動かすことを受け入れる。	・教師に手伝ってもらい、トランポリンの上で飛んで体を動かすことの楽しさを知る。	・教師に支えてもらい、トランポリンの上で飛んで楽しく体を動かす。
	イ 走ったり、飛んだりして楽しく体を動かすことの楽しさや心地よさを表現すること。	・教師と一緒にトランポリンの上で飛んで体を動かすことの楽しさを受け入れる。	・教師に手伝ってもらい、トランポリンの上で飛んで体を動かすことの楽しさを教師と共有する。	・トランポリンの上で飛んで楽しく体を動かすことの楽しさや心地よさを表現する。
	ウ 簡単な合図や指示に従って、走・跳の運動遊びをしようとする。	・教師から簡単な合図や指示を教えてもらい、教師と一緒にトランポリンの上で跳の運動遊びをする。	・教師の言葉掛けで、簡単な合図や指示に気付き、教師と一緒にトランポリンの上で跳の運動遊びをする。	・簡単な合図や指示に従って、トランポリンの上で跳の運動遊びをしようとする。
D 水遊び	ア 教師と一緒に、水の特性を生かした簡単な水遊びを楽しくすること。	・怖がらず、水に慣れることができる。 ・環境を整えることで、水の感覚を全身で楽しみながら感じるすることができる。	・教師に支えてもらったり抱っこしてもらったりしながら水に慣れる。 ・環境を整え、安心感をもつことで、水の感覚を全身で感じる。	・楽しんで水やプールに入る。 ・足湯、手浴を行い、水や湯を感じる。
	イ 水の中で身体を動かすことの楽しさや心地よさを表現すること。	・教師の励ましを受けながら、緊張をほぐして活動に取り組むことができる。	・穏やかな表情で活動している。	・笑顔が見られる。 ・自分で積極的に手足を動かす。

	ウ 簡単な合図や指示に従って、水遊びをしようとする。	・教師から簡単な合図や指示を教えてもらい、教師と一緒に水遊びをする。	・教師の言葉掛けで、簡単な合図や指示に気付き、教師と一緒に水遊びをする。	・教師の真似をしたり、指示を受けて水の中で動いたりする。
E ボール遊び	ア 教師と一緒に、ボールを使って楽しく体を動かすこと。	・教師と一緒に(介助を受けて)ボールに触って活動することができる。 ・優しい声掛けを受けて、教師と一緒にボールに触れる。楽しい雰囲気を作り、たくさん褒められる経験をする。	・教師と一緒に支援を受けて自由に自分から動かすことができる。 ・教師と一緒に、ボールに触れる。楽しい雰囲気を作り、たくさん褒められる経験をする。	・教師と一緒にボールを使って楽しく身体をうごかすことができる。(やりとり) 手本、まね ・目の前にある投球台を見て、自分からボールに触れる。
	イ ボールを使って体を動かすことの楽しさや心地よさを表現すること。	・教師の介助を受けてボールの感触を感じることができる。	・教師と一緒に活動し、表情や身体の動きで楽しさを表現することができる。	・ボールを使って自分から身体を動かして楽しむことができる。
	ウ 簡単な合図や指示に従って、ボール遊びをしようとする。	・教師から簡単な合図や指示を教えてもらい、教師と一緒にボール遊びをする。	・教師の言葉掛けで、簡単な合図や指示に気付き、教師と一緒にボール遊びをする。	・簡単な合図をきいて、ボール遊びをしようとする。
F 表現遊び	ア 教師と一緒に、音楽の流れている場所で楽しく体を動かすこと。	・教師と一緒に、音楽の流れている場所で体を動かすことを受け入れる。	・教師の言葉掛けを受けて、音楽の流れている場所で体を動かすことを楽しむ。	・教師と一緒に、音楽の流れている場所で楽しく体を動かす。
	イ 音楽の流れている場所で体を動かすことの楽しさや心地よさを表現すること。	・教師に体を動かしてもらい、心地よさで緊張を緩むことができる。	・教師と一緒に活動し、表情や身体の動きで楽しさを表現することができる。	・音楽の流れている場所で体を動かすことの楽しさや心地よさを表現する。

	ウ 簡単な合図や指示に従って、表現遊びをしようとする。	・教師から簡単な合図や指示を教えてもらい、教師と一緒に表現遊びをする。	・教師の言葉掛けで、簡単な合図や指示に気づき、教師と一緒に表現遊びをする。	・簡単な合図や指示に従って、表現遊びをしようとする。
G 保健	ア 教師と一緒に、うがいなどの健康な生活に必要な事柄をすること。	・教師から手洗い、消毒などの健康に必要な事柄をしてもらい受け入れる。	・教師からの言葉かけで、手洗い、消毒などの健康に必要な事柄をすることに気づき、教師と一緒に取り組む。	・教師と一緒に、手洗い、消毒などの健康な生活に必要な事柄をすること。
	イ 健康な生活に必要な事柄に気づき、教師に伝えること。	・教師から健康に必要な事柄を教えてもらう。	・教師からの声掛けで、健康な生活に必要な事柄に気付く。	・自分から健康な生活に必要な事柄に気づき、教師に伝える。

※体育【小学部・1段階】

小学部 1・2 年Ⅲグループ 自立活動（うんどう）学習指導案

日 時：令和 4 年 5 月 2 4 日（火）3 校時

場 所：体育館

対象児童：2 年 3 組（男子 1 名，女子 2 名）

1 年 2 組（男子 1 名，女子 2 名）

1 年 3 組（男子 2 名） 計 8 名

指 導 者：石坂 幸恵 (MT)，稗貫真理子 (ST1)

千葉 悠加 (ST2)，畠山 明子 (ST3)

佐藤香穂子 (ST4)，箱石亜利沙 (ST5)

熊本 勤子 (ST6)，堀切ひろみ (ST7)

1 題材名「運動会の練習をしよう」

2 題材について

(1) 題材について

本題材「運動会の練習をしよう」は、6 月 1 0 日（金）に行われる小学部低学年の運動会に向けての競技を練習する題材である。競技名は、「レッツゴー鬼たいじ！2 7 人のもたろうたち」であり、その内容は、長机まで移動し、ボールを取り、そのボールに付けられているイラスト「犬」「猿」「キジ」と同じイラストの傘にボールを入れ、最後に鬼（ボーリングのピンや棒状の段ボール）を倒してゴールするという内容である。

今回の学習内容は、学習指導要領知的障害である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科小学部体育科の「体づくり運動遊び」の第一段階の内容である。児童は、今回の学習活動とおして、ボールを持つ、紐を引っ張る、ボール（もしくは、ボールについた紐）を所定の場所で離す、鬼（ボーリングのピンや棒状の段ボール）に触って倒すという手指を使った経験を積むことができると考える。また、集団での学習によって、友達や教師を意識し一緒に活動する楽しさを感じたり、集団学習ならではの雰囲気を感じたりできると考える。

以上のことから、本題材では、それぞれの実態に応じた手指を使った活動を行うことと、友達や教師と一緒に活動することを楽しんだり、集団活動の雰囲気を感じたりすることをねらいとして学習活動を進めていきたい。

(2) 児童について

1・2 年 3 グループの児童は、男子 4 名、女子 4 名、計 8 名である。児童の実態は、知的障害と肢体不自由を併せもつ重複障害であり、全員、車いすを使用している。また、経管栄養や痰の吸引等の医療的ケアが必要な児童、けいれん発作がある児童、興奮するとチアノーゼ現れる児童など、授業中に配慮が必要である。

身体面については、自分から手を伸ばして引っ張る動きができる児童、教師の支援を

受けながら紐やボールを持つ児童などその実態はさまざまである。また、コミュニケーション面については、教師の声がけに応じて視線を向ける児童、発声や身振りで気持ちを表現する児童、教師や友達の活動の様子を自分から視線を向ける児童、集団の雰囲気を感じて表情に表す児童などである。

(3) 指導にあたって

指導に当たっては、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に基づいた目標を設定して進める。この目標の達成により、「協働的な学び」につながるように、学習活動を展開していきたい。また、目標設定にあたっては、学習到達度チェックリストを活用し、「スコア」を把握し、児童が次の「内容段階」に至るためにはどのような力を育むことが必要であるかを検討して進めていく。

本グループの児童における「協働的な学び」とは、本校の「キャリア教育学習プログラム－自立活動を主とする教育課程－」を踏まえて、総合生活力の中の「友だちに気付く」「身近な人に感情を表す」、人生設計力の「身近な人に関心をもつ」「楽しんで活動に取り組む」と捉える。本授業においては、「友達の活動の様子を意識し視線を向けたり、集団活動の雰囲気を感じたりすること」「教師と一緒に楽しみながら競技に取り組むこと」と捉える。

本題材では、それぞれの児童の実態に合わせた競技への取り組み方の工夫を行うことで、児童が自分から活動に取り組み、自分の力を発揮できるようなできる状況づくりを行っていききたい。また、児童が友達の活動の様子を意識し、視線を向けたり集団活動の雰囲気を感じたりできるように、働き掛けの工夫を行っていききたい。

3 題材の目標及び指導計画

●学習内容 (学習指導要領)	次	● 学習活動	時 間	○ 3つの柱における目標		
				●知識及び技能	●思考力、判断力、 表現力等	●学びに向かう力 人間性等
小学部 体育科 体づくり運動遊び【1段階】 ア 教師と一緒に、手足を動かしたり、歩いたりして楽しく体を動かすこと。 イ 手足を動かしたり、歩いたりして体を動かすことの楽しさや心地良さを表現すること。 ウ 簡単な合図や指示に従って、体づくり運動遊びをしようとする。	第1次	事前学習 ・運動会について知る ・競技について知る 【5月9日(月)】	1	・体づくりの運動遊びの経験を広げ、体の動かし方に気付いたり、知ったりするとともに、できることを見つけてたり増やしたりしながら、いろいろな運動に取り組めるようにする。	・体づくり運動遊びに慣れるとともに、感じたことを表したりすることができるようにする。	・体づくり運動遊びに取り組む中で、楽しみを見つけ、興味関心の幅を広げるとともに、一緒に活動している他者の存在に関心を向けることができるようにする。
	第2次	競技の練習をしよう ・ゴーゴーゴーを歌う ・競技の練習をする ・友達の動きを見たり、集団学習の雰囲気を感じたりする。 【5月10日(火)、5月17日(火)、5月20日(金)、5月24日(火) 本時】	4			
	第3次	全体練習をしよう ・開会式、ゴーゴーゴー、競技、閉会式の練習をする。 【5月31日(火) 2・3校時 6月7日(火) 2・3校時】	4			
	第4次	運動会 ・開会式、ゴーゴーゴー、競技、閉会式を行う。 【6月10日(金) 1・2・3校時】	3			
	第5次	事後学習(学級ごと) ・写真やビデオで振り返りを行う。	1			

4 本時の指導

(1) 本時の学習 「競技の練習をしよう④」

(2) 本時の目標

- ・紐を引っ張る、ボールや紐を所定の場所で離す、鬼（棒状段ボール）を倒す活動に取り組む。
(知識及び技能)
- ・友達の活動の様子に気づき視線を向けたり、集団学習の雰囲気を感じたりする。
(思考力、判断力、表現力等)
- ・自分から手指を動かして活動に取り組んだり、友達の活動に気付いたりする。
(学びに向かう力・人間性等)

(3) 児童生徒の実態と目標

氏名 (学年)	児童の実態	目標	指導・支援の手立て	評価規準
① (2年)	・腕は垂脱臼している。興味がある物であれば、自分から手を伸ばし、触ろうとしたり、引っ張ろうとしたりする。 ・時々、人や物の動きを追視することがある。	・自分から紐に手を伸ばして、引っ張ることができる。 【運動・動作：スコア6 「手を伸ばしてものをつかむ」】 ・自分から友達の活動に視線を向けて見る。 【受け止め・対応スコア2 「音や声の方向に顔の方向を変える」】	・児童が紐に視線を向けられるように教師が紐を動かす。児童の腕の可動域を考慮する。 ・友達の活動の様子を伝えて、視線を向けるように促す。	・紐を引っ張ったか。 ・友達の活動に自分から視線を向けたか。
② (2年)	・経管チューブ抜去対策のために常にミトンを着用している。ミトンを外すと、自分から手を伸ばそうとする。 ・集団の場に緊張しており、音に敏感である。緊張のために、人や物の動きをキョロキョロと見回している	・自分から紐に手を伸ばして、引っ張ることができる。 【運動・動作：スコア6 「手を伸ばしてものをつかむ」】 ・自分から友達の活動に視線を向けて見る。 【受け止め・対応スコア2 「音や声の方向に顔の方向を変える」】	・教師は児童にやさしく声掛けをして、児童が安心して活動に取り組めるようにする。 ・友達の活動の様子を伝えて、視線を向けるように促す。	・紐を引っ張ったか。 ・友達の活動に自分から視線を向けたか。
③ (2年)	・視力が弱い、自分の目の前に紐があれば、自分から紐に手を伸ばし、引っ張ることができる。 ・難聴であるが、近くで話すと人の声で表情が変わることがある。	・自分から紐に手を伸ばして、引っ張ることができる。 【運動・動作：スコア6 「手を伸ばしてものをつかむ」】 ・自分から友達の活動に視線を向けて見る。 【受け止め・対応スコア2 「音や声の方向に顔の方向を変える」】	・児童が紐に視線を向けられるように教師が紐を動かす。 ・友達の活動の様子を伝えて、視線を向けるように促す。	・紐を引っ張ったか。 ・友達の活動に自分から視線を向けたか。

④ (1年)	・目の前に物を持ってくると視線を向けることもある。 ・音や声を聞いて、表情を変えることがある。	・ボールや鬼の方に視線を向ける。 【運動・動作：スコア1 「目や首を動かす」】 ・教師や友達の声や音を聞いて運動会の雰囲気を感じる。 【受け止め・対応スコア1 「人の声で表情が変わる」】	・視線が向くように声掛けをしたり、本人の視界に入るようにボールを差し出したり、バギーの向きを変える。 ・楽しい雰囲気が伝わるような声掛けをする。	・ボールや鬼の方に視線を向けたか。 ・教師や友達の声や音を聞いて運動会の雰囲気を感じたか。
⑤ (1年)	・気に入ったおもちゃであればつかむことができる。 ・音や声を聞いて、表情を変えることがある。	・自分から紐をつかむことができる。 【運動・動作：スコア4 「おもちゃをつかむ」】 ・教師や友達の声や音を聴いて運動会の雰囲気を感じる。 【受け止め・対応スコア1 「人の声で表情が変わる」】	・自分から握ることができるように好きな素材であるスズランテープをボールに付ける。 ・楽しい雰囲気が伝わるような声掛けをする。	・自分から紐をつかむことができたか。 ・教師や友達の声や音を聞いて運動会の雰囲気を感じたか。
⑥ (1年)	・興味のある物に手をのばすことがある。 ・友達や教師の動く様子をよく見ている。	・自分から棒状のダンボールに手をのばして倒すことができる。 【運動・動作：スコア6 「手を伸ばしてものをつかむ」】 ・友達の活動の様子に気づき、視線を向ける。 【受け止め・対応スコア8 「こっちだよ」声をかけるとこちらを見る」】	・棒状の段ボールに鬼のイラストを貼って、やる気を引き出す。 ・倒すことができたなら、称賛し、さらに意欲を高める。 ・友達の活動の様子を伝えて、視線を向けるように促す。	・自分から棒状のダンボールに手をのばして倒すことができたか。 ・友達の活動の様子に気づき、視線を向けたか。
⑦ (1年)	・お手玉やバンダナなど布素材のものは、自分から手を伸ばして触っている。 ・友達や教師の動く様子をよく見ている。	・お手玉をたらいの中から自分で取って、傘の中に入れる。 【運動・動作：スコア6 「手を伸ばしてものをつかむ」】 ・自分から友達の活動に視線を向けて見る。 【受け止め・対応スコア2 「音や声の方向に顔の方向を変える」】	・取り出しやすいように、手元にたらいを寄せる。また、傘の中に入れるときは、「手をパッと放します」と声を掛ける。 ・友達の活動の様子を伝えて、視線を向けるように促す。	・紐を引っ張ったか。 ・紐を手から離れたか。 ・友達の活動に自分から視線を向けたか。
⑧ (1年)	・意識が向いたときは、鬼を手でつかんで倒すことができる。 ・教師と触れ合うことを好む。	・鬼に自分から手を伸ばしてたおす。 【運動・動作：スコア6 「手を伸ばしてものをつかむ」】 ・友達が活動していることに気づき、視線を向けて見る。 【受け止め・対応スコア2 「音や声の方向に顔の方向を変える」】	・鬼に意識が向くように、鬼が見えやすい位置に車椅子を移動したり、「鬼を倒すよ」と声がけをしたりする。 ・友達の活動の様子を伝えて、視線を向けるように促す。	・自分から鬼に手を伸ばして倒したか。 ・友達が活動していることに気付いて、視線を向けたか。

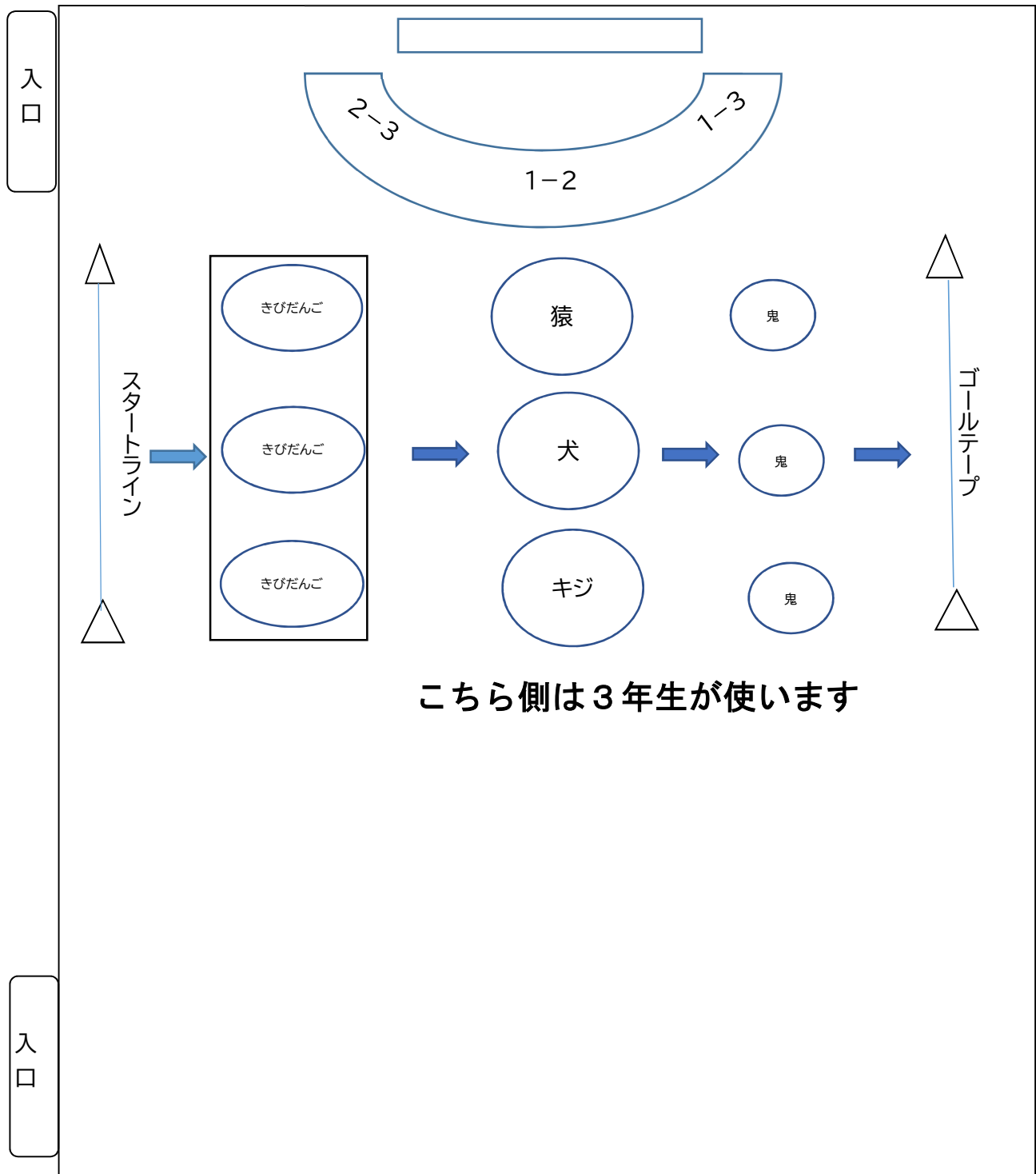
(4) 本時の展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点・児童生徒への配慮等	○評価の視点 ◎評価の方法	教材・ 教具等
導入	1 はじめのあいさつ	・週交代で各学級の当番が始めの挨拶をする。		・ホワイトボード ・次第
5分	2 本時の学習内容を確認する。	・本時の活動内容を簡潔に説明する。		
展開	3 歌「ゴーゴーゴー」	・児童はポンポンを振ったり、鈴を鳴らしたりする。 ・運動会の雰囲気を感じられるように教師もが一緒に歌う。		・ホワイトボード ・CD ・CDデッキ ・ポンポン ・鈴
30分	4 運動会競技練習	・MT が手本を見せる。 ・学級毎にスタートする。 ・自分の番を意識するように、一人ずつ呼名する。 ・「エイエイオー！」の掛け声をかけることで、気持ちを高める。 【順番】 ① 2年3組 ② 1年2組 ③ 1年3組		
	・きびだんごを取ってみよう	・きびだんごとして、普通のボール、紐をつけたボール、児童がつかみやすいもの（お手玉等）などを用意する。	○それぞれの児童の実態に応じた方法で、きびだんご（ボールなど）を取ることはできたか。 ◎観察	・長机 ・たらい ・カラーボール ・お手玉
	・傘に入れてみよう	・児童がボールなどを入れやすいように傘を近づけたりボール等を手から離すように声を掛けたりする。	○それぞれの児童の実態に応じた方法で、きびだんご（ボールなど）を傘に入れることができたか。 ◎観察	・傘 ・傘を立てるための台座
	・鬼をたおしてみよう	・児童が触る力で倒れやすいように、鬼をつけた棒状ボールを用意する。 ・ゴールしたら学級待機場所に戻る。	○それぞれの児童の実態に応じた方法で、鬼を倒すことができたか。	・鬼（棒状段ボール） ・ゴールテープ

	・友達を応援しよう	・教師は児童と一緒に他の児童を応援したり、がんばりを認めたりする。 ・競技をしている友達に視線を向けるように、声を掛けたり視線を向ける方向を指さしたりする。 ・活動の雰囲気を感じて表情に現れたときは、活動の様子を児童に話して共感する。	◎観察 ○友達の方に視線を向けたり、集団活動の雰囲気を感じたりしたか。 ◎観察	・コーン
ま と め 10 分	5 感想発表 ・各学級の代表の児童が前に出てきて、教師と一緒にがんばったことを発表する。 6 おわりのあいさつ	【順番】 ① 2年3組 ② 1年2組 ③ 1年3組 ・児童のがんばりが伝わるように、教師が児童の様子をみんなの前で紹介する。 ・児童の実態に応じて、身振りは発声などで発表できるように支援を行う。競技をしている友達に視線を向けるように、声を掛けたり視線を向ける方向を指さしたりする。 ・がんばり発表の雰囲気を感じて表情に現れたときは、活動の様子を児童に話して共感する。 ・週交代で各学級の当番が終わりの挨拶をする。		

(5) 配置図

療育センター側



(6) 板書計画

①はじめの あいさつ					} 児童顔写真
②きょうの うんどう					
③かんそう					
④おわりの あいさつ					

※ ホワイトボードに、次第カードと児童の顔写真を貼る。

小学部 3 年Ⅲグループ 自立活動（リズム）学習指導案

日 時：令和 4 年 10 月 20 日（木）3 校時

場 所：音楽室

対象児童：3 年 1 組（男子 2 名、女子 2 名）

3 年 2 組（男子 2 名、女子 1 名）

3 年 3 組（男子 2 名、女子 2 名）

指 導 者：野崎桃子（MT）、米屋初恵（ST1）

水本まゆき（ST2）、佐々木美穂（ST3）

栢野智里（ST4）、小田嶋菜花（ST5）

久保雅利（ST6）、伊藤博文（ST7）

1 題材名「たたいてあそぼう～秋だ！まつりだ！太鼓まつりだ！～」

2 題材について

（1）題材について

本題材は、特別支援学校学習指導要領・小学部・音楽 1 段階・A 表現の A（ア）（イ）（ウ）④、B 鑑賞 A（イ）の内容である。おんがく☆☆「たぬきのたいこ」を教材として学習を進める。前題材「夏を楽しもう」では「いるかはざんぶらこ」に取り組み、3 拍子のリズムを感じる学習をしている。今回も 3 拍子のリズムや歌詞の「タンタタタン」「タタタンタン」を感じながら、児童が自分のタイミングで楽器を鳴らすことができると考えて選定した。

今年度は、全員でひも鈴、ギロ、タンブリンを取り扱っており、体験を重ねる中で、友達や教師 が鳴らす音を受け入れたり、自分から楽器に触れたり、鳴らし続けたりすることなどが少しずつできるようになってきている。今回の学習活動をとおして、バチやマレットを使って鳴らす、手で直接触れて鳴らす、教師と一緒に鳴らすなど自分なりの表現で楽器を鳴らし、協働して音楽活動ができるようにしたい。

（2）児童について

3 年自立活動を主とする教育課程の児童は、男子 6 名、女子 5 名、計 11 名である。児童の実態は、知的障がいと肢体不自由を併せもつ重複障がいがあり、そのうち、難聴の児童が 3 名、全盲の児童が 1 名で全員車椅子を使用している。また、経管栄養や痰の吸引等の医療的ケアが必要な児童、けいれん発作がある児童が在籍しており、常時見守りや実態に応じた配慮が必要である。

ときには音色や音の強弱を感じて、体が緊張したり、不快な表情になったりすることもあるが、音や音楽に気付いて笑顔を見せたり、手足を動かしてリズムを楽しんだりする姿がみられている。また、障がいの状態により、声に出して歌うことが難しいため、教師と一緒に歌ったり、手遊びや体のタッピングを取り入れたりすることで、表情が良くなったり、笑顔を見せたりする児童もいる。器楽につながる学習では、これまで、ひも鈴やギロ、タンブリンの学習に取り組んできた。楽器に興味を示して自分から手を伸ばしたり、自分で楽器をたたいたり、こすったりして音を出そうとしたりする児童、支

えがあると手を動かして音を出す児童、教師が児童の手を補助して一緒に音を出す児童などその実態はさまざまである。鑑賞では、音や音楽に耳を傾け、じっくりと聴く児童もいれば、大きな音や不意になる音に驚いて緊張してしまう児童もいる。コミュニケーション面については、教師の声掛けに応じて視線を向ける児童、視線での選択や指さし、発声で気持ちを伝える児童、自分からの表出が少ない児童で構成された集団である。

また、学習到達度チェックリスト 2019（福岡大学教授 徳永豊氏）による児童たちの実態は、《聞くこと》スコア 2～18、《見ること》測定不能～スコア 18、《運動・動作》スコア 2～24 となっている。そのため、それぞれの発達段階に応じた支援が必要となる。

（3）指導にあたって

これまでの学習では、全員で同じ楽器を同時に扱ってきたが、楽器に自分から手を伸ばしたり、触ってみようとしたりする児童が増え、全体的に楽器への興味が育ってきているように感じている。そこで、奏法を工夫することにより、より主体的な器楽につながる学習が展開できるのではないかと考えた。本題材では、自分がたたきやすい楽器や心地よい音を探し、自分なりの方法で取り組めるように支援したいと考える。児童が音や音楽を感じて、自分なりに表現するために次の点について工夫を行い、指導にあたりたい。

○見通しのもてる学習内容

- ・リズム（音楽的な学習）では、年間をとおして、ねらいに応じて歌唱・器楽・身体表現につながる学習、鑑賞を組み合わせ学習を進めている。児童が見通しをもって取り組めるように、本題材でも歌唱・器楽・身体表現につながる学習活動を1時間の授業に入れて取り組みたい。

○楽器の設置方法と場所

- ・自分から活動に取り組み、自分の力を発揮できるような場の設定をする。障がい特性や姿勢によって見えにくさ、とらえられる範囲が限定的であることも踏まえ、楽器によって、床に置く、角度をつける、教師が持つなど手や腕の可動域に合わせて設置する。
- ・児童によって、心地良い楽器の音色や音の大きさが異なるため、楽器の配置を検討しながら進める。

○実態に応じたグループ分け

- ・児童が進んで学習に取り組めるように、実態に応じて3つのグループに分ける。
 - Aグループ・・・音や音楽を感じて自分から、もしくは自分なりに音を出す。
 - Bグループ・・・教師と一緒に楽器を鳴らし、音や音楽に気付きその心地よさを感じる。
 - Cグループ・・・教師と一緒に楽器を鳴らし、注目したり、振動を味わったりする。

3 題材の目標及び指導計画

●学習内容 (学習指導要領)	次	●学習活動	時間	○3つの柱における目標		
				●知識及び技能	●思考力、判断力、表現力等	●学びに向かう力、人間性等
小学部 音楽科【1段階】 A 表現 ア(ア)音や音楽遊びについて の知識や技能を得たり 生かしたりしながら、 音や音楽を聴いて、 自分なりに表そうと すること。 (思考力、判断力、表現力) (イ)表現する音や音楽に 気付くこと。 (知識) (ウ)④音や音楽を感じて 楽器の音を出す技能 (技能) B 鑑賞 ア(イ)聴こえてくる音や 音に気付くこと。 (知識)	第1次	●聴こえてくる音や音楽に 気付く。 ●教師と一緒に楽器をた いて音を出す。 【9月15日(木)3校時】	1	・表現した音、友達や教 師が鳴らした楽器の 音などに気付くこと ができる。		
	第2次	●教師と一緒に、心地よい音や 自分なりの鳴らし方を 探す。 【9月30日(金)3校時、 10月13日(木)3校時】	2	・教師と一緒に楽器の 音を出したり、自分な りの表し方によって、 楽器の音を出したり することができる。 ・聴こえてくる打楽器 の音や音楽に気付く ことができる。	・身近な打楽器に親し み、音を出そうとす る思いをもって取 り組む。 ・打楽器の音や、扱う 曲の音楽に気付き ながら、関心や興味 をもって聴こうと することができる。	・表現したり、聴こ えてきたりする音 や音楽に気付き、 教師や友達と一緒 に音楽活動をする 楽しさを感じる。
	第3次	●表したい思いをもち、音や音 楽を感じて自分なりに 楽器の音を出す。 【10月20日(木)本時、 10月27日(木)3校時】	2	・楽器の音や聴こえて くる音、音楽を感じ たり、自分なりの思 いをもって楽器の音 を出したりすること ができる。		

4 本時の指導

(1) 本時の学習 「たたいてあそぼう④」

(2) 本時の目標

- ・音や音楽に気付き、楽器の音を出すことができる。(知識及び技能)
- ・身近な打楽器に親しみ、自分なりに楽器を鳴らしたいという思いをもって取り組む。
(思考力、判断力、表現力等)
- ・表現したり聴こえてきたりする音や音楽に気付き、教師や友達と一緒に音楽活動をする楽しさを感じる。
(学びに向かう力、人間性等)

(3) 児童の実態と目標

氏名	児童の実態	目標	指導・支援の手立て
①	・難聴であるが、音や音楽が流れると、じっと聴き入ったり、笑顔を見せたりする。 ・自発的に物を握ったりたたいたりすることは難しい。不随意運動でたたくことがある。 ・呼名されると相手を見たり、手を動かしたりすることがある。 《聞くこと》スコア 4 《見ること》スコア 4 《運動・動作》スコア 2	知・技 補助具を使ったり、教師と一緒にマレットを持ったりしてカゴ付きタンブリンを鳴らす中で、自分なりに楽器を鳴らそうとすることができる。 学 音や音楽を感じたり、みんなでタイミングを合わせて楽器をたたいたりして、教師や友達と一緒に音楽活動をする楽しさを感じながら活動に参加することができる。	・教師と一緒にたたけた時も不随意運動でたたけた時も大いに称賛し、自発的な動きへの意欲がもてるようにする。 ・たたき方に抑揚をつけたり、明るい雰囲気で歌ったり話し掛けたりして、活動の楽しさが感じられるようにする。
②	・難聴であるが、楽器の音や曲を聴いて楽しむ様子がみられる。 ・バチをもって提示された楽器をたたいたり、こすって音を出したりすることができる。 ・呼名にタッチで応じたり、あいさつに合わせて礼をしたりできる。 《聞くこと》スコア 18 《見ること》スコア 18 《運動・動作》スコア 18	知・技 音や音楽を感じ、楽器を鳴らすことを楽しみながら、曲の間、両手にバチを持って和太鼓をたたくことができる。 学 自分や周りの表現する音を聞いたり、みんなでタイミングを合わせて楽器をたたいたりして、教師や友達と一緒に音楽活動をする楽しさを感じながら活動に参加することができる。	・自発的にたたけたことを大いに称賛したり、身振り手振りで演奏を促したりする。 ・たたき方に抑揚をつけたり、明るい雰囲気で歌ったり話し掛けたりして、活動の楽しさが感じられるようにする。
③	・難聴であるが、楽器の振動を感じて楽しむ様子がみられる。 ・バチをもって提示された楽器をたたいたり、こすって音を出したりすることができる。	知・技 音や音楽を感じ、楽器を鳴らすことを楽しみながら、曲の間、タンブリンをたたくことができる。	・自発的にたたけたことを大いに称賛したり、身振り手振りで演奏を促したりする。

	・呼名されても反応しないが、手やカードなどを差し出すとタッチで応えることができる。 《聞くこと》スコア 8 《見ること》スコア 8 《運動・動作》スコア 12	学自分や周りの表現する音を聞いたり、みんなでタイミングを合わせて楽器をたたいたりして、教師や友達と一緒に音楽活動をする楽しさを感じながら活動に参加することができる。	・たたき方に抑揚をつけたり、明るい雰囲気で歌ったり話し掛けたりして、活動の楽しさを感じられるようにする。
④	・音や音楽が流れてくると目の上に動かし、音の聞こえる方に意識を向ける様子がみられる。 ・自発的に物を握ったりたたいたりすることは難しい。不随意運動でたたくことがある。 ・呼名されると口を開けたり、声を出したりして応えることがある。 《聞くこと》スコア 2 《見ること》スコア測定不能 《運動・動作》スコア 2	知・技教師と一緒にパドルドラムを鳴らす中で、自分なりに楽器を鳴らそうとすることができる。 学音や音楽を感じたり、みんなでタイミングを合わせて楽器をたたいたりして、教師や友達と一緒に音楽活動をする楽しさを感じながら活動に参加することができる。	・教師と一緒にたたけた時も不随意運動でたたけた時も大いに称賛し、自発的な動きへの意欲がもてるようにする。 ・たたき方に抑揚をつけたり、明るい雰囲気で歌ったり話し掛けたりして、活動の楽しさを感じられるようにする。
⑤	・好きな音楽に反応し、笑顔になったり、声を出して楽しんだりする。 ・パチをもって提示された楽器をたたいたり、こすって音を出したりすることができる。 ・興味のある活動と興味のない活動がはっきりしている。興味のない活動では眠ることが多い。興味のないものを手に持たせると、投げ捨てることが多い。 ・呼名されると手を挙げたり声を出したりして応えることができる。 《聞くこと》スコア 12 《見ること》スコア 12 《運動・動作》スコア 18	知・技楽器やマレットに触れたり、教師と一緒に演奏したりすることでキッズコンガに親しみ、音や音楽に気付いて、自分なりに楽器を鳴らそうとすることができる。 学自分で表現したり、周りから聴こえてきたりする音や音楽を感じて、教師や友達と一緒に音楽活動を楽しむことができる。	・楽しい雰囲気です話し掛けたり、教師も一緒に歌ったりして、活動への意欲がもてるようにする。自分で楽器を鳴らせた時や教師と一緒に鳴らせた時には大いに称賛し、演奏を促す。 ・教師も一緒に歌ったり、曲のリズムに合わせて児童の体をタッピングしたりして、活動の楽しさを感じられるようにする。

⑥	・音や音楽に反応し、じっと聴き入ったり、音の鳴っている方向を見たりする。 ・大きな音に驚き、不安な表情になったり、泣き出したりすることがある。 ・手を動かして楽器を鳴らすことができる。 ・呼名されると目を合わせたり、手を挙げたりして応えることができる。 《聞くこと》スコア 8 《見ること》スコア 12 《運動・動作》スコア 8	知・技 楽器に触れて鳴らしたり、教師と一緒に演奏したりすることでタンブリンに親しみ、音や音楽を感じて、自分なりに楽器を鳴らそうとすることができる。 学 自分で表現したり、周りから聞こえてきたりする音や音楽を感じて、教師や友達と一緒に音楽活動を楽しむことができる。	・自分で楽器を鳴らせた時や教師と一緒に鳴らせた時には大いに称賛し、演奏を促す。周りの大きな音に不快な表情をしているときには、その場を離れたり、静かな場所で気持ちを落ち着かせたりする。 ・教師も一緒に歌ったり、曲のリズムに合わせて児童の体をタッピングしたりして、活動の楽しさを感じられるようにする。
⑦	・難聴であるが、音や音楽に反応し、じっと聴き入ったり、笑顔を見せたりする。 ・バチをもって提示された楽器をたたいたり、こすって音を出したりすることができる。 ・楽器を差し出されると、自分から手を伸ばして鳴らそうとする。 ・呼名されると目を合わせたり、手を挙げたりして応じることがある。 《聞くこと》スコア 4 《見ること》スコア 12 《運動・動作》スコア 24	知・技 音や音楽を感じ、楽器を鳴らすことを楽しみながら、両手にバチを持って、自分なりに和太鼓を鳴らすことができる。 学 自分で表現したり、周りから聞こえてきたりする音や音楽に気付き、教師や友達と一緒に音楽活動を楽しむことができる。	・自分で楽器を鳴らせた時には大いに称賛し、演奏を促す。曲のリズムに合わせて児童の体をタッピングし、3拍子のリズムを感じ取ることができるようにする。 ・教師も一緒に歌ったり、曲のリズムに合わせて児童の体をタッピングしたりして、活動の楽しさを感じられるようにする。
⑧	・好きな曲や知っている曲には、体を動かしたり、発声したりしてうれそうにする。 ・教材や楽器に興味を示すことが増え、自分から手を伸ばしたり、右手でトントんとたたいたりする。 ・呼名に気付いて顔を向けたら、周りの様子に興味をもって視線を向けてじっと見	知・技 音や音楽を感じて、自分でやってみようという気持ちを持ち、タンブリンに注目したり、右手でたたいたりすることができる。 学 自分で鳴らせた音や聴こえてくる曲に気付き、周りの様子を目に向けながら教師と一緒に音楽活動を楽しむことができる。	・自分で鳴らし始めるきっかけになるように、教師がタンブリンをたたいて手本を示す。 ・楽しく活動できるように、顔が下がりにくい姿勢にしたり、注目するところを指さして促したりする。また「楽しいね」「できたね」など、共感

	たりする姿が増えてきている。 《聞くこと》スコア 4 《見ること》スコア 6 《運動・動作》スコア 12		的な声掛けをする。
⑨	- 好きな曲や知っている曲が流れると、両腕を大きく振り、うれしそうにする。 - 教材や楽器に興味をもつと、両手で取ったり、じっと視線を向けたりする。 - 繰り返し取り組む活動では、活動に見通しをもち、興味をもって視線を向けることがある。 《聞くこと》スコア 6 《見ること》スコア 6 《運動・動作》スコア 12	知・技音や音楽を感じて、楽器を鳴らすことが分かり、自分が鳴らす楽器に注目し、自分から手を動かして音を鳴らすことができる。 学自分で鳴らせた音や聴こえてくる音に気づき、周りに視線を向けながら、教師と一緒に音楽活動を楽しむことができる。	- タンブリンに注目して鳴らせるように、かごに入ったタンブリンを机上に設置する。 - 楽しさを感じられるように、教材への注目を促す、教師と一緒に歌う、児童の体をタッピングするなどを行う。
⑩	- 音に気付いたり、好きな曲が流れていたりすると、じっと聴き入ったり、手をたたいたりする。 - 全盲のため、触れることに不安感がある。教師の声掛けを受け入れ、少しずつ教材や楽器に触れる姿がみられてきている。 - 呼名されると、顔の動きを止めたり、手をたたいたりして応じることが増えてきている。 《聞くこと》スコア 4 《見ること》測定不能 《運動・動作》スコア 8	知・技音楽や振動を感じ、楽器に触れることを受け入れ、教師と一緒にスネアドラムを鳴らすことができる。 学様々な音や振動に気づき、興味をもって手を動かそうとし、教師と一緒に音楽活動を楽しむことができる。	- 安心して取り組めるように、教師が先に音を鳴らして活動を予告する。自分で行おうとする気持ちを見取りながら、少しずつ右手をスティックに誘導する。 - 楽しさやみんなと活動していることを感じられるように、「楽しいね」と共感的な声掛けをしたり、教師や友達の様子を伝えたりする。
⑪	- 好きな曲や知っている曲には、じっと聴き入ったり、笑顔になったりする。 - 自分から物を握る、たたくことは難しいが、教師と一緒にいき、できた手応えがあると、笑顔で喜ぶ様子が見られる。 - 見通しをもっている活動では、自分から「やりたい」	知・技音や音楽を感じて、自分で鳴らしてみようという気持ちをもち、自分から手を動かして音を鳴らすことができる。 学自分で鳴らせた音や聴こえてくる音に気づき、教師や友達と一緒に音楽活動を楽しむことができる。	- 自分で鳴らしてみたいと感じて取り組めるように、補助具「トントんくん」を使用する。 - 楽しさを感じられるように、周りが見える配置にしたり、「〇〇さんの音が聞こえたね」「楽しい

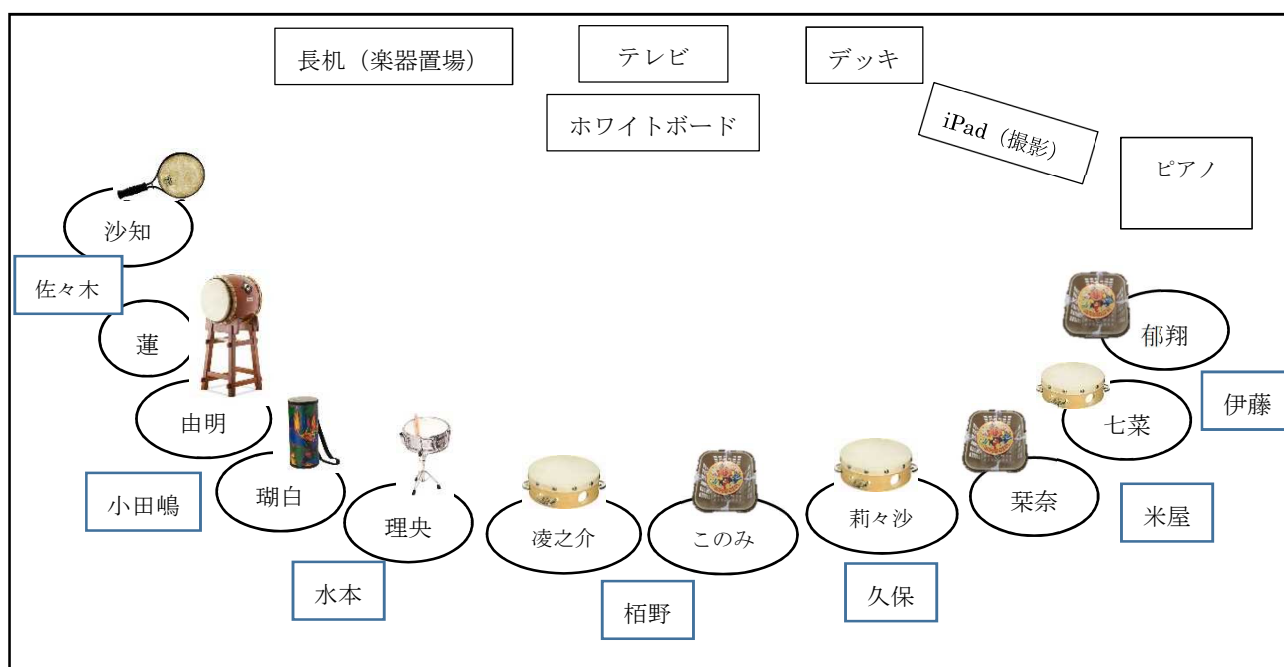
	と表情の変化や体を動かして伝えることが増えてきている。 《聞くこと》スコア 8 《見ること》スコア 8 《運動・動作》スコア 2		ね」など、共感的な声掛けを行ったりする。
--	---	--	----------------------

(4) 本時の展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点・児童生徒への配慮等	○評価の視点 ◎評価の方法	教材・ 教具等
導入 7分	0 あげあげタイム	・児童の好きな曲をかけ、気持ちを高めたり、覚醒レベルを上げたりして、学習を始める準備が整うようにする。		・HDMI アダプター ・iPhone ・テレビ ・ホワイトボード ・デッキ ・USB メモリ ・次第
	1 はじめのあいさつ	・「はじまりのうた」を歌う。 ・週交代で当番が始めの挨拶をする。		
	2 本時の学習内容と目標を確認する。	・本時の学習内容を簡潔に説明し、目標を確認する。		
		本時の学習目標 「たいこをたたこう」		
展開 30分	3 手遊び歌 「証城寺のたぬきばやし」 ・曲を聴いたり、タッピングを受け入れたりする。	・「おいでおいで」や「お腹をたたく」などの模倣を促すために、MT が簡単な振り付けで手本を示す。 ・「こいこいこい」や「ぼんぼこぼんのぼん」の歌詞で教師が児童の体をタッピングし、リズムや曲の雰囲気を感じられるようにする。	知・技 ○楽器に触れたり、たたいたりして楽器の音を出すことができるか。 ◎観察 思 ○楽器に触れたり、たたいたりして、自分なりに楽器の音を出そうとしているか。 ◎観察 態 ○表現したり聴こえてきたりする音や音楽に気付いているか。 ◎観察	・ホワイトボード ・歌詞カード ・USB メモリ ・デッキ ・ペープサート ・歌詞カード ・楽器担当一覧 ・和太鼓 ・パチ ・タンバリン ・iPad ・iPad スタンド ・テレビ
	4 歌 「ぼんぼこたぬき」 ・曲を聴いたり、教師と一緒にペープサートを持ったりする。	・たぬきのペープサートを準備し、教師に持ってもらって注目したり、自分で振って楽しんだりできるようにする。		
	5 楽器 「たぬきのたいこ」 ・一人ずつ担当楽器を確認し、音を鳴らす。 ・全員で曲に合わせて鳴らす。 ・演奏の様子を動画で振り返る。	・担当する楽器について確認する。一人ずつ音を出してみるように声掛けし、表現につなげられるようにする。 ・音が聞こえたときには、音色や奏法について具体的に称賛し、演奏への意欲が高まるようにする。 ・児童によって、心地良い楽器の音色や音の大きさが異なるため、楽器の演奏時は各楽器の配置場所に気を付ける。 ・演奏時の動画を撮影しておき、全員で見ることで、すぐに振り返りができるようにする。		
	6 身体表現「月夜のぼ	・はっぴを準備することで、曲の雰囲気が味わ		・はっぴ

	んちゃらりん」 ・簡単な振り付けを確認し、踊る。	えるようにする。		
ま と め 8 分	7 振り返り ・各学級の児童が前に出て、教師と一緒にがんばったことを発表する。 8 おわりのあいさつ	【順番】 1組→2組→3組 ・児童のがんばりが伝わるように、教師が児童の様子をみんなの前で紹介する。 ・児童の実態に応じて、身振りや発声などで発表できるように支援を行う。 ・「おわりのうた」を歌う。 ・週交代で当番が終わりのあいさつをする。		・ホワイトボード ・デッキ ・USBメモリ

(5) 配置図



(6) 板書計画

ホワイトボード表面	ホワイトボード裏面
歌詞カード ④「証城寺のたぬきばやし」 ⑤「ぼんぼこたぬき」 あいさつ当番表 今日の予定	担当楽器一覧 たぬきイラス たぬきイラス たぬきイラス 月 歌詞カード 「たぬきのたいこ」

小学部 自立活動「うんどう」学習指導案

日 時：令和4年10月20日（木）3校時

場 所：体育館

対象児童：小学部4年3、4組

5年2、3、4組（計17名）

指導者：清水美紀（MT）、中田咲子（ST1）高橋容子（ST2）

岩崎早苗（ST3）、羽上幸恵（ST4）、小菅真由美（ST5）

浅沼樹（ST6）、佐藤光一（ST7）、高橋麻琴（ST8）、

千葉元太（ST9）、阿部眞実（ST10）

佐々木祐美子（ST11）、小笠原春菜（ST12）

嵯峨智子（ST13）、滝本勲（ST14）、桜田茜（ST15）

1 題材名 「揺れる動きを楽しもう」

2 題材について

（1）題材について

自立活動「うんどう」では、特に内容【3人間関係の形成】（4）、【4環境の把握】（1）、【5身体の動き】（1）、【6コミュニケーション】（1）を学ぶことを目的とし、運動会に向けての取り組み、プール学習、揺れやスピード、回転を楽しむ学習、ボール遊び等の学習活動を実施している。本題材の「揺れる動きを楽しもう」は、自立活動を主とする教育課程で学ぶ児童を対象にした体育的な学習「うんどう」において、日常生活では体験しにくい揺れる動きやスピード感などを楽しみながら、環境の把握や身体の動き、コミュニケーションを学ぶことのできる内容である。

今回の学習内容は、学習指導要領知的障害である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の体育科の「器械・器具を使った遊び」（1段階）の内容であり、児童は今回の学習活動において、上下や左右、前後に揺れる動きを体験することを通し、体の力の入れ方や抜き方などに気づき、体を動かす楽しさを感じたり、揺れに身を任せてみたりすることができると考えられる。また、友達や教師と一緒に活動することにより、他者の様子に気付いたり、一緒に行うことの楽しさを感じるができるようになる。

（2）児童について

自立活動を主とする教育課程に在籍する4、5年生の児童は、男子6名（4年2名、5年4名）、女子11名（4年3名、5年8名）の計17名と大人数のグループ構成である。児童の実態は、肢体不自由と知的障がいをもつ重複障がいであり、車椅子を使用する児童、不安定ではあるが歩行も可能な児童と様々である。また、経管栄養や痰の吸引等の医療的ケアが必要な児童、筋緊張の強い児童もいるため、授業中も配慮が必要である。

身体の動きについては、自分でやりたいものに移動して取り組もうとする児童、近くにあるものを自分から手を伸ばして触ったり動かしたりすることができる児童、教師と一緒に取り組む児童など実態は様々である。また、コミュニケーションについても、教師や友達の

様子を自分で見ることができる児童、発声等で気持ちを表現できる児童、教師の声掛けに応じて一緒に取り組む児童等実態に幅が見られる。

（３）指導にあたって

本グループの児童における「協働的な学び」は、本校の「キャリア教育学習プログラム～自立活動を主とする教育課程～」を踏まえ、総合生活力の「友達に気付く」「友達と関わる」「身近な人に感情を表す」「身近な人からの支援を受け入れる」、人生設計力の「身近な人に関心をもつ」「楽しんで活動に取り組む」「自分の好きなことを見つける」ことと捉えた。本授業においては、「教師と一緒に楽しみながら体を動かすこと」「体を動かす心地よさを自分なりの方法で表現すること」「友達の活動に注意を向けること」を捉える。

本題材では、児童個々の実態に合わせた体の動きを引き出せるよう器械・器具を設定する。教師の支援、誘導を受けながら運動や感覚を通して体を動かす心地よさを感じることができ、また、自分の体の動かし方を繰り返し経験することで、ボディイメージをつかむきっかけづくりになると良いと考える。

また、友達や教師と一緒に活動することで周りの人の動きに注目したり、自分もやってみたいという気持ちにつながったりするよう働きかけの工夫を行いたい。

3 題材の目標及び指導計画

●学習内容 (学習指導要領)	次	● 学習活動	時間	○ 3つの柱における目標		
				●知識及び技能	●思考力、判断力、 表現力等	●学びに向かう力、 人間性等
小学部 体育科 器械・器具を使っでの遊び (1段階) ア 教師と一緒に、器械・器具を使って楽しく体を動かすこと。 イ 器械・器具を使って体を動かすことの楽しさや心地よさを表現すること。 ウ 簡単な合図や指示に従って、器械・器具を使っでの遊びをしようとする事。	第1次	9月15日(木) ・揺れる動きの学習について知ろう。 ・揺れる動きを楽しもう① 9月29日(木) ・揺れる動きを楽しもう②	1 1	・教師と一緒に、器械、器具を使って様々な体の動かし方に取り組むことができる。	・器械、器具を使っでの運動に慣れ、体を動かす心地よさを自分なりの方法で表現することができる。	・友達や教師と一緒に自分の好きな運動を見つけ、楽しんで取り組むことができる。 ・簡単な合図を聞いて運動に取り組むことができる。
	第2次	10月13日(木) ・揺れる動きを楽しもう③ ・友達と一緒に楽しもう 10月20日(木) 本時 ・揺れる動きを楽しもう④ ・友達と一緒に楽しもう	1 1 (本時)			

4 本時の指導

(1) 本時の学習 「揺れる動きを楽しもう～友達と一緒に楽しもう～」

(2) 本時の目標

- ・教師と一緒に、または支援を受けて楽しみながら体を動かすことができる。
(知識及び技能)
- ・体を動かす心地よさを自分なりの方法で表現することができる。
(思考力、判断力、表現力等)
- ・友達の活動に注意を向けたり、簡単な合図に従って運動に取り組んだりすることができる。
(学びに向かう力、人間性等)

(3) 児童の実態と目標

氏名 (学年)	児童の実態	目標	指導・支援の手立て
① (4年)	・筋緊張の強い児童である。 ・腹臥位の姿勢が好きで、視線をよく動かし笑顔になることが多い。 【運動・動作スコア 4】 【受け止め対応スコア 6】	・教師と一緒に様々な遊具を使って体を動かすことができる。(知・技) ・身体の緊張を緩めたりすることなどで心地よさを表現することができる。(思・判・表)	・友達が体験している様子を見て、遊具の動きが分かるようにし安心して体験できるようにする。 ・遊具での身体の動きを楽しめるように、リラックスできる姿勢に留意する。快の表出が見られたときには、共感の声掛けをして気持ちを受け止める。
② (4年)	・医療的ケアの必要な児童である。 ・視覚から情報を得ることが難しいため、急な姿勢変換には不安感をもつ。 ・不安や不快な時には身体が緊張し、楽しい心地よいと感じている時は笑顔になることが多い。 【運動・動作スコア 2】 【受け止め対応スコア 4】	・教師と一緒に様々な遊具を使って体を動かすことができる。(知・技) ・様々な揺れの動きを感じ、表情の変化や発声で心地よさを表現することができる。(思・判・表)	・体験する遊具を伝えてから移動するようにし、安心して体験できるようにする。 ・遊具での身体の動きを楽しめるように、リラックスできる姿勢に留意し、声掛けを多くする。快の表出が見られたときには、共感の声掛けをして気持ちを受け止める。
③ (4年)	・自力で立ち上がり歩行することができるが不安定である。 【運動・動作スコア 18】 ・自分のやりたい活動に向かって進んで行ったり、手	・教師の合図を見て、活動の始まりと終わりに気付くことができる。(思・判・表) ・教師と一緒にストレッチボールの乗り方を知り、自分でバランスを保つことができる。(知・技)	・合図に気付くように、目の前で始まりと終わりを提示する。 ・姿勢が保持できるように、教師は脇や腰に手を添えながらゆっくり動かす。

	を伸ばして伝えたりすることができる。 【表現・要求スコア 6】		
④ (4年)	・ダイナミックな動きを好む。 ・自分でトランポリンに座り、上下に動かすことができる。 【運動・動作スコア 8】 ・手をたたいて、何かを要求するような表現をすることができる。 【表現・要求スコア 6】	・座位のままバランスボールに乗り、左右の揺れを受け入れながら 30 秒程度姿勢を保持し続けることができる。(知・技) ・自分の好きな動きを見つけ、手をたたいたり表情を変えたりして自分なりに教師に向けて表現することができる。(思・判・表)	・座位でバランスがとれたことを確認し、バランスが崩れてもサポートできるように後方から左右に揺らす。 ・児童の反応を引き出すために、上下、左右にそれぞれ揺らし、都度本児に問いかけたり、表情を見たりする。
⑤ (4年)	・ダイナミックな動きを好む。 ・自分の好きな器具に進んで行くことができる。 【表現・要求スコア 6】 ・揺れや弾む感覚を臥位で楽しむ傾向がある。 【運動・動作スコア 8】	・教師と一緒にエアトランポリンの乗り方を知り、座位の姿勢を保つことができる。(知・技) ・自分の好きな動きを、視線で教師に伝えることができる。(思・判・表)	・座位の姿勢を取れるように教師と一緒にトランポリンに座り、揺れを楽しむ。 ・揺れの活動をあえて一度止め、視線を合わせてからまた始めることを繰り返す行う。
⑥ (5年)	・短下肢装具を着用している。独歩が可能。 ・座り込んでしまうことがあるが、手すりにつかまって立ち上がるなど、自分の身体を支える動きができるようになった。 【運動動作】スコア 18	・遊具を使った様々な運動を教師と一緒に経験し、体を動かす。(知・技) ・笑顔を見せるなどして、楽しい気持ちを表しながら活動する。(思・判・表)	・声を掛けて様々な遊具を使った運動へ促し、できるだけ自分から体を動かす場面を作りながら取り組む。 ・本人の反応を見ながら様々な運動と一緒に経験する。反応が見られた場合は「楽しいね」などの共感できる声掛けをし、気持ちを共有できるようにする。
⑦ (5年)	・座位をとったり、上肢で身体を支えて四つ這い姿勢をとったりすることが可能。 自分なりに行きたい方向に向かって四つ這い姿勢で移動することができるようになってきた。 【運動動作】スコア 8	・遊具を使った様々な運動を教師と一緒に経験し、体を動かす。(知・技) ・友達や教師の様子を見て、自分もやりたいという意欲をもって活動に取り組む。(学・人)	・声を掛けて様々な遊具を使った運動へ促し、自分から体を動かす場面を作りながら取り組む。 ・順番を待つ時間に友達の活動の様子を見せ、自分もやりたいという意欲をもてるような声を掛けながら活度に誘うようにする。

⑧ (5 年)	・股関節脱臼のため車椅子に座ったままの活動に取り組んでいる。 ・気分が盛り上がると、頭を振ったり、手や足を動かしたりして楽しい気持ちを表しながら活動に取り組んでいる。 【運動動作】スコア 4 【表現要求】スコア 4	・車椅子に座ったままで取り組める運動に教師と一緒に取り組み、できる範囲で体を動かす。 (知・技) ・「楽しい」という気持ちを笑顔や発声、体の動きなどで表現する。(思・判・表)	・使う遊具や動かす体の部位を本人に伝え、安心感をもちながら座ったままでも可能な運動に取り組むようにする。 ・本人の反応を見ながら、様々な運動刺激を感じられるように取り組む。反応が見られた場合は共感の声を掛け、気持ちを共有しながら活動に取り組むことができるようにする。
⑨ (5 年)	・両手を大きく振るなどして、粗大運動に取り組む、笑顔や発声で楽しい気持ちを表現している。 【運動動作】スコア 8 【表現要求】スコア 8	・遊具を使った様々な運動を教師と一緒に経験し、体を動かす。 (知・技) ・笑顔や発声などで楽しい気持ちを表しながら活動に取り組む。(思・判・表)	・声を掛けて様々な遊具を使った運動へ促し、できるだけ自分から体を動かす場面を作りながら取り組む。 ・本人の反応を見ながら様々な運動と一緒に経験する。反応が見られた場合は「楽しいね」などの共感できる声掛けをし、気持ちを共有できるようにする。
⑩ (5 年)	・医療的ケアの必要な児童である。 ・下肢装具を使用しており股関節脱臼に注意を要する。 ・バードチェアでは、腹臥位の姿勢で頭部をチェアに乗せて緊張を緩める様子がみられる。 【運動動作】スコア 8 ・ハンモックの揺れを好んで笑顔を見せたり友達の活動を応援したりすることがある。 【表現要求】スコア 8	・バードチェアでは、腹臥位の姿勢でリラックスすることができる。(知・技) ・要求を教師に伝えようとしたり友達の活動する様子を見て応援したりすることができる。(思・判・表)	・本児の様子を確認しながら安全に留意して介助にあたる。 ・安心して活動できるよう声掛けをする。静と動の動きでめりはりをつけるなどして、教師の手を引いたり、手をたたいたりするなどの本児からの表出を待つ。
⑪	・両上肢および股関節亜脱臼のため、特に車椅子の乗	・バランスボードでは、教師と一緒に座り、様々な揺れに親しむこ	・教師と一緒に乗り、安心して取り組めるようにする。

(5 年)	降や姿勢変換時には留意する。 ・両足短下肢装具を使用している。 ・一人で座位を保持したり、寝返りをしたりすることがある。 【運動動作】スコア 8 ・全体的に介助が必要であるが、近くの大人や友達に手を伸ばしたり、視線を向けたりすることがある。 【表現要求】スコア 4	とができる。(知・技) ・一緒に活動する近くの大人や友達に視線を向けたり、手を伸ばしたりすることができる。(学)	また、股関節に負担が掛かり過ぎないように介助にあたる。 ・順番に体験する際には、タッチなどの関わりの場面を設定するなどして意識づけられるようにする。
⑫ (5 年)	・医療的ケアの必要な児童である。 ・胃瘻のため、姿勢によっては復位に圧がかからないよう留意する。 ・左腕に装具を使用している。 ・一人で座位をとることができるがバランスが悪く転倒することもあるので見守りが必要である。 【運動動作】スコア 8 ・興味のある活動に視線を向けたり、自分から近づいたりして意欲的に取り組む様子がみられる。 【表現要求及び外界の知覚認知】スコア 8	・バランスボードでは、教師の介助を受け入れながら、様々な揺れを体験できる。(知・技) ・視線を向けたり手を伸ばしたりして要求を伝えることができる。(思・判・表)	・姿勢や表情など良かった点を伝えたり、心地よさを伝える声掛けをするなどリラックスして取り組めるようにする。 ・体験した用具や揺れの様子などについて楽しかった、もう一度やってみたいなどを問い、視線や何らかの反応があったものが要求するものと読み取る。
⑬ (5 年)	・強く激しい揺れを好む傾向があり、用具にゆったり身を任せるような様子はあまりみられない。 【運動操作】スコア 8 ・友達や教師と学習することを楽しみにしていて、そ	・バードチェアでは、教師の介助を受けながら、短い時間で腰や脚を伸ばす姿勢に取り組むことができる。(知・技) ・様々な揺れを体験したり、友達の様子を見て応援したりすることができる。(学)	・上手にできたところを伝えながら取り組む。 ・揺らし方を工夫する。また、順番に用具を体験する際には、タッチなどの関わりの場面を設定するなどして意識づけられるようにす

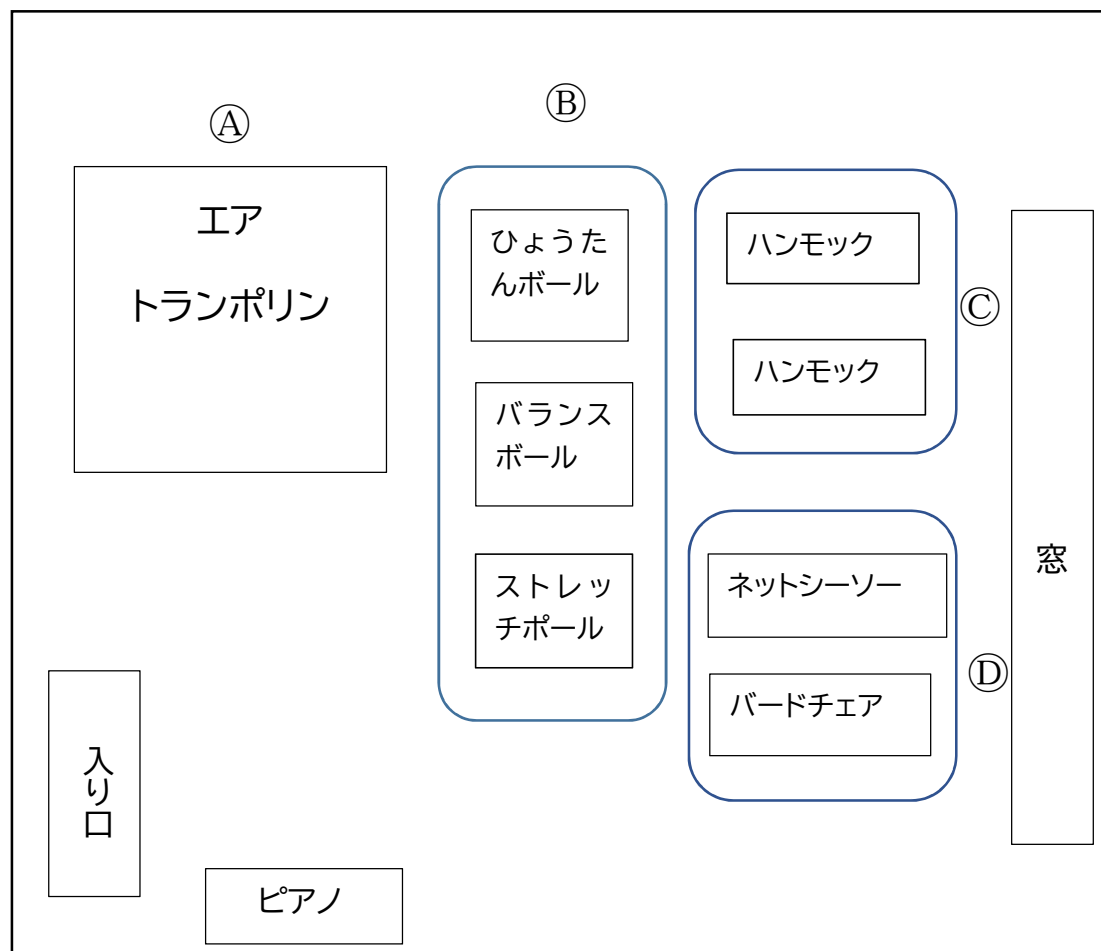
	の様子を見ることが好きである。 【受け止め対応】スコア 12		る。
⑭ (5 年)	・医療的ケアが必要な児童である。 ・日常生活全般で介助が必要であるが、左手を上下に粗大に動かしたり、近くの大人や友達に視線を向けたりすることができる。 【表現・要求】スコア 6 【運動・動作】スコア 8	・揺れを受け入れ、快の気持ちを表情や体の動き、発声で表現できる。 (思・判・表)	・気持ちの表現をしやすいように、揺らした後時間を取り、本人から表出があるまでゆっくりと待つ。 ・表出があった際は、「楽しかったね。」など言葉でフィードバックし、心地よい気持ちを共感することでさらなる表出を促す。
⑮ (5 年)	・短下肢装具、コルセットを使用している。不安定ではあるが独歩が可能。 ・体を動かすことが好きで、自分から遊具に乗ることができる。 【表現・要求】スコア 8 【運動・動作】スコア 18	・自らすすんで様々な遊具を体験し、気に入った揺れを見つける。(知・技) ・全体への終了の合図に気が付き、活動を切り替えることができる。(学・人)	・安全に取り組めるよう、本人の動きを制限しない程度にすぐ近くで見守るようにする。 ・タイマーの音に意識が向きやすいよう、時折一緒にタイマーを確認するよう言葉掛けをする。
⑯ (5 年)	・外転装具を使用している。移動は不安定であるが車椅子自走可能。 ・友達の活動にとっても興味があり、手差しをしたり、マットの上を這ったりして関心を示す。 【表現・要求】スコア 12 【運動・動作】スコア 8	・友達や教師の見本を見て、様々な遊具に挑戦できる。(知・技) ・終了の合図まで、活動を続けることができる。 (学・人)	・不安にならないよう、友達が楽しく活動する様子を見せてから活動に誘うようにする。 ・集中が続くよう、一緒にタイマーを確認して残り時間も活動できるよう促す。
⑰ (5 年)	・不安定であるが独歩可能。 ・感覚遊びが好きで、トランポリンなどは自ら乗ろうとする。足元に注意が向けにくいので、不安になると大人に助けを求める。 【表現・要求】スコア 8 【運動・動作】スコア 12	・教師と一緒に様々な遊具を体験することができる。(知・技) ・教師の言葉掛けにより終わりが分かり、活動を切り替えることができる。(学・人)	・本人のすぐ近くで見守ったり、手をつないだりすることで不安を軽減し、安心して活動でできるようにする。 ・全体への合図の後、気が付かない様子であれば個別に言葉掛けやサインを見せ、活動の切り替えができるようにする。

(4) 本時の展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点・児童生徒への配慮等	○評価の視点 ◎評価の方法	教材・ 教具等
導入 15分	1 あいさつ 2 今日のうんどうについて知る 3 ラジオ体操	・当番が前に出てあいさつする。 ・本時の授業の流れを確認する。 ・本時は揺れる動きの学習の最後の時間であることを伝える。 ・グループに分かれて学習することを確認する。 ・体操の時の姿勢（立つ、車椅子で）は児童の実態に合わせる。		ホワイトボード 顔写真カード 消毒セット CD
展開 20分	4 揺れる動きを楽しもう ④エアトランポリン ⑤ひょうたんボール バランスボール ストレッチポール スロープ ⑥ハンモック×2 ⑦バランスボード バードチェア	・学級毎の4グループに分け、各器械、器具を交代で使用する。 びよんびよんゾーン $\langle 4-3, 4 \rangle$ ④→⑤ $\langle 5-2 \rangle$ ⑤→④ ゆらゆらゾーン $\langle 5-3 \rangle$ ⑥→⑦ $\langle 5-4 \rangle$ ⑦→⑥ ・前半終了の合図をタイムタイマーを使用して知らせる。職員が声がけをし、次の器械器具に誘導する。 ・交代の際、おすすめの楽しみ方として児童が楽しんでいた様子を各グループの職員がホワイトボードに記入しておく。次のグループの職員が楽しみ方について紹介し、期待感を高めるようにする。 ・児童の様子によって休憩を取りながら無理をせずに取り組む。	〈知・技〉 ○楽しんで体を動かすことができたか。 ◎観察 〈思・判・表〉 ○児童に実態に応じた方法で、揺れる楽しさを表現できたか。 ◎観察 〈主・学・態〉 【④】 ○エアトランポリンの上下に揺れたり沈んだりする動きに気付いたり受け入れて楽しんだりすることができたか。 ◎観察 【⑤】 ○バランスボールやストレッチポールの	タイムタイマー エアトランポリン ひょうたんボール バランスボール ストレッチポール 青マット ハンモック バランスボード バードチェア 長マット ミニホワイトボード4

			上下や前後左右に動く揺れを受け入れ、楽しむことができたか。 ◎観察 【㉟】 ○ハンモックに身を任せ、揺れを受け入れたり楽しんだりすることができたか。 ◎観察 【㊦】 ○バランスボードやバードチェアの前後や左右に揺れる動きを受け入れたり楽しむことができたか。 ◎観察	
まとめ 5分	5 振り返り 6 あいさつ	・始めの位置に集合し、MTに注目しやすいよう車椅子の向きに気を付ける。 ・MTがホワイトボードに紹介された楽しみ方を紹介し、みんなで振り返りができるようにする。 ・STは、児童と共感したり相槌を打ったりして楽しかった雰囲気を作る。 ・始まりのあいさつをした児童が終わりのあいさつをする。		

(5) 配置図



中学部 1～3 年 IIIグループ 音楽科学習指導案

日 時：令和 4 年 7 月 1 1 日（月） 3 校時

場 所：音楽室

対象生徒：1 年 3 組（男子 1 名、女子 2 名）

1 年 4 組（女子 1 名）

2 年 5 組（男子 2 名、女子 2 名）

3 年 4 組（男子 1 名、女子 2 名）

計 1 1 名

指 導 者：佐藤陽子（MT）、小水内光浩（ST1）

高橋武文（ST2）、藤森由美子（ST3）

松田長悦（ST4）、森谷かおり（ST5）

吉澤美和子（ST6）

1 題材名「楽器を鳴らそう」

教材名「越天楽今様」「平調越殿楽」「越殿楽幻想曲」

2 題材について

（1）題材について

本題材は、特別支援学校学習指導要領・小学部・音楽 1 段階・A 表現の A（ア）（イ）（ウ）①、B 鑑賞 A（ア）を指導のねらいとし、〔共通事項〕（1）の A との関連を図り、指導要領解説にある「音楽遊びとは、遊びの中で自然に音や音楽に気付き自分なりに表現していく」という部分に重点をおき、「越天楽今様」「平調越殿楽」「越殿楽幻想曲」の 3 曲を教材として学習を進める。生徒の発達段階から、題材の目標・内容は小学部 1 段階としているが、生活年齢や目標との関係においてこの 3 曲が適切であると考えて選定した。「越天楽今様」は「越天楽」の旋律に歌詞をつけた歌曲であり、旋律は「レミソラシ」の 5 音から構成され、音の数や跳躍が少ないため、音や音楽を感じ取りやすい。雅曲「越天楽」の前半部分は 8 種類の楽器（吹物、打物、弾物）が順番に加わりながら進行するため、音や音楽に気付きやすい。また、合奏曲としても生徒が音や音楽を感じて自分なりのタイミングで楽器を鳴らすことができると考えた。「平調越殿楽」「越天楽今様」を通して、音や音楽に気付き、曲に親しむ中で自分なりの楽しさを見つけ、「越殿楽幻想曲」では学習したことをふまえて、曲の良さや面白さ、美しさを感じ取りながら、自分なりの表現で楽器を鳴らし、協働して音楽活動ができるようにしたい。

（2）生徒について

中学部 III グループの生徒は、男子 4 名、女子 8 名（入院中 1 名）である。実態は、知的障がいと肢体不自由を併せもつ重複障がいがあり、全員車椅子を使用している。また、経管栄養や痰の吸引等の医療的なケアが必要な生徒、発作が見られる生徒が在籍しており、常時見守りや実態に応じた配慮が必要な生徒たちである。コミュニケーション面では、あいさつに「あー」と声を出して応じる生徒、教師が呼名すると視線を向けて応じる生徒、入眠している時間が長く自分からの表出が少ない生徒など様々である。

Ⅲグループの生徒にとって音や音楽は、比較的受け入れやすく、音や音楽に気が付き、笑顔を見せたり、手足を伸ばして表現したり、音がする方へ顔を向けたり、楽器に興味を示して触れたり、音を出したりする姿がみられている。時には気持ちが高ぶり泣き出したり、音色や音の強弱を感じて、不快な表情を示したりする様子もみられている。

歌唱につながる学習では、障がいの状態により、声に出して歌うことが難しい生徒が多いため、教師と一緒に歌ったり、手遊びや手話、打楽器を取り入れたりして、表現につなげている。器楽につながる学習では、これまでタンバリンや鈴の学習に取り組んできた。楽器に自分から手を伸ばして音を出す生徒、支えがあると手を動かして音を出す生徒、教師が生徒の手を補助して一緒に音を出す生徒などの様子がみられている。鑑賞では、音や音楽に耳を傾け、集中して聴く様子がみられている。

また、学習到達度チェックリスト 2019（福岡大学教授 徳永豊氏）による生徒たちの実態は、《聞くこと》スコア 1～24、《見ること》スコア測定不能～18、《運動・動作》スコア 1～8 となっている。そのため、それぞれの発達段階に応じた支援が必要となる。

（３）指導にあたって

生徒が音や音楽を感じて、自分なりに表現するために以下の点について工夫を行い、指導にあたりたい。

○見通しのもてる学習内容

- ・リズム（音楽的な学習）では、ねらいに応じて歌唱・器楽・身体表現につながる学習、鑑賞を組み合わせ学習を進めている。生徒が見通しをもって取り組めるように、本題材でも歌唱・鑑賞・器楽につながる活動を１時間の授業に入れて学習を進めたい。

○目標との関わり

- ・「越天楽」の旋律部分を含む３曲を教材として、歌唱につながる学習・鑑賞・器楽につながる学習の順番で繰り返し取り組み、曲への興味・関心を深め、音や音楽に気付くことから、自分なりに楽器を鳴らすという題材の目標まで段階を踏んでせまっていきたい。

○音や音楽に注目できる環境作り

- ・「越天楽今様」では音や音楽に気付けるよう、ピアノのみの伴奏と、ピアノ・太鼓・鈴を入れた伴奏を取り入れる。

○実態に応じたグループ分け

- ・生徒が進んで学習に取り組めるように、実態に応じて３つのパートに分ける。

A グループ・・・音や音楽を感じて自分から音を出す。

※生徒の実態から VOCA や iPad も楽器として使用し、主体的な表現につなげたい。

B グループ・・・音や音楽を感じて自分なりに音を出す。

C グループ・・・教師と一緒に楽器を鳴らし、音や音楽に気付きその心地よさを感じる。

(4) 題材の目標

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
[知]表現する音や音楽に気付く。(表現) [技]音や音楽を感じて楽器の音を出す技能を身に付ける。(表現) [知]聴こえてくる音や音楽に気付く。(鑑賞)	[思]表現したり、聴こえてきたりする音や音楽を聴き取り、それらの働きが生み出す良さや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、自分なりに楽器を鳴らしたいという思いをもつ。(表現)	[学]表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に表現の活動に取り組む。(表現・鑑賞)

(5) 題材の評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
[知]表現する音や音楽に気付いている。(表現) [技]思いに合った表現をするために必要な、音や音楽を感じて楽器の音を出す技能を身に付けている。(表現) [知]聴こえてくる音や音楽に気付いている。(鑑賞)	[思]表現したり、聴こえてきたりする音や音楽を聴き取り、それらの働きが生み出す良さや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、自分なりに楽器を鳴らしたいという思いをもっている。(表現)	[学]表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に表現と鑑賞の活動に取り組もうとしている。(表現・鑑賞)

(6) 指導と評価の計画

時数	学習課題	・学習活動 【指導事項】 【共通事項に係る要素】	評価の 観点	評価 方法
1	◆「越天楽今様」を聴き、聴こえてくる音や音楽に気付く。	・「越天楽今様（歌、ピアノ）」を聴き、教師の歌声やピアノの音色などの音や音楽に気付く、表情や身振りで表現する。 【鑑賞ア（イ）】〔音色、旋律〕	・知 （鑑賞） ・学 （表現・鑑賞）	観察
2	◆「越天楽今様」を聴き、聴こえてくる音や音楽に気付く。 ◆「平調越殿楽」を聴き、聴こえてくる音色に気付く。	・「越天楽今様（歌、ピアノ、鉄琴、打楽器）」を聴き、歌声や楽器の音色などの音や音楽に気付く、表情や身振りで表現する。 【鑑賞ア（イ）】〔音色、リズム、旋律、音の重なり〕 ・「平調越殿楽」を聴き、聴こえてくる和楽器の音や音色などの音や音楽に気付く、表情や身振りで表現する。 【鑑賞ア（イ）】〔音色、リズム、旋律、音の重なり〕	・知 （鑑賞） ・学 （表現・鑑賞）	観察
2	◆自分なり楽器を鳴らし、聴こえてくる音や音楽に気付く。 ◆自分なりの表し方によって、楽器の音を出す。	・自分なりに楽器を鳴らし、表現を楽しみながら、聴こえてくる音や音楽に気付く。 【表現ア（イ）】〔音色、リズム、旋律、音の重なり〕 ・自分から楽器を鳴らしたり、教師と一緒に楽器を鳴らしたりする。 【表現ア（ウ）④】〔音色、リズム、旋律、音の重なり〕	・知技 （表現） ・思 （表現） ・学 （表現・鑑賞）	観察 演奏
2 本時 （1/ 2）	◆表したい思いをもち、音や音楽を感じて自分なりに楽器の音を出す。	・楽器の音や聴こえてくる音、音楽を感じたり、自分なりの思いをもって楽器の音を出したりする。 【表現ア（ウ）④】【鑑賞ア（イ）】〔音色、リズム、旋律、音の重なり〕	・技（表現） ・思 （表現） ・学 （表現・鑑賞）	観察 演奏

3 本時について

(1) 本時の目標

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
技 音や音楽を感じて楽器の音を出す技能を身につける。 (表現)	思 表現したり、聴こえてきたりする音や音楽を聴き取り(感じ取り)、良さや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、自分なりに楽器を鳴らしたいという思いをもつ。(表現)	学 表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に表現の活動に取り組む。(表現・鑑賞)

(2) 本時の評価基準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
技 音や音楽を感じて楽器の音を出す技能を身につけている。(表現)	思 表現したり、聴こえてきたりする音や音楽を聴き取り(感じ取り)、良さや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、自分なりに楽器を鳴らしたいという思いをもっている。(表現)	学 表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に表現の活動に取り組もうとしている。(表現・鑑賞)

(3) 生徒の実態と目標

※ABCは演奏グループ

氏名 (学年)	生徒の実態	目標	指導・支援の手立て
① (1年) B	・音や音楽が流れると、笑顔や険しい表情を見せる。 ・楽器が手に触れると、手を動かして音を鳴らす様子がみられる。 ・呼名に応じたり、あいさつにあわせ、礼をしたりできる。 《聞くこと》スコア6 《見ること》スコア8 《運動・動作》スコア6	・技・思音や音楽を感じて、表したい思いをもち、自分なりに紐鈴を鳴らすことができる。 ・学表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に表現の活動に取り組む。	・実態に応じた楽器を用意する。 ・楽器を鳴らした時に教師が応答し、称賛することで表したい思いにつなげる。 ・歌唱につながる学習や鑑賞を通して、音や音楽への興味につなげる。 ・進んで活動できるよう楽器の配置を工夫したり、自分の番を意識できるよう近くで職員が呼名したりする。

② (1年) A	・音や音楽を聴き、笑顔になったり、口を開けて表現したりできる。 ・手を伸ばしたり、振ったりして楽器を鳴らすことができる。 ・自分の番が分かり、進んで活動に取り組もうとする。 《聞くこと》スコア 24 《見ること》スコア 18 《運動・動作》スコア 8	・技・思音や音楽を聴き、表したい思いをもち、柄付きの鈴、iPad を鳴らすことができる。 ・学表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に表現の活動に取り組む。	・実態に応じた楽器を用意したり、主体的な表現につなげるため iPad を取り入れたりする。 ・楽器を鳴らした時に教師が応答し、称賛することで表したい思いにつなげる。 ・歌唱につながる学習や鑑賞を通して、音や音楽への興味につなげる。 ・主体的に活動できるように、担当する楽器を伝え、音を鳴らして確認したり、仲間の演奏を聴き合い、合奏することを意識したりできるようにする。
③ (1年) B	・音や音楽を聴くと笑顔がみられる。 ・ばちをもって提示された楽器をたたいたり、鈴を振って音を出したりすることができる。 ・近くで呼名すると反応し、職員に顔を向けることができる。 《聞くこと》スコア 4 《見ること》スコア 8 《運動・動作》スコア 8	・技・思音や音楽を感じて、表したい思いをもち、自分なりにサウンドシェイプを鳴らすことができる。 ・学表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に表現の活動に取り組む。	・実態に応じた楽器を用意し、提示の仕方を工夫する。 ・楽器を鳴らした時に教師が応答し、称賛することで表したい思いにつなげる。 ・歌唱につながる学習や鑑賞を通して、音や音楽への興味につなげる。 ・進んで活動できるように楽器の提示の仕方を工夫したり、自分の番を意識できるように近くで職員が呼名したりする。
④ (1年) B	・音や音楽が流れると集中して聴いたり、笑顔を見せたりする。	・技・思音や音楽を感じて、表したい思いをもち、自分なりにサウンドシェイプを鳴らすことができる。	・実態に応じた楽器を用意する。

	・楽器を持つと、進んで鳴らそうとする。 ・近くで呼名すると反応し、職員に顔を向けることができる。 《聞くこと》スコア 4 《見ること》スコア 4 《運動・動作》スコア 4	ち、自分なりに鈴を鳴らすことができる。 ・学表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に表現の活動に取り組む。	・楽器を鳴らした時に教師が応答し、称賛することで表したい思いにつなげる。 ・歌唱につながる学習や鑑賞を通して、音や音楽への興味につなげる。 ・進んで活動できるよう「鈴を鳴らそう」と声掛けしたり、自分の番を意識できるように近くで職員が呼名したりする。
⑤ (2年) B	・音や音楽が流れると、じっと聴き入ったり、笑顔を見せたりする。 ・楽器を提示すると進んで鳴らす様子が見られることもある。 ・周りの雰囲気を感じとり、表情を和らげることができる。 《聞くこと》スコア 4 《見ること》スコア 4 《運動・動作》スコア 4	・技・思音や音楽を感じて、表したい思いをもち、自分なりにサウンドシェイプを鳴らすことができる。 ・学表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に表現の活動に取り組む。	・実態に応じた楽器を用意する。 ・楽器を鳴らした時に教師が応答し、称賛することで表したい思いにつなげる。 ・歌唱につながる学習や鑑賞を通して、音や音楽への興味につなげる。 ・進んで活動できるよう楽器の提示の仕方を工夫したり、自分の番を意識できるように近くで職員が呼名したりする。

⑥ (2年) C	・音や音楽が流れると、周りをきょろきょろと見る。 ・手の拘縮や緊張がみられるため、握って楽器を持ったり、手を動かして音を鳴らしたりすることは難しい。 ・呼名に反応したり、仲間の様子を見たりすることができる。 《聞くこと》スコア 4 《見ること》スコア 4 《運動・動作》スコア 1	・技・思音や音楽を感じて、表したい思いをもち、教師と一緒に当り鉦を鳴らすことができる。 ・学表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に表現の活動に取り組む。	・実態に応じた楽器を用意し、ばちに補助具を付ける。 ・教師と一緒に音楽に合わせて演奏することで心地よさを感じられるようにし、表したい思いにつなげる。 ・歌唱につながる学習や鑑賞を通して、音や音楽への興味につなげる。 ・表現する心地よさを感じられるように、教師が拍に合わせて楽器を鳴らしたり、仲間を意識できるように演奏順に呼名したりする。
⑦ (2年) C	・入眠していることが多いが、耳元でのささやきや、大きな音に反応することがある。 ・音や音楽を聴いて、表情が変わることはあまり見られない。 ・手の拘縮や緊張が見られるため、握って楽器を持ったり、手を動かして音を鳴らしたりすることは難しい。 《聞くこと》スコア 1 《見ること》測定不能 《運動・動作》スコア 1	・技・思音や音楽を感じて、教師と一緒にカウベルを鳴らすことができる。 ・学表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に表現の活動に取り組む。	・実態に応じた楽器を用意し、ばちに補助具を付ける。 ・教師と一緒に音楽に合わせて演奏することで心地よさを感じられるようにし、表したい思いにつなげる。 ・歌唱につながる学習や鑑賞を通して、音や音楽への興味につなげる。 ・表現する心地よさを感じられるように、教師が拍に合わせて楽器を鳴らしたり、周りの雰囲気を感じ取れるように演奏順に呼名したりする。

⑧ (2年) C	・音や音楽を聴いて笑顔を見せる。 ・握る力や手を上下したりする力が弱く、自分で楽器を鳴らすことは難しい。 ・呼名に表情で応じたり、集団での学習を楽しんだりできる。 《聞くこと》スコア1 《見ること》スコア1 《運動・動作》スコア1	・技・思音や音楽を感じて、表したい思いをもち、教師と一緒にコンガを鳴らすことができる。 ・学表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に表現の活動に取り組む。	・実態に応じた楽器を用意し、ばちに補助具を付ける。 ・教師と一緒に音楽に合わせて演奏することで心地よさを感じられるようにし、表したい思いにつなげる。 ・歌唱につながる学習や鑑賞を通して、音や音楽への興味につなげる。 ・表現する心地よさを感じられるように、教師が拍に合わせて楽器を鳴らしたり、周りの雰囲気を感じ取れるように演奏順に呼名したりする。
⑨ (3年) C	・音や音楽に気付き、顔を左右に動かしたり、目をきょろきょろさせたりする。 ・手の拘縮が見られ、手を動かして、音を鳴らすことは難しい。 ・呼名されると呼ばれていることが分かる。 《聞くこと》スコア4 《見ること》測定不能 《運動・動作》スコア1	・技・思音や音楽を感じて、表したい思いをもち、教師と一緒にパドルドラムを鳴らすことができる。 ・学表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に表現の活動に取り組む。	・実態に応じた楽器を用意する。 ・教師と一緒に音楽に合わせて演奏することで心地よさを感じられるようにし、表したい思いにつなげる。 ・歌唱につながる学習や鑑賞を通して、音や音楽への興味につなげる。 ・演奏順に呼名し、自分の番を意識したり、仲間が楽器を鳴らしていることを感じられたりするようにする。
⑩ (3年) B	・音や音楽が流れると笑顔で体を動かしたり、声を出したりする。聴ききれない音楽では不快な表情を示す。	・技・思音や音楽を感じて、表したい思いをもち、自分なりにタンバリンを鳴らすことができる。	・実態に応じた楽器を用意し、提示の仕方を工夫する。 ・楽器を鳴らした時に教師が応答し、称賛する。

	・手を動かして楽器を鳴らすことができる。 ・呼名されると、感じとっている様子が見られる。 《聞くこと》スコア 4 《見ること》測定不能 《運動・動作》スコア 2	・学表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に表現の活動に取り組む。	ることで表したい思いにつながる。 ・歌唱につながる学習や鑑賞を通して、音や音楽への興味につなげる。 ・進んで活動できるように楽器の提示の仕方を工夫する。 ・演奏順に呼名し、自分の番を意識したり、仲間が楽器を鳴らしていることを感じられたりするようにする。
⑪ (3年) B	・音や音楽が流れると、じっと聴き入ったり、笑顔を見せたりする。 ・楽器の奏法を理解しているが、身体の緊張により音を鳴らすまでに時間がかかったり、思うように楽器を鳴らせなかったりする。 ・自分の順番が分かり進んで活動したり、仲間を意識して活動に取り組んだりすることができる。 《聞くこと》スコア 12 《見ること》スコア 4 《運動・動作》スコア 4	・技・思音や音楽を聴き取り、表したい思いをもち、ツリーチャイムやVOCAを鳴らすことができる。 ・学表現したり、聴こえてきたりする音や音楽に興味をもち、教師や仲間と一緒に音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に表現の活動に取り組む。	・実態に応じた楽器を用意したり、主体的な表現につなげるためVOCAを取り入れたりする。 ・視野が狭いため、楽器の配置を工夫する。 ・楽器を鳴らした時に教師が応答し、称賛することで表したい思いにつながる。 ・歌唱につながる学習や鑑賞を通して、音や音楽への興味につなげる。 ・主体的に活動できるように、担当する楽器を伝え、音を鳴らして確認したり、仲間の演奏を聴き合い、合奏することを意識したりできるようにする。

※《学習到達度チェックリストの項目》スコア（獲得年齢ヵ月）

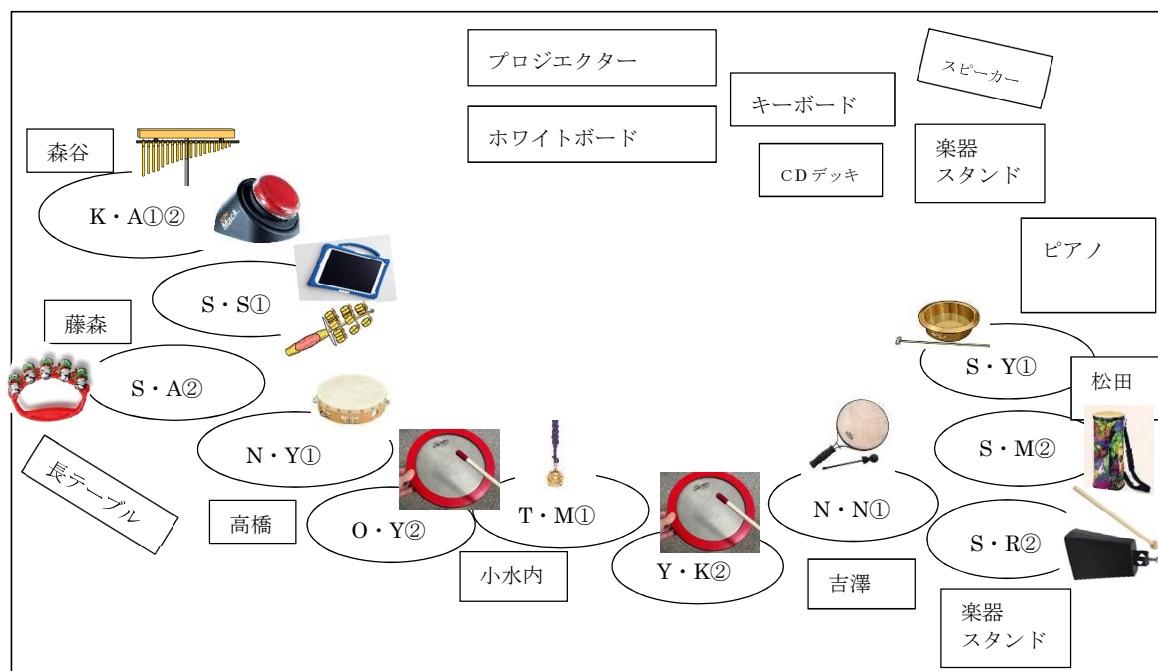
(4) 本時の展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点・生徒への配慮等	評価の観点	評価の方法	教材・教具等
導入 5分	1 あいさつ ・当番が前にでてあいさつを行う。	・一人一人の表情を見て、体調や音楽への反応を確認し、必要に応じて声掛けする。	学	・観察 (表情や身体表現など)	・歌詞 ・学習カード ・目標
	2 はじまりのうた「緑の風になれ」 ・伴奏に合わせて、教師と一緒に歌う。	・はじまりを意識できるように、合いの手「チャチャチャ」を入れるように声掛けし、明るい雰囲気始める。 ・一人一人の表情や身体の動きなどの表出を確認する。			
展開 30分	3 今日の予定 ・今日の学習について確認する。	・目標についてカードを提示し、確認する。	学	・観察 (表情や身体表現など)	・歌詞 ・CDデッキ ・CD ・サウンドシェイプ ・鈴 ・歌詞 ・コンガ ・柄付き鈴
	4 こんげつのうた ①「ラヴァーズコンチェルト」 ・CDに合わせて教師と一緒に歌う。	・「越天楽」について歌や鑑賞の学習を通して音や音楽を感じたり、親しんだりしてから、器楽合奏をすること説明する。			
展開 30分	②「越天楽今様」 ・ピアノ伴奏に合わせて、教師と一緒に歌う ・伴奏にリズム楽器を入れて教師と一緒に歌う。	・一人一人の表情や身体の動きなどの表出を見ながら、表出できている事柄について称賛しながら進める。 ・1番を歌ってみる。 ・歌詞にある言葉について、簡単に説明し、興味をもち、楽しい気持ちで取り組めるようにする。 ・1番は歌い、2番は英語の歌詞のため鑑賞とし、職員が楽器を入れる。	学	・観察 (表情や身体表現など) ・観察 (表情や身体表現など) ・表出 ・観察 (表情や	
		・歌詞カードを提示し、「平調越殿楽」の旋律に歌を付けた歌曲であることにふれ、興味をもてるようにする。 ・伴奏に楽器が入ることを話し、興味をもてるようにする。 ・伴奏楽器を入れ、音や音楽に気付いたり、感じたりできるようにする。 ・どんな楽器が入っていたか問いかける。			

	5 かんしょう ・「平調 越殿 楽」 6 がっき ・一人ずつ担当 楽器を確認し、音を鳴らす。 「越殿楽幻想 曲」 ・合奏する。	・いろいろな楽器の音が聴こえてくることを説明する。 ・一人一人の表情を観察する。 ・グループごとに担当する楽器についてスライドを見て確認し、一人ずつ音を出してみるように声掛けし、表現につなげる。 ・音が聞こえた時には、奏法や音色について具体的に称賛する。 ・合奏では、生徒一人一人の表現を丁寧に見取り、声掛けや伴奏のタイミングをはかって音楽を進行する。	技 思 学	身体表現 など) ・演奏	・スライ ド ・生徒担 当楽器
ま と め 5 分	7 まとめ 8 おわりのう た 「リズムおわり のうた」 ・伴奏に合わせて教師と一緒に歌う。 9 あいさつ ・当番が前に出てあいさつを行う。	・目標についてまとめを行い、活動を称賛する。 ・学習のまとめをし、おわりのうたにつなげる。 ・一人一人の表情を見て、体調や音楽への反応を確認し、必要に応じて声掛けする。			・歌詞

(5) 配置図

※①、②は合奏の演奏順



(6) 板書計画

ホワイトボード表面	ホワイトボード裏面
歌詞カード ・緑の風になれ ・ラヴァーズコンチェルト 本時の学習：音や音楽を感じて楽器を鳴らそう はじまりのうた こんげつのうた かんしょう がっき おわりのうた	越天楽今様 歌詞カード

高等部Ⅲグループ体育学習指導案

日 時：令和4年9月2日（金）5校時

場 所：プレイルーム

対象生徒：2年3組（女子2名）

1年3組（男子2名）

1年4組（男子1名、女子1名）

計6名

指 導 者：柴内光輝（MT） 佐間山智（ST1）

高橋淳子（ST2） 佐藤あゆみ（ST3）

青柳チカ（ST4） 千葉文子（ST5）

1 題材名「モルック大会をしよう」

2 題材について

（1）題材について

「モルック大会の練習をしよう」は、9月26日（月）に行われる高等部のモルック大会に向けての競技を練習する題材である。競技種目「モルック」の概要は、競技者が投げる木製の棒（以下モルック）を3mから4m離れた位置にある1から12の数字の書いた木製のピン（以下スキttl）に当て、倒れたスキttlの本数や数字に応じて得点を積み重ね、ジャスト50点になったほうの勝ちというフィンランド生まれの手軽に楽しめるスポーツである。

本題材では、モルックを肢体不自由児でも取り組むことができるように「となん式モルック」として授業を進める。変更点は以下のとおりである。

- ・競技者が投げるモルックは、投球台に載せたボールを使用することができる。
- ・スキttlの位置は2mの位置に置く。
- ・スキttlの数字は1から10までにする。
- ・得点は30点までとする。
- ・3回連続で得点なしの場合は、0点に戻る。（本来のルールでは失格となり負け）
- ・1試合15分とする。

今回の学習内容は、学習指導要領知的障害である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科小学部体育科の「E ボール遊び」の第一段階の内容である。

生徒は、今回の学習活動を通して、投球台の上にあるボールを押し出して転がす、投球台の上にあるボールについた紐を引っ張ることで転がす、テーブルに載せたボールを押し出し転がすなど、生徒ができる精一杯の活動を引き出したいと考える。

また、小集団での学習活動による仲間や教師と一緒に競い合う楽しさを味わったり、大集団での学習活動でしか味わえない雰囲気を感じたりしながら、楽しく活動してほしいと考えた。

はじめは小集団での活動を中心に経験を重ね、最終的には高等部全員の大集団の中

で活動を行うように設定することで、モルックを通して協働的な学びを深めることができる考えた。

(2) 生徒について

高等部の自立活動を主とする教育課程の生徒は、男子3名、女子3名、計6名である。生徒の実態は、知的障害と肢体不自由を併せもつ重複障害であり、全員、車椅子を全介助で使用している。また、経管栄養や痰の吸引等の医療的ケアが必要な生徒、緊張が強い生徒など、授業中に配慮が必要である。

身体面については、自分からボールに手を伸ばしてボールを転がすことができる生徒、教師の支援を受けながら紐やボールを持つ生徒などその実態は様々である。また、コミュニケーション面については、教師の声掛けに応じて視線を向ける生徒、発声で気持ちを表現する生徒、身振り手振りで感情を表現する生徒、仲間や教師の活動の様子に自分から視線を向ける生徒、集団の雰囲気を感じて表情に表す生徒などである。

学習到達度チェックリスト 2019 (福岡大学教授 徳永豊氏) による生徒たちの実態は、《聞くこと》スコア2～8、《見ること》スコア2～6、《運動・動作》スコア1～6となっている。そのため、それぞれの発達段階に応じた支援が必要となる。

(3) 指導にあたって

指導にあたっては、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に基づいた目標を設定して進める。この目標の達成により、「協働的な学び」につながるように、学習活動を展開していきたい。また、目標設定にあたっては、学習到達度チェックリストを活用し、「スコア」を把握し、生徒が次の「内容段階」に至るためにはどのような力を育むことが必要であるかを検討して進めていく。

本グループの生徒における「協働的な学び」とは、本校の「キャリア教育学習プログラム－自立活動を主とする教育課程－」を踏まえて、総合生活力の中の「友だちに気づく」「身近な人に感情を表す」、人生設計力の「身近な人に関心をもつ」「楽しんで活動に取り組む」ことと捉え、授業においては、「友達の活動の様子を意識し視線を向けたり、集団活動の雰囲気を感じたりすること」「教師と一緒に楽しみながら競技に取り組むこと」を目標として、取り組むこととした。

本題材では、それぞれの生徒の実態に合わせた競技への取り組み方の工夫を行うことで、生徒が自分から活動に取り組み、自分の力を発揮できるようなできる状況づくりを行っていききたい。また、生徒が友達の活動の様子を意識し、視線を向けたり集団活動の雰囲気を感じたりできるように、働き掛けの工夫を行っていききたい。

(4) 題材の目標

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
—知識— ○モルック大会について、動画を見たり説明を聞いたりして知る。	—思考— ○1対1、小集団、大集団の試合の雰囲気を経験する。感じる。	—態度— ○目や首を動かすことができる。 ○ボールを見て、触れたり

—技能— ○教師と一緒に、モルックに実際に触れる。	—判断— ○投球台を使って、ボールを動かすことができる。 —表現— ○モルックを教師と一緒に楽しむことができる。	手を伸ばしたりすることができる。 ○モルックをする雰囲気を楽しむことができる。
---	--	---

(5) 題材の評価基準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
—知識— ○モルック大会について、動画を見たり説明を本人なりに聞いたりしている。 —技能— ○教師と一緒に、モルックに実際に触れている。	—思考— ○1対1、小集団、大集団の試合の雰囲気を経験し、感じている。 —判断— ○投球台を使って、ボールを動かしている。 —表現— ○モルックを教師と一緒に楽しんでいる。	○目や首を動かそうとしている。 ○ボールを見て、触れたり手を伸ばしたりしようとしている。 ○モルックをする雰囲気を楽しもうとしている。

(6) 指導と評価の計画

時数	学習内容	学習活動 【指導事項】〔共通事項に係る要素〕	評価 の観 点	評価 方法
1 8/19	事前学習 ・モルック大会について知る。 ・競技について知る。	○事前学習 ・高等部の昨年度に行ったモルック大会の動画等を見たり聞いたりして、大会の様子を知る。 ・教師からの説明や映像を見て、モルックを知る。 ・実際にモルックに触れる。	知識 技能	観察 ・視線 ・表情 ・手の動き ・身体動作
4 8/22 8/24 8/26 8/31	モルックの練習をしよう ・1対1の練習試合を経験する。 ・友達の動きを見たり、小集団の活動を体験したりする。	○モルックをしよう1 ・1対1の練習試合をする。 ・友達の動きを見たり、小集団での学習の楽しい雰囲気を感じたりする。	思考 判断 表現 態度	観察 ・視線 ・表情 ・手の動き ・身体動作
8	モルック大会に向け	○モルックをしよう2	思考	観察

9/2(本時)、 9/5、7、9、 12、9/14、 16、21	た練習をしよう ・ 3 対 3 の練習試合 を経験する。	・ 3 対 3 の練習試合をする。	判断 表現 態度	・ 視線 ・ 表情 ・ 手の動き ・ 身体動作
4 9/26	モルック大会 (高等部全員) ・ 大集団での活動を経験する。 ・ モルックを行う。	○モルック大会に参加しよう ・ モルック大会を経験する。 ・ 大集団での学習の雰囲気を感じる。	思考 判断 表現 態度	観察 ・ 視線 ・ 表情 ・ 手の動き ・ 身体動作
1 9/28	事後学習 ・ 写真で振り返りを行う。 ・ 授業での個人成績を表彰する。	○事後学習 ・ 教師からの説明や映像を見て、モルック大会の振り返りを行う。 ・ 個人成績を発表し、表彰式を行う。	知識 表現 態度	観察 ・ 視線 ・ 表情 ・ 手の動き ・ 身体動作

4 本時の指導

(1) 本時の学習 「モルック大会に向けた練習をしよう④」

(2) 本時の目標

- ・投球台の上にあるボールを触って転がす、紐を引っ張って投球台の上にあるボールを転がす、テーブルにおいたボールを押出しして転がす、教師と一緒にボールを転がすなど、それぞれの生徒に合わせた投球方法で活動に取り組むことができる。

(知識及び技能)

- ・仲間の活動の様子に目を向け、集団学習の楽しさを表現することができる。

(思考力、判断力、表現力等)

- ・簡単な合図や指示に従うことができる。

(学びに向かう力・人間性等)

(3) 生徒の実態と目標

氏名 (学年)	生徒の実態	目標	指導・支援の手立て	評価規準
① (2年)	・呼名に反応し、しぐさ等で応じることができるが増えてきている。 ・自分から興味があるものに対して近づいて見ることが増えてきている。 ・与えられたものを握ってつかむことができる。 【スコア】 聞くこと 8 見ること 2 運動・動作 6	・判自分の順番になったときに、転がそうとする意欲を見せることができる。 ・学声掛けを受けて、タイミングよく転がすことができる。	・自分の順番になったら呼名する。投球台の前では、ボールに手を伸ばし、目を向けるように声を掛ける。 ・タイミング良くスキットルに向けて転がせた時は、称賛の声掛けをして強化する。	・判投球台を使って、ボールを動かしている。 ・学ボールを見て、ふれたり手を伸ばそうとしている。
② (2年)	・親しい人から声を掛けられると笑うことが増えてきた。 ・指示されたものをつかんで引っ張ることができるようになってきた。 【スコア】 聞くこと 4 見ること 4 運動・動作 6	・判投球台に置いてあるボールをひもを引っ張ることで転がすことができる。 ・学転がるボールに目を向けることができる。	・手首にリストバンドとカラビナをつけ、腕全体を大きく動かすことでボールを転がす。 ・鈴の入った音の出るボールを使用するとともに、ボールが転がり始めたら、ボールに目を向けるように声掛けをする。	・判投球台を使って、ボールを動かしている。 ・学ボールに目を向けようとしている。

③ (1年)	- 慣れたものであれば自分から手を伸ばして触ろうとする。 - 興味があれば、短時間見続けることができる。 【スコア】 聞くこと 6 見ること 6 運動・動作 4	- 判投球台のボールをしっかりと見て、自ら押し転がすことができる。 - 学対象となるものに目を向けることができる。	- ボールをスキットルに向けて転がせたときは、称賛の声掛けをして強化する。 - ボールに注目するような声掛けをする。	- 判投球台を使って、ボールを転がしている。 - 学ボールを見て、触れたり手を伸ばそうとしている。
④ (1年)	- 興味関心があるものに手を伸ばすことができる。 - 注視し続けることが難しいため、手元がおろそかになってしまう。 【スコア】 聞くこと 4 見ること 6 運動・動作 4	- 判投球台のボールを自ら押し出すことができる。 - 学対象となるものに目を向けることができる。	- 腕の可動域を考慮し、対象物に対する体の向きを調整する。 - ボールに目を向けるような声を掛け、手を伸ばすきっかけを作る（手を伸ばすようにならなす）。	- 判投球台を使って、ボールを動かしている。 - 学ボールを見て、ふれたり手を伸ばそうとしている。
⑤ (1年)	- 関心があるものに視線を向けることができる。 - 動くものを目で追うことができる。 【スコア】 聞くこと 2 見ること 4 運動・動作 1	- 学ボールへのタッチや、スキットルが倒れた音に対して、表情で反応を示すことができる。 - 学転がるボールを目で追うことができる。	- モルックの代わりに、音が鳴るサッカーボールを使用する。 - スキットルに鈴を取り付け、倒れた時の音を伝わりやすくする。	- 学試合の雰囲気を経験し、感じようとしている。 - 学目や首を動かそうとしている。
⑥ (1年)	- 肩の可動域が広く、腕を上、横、下に動かすことができる。 - 関心があるものに対して、視線を向けたり、手を伸ばしてつかむ。 - 音や動きがある方向へ視線を向けることができる。 【スコア】 聞くこと 4 見ること 6 運動・動作 4	- 学ボールを注視することができる。 - 判投球台のボールに手を伸ばすことができる。	- 対象物（ボール）に意識が向くような装飾をする。 - 腕の可動域を考慮し、手を伸ばしやすいように、対象物に対する体の向きを調整する。	- 学目や首を動かそうとしている。 - 判投球台を使って、ボールを動かそうとしている。

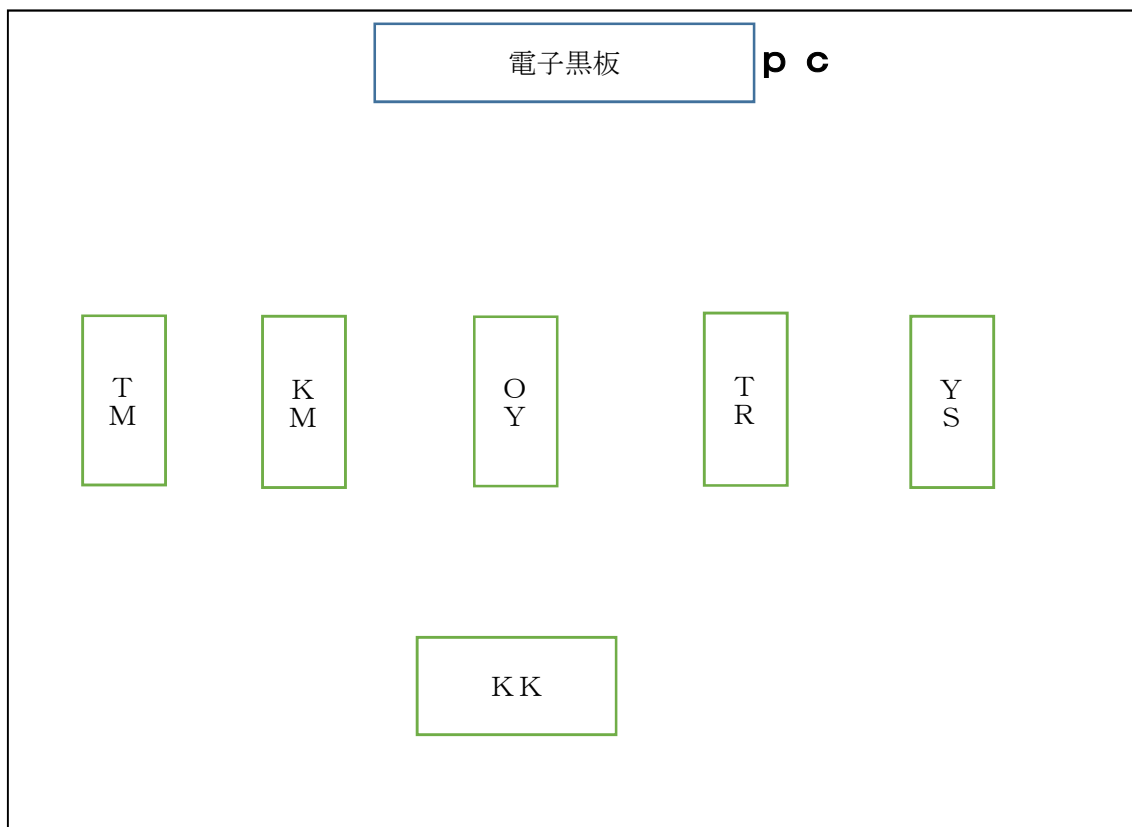
(4) 本時の展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点・生徒への配慮等	○評価の視点 ◎評価の方法	教材・ 教具等
導入 5分	1 あいさつ 2 本時の学習内容を 確認	・輪番制で挨拶をする。 ・本時の活動内容を説明する。		・電子黒板 ・パソコン
展開 35分	床へ移乗 3 準備体操 クールダウン 車椅子へ移乗 4 チーム編成抽選 5 練習試合（3対 3）	- 比較的動きの少ない生徒から順番に床に移乗する。 - 支援体制が整ったことを確認してからふれあい体操を開始する。 5分間のびのびと過ごせるように、見守りの支援のみとする。 - 比較的動きの多い生徒から順番に車椅子に移乗する。 - iPad の抽選アプリを使い、チーム編成を行う。 - 先行のチームから順番に生徒にあった投球方法で試合を進める。 - 自分がプレイしているとき以外もコートに視線が行くように MT が活動の雰囲気盛り上げる。	[技]それぞれの生徒の実態に合わせて、ボールを転がしているか。 ◎観察 [表]友達の方に視線を向け、集団活動の楽しさを表現することができるか。 ◎観察 [学]簡単な合図や指示に従うことができるか。 ◎観察	- iPad - Bluetoothスピーカー - マットレス×3 - 青マット×6 - 各自必要な補助寝具 - iPad - 電子黒板 - モルックセット - バスケットボール - 投球台 - ボッチャのボール - ボッチャの投球台 - 電子黒板 - iPad

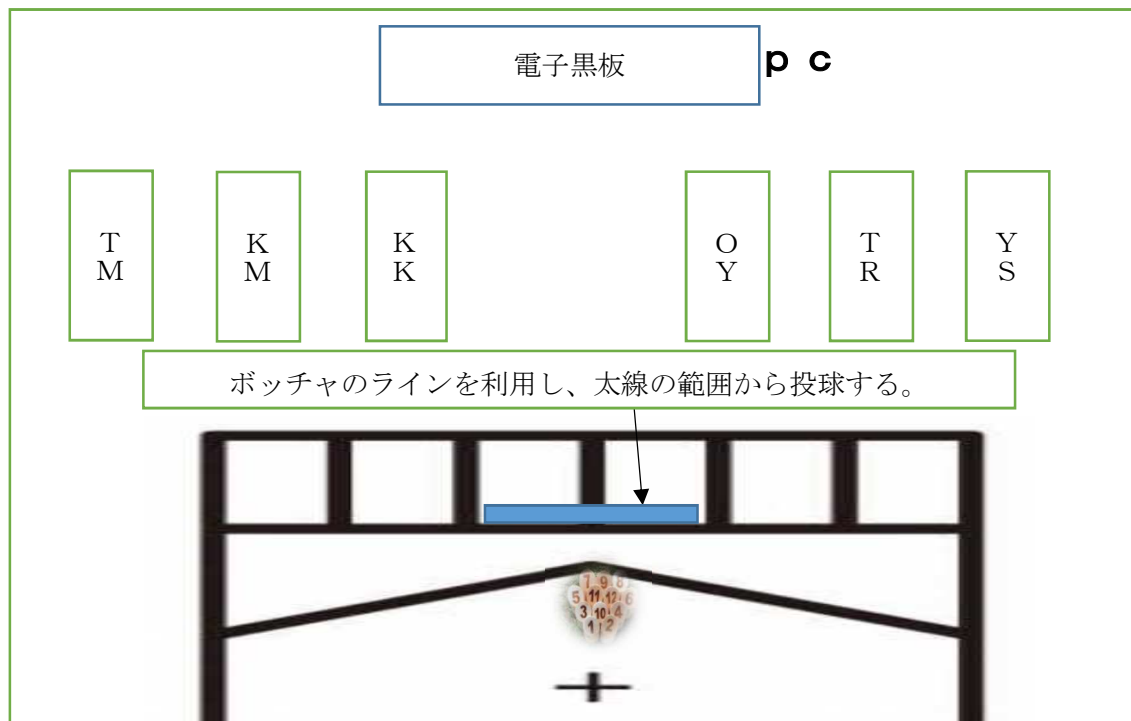
ま と め 10 分	6 結果発表 ・ 個人得点と練習試合の結果を発表する。 7 おわりのあいさつ	・ MT が練習試合結果を発表する。 また、個人得点も合わせて発表する。 ・ ST1～ST5 に個々の生徒の頑張った点や、みんなに伝えたい点を簡潔に発表してもらう。 ・ 輪番制で挨拶をする。		
----------------------------	--	--	--	--

(5) 準備体操時の配置図 (プレイルーム)

音楽室側



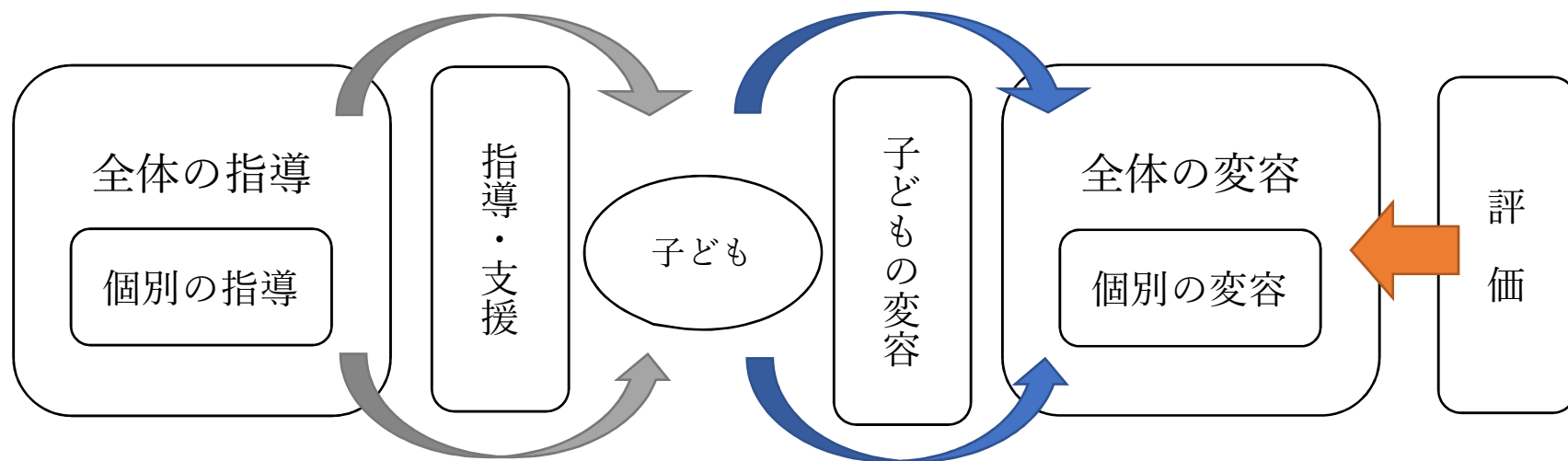
(6) モルック練習試合の配置図 (プレイルーム)
音楽室側



(7) 板書計画

- ・得点表示と記録を兼ねて、パソコン (MOUSE) と電子黒板を使用する。

キーワード：教師と一緒に、集団活動の雰囲気を感じる、友達の活動に注意を向ける



第Ⅳグループ：訪問教育部つばさ 研究テーマ「学びをつなぐ教材教具」

1. 昨年度の成果と課題

昨年度の成果は実態シート（生徒の実態や個別の指導計画の目標を反映させたもの、授業の目標や評価を記入する）を作成・活用することで、みちのく療育園メディカルセンター高等部の授業において教師間の生徒の捉えが共有しやすくなったことである。それによって、指導の個別化がより明確になり、支援や手立てを一人一人に合わせて工夫することができた。

また、課題については年間を通じて計画的に複数訪問を実施していくことや、みちのく療育園メディカルセンター高等部以外の授業を動画に撮影し見合うことが挙げられた。児童生徒の見取りを複数で共有し、複数訪問の教育的効果をより高めていきながら、研究を進めていくこととした。

2. 訪問つばさの取り組み

今年度の研究では「教材教具」と「協働的な学び」に重点を絞り、取り組んだ。訪問授業においては基本的に教師と児童生徒が1対1であるため、常に学習の個性化・指導の個別化を意識して授業づくりをしており、訪問つばさにおける個別最適な学びは土台として実現しているものだと考えている。その土台である個別最適な学びの上に協働的な学びを位置づけ、訪問つばさにおける協働的な学びをどう捉えるのかを小学部・中学部・高等部の共通項である教材教具から迫った。

今年度小学部は療育センターに入院している児童4名（以下、センター生とする）、在宅生3名が在籍している。基本的な感染対策を行った上で療育センターや家庭と密に連携を取りながら通常授業をこれまで実施することができている。

中学部はセンター生1名が8月より在籍している。週1回の授業から開始し、11月中旬から週2回の授業を実施している。

高等部はみちのく療育園メディカルセンター4名、在宅生1名が在籍している。みちのく療育園メディカルセンターはリモート授業でのスタートとなり、現在も継続している。生徒と対面できたのは1学期に3回と2学期に修学旅行・校外学習を行った1回のみ（1名は医ケアのため実施不可）である。在宅生は週3回のうち2回は在宅での訪問授業、週1回はスクーリングを実施している。

上記のような状況から昨年度の課題である計画的な複数訪問の実施は小学部で行っ

た。実態シートを活用しながら、各児童の誕生会・運動会・ハロウィン・クリスマス会ができた。昨年度同様に T1 は授業の目標が立てやすく、T2 との連携がスムーズになっている。このことから実態シートの有効性が確かめられた。また普段の授業においても週 3 回授業がある児童は 3 回のうち 1 回を担当以外の教師が授業を担当することで、複数の目で児童の様子を見取れるようにした。

そして、今年度より訪問つばさが学部付きになったこと、ポケット wi-fi を契約していただいたこと、みちのく療育園メディカルセンターの授業がリモート授業中心になったことなど様々な要因が重なり、本校とのつながりがさらに強まった一年となった。こうした実践の中から訪問つばさにおける協働的な学びは大きく分けて以下の三点だと捉え、その学びを実現する教材教具の観点を整理した。

【訪問つばさにおける協働的な学び】

- ① できるだけ具体物を取り入れ、五感を使うことができる学び
- ② 本校の児童生徒と同じ学校で学んでいることを実感できる学び
- ③ 問題(課題)をより自分の身近なことだと捉え、その問題について周りの人と関わりながら学ぶこと

【訪問つばさにおける協働的な学びを実現する教材教具の観点】

- ① 所属学部と同じ教材教具
- ② 訪問つばさで学部を超えた共通の教材教具
- ③ 訪問の児童生徒も楽しめる、自分の力でできる教材教具

結果として、小学部全児童がリモート授業を経験することができた。リモート授業以外でも手紙やビデオレター、作品・写真を通じての間接的交流、各行事への間接的な参加またはスクーリングでの参加と、多様な形で訪問つばさにおける協働的な学びに挑戦することができた。

また、高等部においてもリモート授業の中で本校と同じ教材を使用したり、リモートで本校の生徒や教師と関わったりすることで、盛岡となん支援学校で学んでいるという実感をもたせるような授業を実践することができた。これは小学部も同様である。

(資料 1) 実態シート

(資料 2) 教材教具実践例集

(資料 3) みちのく療育園メディカルセンターリモート授業変遷

3. 実践内容

- ・みちのく療育園メディカルセンターリモート授業 高等部1年（資料4）
- ・療育センター授業 小学部1年（資料5）

※岩手大学 柴垣 登先生に指導案と授業動画を見ていただいた。

・研究日の記録

日にち	内容
① 5月11日（水）	3年間の見通し、今年度の見通しを確認
② 6月22日（水）	つばさにおける協働的な学びの検討①（授業の動画を見ながら） 実態シートの活用について
③ 7月13日（水）	つばさにおける協働的な学びの検討② 教材教具の観点を整理
④ 9月12日（月）	中学部 高橋武文先生からの講話 教材教具の情報交換
⑤ 10月26日（水）	教材教具実践例を各自でまとめる
⑥ 11月30日（水）	教材教具実践例を見合う 今年度の研究反省
⑦ 12月14日（水）	研究のまとめ

4. 今年度の成果

訪問つばさとしてリモート授業の実績を残すことができた。そしてリモート授業に限らず、手紙やビデオレター、作品・写真を通じての間接的交流、各行事への間接的な参加またはスクーリングでの参加と、多様な形で訪問つばさにおける協働的な学びを実現することができた。特にみちのく療育園メディカルセンター高等部は手探り状態でリモート授業を開始したが、内容の工夫を重ねていくことでリモートでも生徒が主体的に活動できるようになってきている。

また、教材教具を通してつばさ内での連携、本校との連携をスムーズに行うことができた。それにより授業内容が充実するとともに、それぞれの教師が各児童生徒に合わせた支援や手立てをさらに工夫するきっかけとなった。

最大の成果は、盛岡となん支援学校でみんなと一緒に学んでいるという実感を児童生徒にもたせることができたことである。それは普段よりも覚醒状態が良くなったり、笑顔や目の表情など本人なりの反応が多く見られたりと児童生徒の変化として表れている。

今年度の校内研究によって「つばさにおける協働的な学び」とは授業のねらいや児童生徒の実態に応じて、教師が協働的な学びの要素を選択していく。それらをつなぎ合わ

せながら、授業を組み立てていくことで児童生徒の笑顔や主体的な姿が引き出せる大きな学びになると考える。

5. 次年度への課題

次年度への課題は以下の4点である。

①訪問生同士の関わりも大事にする。

②リモート授業や教材教具は単発のものになりがちだった。

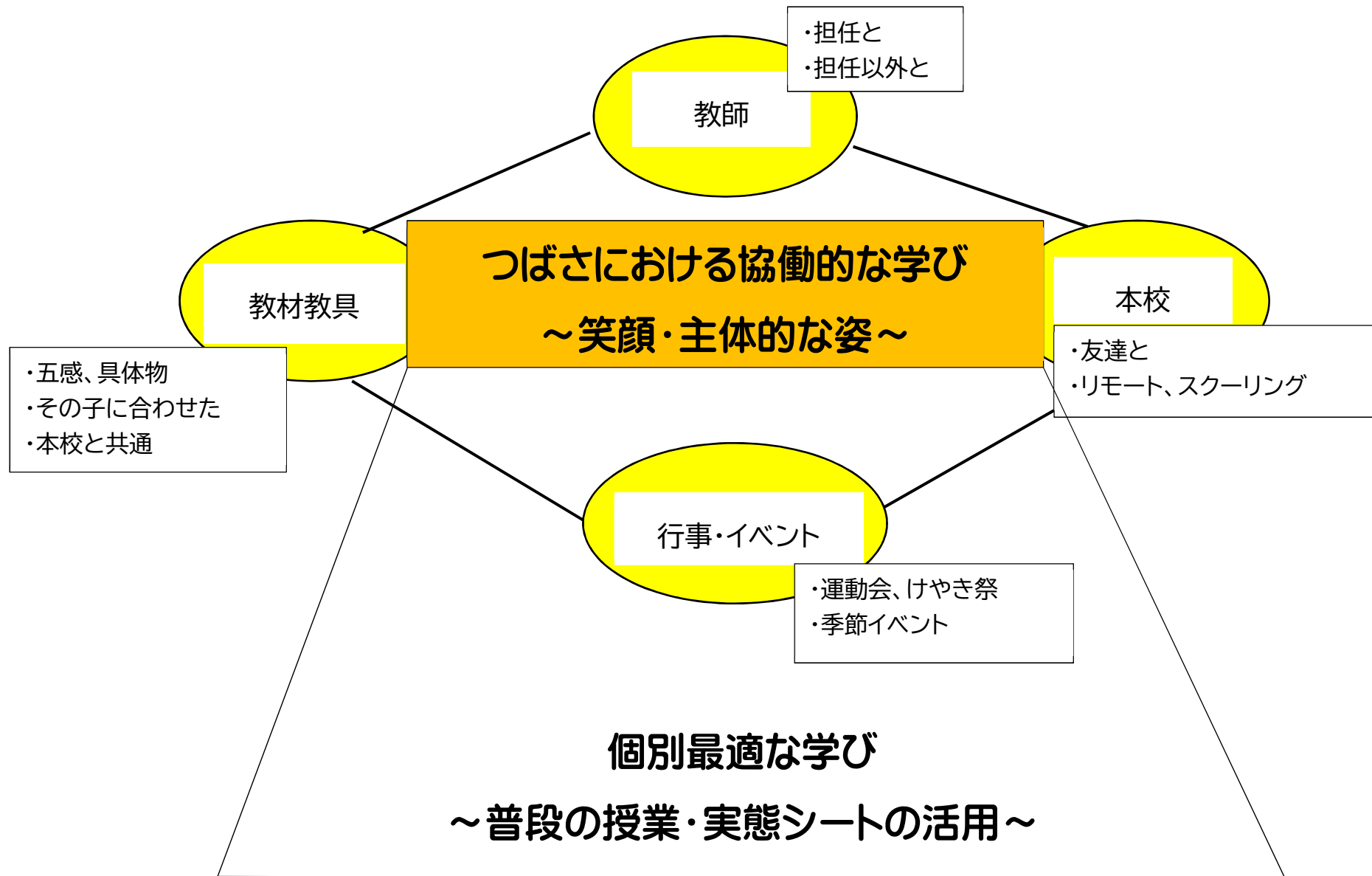
連続性や、単元を通して取り組むことで、さらなる教育的効果を狙えるのではないかな。

③児童生徒の主体的な姿をどう引き出すか

リモート授業においては反応が少ない児童生徒に対してさらなる工夫が必要。

④学校のICT教材活用

訪問生でも楽しめるアプリ（視線入力・ボッチャ）を見つけたり、訪問生でも楽しめるように設定変更したりすることが必要かな。



第Ⅴグループ 訪問教育部 あおぞら・てんくう研究テーマ

復学へつながる支援のあり方

～関係機関との連携をとおして～

1. テーマ設定理由 あおぞら・てんくうにおける「つなぐ」とは

「あおぞら」「てんくう」は、岩手医大に入院中の小学生と中学生を対象に訪問教育を行っている。「あおぞら」は小児科、「てんくう」は児童精神科を訪問して授業を行っており、子どもによって入退院の時期や期間は様々である。授業は医療の指示のもとで行うため、指導方法・教材や学習時間等、個に応じて柔軟に設定している。

児童生徒が退院し、原籍校へ復学した際、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるためにはどのような支援が必要なのか、個に応じた指導の中でみえたものを復学先に“つなぐ”ことができるよう、実態把握の検討、個に合わせた支援内容の検討、申し送り内容の精査等をしていきたい。

2. 研究の重点

- ・協働的な学びの実現に向けた課題と実践内容の明確化
- ・教員との協働的な振り返りで多面的な自己理解を目指す（てんくう）

3. 研究内容

【あおぞら】

「あおぞら」は、重篤な疾病の治療をしていく中、日々変わる児童生徒の心と体の状態を病棟と共有しながら学習を進めている。授業は、担任が全ての教科を担当するのではなく、教科毎に担当者を決め、一人の児童生徒に複数の教師が関わるようにしている。1年次研究では、職員全員で実態把握、目標や指導内容の設定をしたことで、児童生徒の課題に適した活動内容で自立活動の実践を行うことができた。

学習対象となる児童生徒の在籍は、小学校や中学校の通常学級・支援学級、支援学校など様々であり、入院中という環境・条件の中、異なる教育課程、学習内容に対応している。今次の研究では、原籍校が支援学校の生徒を1名抽出し、協働的な学びにつながる学習内容で実践を行った。実践をとおして、「あおぞら」としての協働的な学びの実現に向けた支援方法や課題について検討した。

【てんくう】

1年次研究では、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させる為、教員間での「見立ての共有」、「生徒との学習の振り返り」を実施した。どちらも学習支援に有効であり今次も継続するが、復学先で役立ててもらった見立てのありかたは検討課題となった。また、学習の振り返りでは、生徒の発言から他者視点で考えることの難しさがうかがえたり自分を振り返るつらさから落ち込む生徒が見られたりした。

そこで今次は、復学先へつなげる為の見立て内容と、安心感のある「振り返り学習」の構造について検討した。安心感が保障された環境における教員との振り返りは、協働的・体験的な学びになると考え、児童生徒の「他者視点による自分に気づく力」、教員の「一人ひとりを尊重し理解し受け止める力」に繋げられるよう話し合いを重ねた。

4. 実践

【あおぞら】

本児は、入学式前の緊急入院であった。入学することをとても楽しみにしており、特に「作業学習」を楽しみにしていた。治療が順調に進んで復学するときには、新しい先生や新しい校舎、新しい学習の流れの中に戻ることであり、本人が不安になってしまうことが予想された。そのため、次の2点を重点に学習を進めることとした。

- ・原籍校とのリモート学習や間接的な交流学習
- ・「作業学習」につながる学習

これらを基に、協働的な学びにつながる学習内容を入れながら取り組むこととした。

(1) 原籍校との協働的な学び

ア リモートによる学習

今まで「あおぞら」では、病院管理の遠隔システムを利用して原籍校のホームルームに参加することはあったが、固定カメラのため音が聞こえにくいこともあり、学習に利用したことはなかった。また、治療の影響で髪の毛がなくなるなど、見た目が変わってしまうことからリモートでつなぐことには消極的な児童生徒もあり、子どもの重篤な疾病に対して保護者からのリモートの承諾が得にくい場合もあった。さらに、小中学校によってインターネット環境や使用できるリモートのアプリが異なるため、リモート学習の実現は難しかった。

本児は、原籍校が同じ県立学校のため「Teams」が利用でき、原籍校にも負担なく準備してもらえる環境であった。また、保護者に入学式のリモートを打診したところ、式の様子を見せてあげたいという希望があったため、スタートから取り組んでいくことができた。

リモート学習は、原籍校の行事と本児の治療を考慮して負担がないところで取り組むこととし、退院までに4回のリモートを行うことができた。

入学式	一方的に見るだけの参加を考えていたが、入学式が始まる前に原籍校のクラスメイトや担任と話をすることができた。クラスメイトは知っていたため、うれしそうにしていた。
対面式	原籍校の担任と相談し、新入生紹介の際にリモートで自己紹介を行った。休憩時間には、知っている児童生徒が興味をもって画面の前に来てくれ、自分からも話しかけていた。また、自分から初めて見る先生の名前を尋ねていた。
学級	お互いどのような学習に取り組んでいるのかを写真や作品を見せ合いながら紹介した。また、カメラを持ってもらい、校舎内を見学した。始まる前から楽しみにしており、終了後は「戻って一緒に勉強したい」という前向きな言葉が聞かれた。
休み前発表会	一方的に見る参加となったが、これまでのリモートの中で、1番集中して見ていた。また、終了後、児童生徒が話し掛けてきてくれると、楽しそうに話をしていた。

大きな部屋でのリモートは、マイクで音が上手く拾えないなど課題もあったが、複数回繰り返すうちに、原籍校とのリモートを楽しみに待つ様子がみられるようになった。

イ 復学予定の学級との間接的な交流

これまで「あおぞら」では、原籍校の担任に同じ教材・通信等が届くように依頼し、学校によっては寄せ書きやビデオレターを届けてくれることもあった。また、「あおぞら」からは、原籍校に手紙を書いたり図工や美術などの作品を届けたりしていた。

本児は、長期休み前に復学予定の学級に作品を作って送ることにした。目的ができたことで、自分で選んだアイロンビーズ作品を意欲的に作り上げることができた。送付の際には、写真入りの学習の様子をお知らせする手紙と一緒に同封した。長期休み明けには返事の手紙と作品（プレゼント）が届き、とてもうれしそうにしている様子がみられた。また、原籍校からの写真入りの学級通信を定期的にもらっていたので、学習の様子を楽しそうに見ている様子もみられた。

（２）学習室内の協働的な学び

「あおぞら」で学習する児童生徒は、治療に伴う副作用が見られることが多く、個に応じた学習をすることが多い。また、病状によっては常に無菌病棟内で過ごさなければならないため、学習環境の整った学習室へ登校できることは稀であり、児童生徒同士が協働的に学ぶ機会は限られているのが現状である。

本児は、学習室への登校はほとんどできずにいたが、あまり副作用がなかったため、無菌病棟では継続して学習に取り組むことが可能であった。そのため、「自立活動」の一つの活動として、「アイロンビーズ」作品作りに継続して取り組むこととした。また、作品を商品とし、「職業・家庭」の学習内で金銭の扱いや販売を体験する中で、協働的な学びとして教師や他の児童生徒と関わる場を設定することとした。

本児は、買い物経験はあるが、お店屋さんごっこのような販売経験はないことを保護者から聞いていたため、目標を「販売体験の一連の流れを知り、主体的に活動する」とし、販売前に金銭の種類についての学習と販売の流れの練習を行った。「いらっしやいませ」「ありがとうございます」の受け答えや、商品と金銭の受け渡しの流れを大まかに理解することができた。販売練習時からとても緊張していたが、近くで学習していた児童生徒に客役をしてもらったり、店名を決める際にアドバイスをもらったりしながら学習することができた。

販売当日は無理なく取り組めるよう、学習室の児童生徒や教師など練習から関わった人への販売を想定していたが、本児が病棟内で一緒に入院している未就学児の保護者や病棟スタッフに自ら宣伝を行ったため、急きょ販売する人を決めずに販売することとなった。販売時には店の前に列ができ、本児は忙しいながらも最後まで満足した表情で販売を終えることができた。振り返りシートには「つくるとうるビーズはたのしかったです」と記入することができた。また、買い物に来てくれたお客さんから「ていねいな接客で気持ちよく購入させていただきました。」「ありがとうございます。店員さんのあいさつも接客もていねいでした。」「よかったです。」などのメッセージをいただいたことを聞くと、とても充実した表情をみせていた。

買い物に来た児童生徒からは、自分で選んで買い物できることを楽しみに待っている様子や、事前にどれを買おうか考え、始まる前から列の先頭に並ぶ様子が伺えた。

【てんくう】

(1) 復学先へつなげる為の「見立て」の検討

これまでも復学を見据えた見立ての検討を行ってきたが、引き継ぎや支援会議等では、一対一の学習環境ゆえに取り組めるのではとの捉えもあった。見立てを復学先の環境で役立ててもらうためには、様々な学びの場（小中学校・支援学校・適応支援教室等）に汎用できるものである必要がある。そこで、1年次使用したアセスメントシート（※1）で見立てた課題から、更に教科学習や自立活動の視点で具体的な課題・対応を見立てることにより支援の手立てに活かしてもらえるのではないかと考えた。そこで、指導要領記載の項目を基に課題評価シート（教科・自立活動）を作成した。対象の生徒を決め、観点別の見立てをグループ間で共有し、個別・集団学習や行事等での関わりに活かした。

アセスメントのためのフォーマット

インテイク(情報の整理)	アセスメント(見立て)		プランニング(支援計画策定)
情報 (見たこと、聴いたこと、データなど)	理解・解釈・仮説 (わかったこと、解釈・推測したこと)	支援課題 (支援の必要なこと)	対応・方針 (やろうと思うこと)
家庭 学校 医療 放課後デイ・支援教室 好き(得意)なこと 嫌い(苦手)なこと	生物的事象 (疾患や障害、気候の変わり・偏りなど) 心理的事象 (不安、葛藤、希望、自己感、認知、 内省性、感情統制、防衛機制など) 社会性・対人関係の特徴 環境について		

※1 【資料 アセスメントシート（一部）】

《評価1》

アセスメントを経て対応した後の変容を、自立活動の視点から評価した。

《対応・方針》	1. _____	2. _____	_____
	見立て	支援	経過
1 健康の保持	① 学習スケジュールの理解と言動 ② 学習道具の整理整頓 ③ 体調の自覚、言動 ④ 学習の習慣づけ		
2 心理的な安定	① 落ち着き ② 場に応じた言動 ③ 気持ちの切り替え ④ 自分に合った学習方法で経験の積み重ね		
3 人間関係の形成	① 関わりの積み重ね ② 他者の意図や感情の理解 ③ 自己肯定とルールの中での関わり(フィードバックも) ④ 集団参加(ルール、ふさわしい言動)		

※2 【資料 課題評価シート・自立活動（一部）】

《評価2》

教科学習に取り組む姿の経過（ ）

《対応・方針》		1. _____	2. _____
	見立て	支 援	経 過
国語			
算数・ 数学			
理科			
社会			
英語			
その他			

※2 【資料 課題評価シート・教科（一部）】

(2) 協働的な学習の振り返り

てんくうの児童生徒の協働的な学び（振り返り学習）は、昨年同様、個別学習の中で、節目ごと（①学習開始から1か月後、②長期休業前、③退院前）に振り返りシートを使って実施することや、配慮事項・具体的な関わりを確認した。

ア 配慮事項

特に、①の時期は、教員・児童生徒の関係作りの段階であることから、評価する側・される側ではない共に学習する関係を意識して関わること、また、答えたくない質問は答えなくてもよいことや回答には守秘義務があることを伝え、安心感を保障していくことを共通理解した。

イ 具体的な関わり

様々な背景をもつてんくうの児童生徒にとって、「他者を尊重する」前段階として「自身の存在を認められる」ことが必要であるとの意見が出された。そこで、教員が考えを伝える際には児童生徒の考えを受け止めた上で伝えることにした。また、児童生徒がどのように感じて「そのままのあなたでよいこと」をフィードバックする丁寧な関わりが、児童生徒が自分の内面に向き合い、様々な考えを受け止めようとする気持ちに繋がることを共有した。

復学先に引き継ぐ際、やり取りの具体的なイメージとして役立ててもらえるよう、振り返りシートにメモ欄を追加し、記入することにした。

☆てんくう学習室での学習はどうでしたか？ 今の気持ちを教えてください。
(あてはまる所に○をつけよう)。

1. 先生と 学習することが 楽しい。	1 2 3 4
2. 知りたいことが たくさんある。	1 2 3 4
3. 学校の 学習は 大いに 役に立つと思う。	1 2 3 4
4. 分からないことは 先生に 聞いています。	1 2 3 4
5. 自分の表現方法で 話すことが できる。	1 2 3 4
6. 先生は 話を しっかり 聞いてくれる。	1 2 3 4
7. 先生は 自分のことを よく 解ってくれる。	1 2 3 4
8. 学習をして よかったと 思う。	1 2 3 4

1:よくあてはまる 2:まあまああてはまる
3:あまりあてはまらない 4:まったくあてはまらない

記入日 月 日 氏名

【資料】 振り返りシート (旧)

【学習のふりかえりシート】

記入日 月 日 氏名

てんくう学習室での学習はどうでしたか？ 今の気持ちを教えてください。
(あてはまる数字に○をつけてください)。

質問	
1. 学習することが 楽しい。	4 3 2 1
2. 知りたいことが たくさんある。	4 3 2 1
3. 学習したことは 大いに役に立つと思う。	4 3 2 1
4. 分からないことは 先生に聞いています。	4 3 2 1
5. 自分の考えや気持ちを 伝えることができる。	4 3 2 1
6. 先生は 話を しっかり 聞いてくれる。	4 3 2 1
7. 先生は 自分のことを よく 解ってくれる。	4 3 2 1
8. 学習をして よかったと 思う。	4 3 2 1

4:よくあてはまる 3:まあまああてはまる
2:あまりあてはまらない 1:まったくあてはまらない

振り返りシート (新)

5. 今次研究で明らかになったこと (成果)

【あおぞら】

本児の原籍校や保護者の理解を早期に得られたため、入院直後から退院までの複数回、リモートによる協働学習が実現できた。行事への参加だけでなく、学級での学習の様子について見聞きたり友だちと会話をしたりしたことで、復学に対する不安が解消され、前向きな言葉も聞かれた。また、作品交流を行ったことで「作って送りたい」という目的ができ、意欲的に学習に取り組むきっかけとなった。

復学後の「作業学習」につながる学習では、個に合わせた内容を考えたことで、販売する製品を作ることや販売に必要な知識や技能について学ぶことに興味関心をもち、販売会当日まで見通しをもって取り組むなど、主体的な学びが実現できた。また、それが自発的な販売会の宣伝につながり、教職員や学習室の子ども同士だけでなく、他の入院患児やその保護者、病棟スタッフなど対話的な学びが広がり、「あおぞら」ならではの協働的な学びへとつながった。

【てんくう】

(1) 生徒の成果

- ・観点別の課題評価シートの作成により、具体的に見立てたポイントに生徒と教員が一緒に向き合い、方略を身につけられた。自分が変わった経験や学びを得ることができた。振り返りでは、教員に対し「自分をわかってくれる」「学習に取り組んでよかった」と表出し、学習面での理解者の存在に気づくことができた。
- ・教員が児童生徒の目標を共通理解し一貫した関わりを行ったことで、生徒は担当教員以外との場 (集団学習) でも安心して取り組むことができた。

(2) 教員の成果

- ・観点別評価シートの作成により、課題が明確になり支援が行いやすくなった。具体的な関わりを復学先にイメージしてもらいやすくなったとも考えられる。

- ・児童生徒がありのままの自分を認められる段階を経ることで自分以外の人の考えを受け止め、「気づかなかった自分への気づき」（多面的な自己理解）や主体的に学習に取り組む姿に繋がった。振り返り学習がてんくうにとっての「教員との協働的な学び」の実践になったと考えられた。
- ・ある教員は児童生徒の「出来たところ」に目を向けて評価しがちであることに気づいた。自己を振り返る姿がつかず質問に答えない生徒の姿に対し「そのままのあなたでよい」と受け止める関わりの必要性に気づき、教員自身の振り返りにもなった。

6. 次期研究に向けて（課題・継続していくこと）

【あおぞら】

- ・リモートによる協働学習は、本人と保護者、原籍校それぞれの気持ちが一致したときに初めて実現できる。また、ハード面については改善されてきているが、使用する ICT 教材が原籍校と合わないと気軽に行うことができない。協働的な学びの実現のために学習室として考える内容や方法が、本人や保護者、原籍校とずれが生じる場合もあるため、どのように「つなぐ」べきか検討を重ねていく。
- ・学習室を利用する児童生徒数が年々減っているため、実態差が生じやすく協働学習の場を設定するのが難しい。また、実態差が少ない児童生徒が揃った場合でも、治療優先のためスケジュールが組みにくい。条件が揃ったときには柔軟に対応できるよう、「『あおぞら』としての協働的な学び」のあり方を職員間で共有していきたい。

【てんくう】

- ・今次示した、個別最適な学びから協働的な学びへの流れや、てんくうにとっての協働的な学びの指導構想を基に、3年次も実践し改善や検討を重ねていく。
- ・観点別評価シートにより明確になった支援を、復学先で役立てられるような具体的なつなぎ方を検討し、今次の構想に加え示していく。
- ・教員間の見立てる「その子の目標」と病棟側が願う「その子の学習の姿」の違いは立場上生じることを理解しながら、今後も連携・協力体制を取っていく。

てんくう 自立活動「学習の振り返り」学習指導案

1 題材名 「学習の振り返りをしよう」

2 題材の目標

①学習や活動に向かう自分の姿に気づくことができる。

〔人間関係の形成：(3) 自己の理解と行動の調整に関すること。〕

②数字スケール、表情スケール、言語など自分の表現方法で表現しようとする。

〔コミュニケーション：(2) 言語の受容と表出に関すること、(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。〕

③教員とのやり取りを通し、様々な自分の姿を知ることができる。

〔人間関係の形成：(1) 他者との関わり の基礎に関すること、(3) 自己の理解と行動の調整に関すること。〕

〔コミュニケーション：(2) 言語の受容と表出に関すること。〕

3 題材について

てんくう学習室では、学習開始1か月後、長期休業前、退院前、の節目の時期に、児童生徒と教員による「学習の振り返り」を行ってきた。この学習では、児童生徒が教員とのやり取りの中で、学習に対する自分の頑張りや変化といった気づきから自己理解につなげることを目的の一つとしている。

振り返りシートは、5段階のスケール(表情・数字の2パターン)を使用し、児童生徒が、1回目と2回目のシートを見比べることで自己の変容が視覚的に理解しやすい特徴がある。

前年度、ほとんどの児童生徒は自己評価の得点があがり、自己の変化が明確に数字で示されたことで、自信に繋がった様子が見られた。一方、一部の生徒からは振り返る辛さから落ち込む様子がみられたり、「先生は自分のことをよくわかってくれる」の質問に対し「自分以外の方が考えていることはわからない」という発言が聞かれたりした。

てんくうの児童生徒は、学習の空白期間や苦手さを抱えていることが多く、学習への肯定感をもちにくい状況が生じやすい。また、障害特性による対人関係の築きにくさや、傷つき体験による対人不信や不安を抱えていることが少なくない。その為、児童生徒が安心安全な環境のもとでこれまでの学習を振り返られる構造を検討した。教員とのやり取りや関わりを通し、協働的かつ児童生徒の「様々な自分に気づく」学びにつなげたい。

4 対象児童生徒の実態

対象は、岩手医科大学児童精神科病棟に入院中の小1から中3までの児童生徒である。疾患は、神経発達症(知的障害、ASD、ADHDなど)やトラウマストレス関連障害(PTSD、愛着障害など)、摂食障害など多岐にわたっている。様々な背景から気持ちを言語化することの苦手さもうかがえる。

てんくう学習室において国・数・英の教科学習を基本とした個別学習を行っている。個々の学習状況等に応じ、担当教員がそれぞれの児童生徒が取り組める学習の構造化(時間・内

容等)をしている。毎回の丁寧な積み重ねの中で築いた信頼関係のもと、児童生徒が自分に適した方法で気持ちを表現し、振り返り活動や自己認識、自己の変容の気づきにつなげられるよう展開したい。

5 指導にあたって

指導においては、以下の点に留意する。

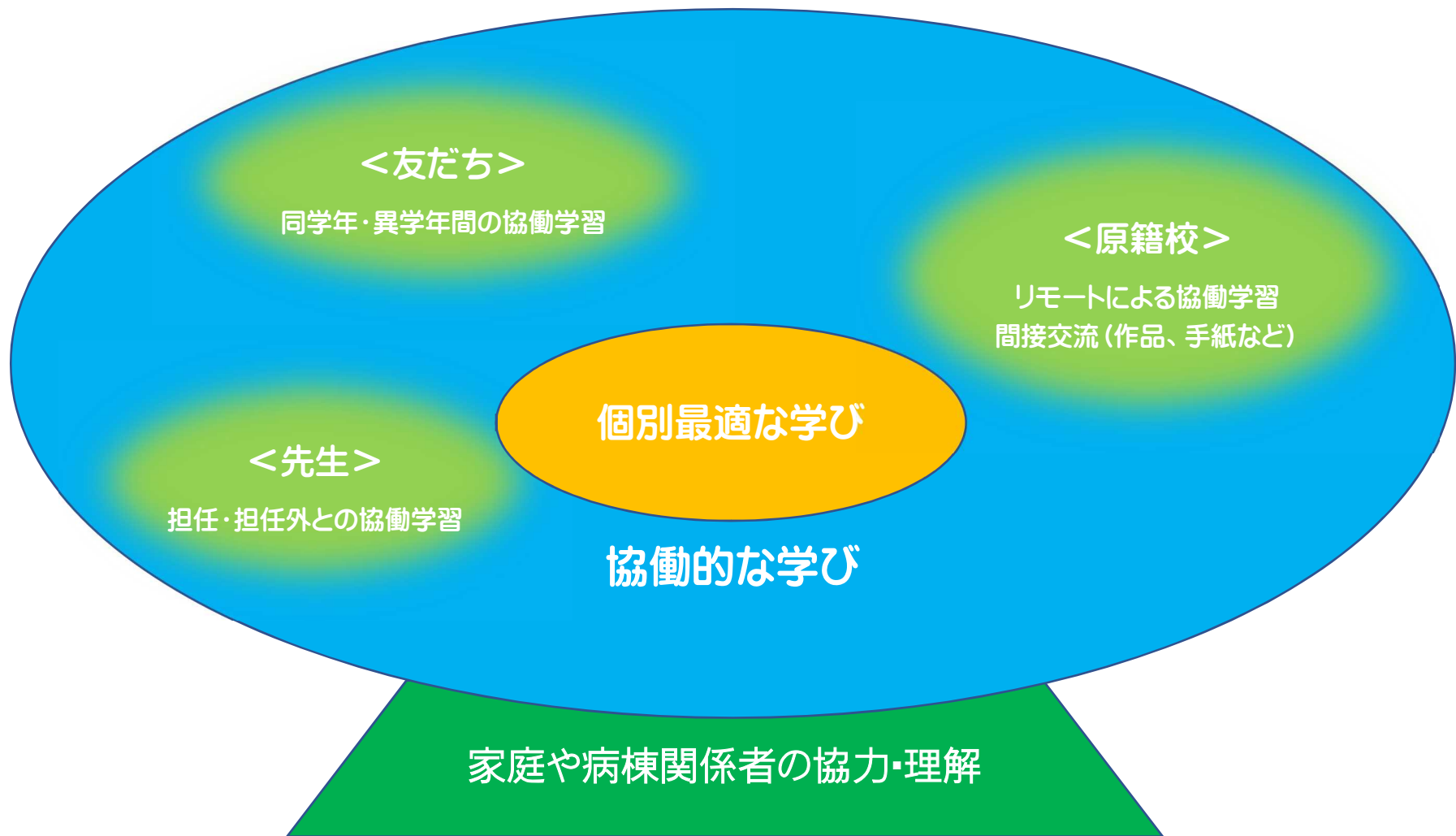
- ・児童生徒が安心して取り組めるよう、教員は生徒の記入前に、守秘義務があることや答えたくない質問は答えなくてよいことを伝える。
- ・教員は児童生徒のありのままの姿や気持ちを受け止め、認める関わりを行う。どのような姿でもあなたのままでよいことをフィードバックし安心感を保証し、教員からみた児童生徒の姿も伝える。

6. 展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点・児童への配慮等	教材・教具等
導入 5分	1 あいさつ 体調確認 2 学習内容の確認 本時の学習内容を知る		
展開 40分	3 学習・活動 各々の学習・活動 4. 振り返りシートの説明 教師からの説明を聞く。 5. シートに記入をする。 6. 教員と学習を振り返る 7. 修了証書をもらう。	・実施時期は児童生徒の治療状況や学習状況を考慮する。 ・守秘義務があること、答えたくない質問は答えなくてよいことを伝える。 ・児童生徒に応じ、わかりやすい言葉で説明する。 ・状況に応じ、2種類（表情・数字）のシートから選択できるようにする。 ・必要に応じ、気持ちの言語化や代弁をする。	・振り返りシート ・修了証書
終末 5分	8. おわりの挨拶をする。		

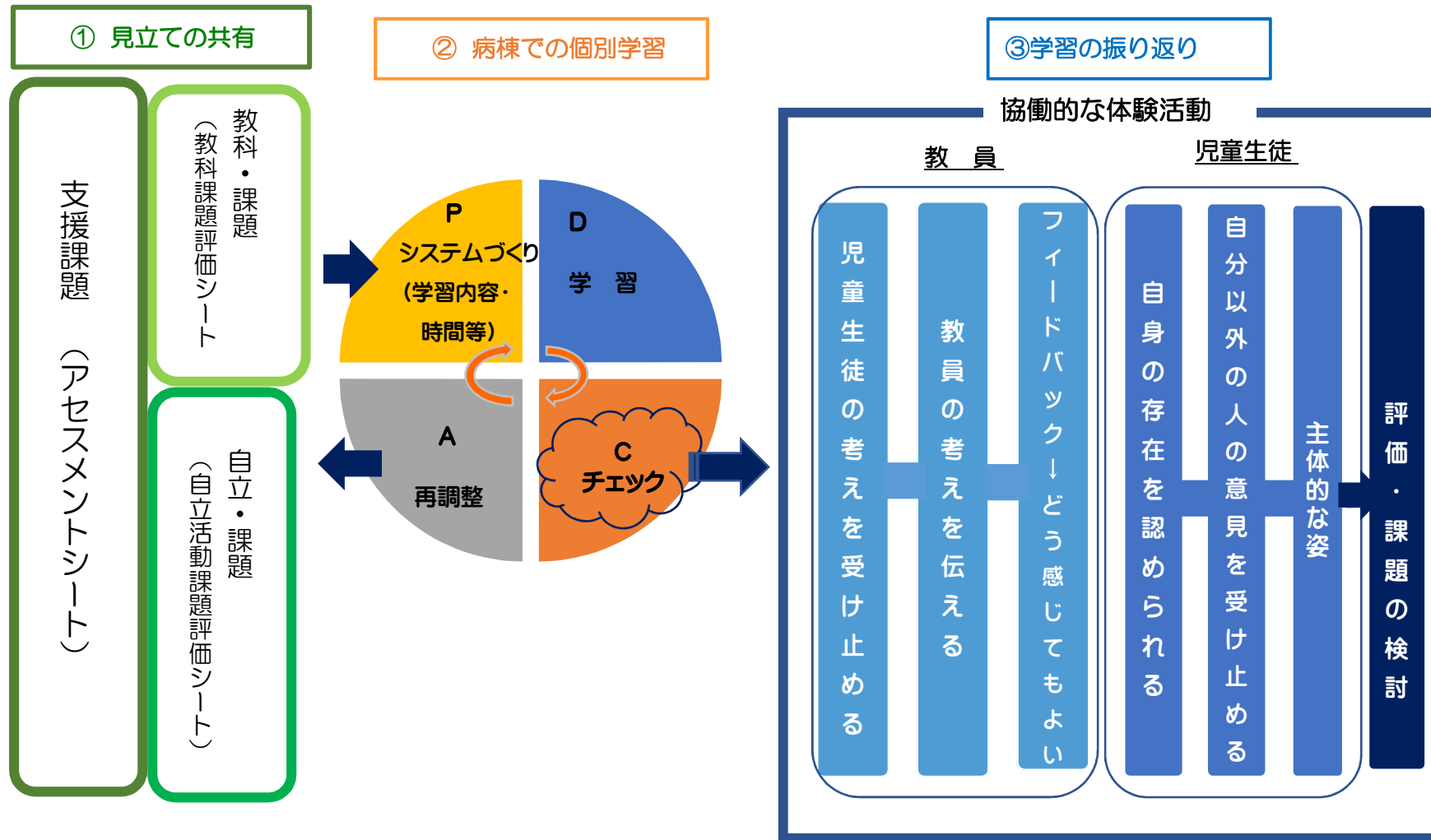
7. 評価の観点

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・ 本時の目的や活動内容を理解し取り組む。 ・ 学習に対する様々な自分の姿を知る。	・ 自分に合うものを考えて選ぶとする。 ・ 教師とのやり取りの中で選んだ理由を考えて表現しようとする。	・ 自分で学習室に来ようとする。 ・ 質問に対し、教師と一緒に考えようとする。



協働的な学びの構想図

《協働的な学びの指導構想》



第Ⅵグループ：寄宿舎研究テーマ

「協働的な活動を通して考える、自分たちの生活のしやすさ」

～主体的で対話的な学びや体験を通して～

1. 1年次の取り組み成果と課題

1年次は、「なりたい自分へつなぐ学びの実現」、「主体的で対話的な学びを通して獲得したスキルの活用」、「他者と関わる中での学びへつなぐ取り組み」をメインに、「寄宿舎における個別最適な学び」について探った。

研究の重点として、「実態把握」のあり方や方法の見直しを行い、寄宿舎生との対話を重視しながら、個別の生活指導計画に取り組んだ。そのことで、寄宿舎生の困り感や達成感を共有することができ、より実態に即した支援を行うことができた。また、寄宿舎生の自己理解につながるだけでなく、生活のしやすさを考えるきっかけにもなった。

このように一定の成果が見られたが、正確な実態把握の検討、寄宿舎生の実態に即した対話の方法やツールを用いた方法のあり方、家庭・学部との連携、寄宿舎内でのアセスメントについては、2年次も工夫し実践していく。

2. テーマ設定理由

1年次の研究から「寄宿舎における個別最適な学び」は何かを探る中で、寄宿舎生との対話を通じた実践（実態把握や個別の生活指導計画）により、自分はどのようにしたら～を行いやすいのか、何を支援してもらえば～が可能になるのかなど、対話と定期的な振り返りの中で考える機会を設定し、自己理解のためのスタートラインに立つことができた生徒やもう少し踏み込んだ形で自分の生活について考えることにつながった生徒もいる。

1年次の土台として取り組んできた個別最適な学びを生かしながら、2年次のテーマにはこれまでポイントとしてきた生徒の主体性を引き出す取り組みを、より大切にして取り組んでいきたい。加えて、生徒と職員間の関わりに限らず、生徒同士の協働的な活動の中で自分たちの生活のしやすさについて考えていければ、より学びが深いものになるのではないかと考えた。

自分たちで自分たちの生活を考えることは、前向きな生活を送るための基盤となるはずである。生徒一人一人のこれまでの経験、未学習や誤学習などを整理しながら、対話を通じた活動で「自分で気付く」、「お互いに学ぶ」ということにつながっていければと考えている。

3. 研究の重点

- (1) 一人一人の良い点や可能性を生かす活動の検討と構築
- (2) 他者と関わり合う中での個を伸ばす支援の検討と実践

4. 研究内容

(1) 対話を重視した実態把握と取り組み

- ① 「なりたい自分シート」の作成と活用
- ② 個々の困り感や願いの把握と支援方法の検討

(2) 行事・活動における協働的な学びを核にした実践

- ① 寄宿舎生が主体的に参加・活動できる内容の検討
- ② 一人一人が活動に関わり、学び合える支援の検討・検証

5. 実践

<実践1> 高等部前期実習前オリエンテーション

(1) 対象……高等部

- (2) ねらい…実習に向けて必要な事項を確認するとともに、寄宿舎生がお互いの目標や考え方を知り、学び合える機会にする。

(3) 実施方法

- ① 内容が深められるよう、2週に分けて実施する。
- ② 1週目はオリエンテーションを中心に行い、2週目は目標発表・意見交換とする。

(4) 実施

【1週目 6/13 実施】

① 内容

ア 社会人としてのマナーについて、パワーポイントをもとに確認し、働くために必要な力を参加者で考える。

イ なりたい自分シートを活用した目標設定の方法について確認する。

② 活動の配慮点

ア 参加生徒と対話しながら進めることで、自己理解が深められるようにする。

目標設定について

ア 翌週の実習前オリエンテーション②で、一人ひとり発表することを伝える。

イ なりたい自分シートのマスはすべて埋めなくてもよい。他の寄宿舎生の発表やアドバイスを聞いて書きこんでもよいものとする。

③ 活動の様子

ア 指導員の説明をしっかりと聞いている寄宿舎生が多かった。

イ 積極的な発言が多かった。

ウ お互いに褒め合える雰囲気を目指して指導員が作ったところ、寄宿舎生同士拍手する様子が見られた。

エ 説明が長かったためか、集中力の続かない生徒がいた。

④ 改善点

ア 説明パートはわかりやすく短時間で行い、ワークショップや意見交換できる場面を設けるなど、動きのある活動を盛り込んでいく。

イ 寄宿舍生同士の対話を促すよう、指導員側で発言しやすい雰囲気作りをしていく。

【2週目 6/20 実施】

① 内容

ア 1週目の活動を受け、考えてきた実習の目標をそれぞれ発表する。

イ 発表後、お互いの目標について共感したりアドバイスし合ったりする時間を設ける。

② 活動の配慮点

ア 座席は、生徒が対面で話し合えるよう配置する。

イ なりたい自分シートについて

(ア) 作成の際は、担当指導員が必要に応じて相談・支援を行う。

(イ) それぞれのシートは画像として保存し、電子黒板に投影する。

(ウ) オリエンテーション終了後、廊下に全員分掲示し、参加できなかった生徒も確認できるようにする。

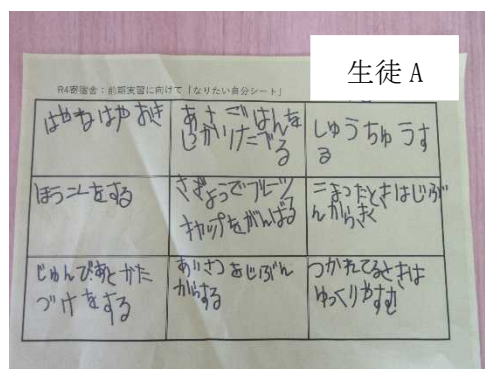
③ 活動の様子

ア 集中して話し合いができていた。

イ 電子黒板に投影し、お互いの目標をじっくり見合うことができたことで、気付きも多く、意見交換ができていた。

④ 改善点

ア より対話を深められるよう、後期は生徒からの意見を取り入れて内容を考える。



<実践2> 高等部後期実習明けオリエンテーション

(1) 対象……高等部

(2) ねらい

① お互いの実習の様子を知る。

② 「自立の手助けになるもの」を考え、お互い教え合う。

➡学部での活動もあり、ユニバーサルデザインに興味を持つ生徒、便利グッズを持参し活用している生徒がいることから設定した。

(3) 活動内容

- ① それぞれ実習の感想を発表する。
- ② 自分が使ってみて有効だったもの、使ってみたいものを事前にそれぞれ iPad で検索し、当日発表する。
- ③ 生活の中で困っていることを話し合う。

(4) 活動の配慮点

- ① 便利グッズ検索に関わるサポートは、個々の実態を考慮しつつ担当指導員が中心となって相談・支援を行う。
- ② 電子黒板を使用し、それぞれ検索した画像を投影しながら発表する。
- ③ 座席は、電子黒板を囲み、顔を見合わせて話し合いができるよう配置する。

(5) 活動の様子

- ① 実習の感想発表については、学部で同じ内容の活動を行っていることもあってか、自分の体験を話すことはできていても、他の寄宿舍生の様子については、関心をもって聞いている様子はあまりみられなかった。
- ② 便利グッズの紹介は、発表の事前準備があったこと、映像や実物の視覚支援があったことで、関心を持って参加する様子が見られた。生徒の発言や対話も見られた。
- ③ 困り感についてはそもそも感じていないことや、この話題自体に関心がない様子が見られた。
- ④ 言葉でのコミュニケーションが難しい寄宿舍生に対しては、「ジェスチャーの補助」「代返」「発表順や進行状況の提示(電子メモパッド使用)」の支援を行ったが、会の中でどのような受け答えがあるかわからない部分があったため、事前に確認する必要がある。



(6) 改善点

- ① 学部と重複する内容については見直しを行い、生活のしやすさや自立に向けた内

容を盛り込んだ内容を検討していく。

- ② 発言や対話を促すためには、会の流れを周知したうえで、事前に話題提供をしておくことも必要である。
- ③ 視覚的支援が効果的であるため、活用しつつさらに工夫していく。
- ④ 寄宿舍生が困り感を感じていない理由としては、未経験なことが多い、視野が狭い、先回りの支援等で生徒が困る場面がないなどが考えられるため、生徒の気付きにつながるような内容の検討が必要である。

＜実践3＞ 男女合同ミーティング

(1) 対象…当日宿泊する寄宿舍生

(2) ねらい

- ① 寄宿舍生が主体的に発表する場を設ける
- ② 寄宿舍生が自由に自分の思ったことを伝えることができる。
- ③ 寄宿舍生が活動の趣旨（情報交換の場）を理解することができる。

(3) 実施方法

- ① 毎月第1週に行う。寄宿舍生の宿泊曜日が異なるため、実施曜日は毎月変える。
- ② 司会は男女交互に当番制で行う。
- ③ 初の試みであるため、実施の都度見直し・検討を行う。

(4) 実施

【第1回 10/12 実施】

- ① 内容…男女一緒にミーティングを行う。
- ② 活動の配慮点
 - ア 主体的に発表ができるように促す。
 - イ 予め司会の生徒と次第を確認する。
 - ウ 言葉でのコミュニケーションが難しい寄宿舍生は、発表の仕方を担当指導員と確認する。
- ③ 当日までの準備の様子
 - ア 執行部生と合同ミーティングの目的を確認し、進行表の確認を行った。各棟の活動について知ること、個々の発表（一分間スピーチ等）、舎監の話を盛り込みたいという意見が出された。
 - イ 各棟で次第や発表の有無について確認した。
 - ウ 司会者と発表者は、担当指導員が中心になって内容の確認と練習を行った。
 - エ 言葉で伝えることが難しい際は、iPadの読み上げアプリを活用することにし、担当指導員と一緒に文章を作成した。
- ④ 当日の活動の様子
 - ア 事前に発表者・発表内容を確認していたことで、スムーズに発表することがで

きた。

イ 女子棟の行事紹介の際、作成したポスターを見せながら行うなど、伝わりやすくする工夫をする様子がみられた。

ウ 初回だったこともあり、「みなさんから」の発表をためらった寄宿舎生もいたが、一度経験したことで流れがわかり、次回は発表してみたいという声が聞かれた。

エ 言葉でのコミュニケーションが難しい寄宿舎生は、iPad を利用しわかりやすく発表することができた。

オ 舎監からの話では、共感しながら聞く様子、気付きのきっかけになる様子がみられた。



⑤ 改善点

ア 執行部会でその都度反省・内容の改善を検討し、棟のミーティング等で周知していく。

イ 寄宿舎生の発表を後押しする、指導員が手本を見せるなど、発言しやすい環境作りを行う。

ウ 本ミーティングの目指す姿は、寄宿舎生主体で行えることであるため、指導員間で目的や進め方の理解統一をして進めていく。

エ 事前準備を含め、流れが定まり寄宿舎生が慣れるまでは、指導員が積極的にサポートを行っていく。

【第2回 11／8実施】

① 内容

ア 各棟、系の活動計画の発表

イ 個人の発表「みなさんから」

ウ 舎監の先生や、指導員の話聞く。

② 活動の配慮点

ア 事前に棟ごと、係ごとに発表内容を話し合う。

イ 言葉でのコミュニケーションが難しい寄宿舎生の発表の仕方を工夫する。

③ 活動の様子

- ア 棟や係で事前に発表内容を確認したことで、共通理解が深まった。
- イ 趣味や経験を話す寄宿舍生がいたことで、「みなさんから」のイメージをもつことができた。
- ウ 言葉でのコミュニケーションが難しい寄宿舍生も自分が発表する意識をもち、発声や意識が表出されていた。
- エ 舎監や指導員の話聞き、共感している様子が見られた。自己を振り返る機会につながったのではないかとと思われる。
- オ 事後反省の際、発言時に周りの反応が薄く、発言しづらいという反省が出た。

④ 改善点

- ア ミーティングに参加していない寄宿舍生は、棟や係の発表内容を知る機会がなかったため、次回からは棟や係の発表内容を書く用紙を担当指導員が準備し、発表内容を記入してもらい、発表後は用紙を掲示して不在者にも周知する。
- イ 気軽に意見・発表しやすい雰囲気作りが必要である。執行部会で話題にして生徒と考えていくとともに、棟ごとに話を聞く際の態度についてSSTを行う。

6. 今年度の実践の成果

今年度は、「協働的な活動をとおして考える自分たちの生活のしやすさ」について、様々な活動を基に探ってきた。

寄宿舍生活における「協働的な活動」を考えた時、日常的に行われている多くの活動が「協働的な活動」に結びついており、それぞれが生き生きと活動に参加するためには、寄宿舍生一人一人の特性を考慮したきめ細やかな支援が必要だということを改めて感じた。そのためには「対話重視の実態把握」が不可欠であり、それぞれが自己理解を進めるとともに、どのような手順でどのような支援を受ければ、集団の中で良い点や可能性を生かすことができるのかを、常に模索する必要性も強く感じた。

実践の内容としては、初め単発的な活動と経験を重ねられる活動の2種類で行ってみたが、単発的な活動は内容や支援方法に改善点を見出しても次の活動につながらず、上手く生かすことができなかったため、後半は経験を重ねられる活動に絞り、実践・検証を行った。

実践の中で見えてきたことは、事前準備の大切さだった。活動の流れや発表内容を事前に提示し、担当指導員と相談しながら準備を進めたことで、寄宿舍生に余裕が生まれ、寄宿舍生同士の対話につながったように思われる。そして、対話の中で新たな気づきや自分を見つめ直すきっかけが生まれ、生活のしやすさを考える機会にもつながっていた。

また、電子黒板を使用し、内容を投影しながら行ったことも、対話を生むきっかけになっており、有効な手段であることを再認識した。今後も視覚的支援を効果的に取り入れながら、寄宿舍生が興味をもち、主体的に活動できるような内容を実践していきたい。

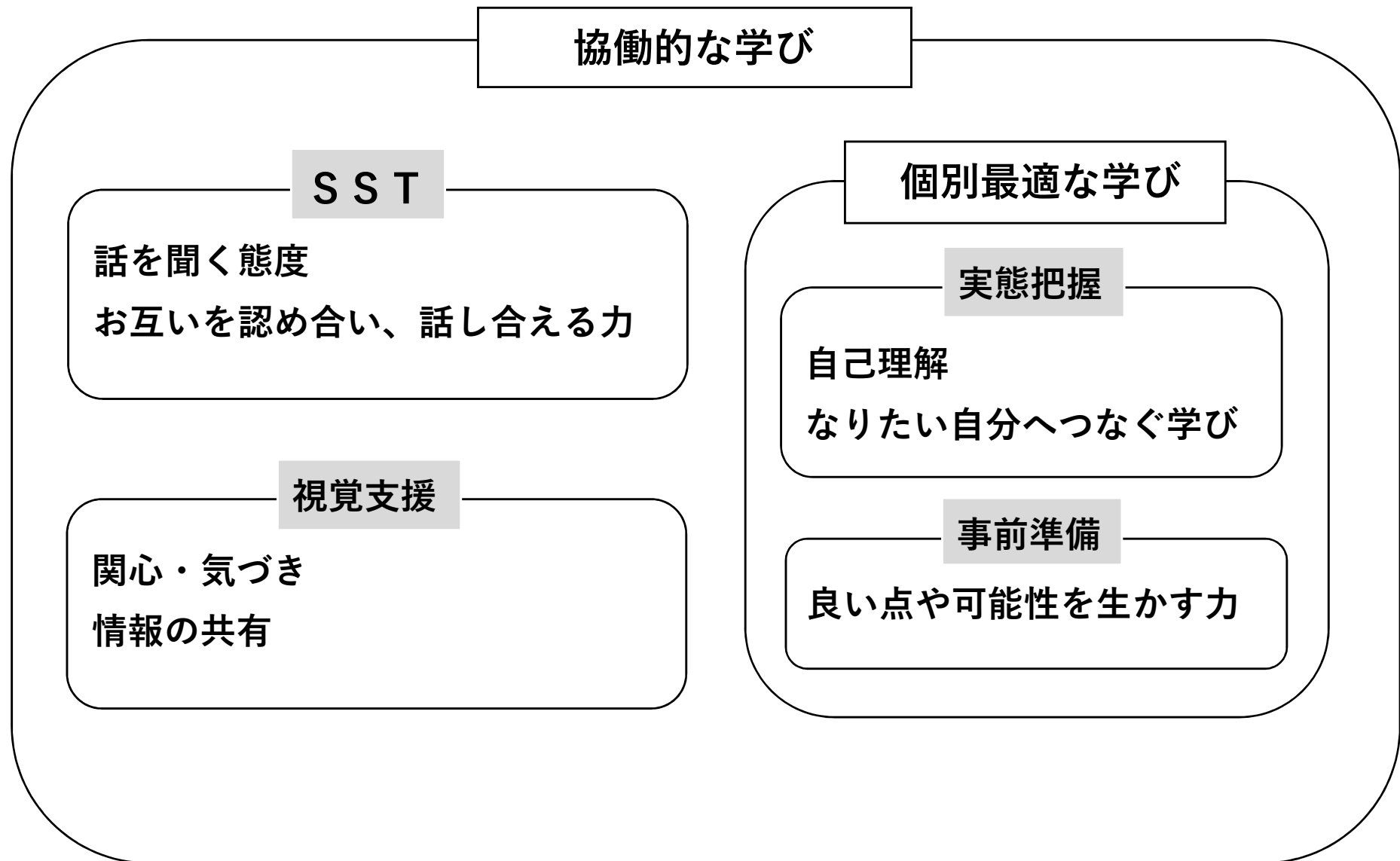
7. 来年度に向けて（課題）

今年度は、「集団の中の個」に重点を置き、様々なグループ活動をとおして活動内容や支援方法を模索してきた。「集団の中の個」がより個々の力を発揮するには、的確な実態把握と効果的な支援が必要であると捉えて実践したが、見通しを誤り、思った効果を上げられない活動もあったため、実態把握の方法・アセスメントを今一度検討し、グループ構成も段階によって分けるなど、寄宿舍生の実態に即した活動につなげていきたいと考えている。

また、SSTについても引き続き支援をする必要があると考えている。活動の目指す姿は、寄宿舍生主体の活動になることであるが、現状寄宿舍生の力だけでは難しい様子がみられるため、力が備わるまでは、引き続き指導員がサポートに入りながら進めていきたいと考えている。

次年度は今年度の課題を基に、寄宿舍生一人一人が最適な学びを受けつつ、集団の中で良さを発揮しながら、「なりたい自分」に近づけるよう、効果的な実践を工夫していきたいと思う。

協働的学びの指導構想図（寄宿舍研究グループ）



Ⅳ 研究のまとめ

（１）今次研究の成果

今次研究では、以下の点を成果として捉える。

○前次研究で作成した資料を活用しながら、研究推進を行うことができたこと。

- ・知的代替の教育課程においては、昨年度作成した「本校の児童生徒に育てたい資質・能力」について、取り組む単位ではどの力を高める活動にするのかを明確にし、授業づくりに取り組んだ。
- ・自立活動を主とする教育課程においては、となん式ねらい一覧表（音楽科・体育科）を活用し、教科の目標・内容を取り扱った授業実践を行った。
- ・訪問教育部・てんくうでは、観点別評価シートを作成したことで、指導者同士の共通理解が図られ、生徒が安心して学習に取り組むことができた。

○前次研究の課題を明確にしながら取り組むことができたこと

- ・準ずる教育課程においては、前次研究で明らかになった「自己評価が高い」という課題から、自己評価の取り組み方について検討し、ループリックを活用した学習評価に取り組んだ。
- ・知的代替の教育課程では、活動が先に設定され、その後に扱う各教科等の目標・内容を決定していたという課題から、児童生徒の実態から扱う各教科等の目標・内容を決定、また、「本校の児童生徒に身に付けたい資質・能力」を設定し、それらを総合的に考えて、活動を設定する「授業構想シート」の作成を行った。

○「協働的な学び」の場の設定を行ったこと。

多様な児童生徒の実態について、前次研究で作成した資料を活用し、実態把握を行い、一人一人が自分のよさや可能性を認識できるような場の設定、ICTを活用した新たな教材や学習活動を積極的に取り入れながら、児童生徒が同じ空間で時間を共有することで、お互いの感性や考え方等にふれ、刺激し合うことなどができるよう、授業改善、指導改善を行うことができた。

- ・訪問教育部・つばさ：リモート授業、手紙やビデオレター、作品・写真を通じての間接交流、各行事への間接参加、スクーリング
- ・訪問教育部・あおぞら：原籍校とのリモート学習（授業や行事への参加）
- ・寄宿舎：発表する場の設定、自由に思ったことを伝える機会の設定、情報交換の場の設定

（２）来年度に向けて（課題）

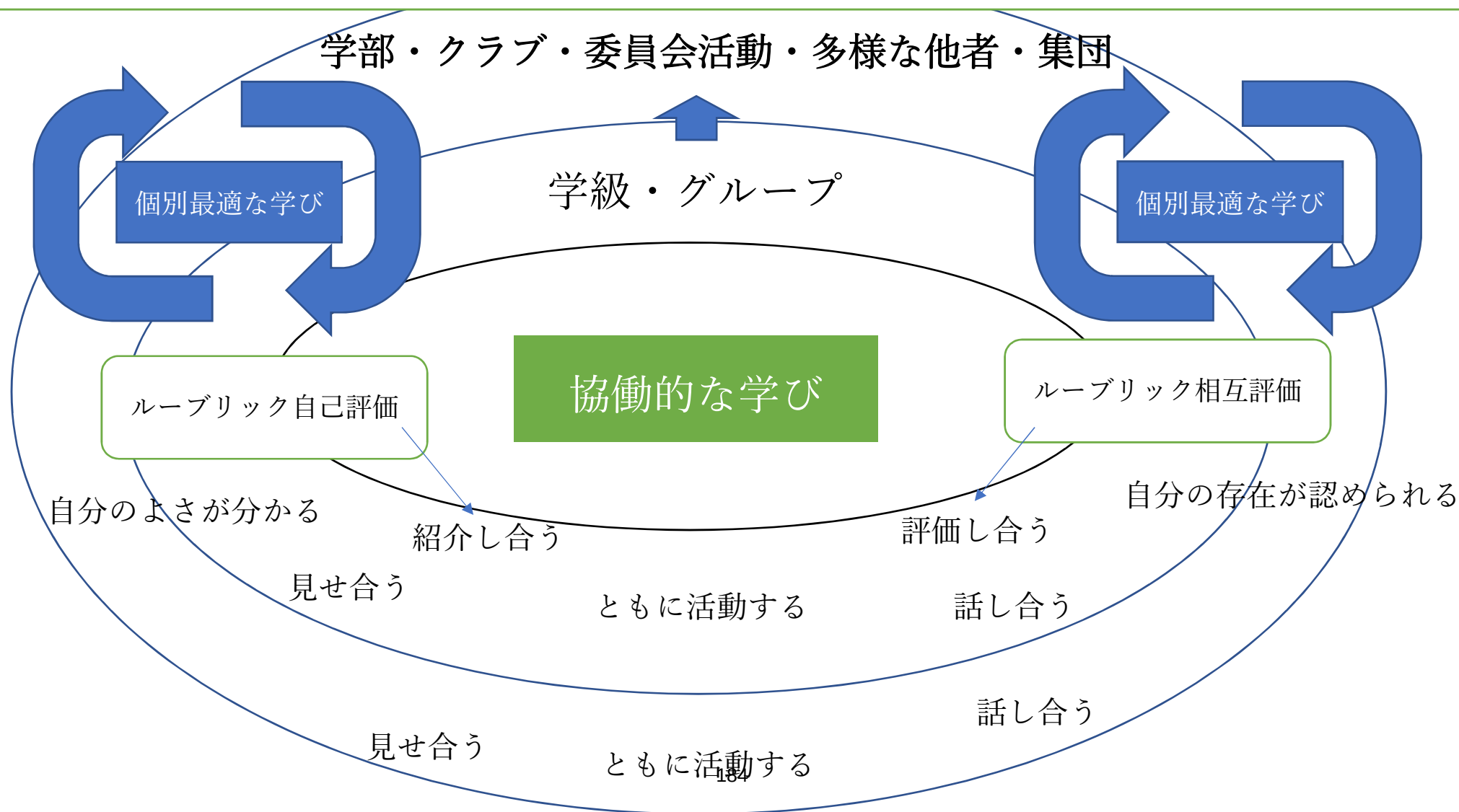
今次研究では、「協働的な学び」の実現に向け、児童生徒が協働する活動や場面を設定したり、児童生徒が1人の場合、本校としてこの「協働的な学び」をどう捉えるのかについて検討したりしてきた。その中で、どのグループでも共通していえることは、職員が児童生徒同士をつなぐための場を設定したが、「そのかわり方がわからない」という状況が生まれることである。その場を共有し、その場と一緒にいることに対しては、抵抗はない場合が多い。しかし、その中で「自分のよさを発揮できる」ように検討してきたが、そのよさを発揮できるツールやかわり方についてまだ課題があることが明確となった。本校の児童生徒の実態から、与えられたことやものに対しては、取り組むことができるが、「自分から」「自分で考えて」など、主体性にかかわるスキルを高める必要がある。

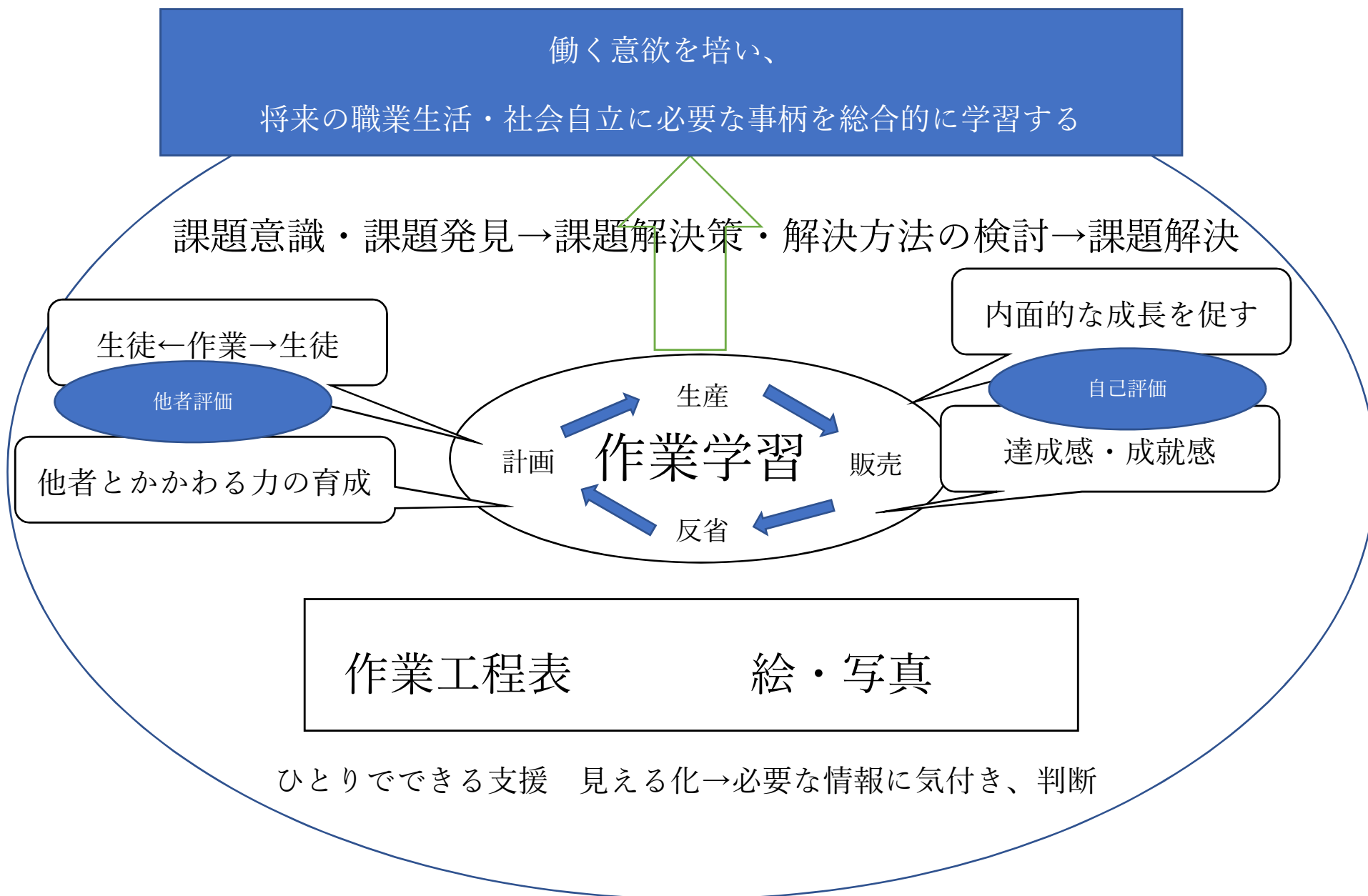
令和5年度は、この3年次研究の最後の年となり、まとめの段階となる。「個別最適な学び」「協働的な学び」について検討してきた中で、「協働的な学び」で、自己の力を発揮するためには、「個別最適な学び」において、個々の力を高め、それを十分に発揮できるよう、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還が重要となる。研究のまとめとして、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還によって、子どもたちをつないでいきたい。

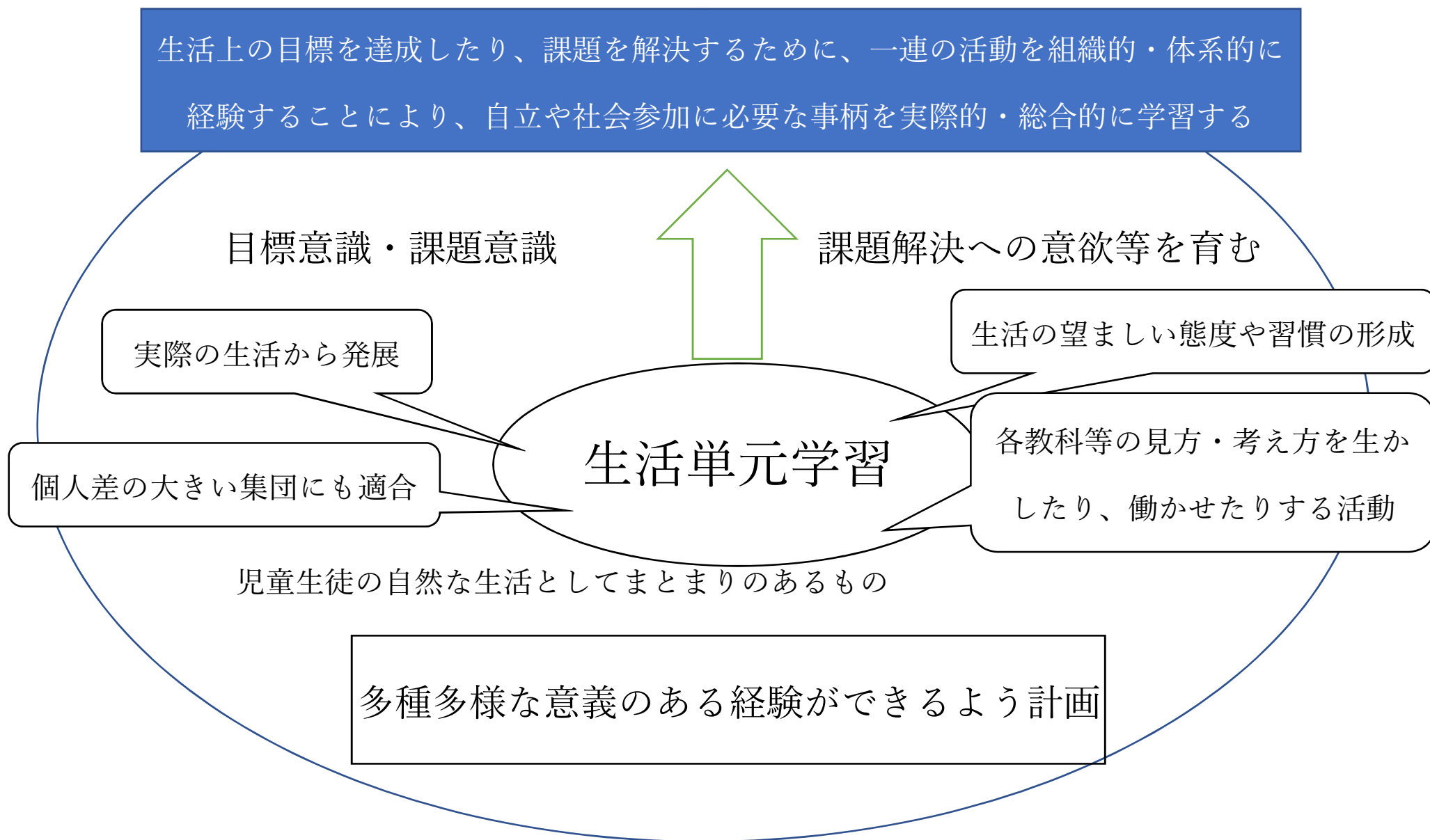
研究サポートのための各種資料・様式

(1) 協働的な学びの構想図 教科等 (小学校等に準ずる教育課程)

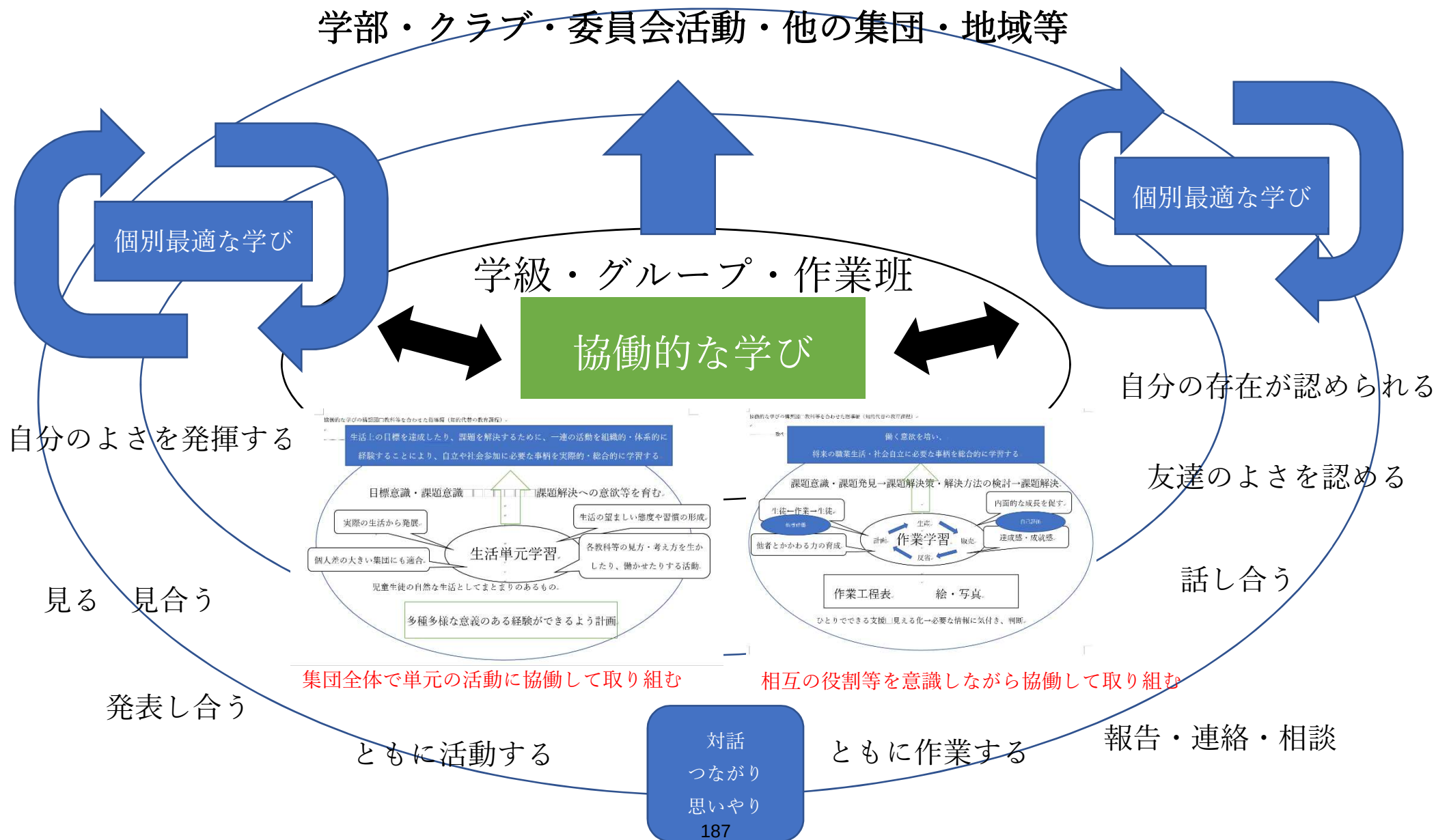
集団活動を通して、その活動に必要なことについて考え、話し合い、合意形成を図ったり、意思決定をしたりする。





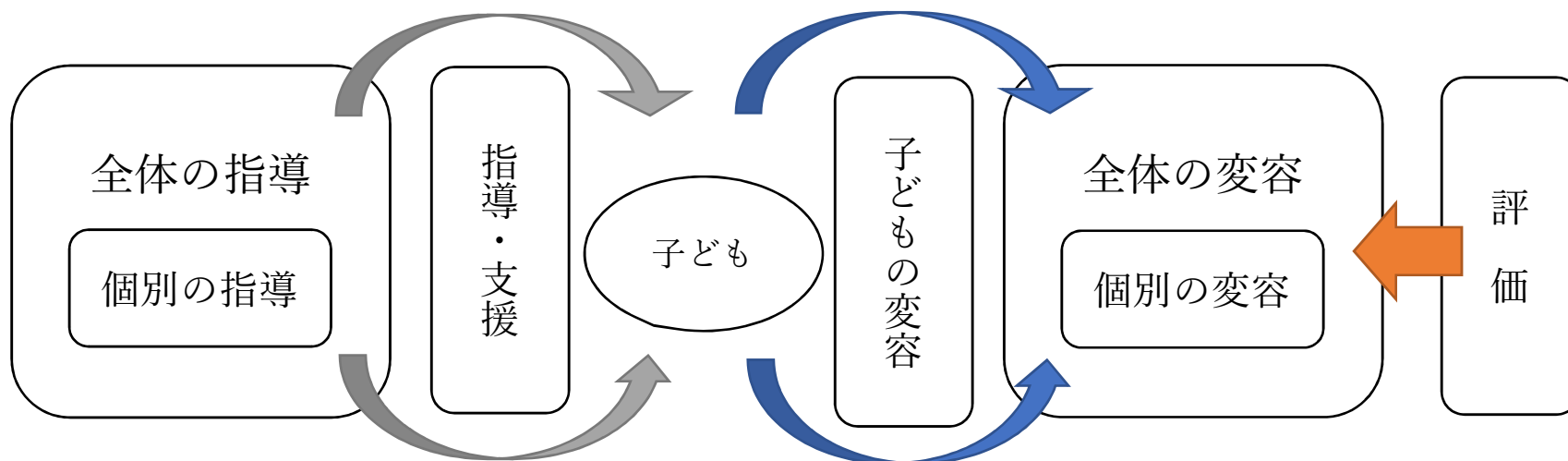


(2) 協働的な学びの構想図 教科等を合わせた指導編（知的代替の教育課程）

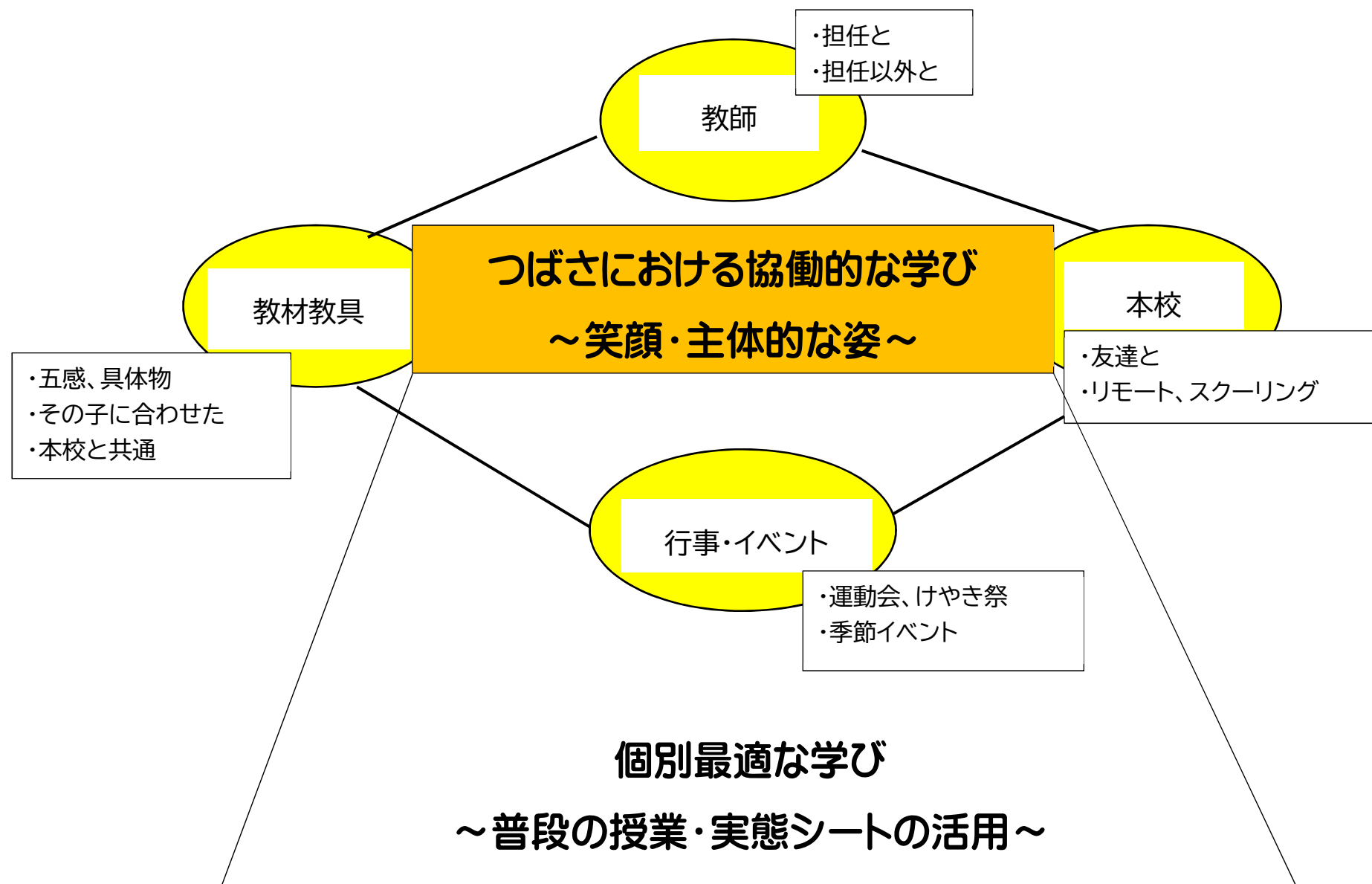


(3) 協働的な学びの構想図（自立活動を主とする教育課程）

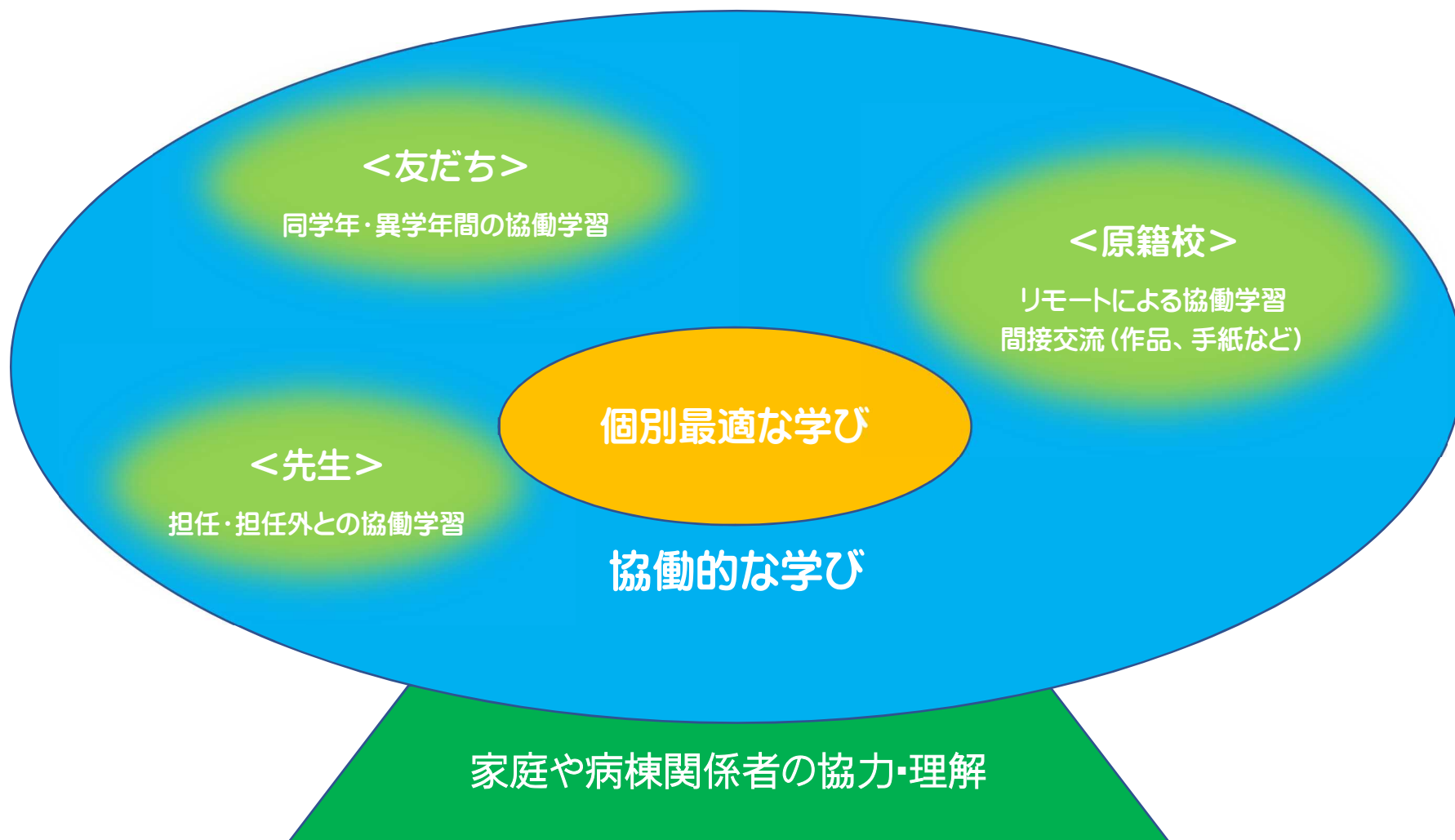
キーワード：教師と一緒に、集団活動の雰囲気を感じる、友達の活動に注意を向ける



(4) 協働的な学びの構想図 訪問つばさ編（自立活動を主とする教育課程）

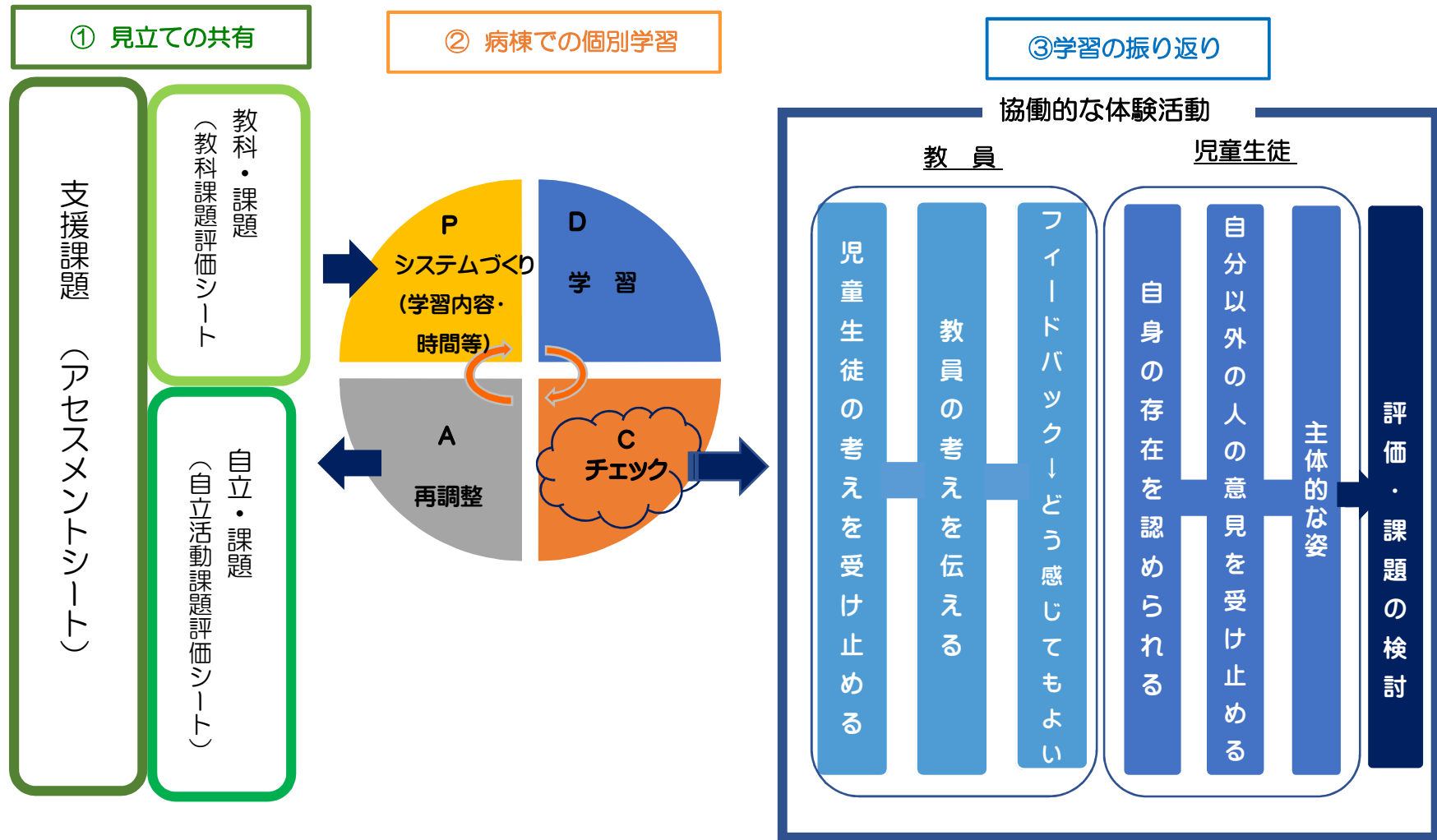


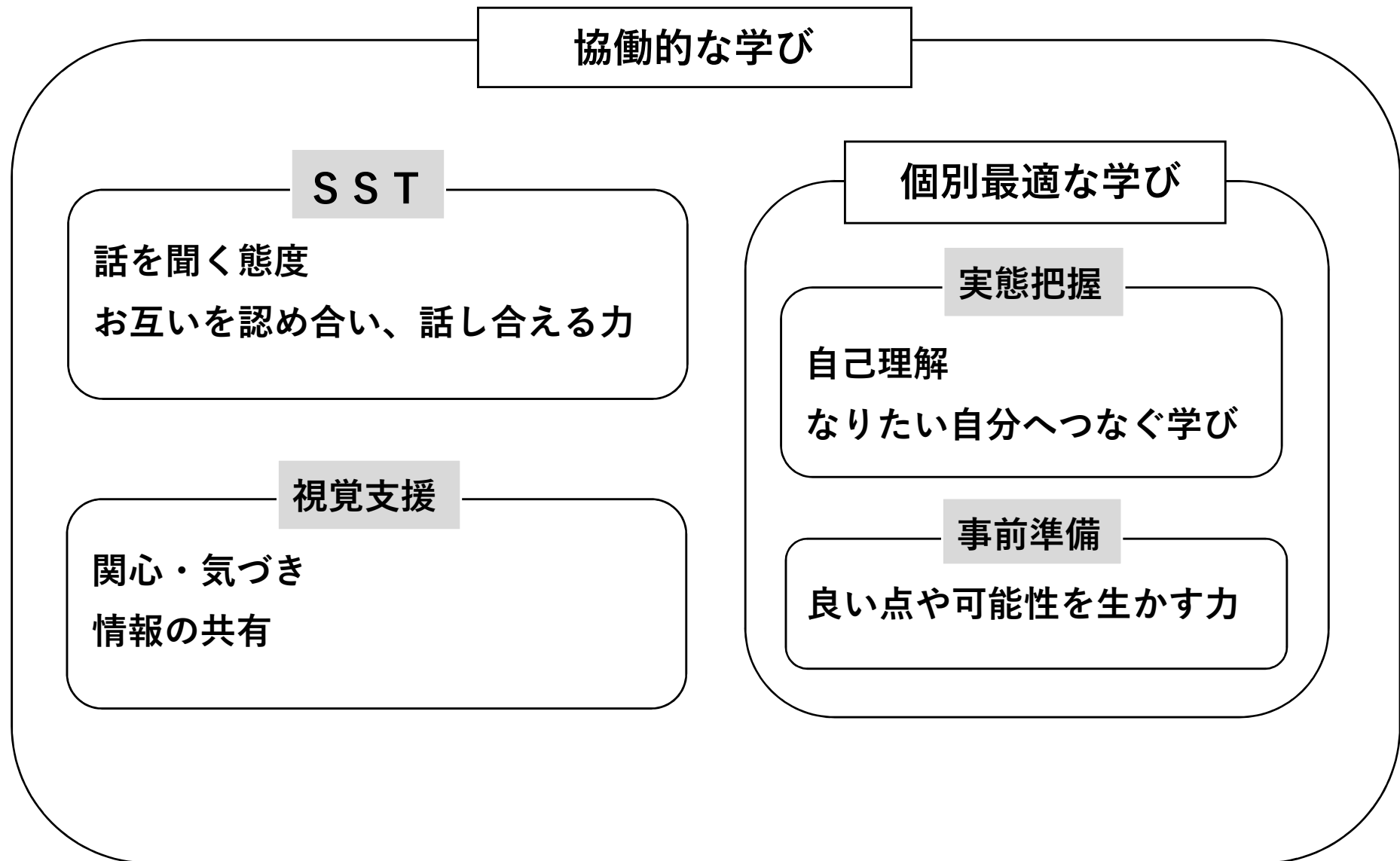
(5) 協働的な学びの構想図（訪問教育部・あおぞら）



協働的な学びの構想図

《協働的な学びの指導構想》

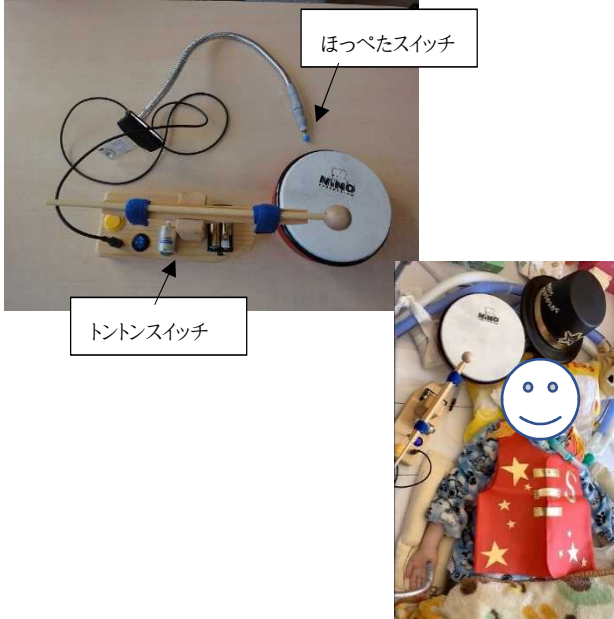
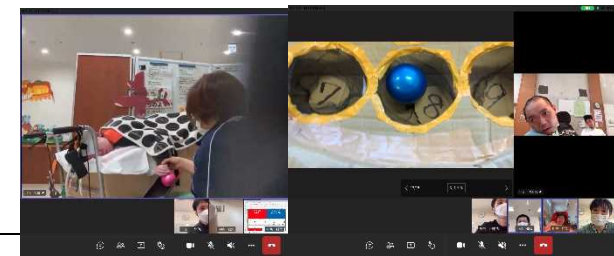


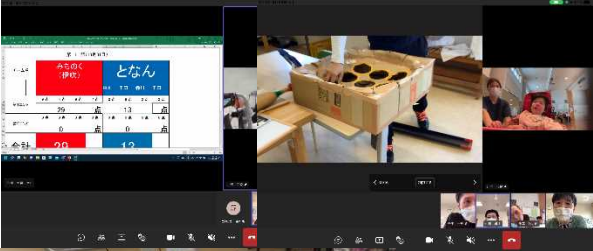


小1年	
実態	中期目標
気管切開しており、24時間人工呼吸器使用。モニターでSpO2と心拍数を管理している。 24時間導尿カテーテル留置。 入学式でのスクーリングでは初めて病棟の外に出て、緊張したようで汗をたくさんかいていた。 教師の声や歌・楽器の音を聞いていると、心拍数に変化がみられる。 骨折のリスクが高い。 不快時はアラームを鳴らして教えるようだ。 胃瘻からの栄養注入を行っている。 常時痰の吸引が必要である。	・教師と一緒に様々な活動に取り組み、学習に慣れる。 ・学習活動を通して、自分の好きなことを見付ける。
	年間目標
	・授業のペースに慣れる。 ・季節行事や家族とのやりとりを楽しむことができる。 ・季節や行事の歌を聞いたり、様々な楽器の音色を聞いたりして、楽しむ。 ・様々な質感や感触を肌で感じたり、光や温度の変化を感じたりすることができる。 ・教師からの働き掛けに気づき、自分なりの方法で応えようとする。 ・絵本の読み聞かせを教師と一緒に楽しむことができる。 ・身近な人との触れ合いの中で、つながりを深めることができる。
授業の目標「運動会」 ・競技「レッツゴーおにたいじ」では手の平にこん棒をのせて、教師と一緒に積み木（鬼）を倒す。 ・プレイバルーンでは風を感じたり、楽しい雰囲気味わったりする。	
評価 ・競技では「3・2・1」の掛け声の後、教師と一緒に積み木（鬼）を倒すことができていた。 ・プレイバルーンでは教師の大きな声に驚くこともあったが、雰囲気を味わうことができた。 ・手の平に金棒をのせたり、その金棒を動かしたりしても、驚かずに教師と一緒に取り組むことができた。 ・プレイバルーンが始まると、PR値が90台に上昇した。（それまでは80台）最後まで90台を維持していた。 ・教師の大きい声にPR値が155まで上昇。アラームが鳴る。すぐに落ち着いたが、その後は全身の震えが始まった。本人なりの不快感の表れか？1回目のプレイバルーンは楽しめていたのではないか。	

資料2 教材教具実践例集

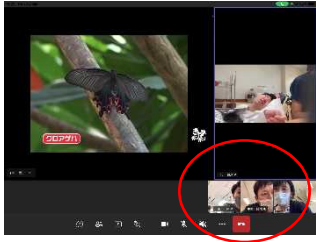
教材・教具の写真	教材・教具の説明	反省（◎良かった点、●改善点）
   	授業名：みちのく療育園 MC リモート授業「リズム」 授業者：千田一輝（T1） 教材名：箏、トライアングル、ハンドベル 等 ・本校高等部Ⅱ・Ⅲグループ音楽の授業でも取り扱っている楽器である。 ・本校とみちのく療育園 MC を Microsoft teams を使ってつないでいる。教師が楽器を演奏し、生徒が鑑賞する。生徒は鑑賞しながら、療育園にある楽器を演奏することもある。	◎本校の授業と同じ学習内容・教材を扱うことで、本校で学習している生徒と同じ学校で学んでいるという実感ができるような授業を行うことができた。 ◎T1 が本校の音楽の授業に T2 として入ることで、本校との連携ができた。 ●本校の楽器を施設へ持ち込むことができなかった。施設へ持ち込み、教師と同じ楽器を使うことができたらより学びが深まったのではないかと感じた。
「お誕生会（ビデオレター）」   「交流学級のお誕生会（リモート出演）」  	授業名：「お誕生会」 授業者：巴 真希子 教材名：iPad、バースデーカード、バースデーカード制作補助具等 ・お誕生会：動画メッセージを通して、交流学級からバースデーカード・手作りの花束のプレゼントを受け取る。 ・交流学級のお誕生会：リモート出演し、自分の作ったバースデーカードを誕生日の友達が受け取る場面を画面越しではあるが実際に確認する。	◎リモート学習やビデオレター等の間接的な交流ではあったが、スクーリング以外で友達との関わりを広げる貴重な機会となった。また、交流学級と同じ単元で学習することができ、学校との連続性・系統性のある学びにつなげることができた。 ◎リモート学習の振り返り時に、バースデーカードを誕生日の友達が笑顔で受け取る場面を再度流すと、眼球を動かしながら確認するなど、友達に意識を向ける様子が見られた。 ●継続的なリモート学習を実施できれば、交流学級との児童との関わりをもっと深めることができたように感じた。
	授業名：リモート授業「朝の会」 授業者：山路 愛里 教材名：iPad ・療育センター病棟と交流学級を Teams でつないでいる。	◎初めてのリモート授業だったが、交流学級の児童を意識し、画面を見ることができた。 ●継続してリモート授業を行うことで、交流を深めていけたら良いのではないかと感じた。

	・交流学級が普段から行っている流れで朝の会をする。	
	授業名：リズム「大きなたいこ」 授業者：塚野 美奈 教具名：ほったスイッチ、トントンスイッチ ・ほったスイッチとトントンスイッチをつなぐ。児童の手の平の上にほったスイッチを準備し、手が触れたらトントンスイッチが太鼓を叩く。 ・親学級のビデオを見ながら練習に取り組み、けやき祭の発表にもつながった。	◎始めは教師がほったスイッチを手の平に近づけて太鼓を叩いていたが、練習に取り組む中で自分から手の平を動かしてほったスイッチに触れて太鼓を叩くことができた。 ◎児童の手を動かすことは様々なリスクがあり、制限されている。その中で児童に負担をかけずに、自発的な姿を引き出すことができた。 ●ほったスイッチを取り付ける位置が安定するように工夫が必要だった。 ●ほったスイッチを継続して取り組み、本人の主体的な姿を引き出せるようにする。けやき祭から少し時間が空いたが、現在のはじめの会のスイッチやクリスマスに向けてリズムで再度取り組んでいる。
	授業名：「さんさ太鼓づくり」 授業者：木村 るみ子 教材名：さんさ太鼓キット ・けやき祭の発表に向けて小道具づくりを行う。 ・発表グループと互いの進み具合を写真などで見ながらさんさ太鼓づくりを進めた。	◎組み立てる途中で、胴回りの色画用紙や絵の具の色を自分で選ぶことができた。段ボールや紐などの素材に触れ感触を確かめることができた。 ◎本校と同じ単元で学習することで、間接的な関わりをもつことができた。 ●顔と手の向きが違うことが多いので、教材を確認できるように提示する位置や話し掛けなど工夫が必要だった。
	授業名：みちのく療育園 MC リモート授業「運動」 授業者：中嶋健太 (T1) 教材名：コロコロストラックセーフ 1号 ・ストラックアウトの平面バージョン。穴に入ると1～9点のいずれかが得点できるしくみ。	◎みちのく療育園 MC 職員とともにボールを投げるため、生徒達は楽しみながら行っている様子が画面から伝わった。 ◎学校職員はモルックを用いて、生徒達と得点を争う対決を行うことができた。

	・本教材に向かってボールを投げるだけで得点できるのでとても簡単に誰でも取り組むことができる。 ・ボールを握ったり、投げるができない生徒にはみちのく療育園職員とともに、雨樋を投球台にするなどした。 ・持ち運びが簡単で、みちのく療育園 MC の職員さんでも簡単に操作できる。	◎得点表や対戦表を用いて、ゲーム感覚で生徒もみちのく療育園 MC 職員と学校職員とで楽しむことができた。 ●得点が入ったことが分かるよう、鈴をつけたり、光が点灯するなど工夫すれば良かった。
	授業名：音楽 授業者：佐々木裕美 教材名：大太鼓 ・紐を引っ張って離すとボールがぶつかって音が鳴る。紐を離す衝撃と太鼓の振動を感じることができる。 教材名：ウクレレ ・ゴムを触って、簡単に音を出すことができる。触って感触を楽しむことができる。	◎週1回スクーリングで音楽の授業に参加した。高等部の生徒と同じ楽器を使用したり、同じ曲を聴いたりすることができた。 ◎大太鼓は自分の力で紐を持ったり、離したりして音を出すことができた。太鼓の音を感じている様子だった。 ◎ウクレレは軽いので持ちやすく、軽く触るだけで音を出すことができた。

資料3 みちのく療育園メディカルセンターとのリモート授業変遷

基本的なリモート体制

4月当初	現在
(写真) 	(写真) 
(機材内容など) 職員一人1台タブレットもしくはパソコン。 タブレットを三脚に固定していた。	(機材内容など) T1は2台のパソコンもしくはタブレットを使用する。 タブレットは机に置き固定しない。 Surface Go3を使用できるようになり、いろいろな機能が使えるようになった。 月1回開催しているみちのく療育園メディカルセンターとの連絡調整会議もリモートで行った。 Surface Go3を使用し一人一台で会議に参加できるようになった。
(説明・補足があれば) 一人1台で行っていたので、天気調べで外に出る時はパソコンを外に持ち出した。 また、タブレットは三脚に固定していたため、授業途中で動かすことが難しかった。	(説明・補足があれば) T1は2台使用することで、画面の共有を行った時に、もう1台で生徒の様子を見ることができる。 また、もう1台を使って自分自身を映すことができる。(赤○の部分に2台使用することで映る) タブレットを固定しないことで、授業中スムーズに移動できるようになった。
(学校の児童生徒職員との交流) ・前もってお願いしてからリモート交流を行った。	(学校の児童生徒職員との交流) ・タブレットを持って校内を散策すると、声を掛けてくれる職員、児童、生徒が増えた。

各活動の変遷

① 制作

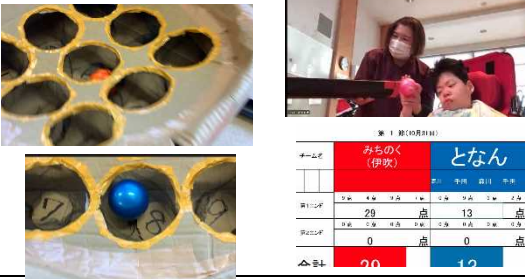
授業の進め方について

- ・1回目、2回目は学校で職員が制作する様子をリモートした。みちのく療育園 MC から、教材を届けてもらえば、みちのくの職員と一緒に生徒が制作することができる、と話をいただき、毎週教材を届け、みちのく MC で制作してもらっている。
- ・医ケアある、なし、で授業時間を分けているため、1人と3人に分かれて授業を行っている。1人に2人職員がつき、3人にも2人の職員がついているので、3人のグループの制作進度が遅れてしまうことが多

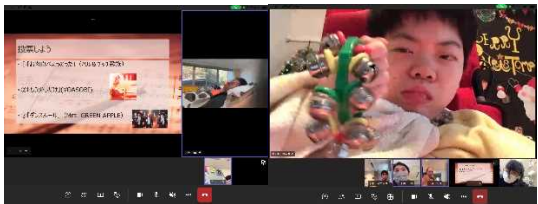
い。 ・制作過程をみちのく療育園 MC の職員にお願いするので、汚れないもの、片付けが楽なもの、完成図がイメージしやすいもの等、教材準備に制限があったが、実際に生徒が制作活動に取り組むことができよかった。 ・制作活動が苦手（嫌い）な生徒がいたので、制作した物に関係する音楽を聴く時間を設けた。		
	活動内容	生徒の様子、良かった点・苦労した点など
4月～7月	・花を咲かそう（リモート）  ・「はらぺこあおむし」   	・見て楽しめる教材ということで、水をかけることで花びらがひらく実験をリモートした。画面上では、花がひらく変化を理解するのは難しい様子だった。 ・触って感触の違いを感じることができるよう、紙、花紙、セロファン、フェルト等違う素材を使用するようにした。 ・花紙を濡らして作品を作り、感触の変化を感じることができるようにした。 ・みちのく療育園 MC 職員の方が一人ずつ丁寧に取り組んでくれた。 ・3人の授業グループは他の人が再作している間、待つ時間ができてしまった。(次年度は1人、1人の予定) ・学校でも教師が同じものを制作し、様子を見せることで、制作方法や完成図がイメージしやすくなった。
8月～12月	・○△□で何作ろう  ・ハロウィンガーランド  ・落ち葉アート  ・クリスマス飾り 	・フェルトの○△□の形を貼って作品を作った。○△□という形、赤、青、黄の色の違い、大きい小さいの違いを一緒に確認できるようにした。 ・かぼちゃ、おばけ、こうもりの形にマジックで色を付けた。自分でペンを持ち描くことができる生徒もいた。 ・校外学習で拾った落ち葉を紙に貼ったり、紐でつるしたりして飾りを作った。落ち葉の色の違いを一緒に確認した。 ・三角錐という形について説明し、好きな飾りを貼ってツリーを作った。手に持って作品を確認する様子がみられた。

② 運動

	活動内容※活動の前にスポーツに関するニュース等を動画で視聴したあと、以下の活動を行った。	生徒の様子、良かった点・苦労した点など
4月～7月	・リマック体操  ・ふれ愛体操  ・ふれっ手体操  ・ラジオ体操  ・様々な体操 	・生徒達は様々な体操を行うことで、リラックスすることができ、十分に体を動かすことができた。 ・体操の仕方について、中継先の職員と一緒に対する伝え方に苦労したが、パワーポイントに体の動かし方を載せて共有画面にして伝えられたので良かった。

8月～12月	・コロコロストラックセーフ秋季リーグ戦、冬季リーグ戦 	・生徒達は職員と一緒にボールを握って離す、置いてあるボールを手で払うなどして興味を持って取り組んでいたように感じた。 ・学校職員と対決という形で取り組み、スコアをつけて勝敗を決めることで大変盛り上がり、協働的な学びへと繋がったように思う。
--------	--	--

③ 音楽

	活動内容	生徒の様子、良かった点・苦労した点など
	※授業の前半で、PowerPoint で絵や写真を活用しながら、楽器や曲について説明を行った。後半は、鑑賞や演奏などの学習活動を行った。	
4月～7月	・日本の楽器について（箏、三味線） ・外国の楽器について（ビブラスラップ、サンポーニャ） ・手遊び ・日本の伝統芸能 ・季節のうた（春夏） 	・音楽が好きな生徒が多く、様々な楽器の音色を楽しんでいる様子がたくさんみられた。音楽に関する経験を広げることができた。 ・曲に合わせて体を動かしたり、楽器を握って鳴らそうとする様子があった。意欲的に学習に取り組んでいた。 ・楽器を演奏したり、手遊びを行うときは療育園職員の支援に頼ってしまう部分が大きかったように感じた。
8月～12月	・学校の音楽室にある楽器を鳴らそう（ハンドベル、タンバリン、ツリーチャイム、トライアングル） ・11月の「こんげつのうた」をみんなで決めよう ・高等部音楽発表会の練習 ・越天楽 ・季節のうた（秋冬） 	・本校にある楽器を使用し、通学生徒同じような音楽的体験をすることができた。 ・高等部行事である、クリスマスコンサートへの取り組みを授業に加えることや、リモートで行事に参加し本校の生徒や教師と関わったりすることで、盛岡となん支援学校で学んでいるという実感をもたせるような授業を実践することができた。 ・ネットワークで伝えることができない情報（触感、香り等）を体験できなかったのも、対面授業を行うときはぜひ経験させたいと感じた。（楽器の重さや肌触りを感じる、手遊びで「茶摘み」を扱うときに、一緒に新茶の香りを楽しむ等）

まとめ

内容を工夫することでリモートでも、生徒が主体的に活動に取り組むことができる授業を実施することができた。しかし、ネットワークトラブルによる授業中断もあり、リモートの難しさもあった。対面で学習できることが一番良いが、今後も感染症対策による欠席が考えられ、リモート授業は必要である。生徒が主体的かつ協働的な学びができる授業内容を検討していきたい。

資料4 みちのく療育園メディカルセンター訪問教育リモート授業 自立活動「制作」学習指導案

日 時：令和4年7月4日（月）14:00~14:30

場 所：みちのく療育園 小ホール

対象生徒：高等部1年 男子1名 計1名

指 導 者：森川（T1）、中嶋（T2）、千田（T3）

1. 単元名「私のはらぺこあおむし～色や感触の変化を楽しもう～」

2. 単元計画（全13時間）

	主な学習内容	主な教材
① 5／27（金）	・カラーセロファンを通してみた光の色の変化を楽しむ。 ・「赤」「青」「黄」の色水を混ぜた時の色の変化を楽しむ。	カラーセロファン 色水 習字用紙
② 6／3（金）	・花紙を丸めて青虫を作る。	花紙 画用紙 卵パック
③ 6／10（金）	・花紙をちぎって、葉を作る。 ・花紙を丸めて濡らして卵を作る。	花紙 画用紙 のり
④ 6／24（金）	・花紙をちぎって太陽を作る。 ・花紙を丸めて青虫を作る。	花紙 画用紙 のり
⑤ 7／4（月） （本時5/13）	・りんごを見る。 ・りんごを紙を使って作る。 ・青虫を見る。	・りんご ・花紙 ・あおむし
⑥ 7／13（水）	・なしを作る。	
⑦ 7／22（金）	・すももを作る。	
⑧ 8／19（金）	・いちごを作る。	
⑨ 8／26（金）	・オレンジを作る。	
⑩ 8／29（月）	・チョコレート～すいかを作る。	
⑪ 9／7（水）	・葉を作る。	
⑫ 9／16（金）	・さなぎとあおむしを作る。	
⑬ 9／26（月）	・ちょうちょを作る	

3. 本時の展開

- (1) 目標
- ・外の様子を見て、今日の天気を知る。
 - ・今月の歌「夏色」に合わせて楽器を鳴らす。
 - ・りんごを見たり触ったり匂いを嗅いだりする。
 - ・りんごを「apple」ということを知り、言葉の響きを楽しむ。
 - ・紙でりんごの形を作り、りんごの色や形を確認する。
 - ・本物の青虫を見る。

(2) 展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点・児童生徒への配慮等	○評価の視点 ◎評価の方法	教材・ 教具等
導入 10分	1 はじめの会	・次第カードに注目できるように提示する。 ・天気を感じることができるよう外の様子を伝える。 ・「夏色」の歌に合わせて楽器を鳴らすことができるようにリズムを取ってみせる。	○画面を見ることができたか。 ◎表情を観察 ○楽器を持つことができたか。 ◎手の動きを観察	楽器
展開 15分	3 りんご観察 4 りんご制作 5 あおむし観察	・りんごを見えやすい場所で提示する。 ・りんごの匂いを嗅ぐことができるように鼻に近付ける。 ・りんごを触ることができるよう手に近付けりんごに手を置く。 ・りんごを「apple」ということを伝える。 ・キッチンペーパーを握ることができるよう手に持たせる。 ・キッチンペーパーを霧吹きで湿らせ一緒に握って丸くする。 ・赤い花紙を上からかぶせる。 ・りんごが丸い形、赤い色であることを一緒に確認する。 ・あおむしを画面で見せる。 ・黒から緑に変わることを伝える。	○りんごに興味をもつことができたか。 ◎表情を観察 ○材料を触ったり、握ったりすることができたか。 ○乾いた時と濡れた時の感触の違いを感じることができたか。 ◎表情や手の動きを観察 ○画面を見ることができたか。 ◎視線や表情を観察	りんご キッチンペーパー 霧吹き 花紙 あおむし
まとめ 5分	6 終わりの会	・本時の学習を振り返る。 ・次回の予定について確認する。	○画面を見ることができたか。 ◎視線や表情を観察	

4. リモート授業について

チームスを使用する。

タブレットを3台用意し2台はT1のアカウントで入り、1台は生徒アカウントで入る。

T1をスポットに設定する。

日 時：令和4年6月30日（木）

場 所：県立療育センター病棟

対象児童：小学部 1年 1名

指 導 者：塚野 美奈

1 単元名 「七夕会をしよう」

(1) 単元計画

①「たなばたさま」を聞こう（1回）	歌「たなばたさま」を聞く。七夕について知る。
②七夕かざりを作ろう（2回）	七夕かざりを教師と一緒に作る。 折り紙やテープの感触を感じる。
③七夕かざりをかざろう（本時）	笹に飾り付けをする。願い事発表を撮影する。
④七夕会をしよう（1回）	親学級の友達の動画を見ながら、教師と七夕会をする。

2 本時の指導

(1) 本時の学習「七夕かざりをかざろう」

(2) 本時の目標

- ① 教師と一緒に七夕かざりを作ったり、歌「たなばたさま」を聞いたりすることを通して、季節感を味わうことができる。（知識・技能）
- ② 教師の呼び掛けに対して自分なりの方法で応じようとしている。（思考・判断・表現）
- ③ 教師と一緒に最後まで活動する。（主体的に学習に取り組む態度）

(3) 対象児童の実態

30分の授業を週2回行っている。バイタルが安定した状態で教師と活動できることが増えてきているが、時々全身の震えとともにPR値が60台まで下がることもある。普段のPR値は80台～100台。本人の表出はとても少なく、現在はPR値の変動と顔または体の動きを本人の表出として捉えて、やりとりをしている。

音楽や楽器の音は好きようで、様々な楽器を落ち着いて聞くことができる。6月になってからは歌に合わせて本人の指に触れることにも取り組んだ。初めこそPR値が上昇したが、回数を重ねていくと落ち着いて受け入れることができるようになった。

また、5月に低学団運動会の動画を見た際に、偶然かもしれないがSさんが体を動かして教師の呼び掛けに応えていた。

上記のことから、今回の「七夕会をしよう」の単元では家族に願い事を書いてもらったり、親学級の七夕会にSさんも動画で参加したりすることで、家族や友達とのつながりの中でSさんの表出を促したいと考えた。

※動画は本時の展開の「4. 飾り付けをする。5. 願い事発表をする（前半）。」10分の内容になっております。

(4) 本時の展開

段階	学習内容・活動	時間	指導上の留意点・児童への配慮等(○)	教材・教具等
導入	1. はじめの会をする。 (はじめの会の中で) 2. 本時の活動内容を確認する。 ①作った飾りと短冊を笹に飾る。 ②願い事発表の撮影をする。	7分	・最初にはじめの歌を歌うことで、授業の始まりが分かるようにする。 ・前回の活動を想起できるよう、児童が作った飾りを提示する。 ・願い事発表の動画は小学部の友達に見せることを知らせる。	・キーボード、次第カード ・児童が作った飾り、笹 ・友達の顔写真
展開	3. 「たなばたさま」を歌う。 4. 飾りつけをする。 5. 願い事発表をする。	15分	・児童の意欲を高められるように、「たなばたさま」の歌を歌う。 ○歌の雰囲気が伝わるように、ペープサートも見せる。 ○飾りや短冊を児童の手に触れさせてから、笹に飾りつけていく。 ○飾る位置も一つ一つ声を掛けながら、児童の意欲や反応を引き出せるようにする。 ○戦隊ヒーローのお面を提示し、楽しく発表できるように雰囲気作りをする。 ・撮影前に児童なりの方法(顔や体を動かす等)で伝えてみようと言掛けをする。	・ツリーチャイム、ペープサート ・笹、飾り、短冊 ・タブレット、お面、笹
まとめ	5. おわりの会をする。	8分	・振り返りでは、飾りつけが楽しくできたか、願い事発表は友達に動画を見せるのが楽しみかどうかを聞いてみる。	・次第カード、キーボード

(5) 評価

- ① 教師と一緒に七夕かざりを作ったり、歌「たなばたさま」を聞いたりすることを通して、季節感を味わうことができる。(知識・技能)【観察】
- ② 教師の呼び掛けに対して自分なりの方法で応じることができる。(思考・判断・表現)【観察】
- ③ 教師と一緒に最後まで活動しようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)【観察】

外部研究団体における発表資料

岩手県立盛岡となん支援学校 教諭 吉田 恵理子

1. 本校の概要

2. 研究の概要

II 研究の実際

1. 研究の目的

2. 研究の実際（校内研究準ずる教育課程グループの研究内容から）

(1) 課題の明確化

小・中学生に課する教育課程：児童の実態図

豊かな生活を営む子ども。

なんとなくの日常に満足している。

人に興味がない。自己中心的な世界。

自分で深く考える力。

問題を解決しなくても平気。怒にならない。

食べたいだけ食べる。ゲームしたいだけする。

入浴・歯磨きなど清潔にしようという心。

朝からカッパ。朝寝起き。

計画を立てられない。感情をうまく表現できない。

援助依頼しなくても大人が動くので、自分から行動できない。

言われたことだけやろうとする。

自分の考えを伝える子ども。

自ら学び、成長する子ども。

健康を大切にすることも。

図1 小学部児童の実態

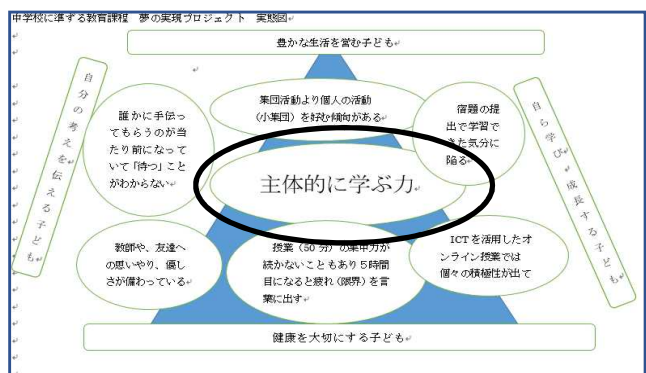


図2 中学部生徒の実態

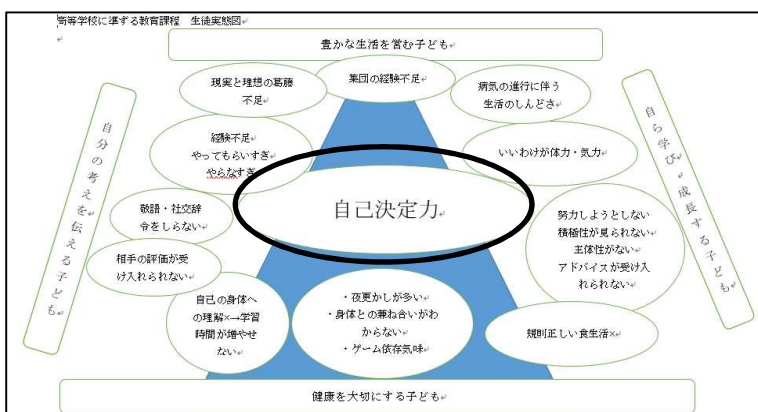


図3 高等部生徒の実態

本校のめざす児童生徒像としての
「豊かな生活を営む子ども」
「自分の考えを伝える子ども」
「自ら学び、成長する子ども」
「健康を大切にする子ども」

の4つの観点から今ある状態や課題を洗い出し、結論として「必要な力」としてまとめたものを中心の楕円部に表した。

(2) 育てたい資質・能力の整理

健康を大切にする子ども			
元気に学習できる喜びを実感し、命を尊び、健康的な生活を送るために必要な知識技能、習慣を実践的に学ぶ子ども			
キャリア：総合生活力—健康やかな体			
段階	小学生	中学生	高校生
知識及び技能	自分の特徴が分かり、それを含めた生活における心身の健康・基本的な生活習慣について理解すること。		
思考力 判断力 表現力等	健康状態の維持、改善に必要な食事・水分補給・排泄・衣服の調節、室温の調節や換気、感染予防について工夫して取り組むこと。	心身の機能の発達と心の健康についての課題解決に向けて、思考し判断するとともに、それらを表現すること。	
学びに向かう力 人間性	自己の健康の保持増進や回復に進んで取り組もうとしている。	自他の健康に関心をもち、心身の健康の保持増進を目指そうとしている。 友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、理解しながら、人間関係を築こうとしている。	
自ら学び、成長する子ども			
できる、わかるという経験により、自信をもち、もっと知りたいという意欲を高めながら、主体的に学ぶ子ども			
キャリア：総合生活力—確かな学力			
段階	小学生	中学生	高校生
知識及び技能	基礎的・基本的な知識及び技能を習得すること。 学習内容を確実に身に付けること。 コンピュータや情報ネットワークを適切・効果的に活用し、 情報を収集・整理・発信すること。		小：自分で深く考える力 ↓ 中：主体的に学ぶ力 ↓ 高：自己決定力
思考力・判断力 表現力等	各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、 より深く考えたり、考えたことを表現したりすること。		
学びに向かう力 人間性	学習する前と学習した後に自分がどのように変わったのかを実感し、次の学びへつなごうとしている。	自分の意思で目標に向かって課題の解決に取り組もうとしている。 学ぶ意義が分かり、目的を明確にして学ぼうとしている。	自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決しようとしている。 現在及び将来の自己の在り方
		学校生活をとおり、将来の夢や希望をもとにしている。	き方につなげて考えようとしている。
自分の考えを伝える子ども			
自分をわかってほしい、相手のことをもっと知りたいという「意欲」をもち、伝えてよかったという「価値」を実感する子ども			
キャリア：総合生活力—豊かな心			
段階	小学生	中学生	高校生
知識及び技能	自己の存在感を実感しながら伝えたり、相手に配慮しながら聞いたりして、よりよい人間関係を形成すること。		
思考力 判断力 表現力等	目的や意図に応じて、自分のことを明確に伝えること。 相手に配慮しながら、知りたいことを尋ねること。		目的や意図に応じて、自分のことを明確に伝え、自分で伝えたことには責任をもつこと。 相手に配慮しながら、知りたいことを尋ねること。
学びに向かう力 人間性	相手に聞かれる前に、自分から自分の考えや気持ちなどを伝えようとしている。 一緒に生活する友達に興味をもち、自分から知ろうとしている。		多様な他者の価値観や個性を受け入れ、尊重しようとしている。
豊かな生活を営む子ども			
集団の一員として、自分の果たすべき役割を理解し、主体的に取り組むとともに、個性を発揮して環境に適應できる子ども			
キャリア：総合生活力—豊かな心 人生設計力—将来設計力			
段階	小学生	中学生	高校生
知識及び技能	多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動に必要なことについて理解し、行動の仕方を身に付けること。		
思考力・判断力・表現力等	集団活動を通して、その活動に必要なことについて考え、話し合い、合意形成を図ったり、意思決定をしたりすること。		
学びに向かう力 人間性	集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成し、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとしている。	集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成し、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとしている。	主体的に集団や社会に参画し、生活及び人間関係をよりよく形成し、人間としての在り方・生き方についての自覚を深め、自己実現を図ろうとしている。

表1 各学部 育てたい資質・能力の一覧

さらに、学習指導要領の三つの柱と照らし合わせながらまとめている。

(3) 構想図

本校の目指す子ども像である。

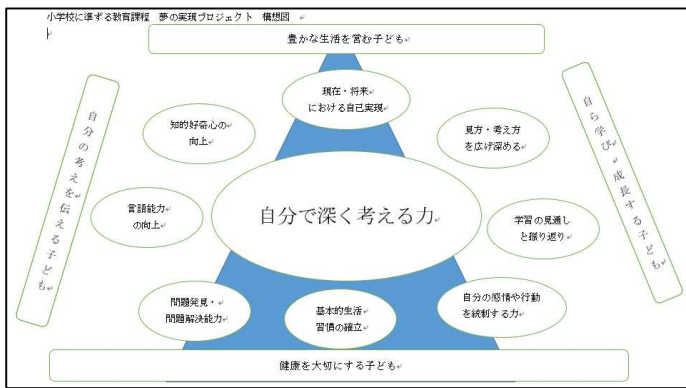


図4 小学部 構想図

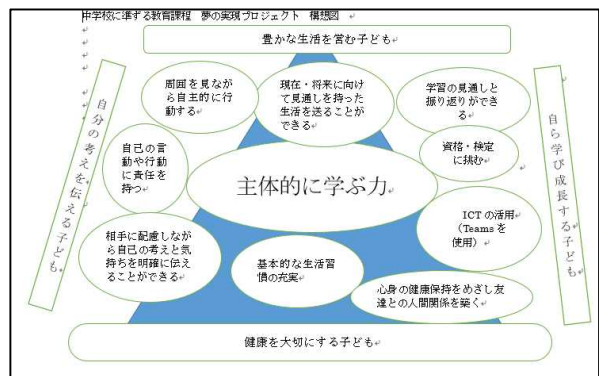


図5 中学部 構想図

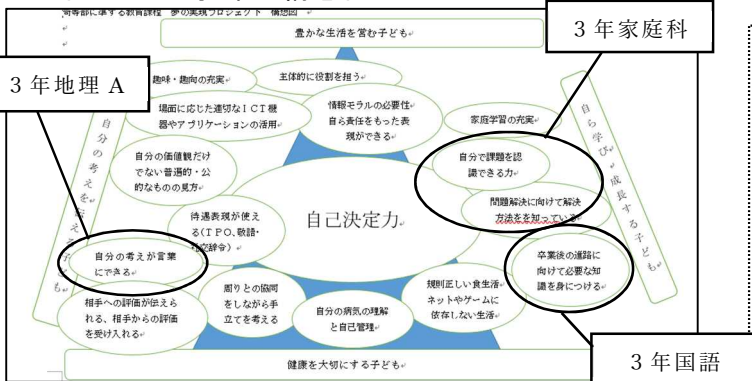


図6 高等部 構想図

構想図について

中心の楕円部に表した「育成すべき資質・能力の中核」を得るために、どんなことができるようになってほしいかを具体的に考えて並べた。さらに、あとの事例に関連して高等部各教科で「育てたい力」として掲げた項目を丸で囲んで示している。

3. 実践の中から高等部の実践について紹介する（高等部生徒事例）

(1) 生徒の実態

対象の生徒は高等部3年生の2名のクラスである。1年生から「国語総合」でいくつかの説明文、論説文に取り組み、2年生「国語表現」では「小論文」の書き方について学び、3年生では論説文や小説など明治以降の近代から現在までの「現代文」の的確な理解と、言語事項との関連に配慮しながら指導することによって、適切に表現する能力を高め、総合的な国語力の向上が図られつつある。2名とも身近な話題が混じっている文章には親しみやすいが、概念論、哲学論は苦手としている。

(2) 生徒の実態から検討した手立て

「随想・評論」の第四番目の「ことばと文化」の第2章にあたる「ものごとことば」という教材である。題のとおり「もの」と「ことば」の関係性に目を向けた教材。結論としては「人間はあるがままの素材の世界と直接ふれることができない。素材の世界とは、渾沌と言うべき無意味な世界であり、これに秩序を与え人間の手に負えるような、物体、性質、運動などに仕立てる役目をことばが果たしている」と述べている。

これに向けての具体的事例をたどる読解が今回の内容。読解力の足がかりとして「質問シート」と「ノートテイク」という2種類の教材を準備し、自分で考える場面、読解の足がかりや答えを自分で読むことによって知り、筆者の主張に自ら興味・関心をもてるように配慮して行う。

(注:「国語総合」「国語表現」「現代文A」は令和5年度卒業生までの履修教科名。令和4年度1年生からは新学習指導要領・新教科での履修が始まっている。)

(3) 指導の実際

ア 生徒の実態から検討した育てたい力

卒業後の進路に向けて必要な知識を身につける。

イ 実践名

卒業後の進路のために読解力を高める学習

ウ 教科名

国語科 3年 現代文A

エ 単元とねらいについて

単元名: ことばと文化 「ものごとことば」(著者: 鈴木孝夫)〈論説文〉

ねらい: 1 日常使われることばを見つめ直し、言葉についての自覚を高める。

2 論理的な文章を読み取る。

3 説明的文章を読ませて、生徒の論理的な思考、

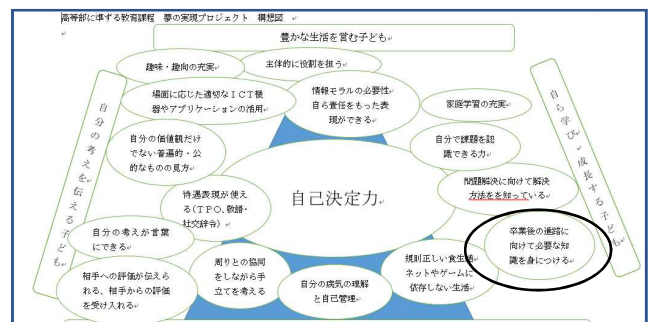


図7 高等部「生徒の実態から検討した育てたい力」

207

「実態把握と授業づくりをつなぐ」

～となん式システムづくり～

岩手県立盛岡となん支援学校

教諭 川村 麻理衣

【目的】

本校では、授業担当者によって、「自立活動の目標・内容」で授業したり、「教科的な目標・内容」で授業したりする現状から、授業の担当者全員で確認し、共通認識をもって授業を行うことが必要と考えた。また、自立活動の指導の基本である『児童生徒の実態を的確に把握し、それに基づいて指導すべき課題を明確にし、個々の指導目標や具体的な指導内容を設定していくこと』についても再確認し、学校独自の『実態把握→目標設定のシステム』を作り、授業を行っていくこととした。

【内容・方法】

1. 「児童生徒の指導や支援についての課題点の整理」、2. 「『自立活動の指導』について確認」、3. 「目標設定に至る手続きの理解のための『課題関連図の作成』」の3点で実践を行った。

1では、小グループに分かれて課題を共有した。その後、グループごとに発表し合うことで全体での課題の共有や明確化を図った。

2では、学習指導要領解説自立活動編を参考に、「自立活動の指導」について再確認を行った。

3では、熊本県立松橋東支援学校の様式を参考に、本校の実態に合わせて作成した様式を用いて作成を行った。始めに、小グループに分かれ、各グループ1名の児童生徒を抽出し課題関連図を作成した。その後、全体の場に「課題関連図」を持ち寄り、作成してみての感想・意見や改善点などを発表して共通理解を図った。

【結果と考察】

1では、職員が抱えている悩みが多く挙げられた。挙げられた内容からは、「教科の指導」や「自立活動の指導」の理解、「自立活動の指導」

における目標設定に至る手続きの理解が必要ながことが分かった。

2は、短時間での実施であったため、「自立活動の指導」における目標設定や評価について、学習指導要領解説自立活動編を活用し、今後も継続して理解を深めていくことが必要だと分かった。

3では、児童生徒15名分の「課題関連図」が作成された。作成についての感想・意見や改善点については、これまで担任一人で行ってきた「目標設定に至る手続き」を児童生徒に関わる職員間で話し合いながら行うことができたため、「共通理解が深まり良かった」という意見が多かった。また、今回は1名を抽出して行ったので、「学級の児童生徒全員分を作成するには、話し合う時間的余裕がない」という意見も多く出た。更に、作成時期について、「年度初めには、情報収集面でも実態を関連させる点においても難しい」という意見が多かった。

成果は、3点ある。1点目は、「自立活動を主とする教育課程」の担当職員が抱えている悩みを明確化し課題の共有を図ることができた点。2点目は、自立活動の目標設定に至る手続きについて確認することで、各教科と自立活動の指導の違いについての再確認ができた点。3点目は、「課題関連図の作成」を行ったことにより、共通理解が深まった点。以上のことから、今後も「自立活動の指導」の目標設定の際に「課題関連図」を作成することで、共通理解の深まりや指導の一体感が期待できると考える。

今後の課題は、「自立活動の指導」についてのより深い理解と目標設定に至る手続きのための様式の検討である。

あ と が き

本校は昨年度より「つなぐ～個別最適な学びと協働的な学び～」の研究主題で全校研究に取り組んでいます。本校には約130名の児童生徒が在籍しており、一人一人のニーズに応じるため「小学校等に準ずる教育課程」「知的代替の教育課程」「自立活動を主とする教育課程」の3つの教育課程ごとのグループと「訪問教育」については実態や学習形態の異なる3つのグループ、そして寄宿舎の7つのグループを設定し、グループごとに研究会を行っています。様々な児童生徒がいる中で、確かな実態把握から効果的な指導方法・教材の検討を行い、児童生徒一人一人の興味・関心に応じた最適な学びが実現できる「個別最適な学び」と、その学びで付けた力を生かし、探求的な学習や体験活動を通して、他者と関わりながら必要な資質・能力を身に付ける「協働的な学び」を「つなぐ」ことにより「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指しています。

本研究の1年次である昨年度は、「個別最適な学び」とは何かを検討し、一人一人の児童生徒と向き合い、適切な実態把握のための資料作りに取り組みました。2年次である今年度は、昨年度作成した資料を活用した実態把握を行い、「個別最適な学び」に必要な指導・支援を明確にし、実践しながら、各教科等、教育課程、指導形態における「協働的な学び」について、グループごとに指導構想の検討を行いました。検討した指導構想を基に「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたグループごとの授業改善・指導改善に繰り返し取り組みました。

この本研究2年次の研究集録には、それぞれのグループの実践・検討・課題をまとめました。本研究のさらなる充実に向けて、是非本校の実践・検証をご一読いただき、研究に対して忌憚のないご意見、ご批評をお聞かせいただければ幸いです。

令和5年3月

副校長 岩 渕 昌 文

研究集録 第 39 集

岩手県立盛岡となん支援学校

製本：令和 5 年 3 月 2 4 日

〒028-3609

岩手県紫波郡矢巾町医大通二丁目 1 番 5 号

TEL:019-601-2227

FAX:019-698-4352

e-mail: <http://www2.iwate-ed/mor-y/>